

秋田県文化財調査報告書第386集

# 大見内遺跡・館野遺跡

—— 県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ ——

2005・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡  
出土の「岩偶」です。  
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

おおみないいせき たてのいせき  
大見内遺跡・館野遺跡

—— 県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ ——

2005・3

秋田県教育委員会



1. 2区S K 81土坑出土木製品（鋤）



2. 2区S K 81土坑遺物出土状況（北西→）

## 序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、農業地域においては、用排水路網の整備と水田の大区画化により、農業の大規模化と担い手の育成を目的とするほ場整備事業が行われております。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業に先立って、平成15年度に雄物川町において実施した大見内遺跡・館野遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、大見内遺跡において縄文時代の土坑と平安時代の掘立柱建物跡、鋏・下駄・曲物などの木製品が出土した土坑や水田跡などが検出されました。また、館野遺跡では近世の塚が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県平鹿地域振興局農林部、雄物川町、雄物川町教育委員会、雄物川町館合地区土地改良区など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

秋田県教育委員会

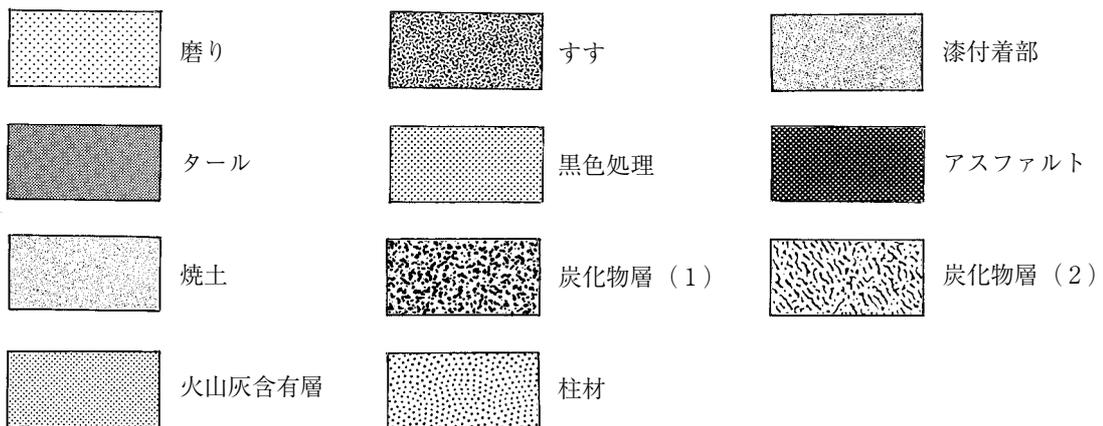
教育長 小野寺清

# 例 言

- 1 本報告書は、県営ほ場整備事業（館合地区）に伴い、2003（平成15）年度に調査した大見内遺跡・館野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 3 本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「浅舞」、秋田県平鹿地域振興局農林部提供の1千分の1「担い手育成基盤整備事業（館合地区）現況計画平面図」、雄物川町提供の1万5千分の1「雄物川町全図」である。
- 4 遺跡基本層序と遺構土層中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2001年版によった。
- 5 本報告書に使用した空中写真は、昭和51年11月6日に国土地理院が撮影したものを、財団法人日本地図センターより提供を受け掲載したものである。
- 6 第5章「自然科学的分析」のうち、第1節～第4節は株式会社パレオ・ラボ、第5節はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した成果報告である。
- 7 本遺跡の報告書作成にあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）  
三上喜孝（山形大学人文学部助教授）、稲野彰子（いろは写房）
- 8 本報告書の草稿執筆は、第3章第3節を石井直樹、伊藤一彦、第4章の5区に関することを高橋直樹、第4章の掘立柱建物跡・柱列に関することを児玉準、それ以外を伊藤和美が行った。

# 凡 例

- 1 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。大見内遺跡・館野遺跡のグリッド杭座標原点MA50 ( $X = -77237.385$ ,  $Y = -34042.646$ ) とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏  $7^{\circ} 50'$  である。
- 2 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。  
SB・・・掘立柱建物跡      SA・・・柱列      SKI・・・竪穴状遺構  
SK・・・土坑      SD・・・溝跡      SY・・・塚  
SX・・・性格不明遺構  
なお、遺構図面中に記したPは掘立柱建物跡、柱列等の遺構に伴うピットを示している。
- 3 各区の基本層序にはローマ数字を、各遺構の堆積土には算用数字を使用した。
- 4 挿図中に使用した主なスクリーントーンは以下のとおりである。また、断面図で黒く塗りつぶされているものは、火山灰である。このほかについては個々に挿図中に示した。



# 目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 はじめに		第2節 検出遺構と遺物	28
第1節 調査に至る経過	1	1 1区の検出遺構と遺物	30
第2節 調査要項	1	2 2区の検出遺構と遺物	53
		3 3区の検出遺構と遺物	82
第2章 遺跡の環境		4 4区の検出遺構と遺物	100
第1節 遺跡の位置と立地	3	5 5区の検出遺構と遺物	102
第2節 歴史的環境	5	6 6区の検出遺構と遺物	109
		7 7区の検出遺構と遺物	114
第3章 発掘調査の概要		第3節 確認調査出土遺物	115
第1節 遺跡の概観	11		
第2節 調査の方法	11	第5章 自然科学分析	
第3節 調査の経過	15	第1節 放射性炭素年代測定	122
第4節 整理作業の方法と経過	22	第2節 テフラ分析	123
		第3節 花粉化石分析	127
第4章 調査の記録		第4節 プラント・オパール分析	130
第1節 基本層序		第5節 木材の放射性炭素年代測定と 樹種同定	132
1 1区の基本層序	23		
2 2区の基本層序	23	第6章 まとめ	135
3 3区の基本層序	24		
4 4区の基本層序	24	図版	137
5 5区の基本層序	24	報告書妙録	
6 6区の基本層序	25		
7 7区の基本層序	25		

# 挿図目次

第1図	遺跡位置図	第40図	2区SK140出土遺物(4)
第2図	地形分類図	第41図	2区SD01・07・10・12・31・32・124・201
第3図	周辺遺跡位置図	第42図	2区SD01・07・12・31出土遺物
第4図	調査区位置図	第43図	2区SD124・SKP03出土遺物
第5図	グリッド配置図	第44図	2区水田跡断面図
第6図	1区遺構配置図	第45図	2区SX02・04・86・87・139・169と出土遺物
第7図	2区遺構配置図	第46図	2区遺構外出土遺物(1)
第8図	3区遺構配置図	第47図	2区遺構外出土遺物(2)
第9図	4区・6区遺構配置図	第48図	3区SA07・27
第10図	5区遺構配置図	第49図	3区SK03と出土遺物
第11図	7区遺構配置図	第50図	3区SK06・30・32・33・34・38・65・68・69
第12図	1・2・3区基本土層図	第51図	3区SD02と出土遺物
第13図	5・6・7区基本土層図	第52図	3区SD01・13・15・62・63・82
第14図	1区SK90・98と出土遺物	第53図	3区SD85・86・87・93
第15図	1区SB06	第54図	3区北側水田跡断面図(1)
第16図	1区SB59	第55図	3区北側水田跡断面図(2)
第17図	1区SB62(1)	第56図	3区南側水田跡断面図(1)
第18図	1区SB62(2)	第57図	3区南側水田跡断面図(2)
第19図	1区SB64	第58図	3区南側水田跡断面図(3)
第20図	1区SA24	第59図	3区中央部水田跡、SX64・66
第21図	1区SK02・03・04・48・50・157と出土遺物	第60図	3区遺構外出土遺物
第22図	1区SK52・53・54・55と出土遺物	第61図	4区SY01と遺構外出土遺物
第23図	1区SK68・83・92・93・94・99と出土遺物	第62図	5区SK21、SA22と出土遺物
第24図	1区SK100・101・102・103・104・119・120と 出土遺物	第63図	5区SK02・03・04・10・19・31
第25図	1区SK125・132・133・146・150・151・152・ 155と出土遺物	第64図	5区SD05・06・07・08
第26図	1区SD77・80と出土遺物	第65図	5区SX01・20と出土遺物
第27図	1区SD80出土遺物	第66図	6区SK11・12・13・15・28・30と出土遺物
第28図	1区SD01と出土遺物	第67図	6区SD01・03・04
第29図	1区遺構外出土遺物	第68図	6区水田跡
第30図	2区SB29	第69図	6区遺構外出土遺物
第31図	2区SA16・38・43・60・62	第70図	確認調査出土遺物(1)
第32図	2区SA149・152・153と出土遺物	第71図	確認調査出土遺物(2)
第33図	2区SKI35、SK80・81・82・83・84	第72図	確認調査出土遺物(3)
第34図	2区SK81出土遺物(1)	第73図	確認調査出土遺物(4)
第35図	2区SK81出土遺物(2)	第74図	確認調査出土遺物(5)
第36図	2区SK89・140・143・180と出土遺物	第75図	火山ガラスの形態分類
第37図	2区SK140出土遺物(1)	第76図	4Φ残渣の鉱物組成
第38図	2区SK140出土遺物(2)	第77図	火山ガラスの屈折率とそのタイプ
第39図	2区SK140出土遺物(3)	第78図	主要花粉化石分布図
		第79図	プラント・オパール分布図

# 表目次

第1表	雄物川町遺跡一覧	第11表	5区柱穴様ピット計測一覧
第2表	調査の経過(1)	第12表	6区柱穴様ピット計測一覧
第3表	調査の経過(2)	第13表	放射性炭素年代測定および暦年代較正結果
第4表	各調査区の検出遺構数	第14表	堆積物の鉱物分析結果一覧
第5表	土師器・須恵器の分類と出土状況	第15表	火山ガラスの屈折率測定結果
第6表	1区柱穴様ピット計測一覧	第16表	産出花粉化石一覧表
第7表	2区柱穴様ピット計測一覧(1)	第17表	試料1gあたりのプラントオパールの個数
第8表	2区柱穴様ピット計測一覧(2)	第18表	放射性炭素年代測定および樹種同定結果
第9表	2区柱穴様ピット遺物出土状況	第19表	暦年代較正結果
第10表	3区柱穴様ピット計測一覧		

# 図版目次

図版1	空中写真	図版12	検出遺構(9)
	空から見た大見内遺跡・館野遺跡(南→)	1.	3区S K03土坑完掘(南西→)
図版2	遺跡近景(1)	2.	3区S K03土坑斎申出土状況(東→)
1.	1区東側全景(北西→)	3.	3区S K32土坑完掘(南西→)
2.	1区南側全景(北→)	4.	3区S K68土坑完掘(南東→)
3.	1区西側全景(北東→)	5.	3区S D01溝跡完掘(南東→)
図版3	検出遺構(1)	6.	3区S D01溝跡遺物出土状況(北→)
1.	1区S B06掘立柱建物跡、S A24柱列(北→)	7.	3区S D02溝跡遺物出土状況(南西→)
2.	1区S B59掘立柱建物跡(南→)	8.	3区S D93溝跡完掘(南→)
3.	1区S B62・64掘立柱建物跡(北西→)	図版13	検出遺構(10)
図版4	検出遺構(2)	1.	4区S Y01塚半截(東→)
1.	1区S D01溝跡完掘(南東→)	2.	4区S Y01塚断面(北東→)
2.	1区S D01溝跡西端完掘(南東→)	3.	4区S Y01塚全景(南東→)
3.	1区S D77溝跡完掘(東→)	4.	4区S Y01塚全景(南西→)
4.	1区S D80溝跡確認(東→)	5.	4区S Y01塚全景(北西→)
5.	1区S D80溝跡断面(東→)	6.	4区S Y01塚周溝遺物出土状況(北東→)
図版5	検出遺構(3)	図版14	検出遺構(11)
1.	1区S K90土坑完掘(東→)	1.	4区S Y01塚断面と周溝(西→)
2.	1区S K90土坑遺物出土状況(東→)	2.	4区S Y01塚全景(北東→)
3.	1区S K48・157土坑完掘(西→)	3.	4区S Y01塚周溝全景(北西→)
4.	1区S K52・53土坑完掘(南西→)	図版15	検出遺構(12)
5.	1区S K55土坑完掘(南→)	1.	5区S A22柱列(南東→)
6.	1区S K83土坑完掘(南→)	2.	5区南側全景(北→)
7.	1区S K94土坑完掘(南→)	3.	5区S D05・06・07・08溝跡(北西→)
8.	1区S K100・119土坑完掘(南東→)	図版16	検出遺構(13)
図版6	検出遺構(4)	1.	5区S A22P1柱材出土状況(南東→)
1.	2区S B29掘立柱建物跡(東→)	2.	5区S A22P2柱材出土状況(北西→)
2.	2区S A38・43柱列、S K I35堅穴状遺構(北東→)	3.	5区S K02土坑完掘(北東→)
3.	2区S A16・149・152・153柱列(北→)	4.	5区S K03土坑完掘(南西→)
図版7	検出遺構(5)	5.	5区S K04土坑完掘(南→)
1.	2区北側水田跡(北→)	6.	5区作業風景(南東→)
2.	2区南側水田跡(北→)	7.	5区S X01性格不明遺構完掘(南→)
3.	2区S K81土坑遺物出土状況(南→)	8.	5区S X20性格不明遺構完掘(北西→)
4.	2区S K81土坑完掘(南→)	図版17	遺跡近景(3)
図版8	遺構検出(6)	1.	5区全景(北西→)
1.	2区南側水田跡畦畔断面(東→)	2.	6区北側全景(東→)
2.	2区S K I35堅穴状遺構完掘(西→)	3.	6区東側全景(北→)
3.	2区S K140土坑完掘(東→)	図版18	検出遺構(14)
4.	2区S K140土坑遺物出土状況(東→)	1.	6区S K11・30土坑完掘(北→)
5.	2区S K180土坑遺物出土状況(西→)	2.	6区S K12土坑完掘(西→)
6.	2区S D07溝跡完掘(西→)	3.	6区S K15土坑、S D04溝跡完掘(北→)
7.	2区S D124溝跡遺物出土状況(北西→)	4.	6区S D03溝跡完掘(北→)
8.	2区S A153P1柱材出土状況(東→)	5.	6区水田跡
図版9	遺跡近景(2)	6.	6区西側S K P群(東→)
1.	3区北側全景(南→)	7.	6区北側中央部S K P群(北→)
2.	3区南側全景(北→)	8.	7区全景
3.	3区南側全景(南→)	図版19	出土遺物(1)
図版10	検出遺構(7)	図版20	出土遺物(2)
1.	3区南側水田跡(北→)	図版21	出土遺物(3)
2.	3区南側水田跡畦畔C(南西→)	図版22	出土遺物(4)
3.	3区南側水田跡畦畔D(南→)		
図版11	検出遺構(8)		
1.	3区南側水田跡畦畔C(西→)		
2.	3区北側水田跡畦畔A(東→)		
3.	3区北側水田跡畦畔B(北→)		

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

ほ場整備事業は、ほ場の区画形質の変更を中心とした農業の生産基盤を整えるための総合的な整備事業である。高生産性のほ場を造成することにより、近年の農業情勢である農業の担い手の減少や高齢化、国際化に対応できる生産体制の確立などに対応し、大規模経営が展開可能な農業構造にすることを目的としている。1993（平成5）年度から実施している「ほ場整備事業（担い手育成型）」では、大区画ほ場を整備することにより、生産費や労働時間の減少などをねらいとしている。

雄物川町館合地区では、1997（平成9）年度から2005（平成17）年度までの9か年で計画面積375haのほ場整備を実施している。このほ場整備工事区域には、埋蔵文化財が包蔵されていることが判明していた。工事に先立って、原因者の秋田県平鹿地域振興局より、秋田県教育委員会に対し、埋蔵文化財の包蔵地の確認とその対応について依頼があった。これを受けて秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、2001（平成13）年度と2002（平成14）年度に計画区域内の遺跡分布調査を実施した。結果、2001（平成13）年度の遺跡分布調査で計画区域内に新しい遺跡として大見内遺跡が発見された。このため、秋田県教育委員会は、今後確認調査が必要であること、確認調査の結果、記録保存の必要な場合には発掘調査を実施すべきことを回答した。

以上の経緯に基づき、大見内遺跡のうち、2002（平成14）年度の工事区域内の分については、2001（平成13）年度に確認調査、2002（平成14）年度に発掘調査を実施し、ほ場整備を終了している。大見内遺跡の2003（平成15）年度の工事区域内と館野遺跡については、2002（平成14）年度に確認調査を行い、2003（平成15）年度に発掘調査を実施するに至った。

## 第2節 調査要項

遺 跡 名	大見内遺跡・館野遺跡（おおみないいせき・たてのいせき）：遺跡略号8OMN・TN	
遺 跡 所 在 地	大見内遺跡：秋田県平鹿郡雄物川町薄井字大見内300外 館 野 遺 跡：秋田県平鹿郡雄物川町薄井字長願110外	
調 査 期 間	平成15年5月13日～10月31日	
調 査 面 積	大見内遺跡：12,300 m <sup>2</sup> 館 野 遺 跡：700 m <sup>2</sup>	
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会	
調 査 担 当 者	栗澤 光男（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 文化財主査）	
	石井 直樹（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）	
	高橋 直樹（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）	
	伊藤 和美（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事）	

## 第1章 はじめに

伊藤 一彦（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査・研究員）

照井 洋子（秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査・研究員）

総務担当者 平成15年度 総務担当者

金 義晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長）

高橋 修（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任）

田口 旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事）

平成16年度 総務担当者

渡辺 憲（秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長）

高橋 修（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任）

田口 旭（秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事）

調査協力機関 秋田県平鹿地域振興局 雄物川町 雄物川町教育委員会 館合地区土地改良区

### 《引用・参考文献》

秋田県 『平成14年度 農林水産業及び農山漁村に関する年次報告』 2003（平成15）年

秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987（昭和62）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第342集 2002（平成14）年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第365集 2003（平成15）年

秋田県教育委員会 『大見内遺跡』 秋田県文化財調査報告書第374集 2004（平成16）年

## 第2章 遺跡の環境

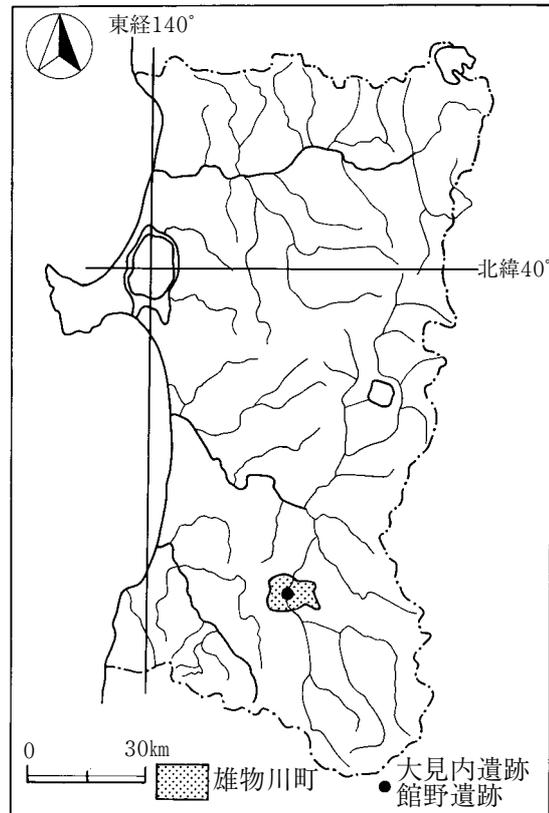
### 第1節 遺跡の位置と立地

大見内遺跡・館野遺跡の所在する秋田県平鹿郡雄物川町は、秋田県の南部にあり、南北約 60 km、東西 15 kmにおよぶ横手盆地の西側に位置する（第1図）。北は平鹿郡大森町・大雄村、東は平鹿郡平鹿町・十文字町、南は雄勝郡羽後町、西は由利郡東由利町と接している。奥羽山系を水源とする雄物川が町のほぼ中央部を土地を二分するように北流しており、雄物川の東部は平坦肥沃な水田地帯、西部は出羽山地の一角を占める山麓地帯となっている。また、雄物川の東側に主要地方道湯沢雄物川大曲線（県道 13 号）が通じ、町の南部を東西に国道 107 号線が通じている。町域は、南北 10 km、東西 12 kmにわたり、その面積は、73.39 km<sup>2</sup>である。

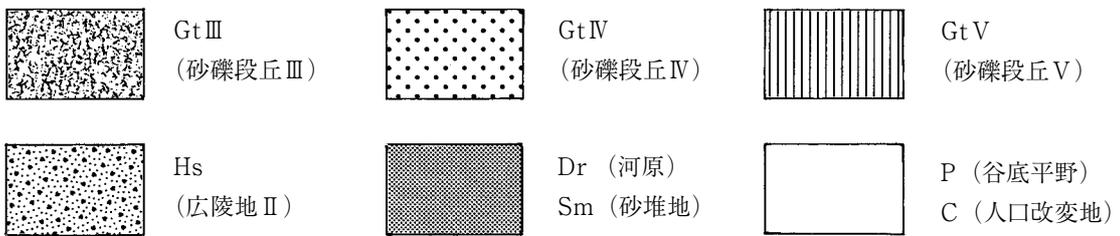
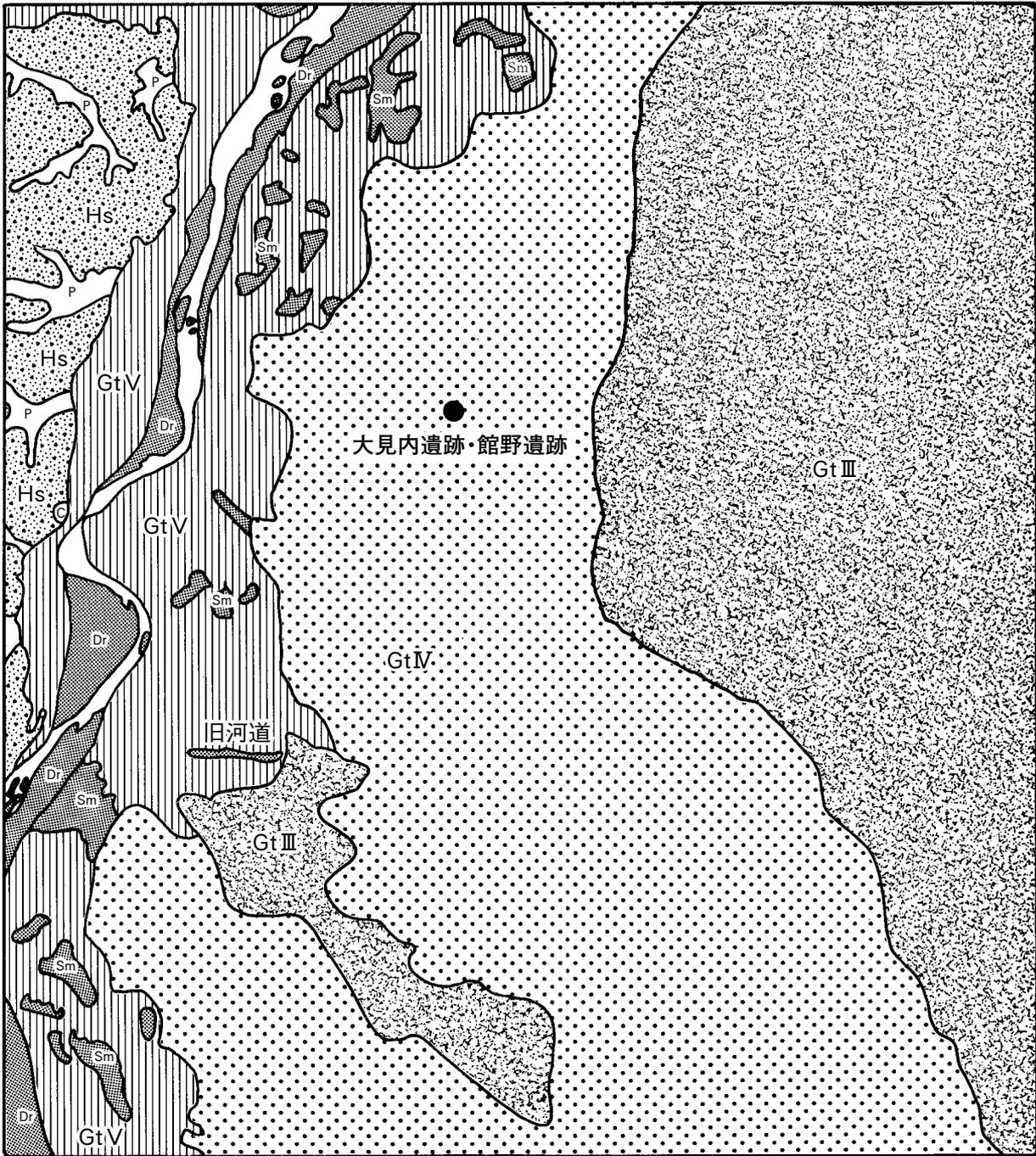
本遺跡は、雄物川町館合地区に所在し、北緯 39° 18′ 20″、東経 140° 26′ 25″、雄物川町役場から北北東へ約 2 kmのところに位置する（第3図）。周辺地域は、平坦肥沃な水田地帯になっている。

遺跡周辺の地形は、『出羽丘陵開発計画地域 土地分類基本調査 浅舞』によれば丘陵地と低地の 2 つに分けられ、雄物川の東側には横手低地（Ⅲ a）、西側には沼館丘陵地（Ⅱ e）・明治丘陵地（Ⅱ f）が形成されている。

本遺跡は、雄物川・皆瀬川・西馬音内川などによって形成された沖積平野である横手低地内にある。横手低地はほとんど勾配がないため、雄物川とその支流が相当乱流しており、各所に旧河道がみられる。雄物川の右岸から大宮川までの間に数段の砂礫段丘が形成されているが、本遺跡は砂礫段丘Ⅳ(Higher Lowest)に属する（第2図）。この標高 40～50 mの段丘堆積物は、過去に雄物川・皆瀬川・成瀬川等の諸河川が、その流路を変遷させつつ形成したものと考えられる。遺跡の表層地質は、第四紀洪積世の未固結堆積物（段丘堆積物）である。この付近の第四紀の堆積物は、泥・砂・礫の他に植物破片・炭質物・泥炭を含んでいる。このような構成内容からも河成堆積物であると言える。土壌区分上は細粒質のグライ土壌である浅津統（遺跡中心部）と、微粒質のグライ土壌である幡野統（遺跡外周部）に属する。



第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図

## 第2節 歴史的環境

雄物川町には、2004（平成16）年12月現在、旧石器時代から近世までの118遺跡が確認されている。1987（昭和62）年刊行の『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、旧石器時代から江戸時代までの96遺跡が確認されており、2001（平成13）年度以降の秋田県教育委員会と雄物川町教育委員会の遺跡分布調査では、22遺跡が新しく発見されている。

第1表に2004（平成16）年まで確認されている雄物川町内の遺跡を掲載した。60-97～60-118の遺跡については、雄物川町の『遺跡登録カード』、雄物川町教育委員会2004（平成16）年刊行の『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』、秋田県教育委員会2004（平成16）年刊行の『大見内遺跡』をもとに付け加えた。

旧石器時代から縄文時代までの遺跡は雄物川西側の出羽山麓を中心に、弥生時代から平安時代までの遺跡は雄物川東側の水田地帯を中心に、中世の遺跡は出羽山地や雄物川流域の山麓や平地に分布している。

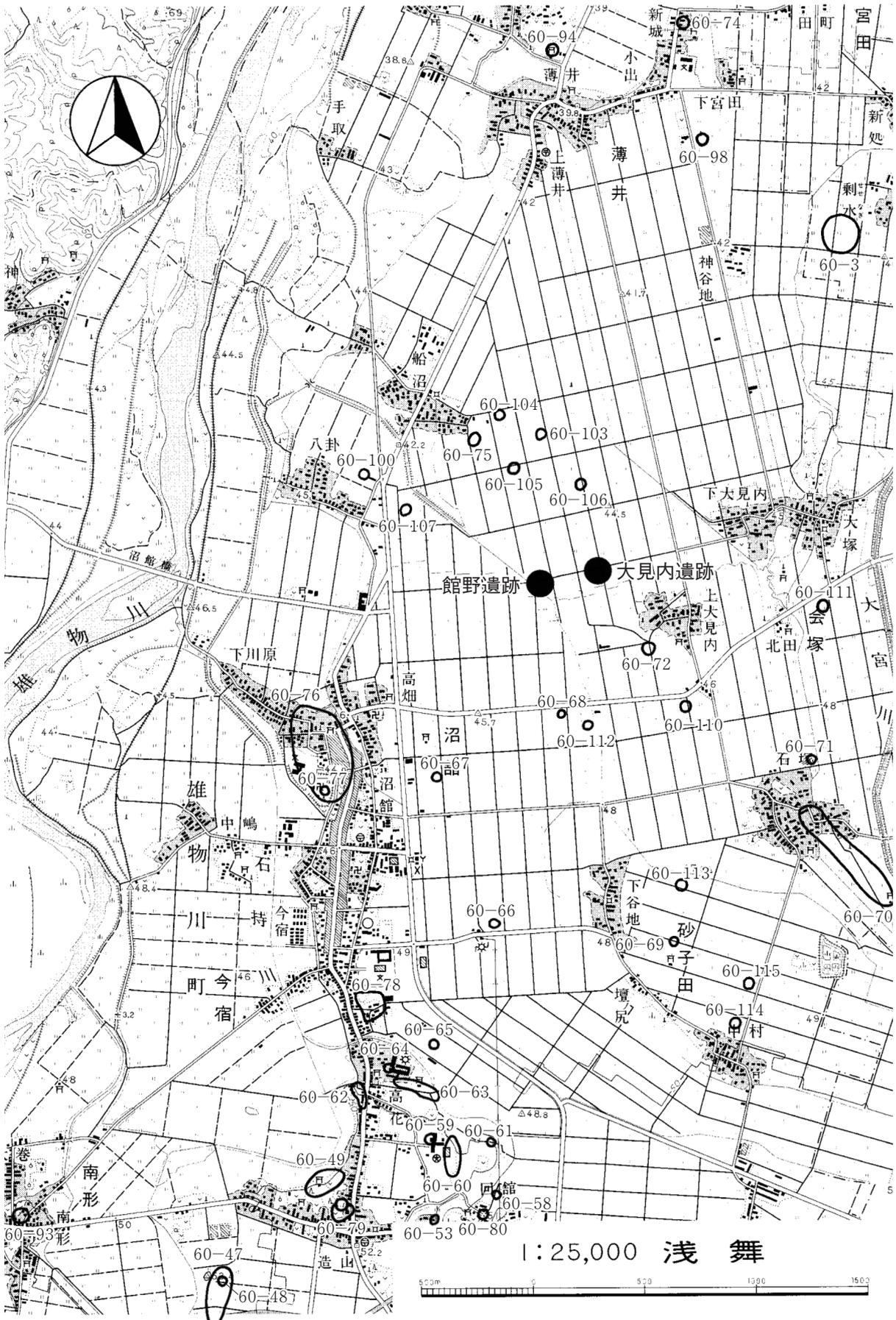
旧石器時代の遺跡は、新道Ⅰ遺跡（60-9）の1遺跡が確認されている。佐藤鶴松氏によって石刃2点と尖頭器1点が発見され、東北大学芹沢長介氏によって、石刃は後期旧石器時代、尖頭器は後期旧石器時代最終末期に属するとされている。

縄文時代草創期の遺跡は、今のところ確認されていない。

縄文時代早期の遺跡は、常野遺跡（60-46）の1遺跡が確認されている。2001（平成13）年のほ場整備事業の工事立ち会い調査で、貝殻条痕文のある土器が出土した。

縄文時代前期の遺跡は、坂ノ下Ⅱ遺跡（60-6）、根羽子沢遺跡（60-25）、竹の子沢遺跡（60-40）、常野遺跡（60-46）の4遺跡が確認されている。根羽子沢遺跡は、過去3回発掘調査が行われている。1955（昭和30）年に雄物川町教育委員会と秋田県立沼館高等学校（現：雄物川高等学校）社会科クラブが発掘調査を行い、配石遺構を伴う土坑墓を2基検出し、大木4・5式土器や珧状耳飾が出土している。その後、1986（昭和61）年に雄物川町教育委員会、1987（昭和62）年に秋田県教育委員会が国道107号線の改良工事に伴う緊急発掘調査を行い、大型住居跡（長軸15.7m×短軸5.2m）や土坑が検出され、大木6式土器と円筒下層d式土器が出土した。

縄文時代中期の遺跡は、鍛冶台遺跡（60-1）、黒沢Ⅰ遺跡（60-2）、黒沢Ⅱ遺跡（60-3）、坂ノ下Ⅰ遺跡（60-5）、坂ノ下Ⅱ遺跡（60-6）、坂ノ下Ⅲ遺跡（60-7）、坂ノ下Ⅳ遺跡（60-8）、新道Ⅰ遺跡（60-9）、新道Ⅱ遺跡（60-10）、新道Ⅲ遺跡（60-11）、新道Ⅳ遺跡（60-12）、新道Ⅴ遺跡（60-13）、新道Ⅵ遺跡（60-14）、新道Ⅶ遺跡（60-15）、内童子ヶ沢遺跡（60-16）、水上沢遺跡（60-17）、大沢Ⅰ遺跡（60-18）、盲沢遺跡（60-19）、長谷堂遺跡（60-21）、内山Ⅱ遺跡（60-22）、内山Ⅲ遺跡（60-23）、根羽子沢遺跡（60-25）、金峰Ⅰ遺跡（60-27）、郷遺跡（60-30）、二井山Ⅰ遺跡（60-34）、笹の沢Ⅰ遺跡（60-37）、笹の沢Ⅱ遺跡（60-38）、笹の沢Ⅲ遺跡（60-39）、竹の子沢遺跡（60-40）、竹の子沢Ⅱ遺跡（60-41）、竹の子沢Ⅲ遺跡（60-42）、常野遺跡（60-46）の32遺跡が確認されている。この時期の遺跡の大部分は、雄物川の西、出羽丘陵東縁部の海拔100メートル前後の舌状台地に点在しており、遺跡数も多い。長谷堂遺跡からは大木9・10式土器、内山Ⅲ遺跡からは大木8a式土器、常野遺跡からは大木9式土器が出土している。



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 雄物川町遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡所在地	時代・時期
60-1	鍛冶台遺跡	大沢字鍛冶台	縄文(中)
60-2	黒沢Ⅰ遺跡	大沢字黒沢	縄文(中)
60-3	黒沢Ⅱ遺跡	大沢字黒沢	縄文(中)
60-4	黒沢Ⅲ遺跡	大沢字黒沢	縄文(晩)
60-5	坂ノ下Ⅰ遺跡	大沢字坂ノ下 (東海林松三郎氏宅地内)	縄文(中)
60-6	坂ノ下Ⅱ遺跡	大沢字坂ノ下1の1 (共同墓地南面)	縄文(前・中)
60-7	坂ノ下Ⅲ遺跡	大沢字坂ノ下 (北ノ沢橋手前の畑地)	縄文(中)
60-8	坂ノ下Ⅳ遺跡	大沢字坂ノ下 (坂ノ下集落南側田圃中)	縄文(中)
60-9	新道Ⅰ遺跡	大沢字新道13ノ2	旧石器(後)、縄文(中)
60-10	新道Ⅱ遺跡	大沢字新道13ノ1	縄文(中)
60-11	新道Ⅲ遺跡	大沢字桐ノ木沢13、1	縄文(中)
60-12	新道Ⅳ遺跡	大沢字桐ノ木沢13、5	縄文(中)
60-13	新道Ⅴ遺跡	大沢字坂ノ下58、1	縄文(中)
60-14	新道Ⅵ遺跡	大沢字坂ノ下55	縄文(中)
60-15	新道Ⅶ遺跡	大沢字新道14-27	縄文(中)
60-16	内童子ヶ沢遺跡	大沢字内童子ヶ沢	縄文(中)
60-17	水上沢遺跡	大沢字水上沢1の1の内	縄文(中)
60-18	大沢Ⅰ遺跡(赤井遺跡)	大沢字赤井(大沢貯水池)	縄文(中)
60-19	盲沢遺跡	大沢字盲沢	縄文(中)
60-20	上前遺跡	大沢字上前	縄文(後)
60-21	長谷堂遺跡(内山Ⅰ遺跡)	大沢字内山	縄文(中)
60-22	内山Ⅱ遺跡	大沢字内山	縄文(中)
60-23	内山Ⅲ遺跡	大沢字内山	縄文(中)
60-24	飯岡遺跡	大沢字飯岡	縄文
60-25	根羽子沢遺跡	大沢字根羽子沢	縄文(前・中)
60-26	末館窯跡	今宿字末館 および今宿字敷沢目	奈良
60-27	金峰Ⅰ遺跡	大沢字金峰	縄文(中)
60-28	上法寺旧寺跡	大沢字上法寺	平安
60-29	北野経塚 (大沢森経塚を含む)	大沢字北野および 今宿字ハアカ坂の境界 (大沢森経塚は平安)	鎌倉～室町 (大沢森経塚は平安)
60-30	郷遺跡	今宿字ハアカ坂	縄文(中)
60-31	郷Ⅰ遺跡	今宿字郷	平安
60-32	郷Ⅱ遺跡	今宿字郷	縄文(後・晩)
60-33	兵部ヶ沢遺跡	沼館字兵部ヶ沢	縄文(後・晩)
60-34	二井山Ⅰ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文(中)
60-35	二井山Ⅱ遺跡	二井山字和田	縄文(後)
60-36	二井山Ⅲ遺跡	二井山字和田	縄文(後)
60-37	笹の沢Ⅰ遺跡	二井山字笹の沢	縄文(中)
60-38	笹の沢Ⅱ遺跡	二井山字笹の沢	縄文(中)
60-39	笹の沢Ⅲ遺跡	二井山字笹の沢	縄文(中)
60-40	竹の子沢遺跡	二井山字竹の子沢	縄文(前・中)
60-41	竹の子沢Ⅱ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文(中)
60-42	竹の子沢Ⅲ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文(中)
60-43	二井山松子台遺跡	二井山字松子台	縄文
60-44	水沢遺跡	二井山字境長根	縄文
60-45	上西野遺跡	西野字後田表	平安
60-46	常野遺跡	柏木字歌舞伎野	縄文(早・前・中)
60-47	蝦夷塚古墳群	造山字蝦夷塚55、36-1	縄文(後)、奈良～平安
60-48	蝦夷塚出土勾玉	造山字蝦夷塚	奈良～平安
60-49	造山遺跡(造山古墳群)	造山字造山(通称:ヒツ森)	奈良～平安
60-50	栗林遺跡	造山字栗林	縄文、奈良～平安
60-51	栗林製鉄跡	造山字栗林	奈良～平安
60-52	廻館十三塚	東里字十三塚	弥生、平安～鎌倉
60-53	十三塚Ⅰ遺跡	東里字十三塚340	縄文(晩)、弥生
60-54	十三塚Ⅱ遺跡	東里字十三塚337の1内	縄文(晩)、弥生
60-55	十三塚Ⅲ遺跡	東里字十三塚337の1内	縄文、弥生
60-56	廻館Ⅰ遺跡(十三塚遺跡)	東里字廻館および十三塚337の1	弥生、平安
60-57	廻館Ⅱ遺跡	東里字廻館	平安
60-58	雄物川高校裏遺跡	今宿字猫袋	平安
60-59	雄物川高校Ⅰ遺跡	今宿字猫袋	縄文、平安

番号	遺跡名	遺跡所在地	時代・時期
60-60	雄物川高校Ⅱ遺跡	今宿字猫袋	縄文、平安
60-61	猫袋遺跡	今宿字猫袋 (雄物川高校敷地内)	縄文、平安
60-62	くずれ遺跡	造山字高花	平安
60-63	十足馬場遺跡	造山字十足馬場	平安
60-64	首塚遺跡	今宿字首塚	奈良～平安
60-65	南田遺跡	今宿字南田	奈良～平安
60-66	下作の瀬遺跡	今宿字下作の瀬28	平安
60-67	千刈田遺跡	沼館字昼飯塚	平安
60-68	正願谷地遺跡	沼館字正願谷地	平安
60-69	旧明神遺跡	砂子田字旧明神	縄文
60-70	石塚上台遺跡	会塚字上台	平安
60-71	上大塚遺跡	会塚字上大塚	平安
60-72	上大見内遺跡	薄井字大見内506	奈良～平安
60-73	館野遺跡	薄井字館野	縄文(後)、平安
60-74	新城館跡	薄井字新城	室町
60-75	薄井館跡	薄井字館沼	室町
60-76	沼の欄跡(沼館城跡)	沼館字沼館	平安(沼館城跡は室町)
60-77	蔵光院板碑	沼館字沼館	室町
60-78	今宿館跡	今宿字高花および 今宿字西在家の一带	室町
60-79	造山館跡	造山字造山	室町
60-80	廻館跡	東里字廻館	室町
60-81	悪戸城跡	西野字悪戸	室町
60-82	兵部ヶ沢館跡	沼館字兵部ヶ沢	平安
60-83	二井山館跡	二井山字野沢	室町
60-84	赤館跡	二井山字館平	室町
60-85	三吉山館跡	今宿字末館10	室町
60-86	末館跡	今宿字末館	室町
60-87	館森館跡	大沢字根羽子沢	室町
60-88	上法寺館跡	大沢字上法寺	室町
60-89	赤井館跡	大沢字赤井	室町
60-90	大沢城跡	大沢字天下屋敷	室町
60-91	黒沢城跡	大沢字黒沢	室町
60-92	大沢口境目御番所跡	大沢字坂ノ下	江戸
60-93	深井焼窯	南形字深井	江戸
60-94	天保無縁塚	薄井字下開	江戸
60-95	矢神遺跡	平鹿郡大森町鱈沼 (矢神集落)	縄文(後)
60-96	大沢松雲寺遺跡	大沢字大沢	縄文
60-97	釘貫遺跡	東里字釘貫	縄文(晩)、奈良
60-98	小出遺跡	薄井字小出393-1外	平安
60-99	大見内遺跡	薄井字大見内226-1外	縄文(後)、奈良～平安、中世
60-100	八卦遺跡	沼館字八卦	奈良～平安、中世
60-101	十三塚遺跡	東里字十三塚	奈良～平安
60-102	造山Ⅱ遺跡	造山字造山	縄文(後・晩)
60-103	明神Ⅰ遺跡	薄井字明神	平安
60-104	明神Ⅱ遺跡	薄井字明神	縄文(後)
60-105	明神Ⅲ遺跡	薄井字明神	縄文(後)
60-106	明神Ⅳ遺跡	薄井字明神	縄文(後)
60-107	桜木谷地遺跡	沼館字桜木谷地	平安
60-108	水里遺跡	東里字水里	奈良～平安
60-109	耳取遺跡	造山字耳取	江戸
60-110	樋向遺跡	会塚字樋向	平安
60-111	田中遺跡	会塚字田中	平安
60-112	下谷地Ⅰ遺跡	砂子田字下谷地	平安
60-113	下谷地Ⅱ遺跡	砂子田字下谷地	平安
60-114	中村Ⅰ遺跡	砂子田字中村	平安
60-115	中村Ⅱ遺跡	砂子田字中村	平安
60-116	柄内遺跡	東里字柄内	縄文・平安
60-117	水尻遺跡	東里字水尻	縄文・平安
60-118	東里北遺跡	砂子田字東里	平安

縄文時代後期の遺跡は、上前遺跡（60-20）、郷Ⅱ遺跡（60-32）、兵部ヶ沢遺跡（60-33）、二井山Ⅱ遺跡（60-35）、二井山Ⅲ遺跡（60-36）、蝦夷塚古墳群（60-47）、館野遺跡（60-73）、矢神遺跡（60-95）、大見内遺跡（60-99）、造山Ⅱ遺跡（60-102）、明神Ⅱ遺跡（60-104）、明神Ⅲ遺跡（60-105）、明神Ⅳ遺跡（60-106）の13遺跡が確認されている。2002（平成14）年に雄物川町教育委員会が行った明神遺跡分布調査では、宮戸1b式土器が出土した。

縄文時代晩期の遺跡は、黒沢Ⅲ遺跡（60-4）、郷Ⅱ遺跡（60-32）、兵部ヶ沢遺跡（60-33）、十三塚Ⅰ遺跡（60-53）、十三塚Ⅱ遺跡（60-54）、釘貫遺跡（60-97）、造山Ⅱ遺跡（60-102）の7遺跡が確認されている。1982（昭和57）年に雄物川町教育委員会が発掘調査を行った兵部ヶ沢遺跡では、竪穴住居跡が2軒検出され、鉢形土器、注口土器などが出土した。

弥生時代の遺跡は、廻館十三塚（60-52）、十三塚Ⅰ遺跡（60-53）、十三塚Ⅱ遺跡（60-54）、十三塚Ⅲ遺跡（60-55）、廻館Ⅰ遺跡（60-56）の5遺跡が確認されている。十三塚Ⅰ遺跡からは、胴部に平行沈線によって連続する弧線が描かれ、その間に刺突文が施された壺形の土器が出土している。

古墳時代の遺跡は、確認されていない。

奈良時代の遺跡は、末館窯跡（60-26）、蝦夷塚古墳群（60-47）、蝦夷塚出土勾玉（60-48）、造山遺跡（60-49）、栗林遺跡（60-50）、栗林製鉄跡（60-51）、首塚遺跡（60-64）、南田遺跡（60-65）、上大見内遺跡（60-72）、釘貫遺跡（60-97）、大見内遺跡（60-99）、八卦遺跡（60-100）、十三塚遺跡（60-101）、水里遺跡（60-108）の14遺跡がある。1957（昭和32）年と1959（昭和34）年に発掘調査された末館窯跡では、半地下式窖窯が2基検出され、8世紀中葉から末葉の須恵器が多数出土した。これらの遺物は県内窯跡出土須恵器の編年上、最も古い時期のものである。蝦夷塚古墳群は、1955（昭和30）年に藤田亀治・藤一・正一氏、1958（昭和33）年には佐藤金一氏によって勾玉などの玉類を多数発見されている所である。菅江真澄の『雪の出羽路』平鹿郡二巻に「造山邑の蝦夷塚といふあたりより、長之亟といふ村民の掘り得しとて、勾玉あり」と記されていることからわかるように、古くから遺物の出土する地として知られていた所でもある。1985（昭和60）年には、国道107号改良工事に伴って秋田県教育委員会が、2002（平成14）年には県営ほ場整備事業に伴って雄物川町教育委員会が発掘調査を行い、計17基の古墳が検出され、県内最大規模の古墳群であることが判明している。また、2003（平成15）年に雄物川町教育委員会が発掘調査した釘貫遺跡と八卦遺跡からは、奈良時代中ごろの竪穴住居跡が検出され、内面を黒色処理した非ロクロ土器の坏や須恵器の坏が出土している。

平安時代の遺跡は、上法寺旧寺跡（60-28）、郷Ⅰ遺跡（60-31）、上西野遺跡（60-45）、蝦夷塚古墳群（60-47）、蝦夷塚出土勾玉（60-48）、造山遺跡（60-49）、栗林遺跡（60-50）、栗林製鉄跡（60-51）、廻館十三塚（60-52）、廻館Ⅰ遺跡（60-56）、廻館Ⅱ遺跡（60-57）、雄物川高校裏遺跡（60-58）、雄物川高校Ⅰ遺跡（60-59）、雄物川高校Ⅱ遺跡（60-60）、猫袋遺跡（60-61）、くずれ遺跡（60-62）、十足馬場遺跡（60-63）、首塚遺跡（60-64）、南田遺跡（60-65）、下作の瀬遺跡（60-66）、千刈田遺跡（60-67）、正願谷地遺跡（60-68）、石塚上台遺跡（60-70）、上大塚遺跡（60-71）、上大見内遺跡（60-72）、館野遺跡（60-73）、沼の柵跡（60-76）、兵部ヶ沢館跡（60-82）、小出遺跡（60-98）、大見内遺跡（60-99）、八卦遺跡（60-100）、十三塚遺跡（60-101）、明神Ⅰ遺跡（60-103）、桜木谷地遺跡（60-107）、水里遺跡（60-108）、樋向遺跡（60-110）、田中遺跡（60-111）、下谷地Ⅰ遺跡（60-112）、下谷地Ⅱ遺跡（60-113）、中村Ⅰ遺跡（60-114）、中村Ⅱ遺跡（60-115）、柄内遺跡（60-116）、水尻遺跡（60-117）、

東里北遺跡（60-118）の44遺跡が確認されている。2004（平成16）年に雄物川町教育委員会が発掘調査した柄内遺跡では、竪穴住居跡が検出され、底部に木葉痕のある土師器が出土している。

鎌倉時代から室町時代の遺跡は、北野経塚（60-29）、廻館十三塚（60-52）、新城館跡（60-74）、薄井館跡（60-75）、沼館城跡（60-76）、蔵光院板碑（60-77）、今宿館跡（60-78）、造山館跡（60-79）、廻館跡（60-80）、悪戸城跡（60-81）、二井山館跡（60-83）、赤館跡（60-84）、三吉山館跡（60-85）、末館跡（60-86）、館森館跡（60-87）、上法寺館跡（60-88）、赤井館跡（60-89）、大沢城跡（60-90）、黒沢館跡（60-91）、大見内遺跡（60-99）、八卦遺跡（60-100）の21遺跡が確認されており、その多くが中世城館である。末館跡は、雄物川に臨む出羽山地の東縁辺にある館跡である。三吉神社の山頂部が主郭に比定され、この北西に東西40m、南北50mの略方形の郭があり、回りを幅5mの帯郭が一段取り巻いていることが知られている。

江戸時代の遺跡は、大沢口境目御番所跡（60-92）、深井焼窯（60-93）、天保無縁塚（60-94）、耳取遺跡（60-109）の4遺跡が確認されている。2003（平成15）年に雄物川町教育委員会が発掘調査した耳取遺跡からは、寛永通宝1点と磁器2点が出土した。

このように、雄物川町では旧石器時代から近世に至るまで多くの遺跡が発見され、その調査結果から当地域における通史が徐々に明らかにされてきている。

## 第2章 遺跡の環境

### 《引用・参考文献》

- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第365集 2003（平成15）年
- 秋田県農政部農地整備課 『出羽丘陵開発計画地域 土地分類基本調査 浅舞』 1979（昭和54）年
- 大沢禮・大口健志・高安泰助 『地域地質研究報告 浅舞地域の地質』 通商産業省工業技術院地質調査所 1979（昭和54）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987（昭和62）年
- 雄物川町教育委員会 『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』 雄物川町文化財調査報告書第2集 2002（平成14）年
- 雄物川町教育委員会 『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』 雄物川町文化財調査報告書第4集 2003（平成15）年
- 雄物川町教育委員会 『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』 雄物川町文化財調査報告書第7集 2004（平成16）年
- 秋田県教育委員会 『大見内遺跡』 秋田県文化財調査報告書第374集 2004（平成16）年
- 雄物川町役場 『雄物川町郷土史』 1980（昭和55）年
- 雄物川町教育委員会 『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』 雄物川町文化財調査報告書 1987（昭和62）年
- 秋田県教育委員会 『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第176集 1988（昭和63）年
- 雄物川町郷土資料館 『雄物川町郷土資料館報告書』 第1号 1984（昭和59）年
- 秋田県 『秋田県史 考古編』 1960（昭和35）年
- 大和久震平 『末館窯跡発掘調査報告』 『雄物川町郷土史資料』 第3集 雄物川町教育委員会 1963（昭和38）年
- 内田武志・宮本常一編 『菅真澄全集』 第6巻 未来社 1976（昭和51）年
- 秋田県教育委員会 『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第136集 1986（昭和61）年
- 雄物川町教育委員会 『蝦夷塚古墳群』 雄物川町文化財調査報告書第3集 2003（平成15）年
- 雄物川町教育委員会 『八卦遺跡』 雄物川町文化財調査報告書第5集 2004（平成16）年
- 雄物川町教育委員会 『耳取遺跡・釘貫遺跡』 雄物川町文化財調査報告書第6集 2004（平成16）年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第380集 2004（平成16）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

大見内遺跡・館野遺跡は既述のとおり、雄物川によって形成された沖積地に立地している。県道48号横手東由利線の北側、上大見内集落の北西側にあり、2001（平成13）年度と2002（平成14）年度の確認調査で判明した範囲は、東西約800m、南北約600mにおよぶ約390,000m<sup>2</sup>である。大見内遺跡の現況は水田であり、標高は約42～44mである。館野遺跡の現況は盛土された神社跡地であり、標高は約43～45mである。また、北側には薄井館跡（60－75）、明神Ⅰ遺跡（60－103）、明神Ⅱ遺跡（60－104）、明神Ⅲ遺跡（60－105）、明神Ⅳ遺跡（60－106）、西側には八卦遺跡（60－100）、桜木谷地遺跡（60－107）、南側には正願谷地遺跡（60－68）、上大見内遺跡（60－72）、樋向遺跡（60－110）、下谷地Ⅰ遺跡（60－112）、東側には田中遺跡（60－111）が確認されている。

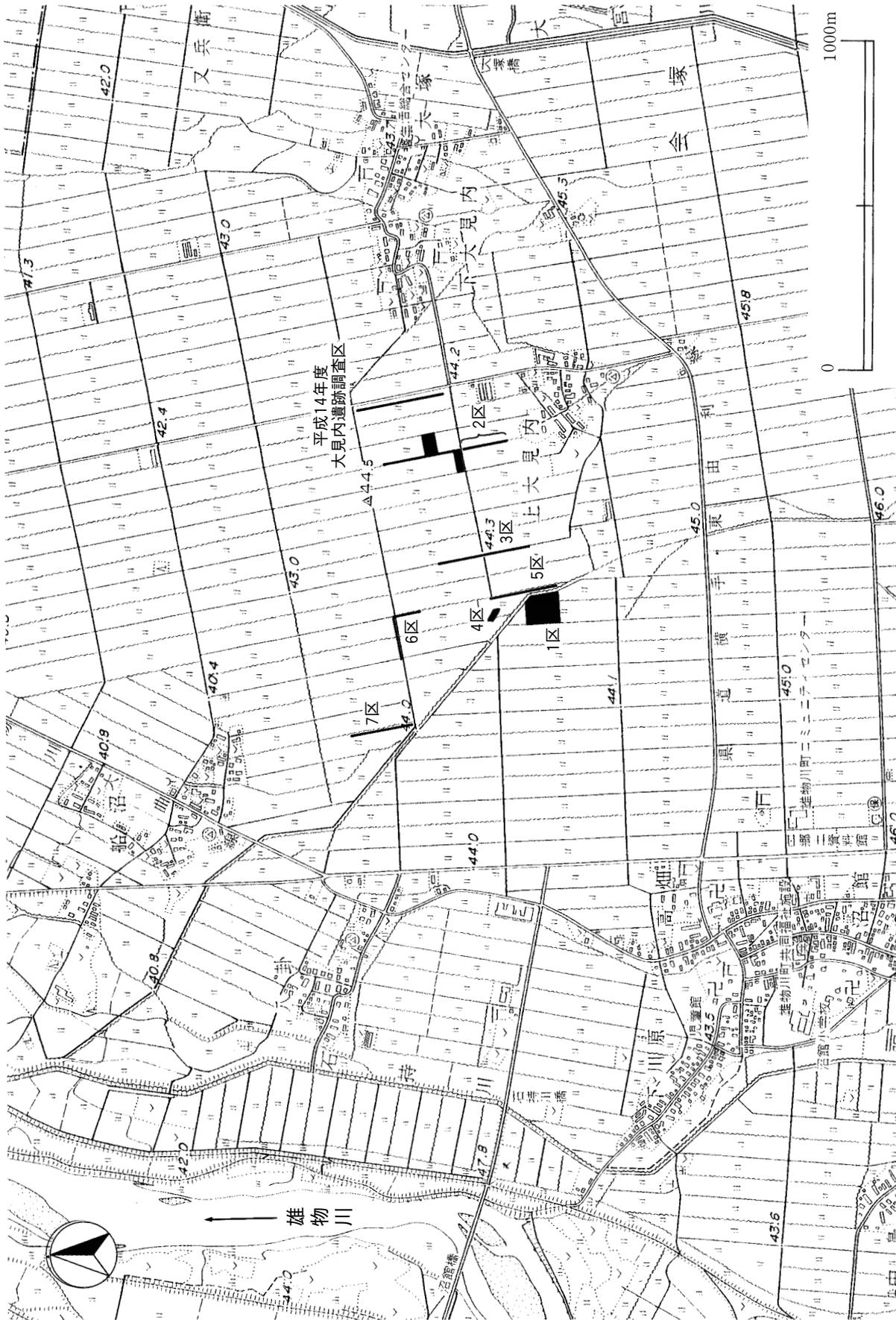
発掘調査は、大見内遺跡・館野遺跡内で破壊が免れない切土施行部分（面積13,000m<sup>2</sup>）について行われた。調査にあたり調査区を7つに区分し、1区（7,000m<sup>2</sup>）、2区（900m<sup>2</sup>）、3区（1,300m<sup>2</sup>）、4区（700m<sup>2</sup>）、5区（900m<sup>2</sup>）、6区（1,130m<sup>2</sup>）、7区（1,070m<sup>2</sup>）と呼称した。これは工事を実施する平鹿地域振興局より調査が終了次第、調査区を引き渡すよう要請を受けていたためにとった措置であり、本書中でもこの呼称を用いる。なお、1・2・3・5・6・7区が大見内遺跡にあたり、4区が館野遺跡にあたる。

### 第2節 調査の方法

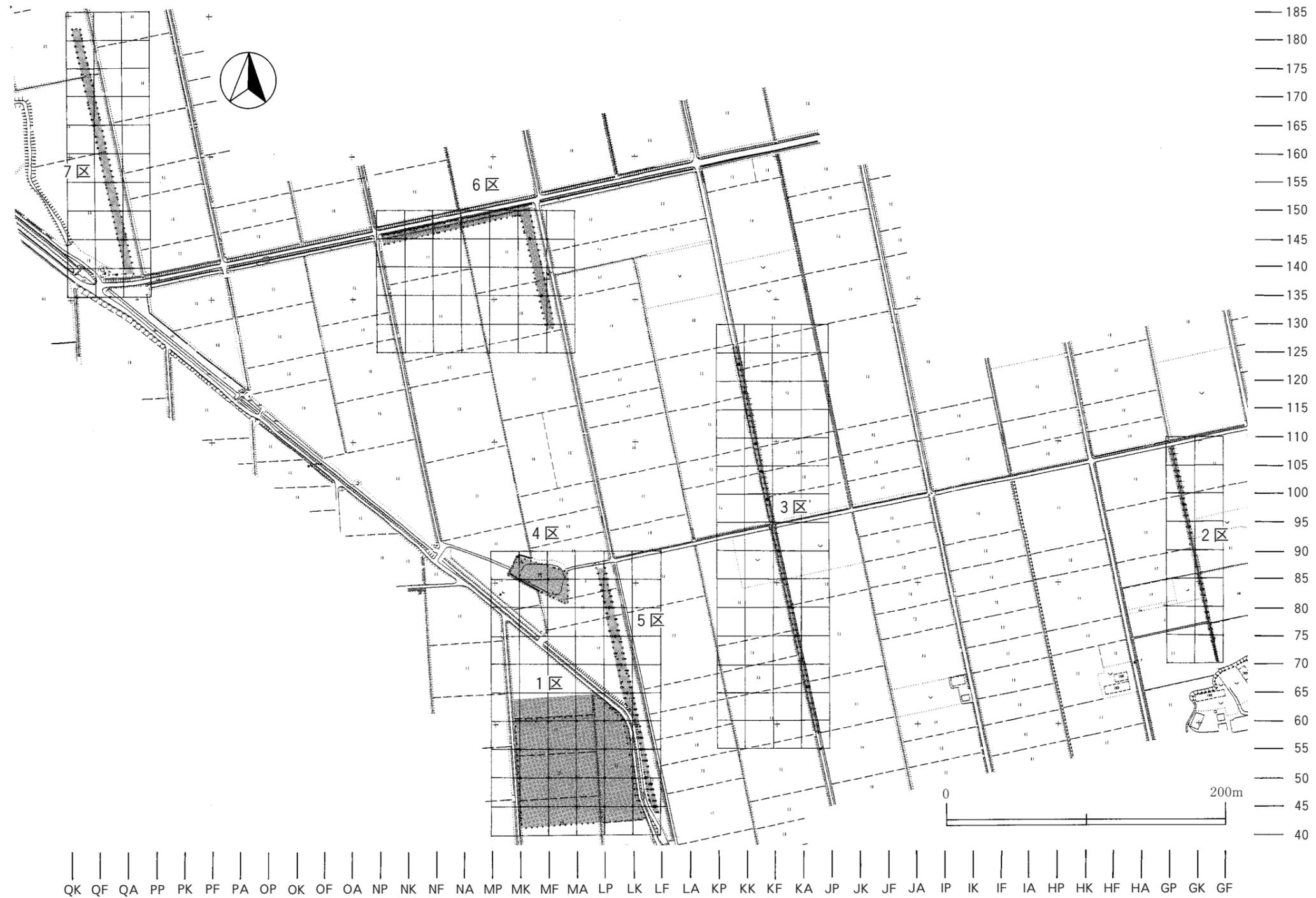
発掘調査はグリッド法を採用した。調査区1区のほぼ中央にグリッド原点MA50を設置した。この杭から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また、グリッド杭には東から西に向かって昇順するアルファベット2文字と、南から北に向かって昇順する連続する数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

各調査区を掘り進む方法は、Ⅰ層・Ⅱ層の表土及び耕作土をバックフォーで除去した後、人力で行った。また、1区の50～60ラインの落ち込み部分の調査においては、遺構確認作業を円滑に進めるため、南北方向に幅4mのトレンチを6本設定し掘り進めた。

検出した遺構には、各調査区ごとに、検出した順に連番を付し、凡例にあげた遺構略号をつけた。出土した遺物については、遺構内のは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を、遺構外のは出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。調査の記録については、実測図・写真・筆記によって行い、実測図は、基本的に1/20の縮尺で、一部の土坑は1/10の縮尺で作図した。また、検出遺構の写真撮影は、35mmのモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーを使用した。



第4図 調査区位置図



第5図 グリッド配置図

### 第3節 調査の経過

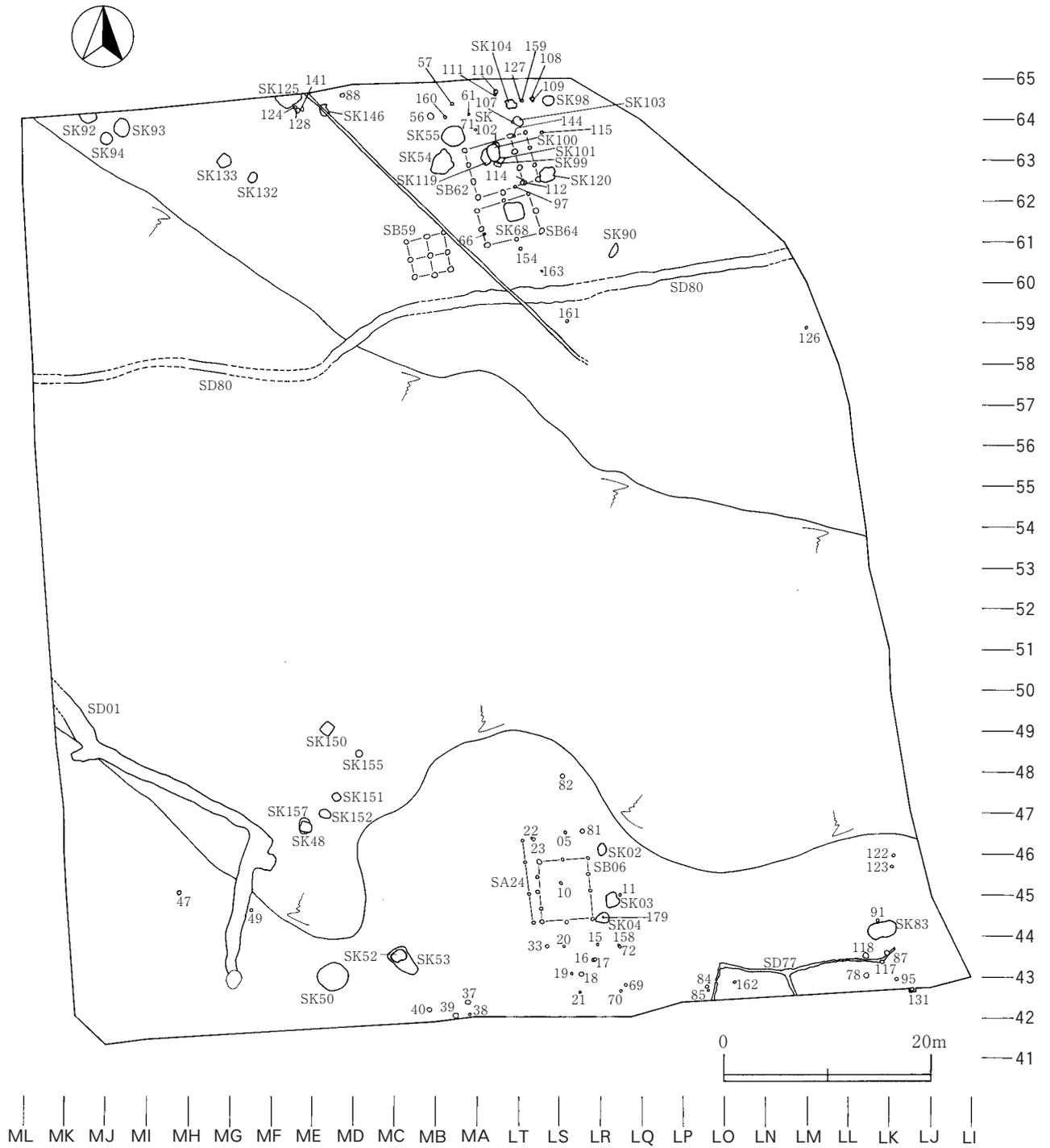
発掘調査は、平成15年5月13日から10月31日までの延べ100日間行った。調査経過は、以下のとおりである。

第2表 調査の経過(1)

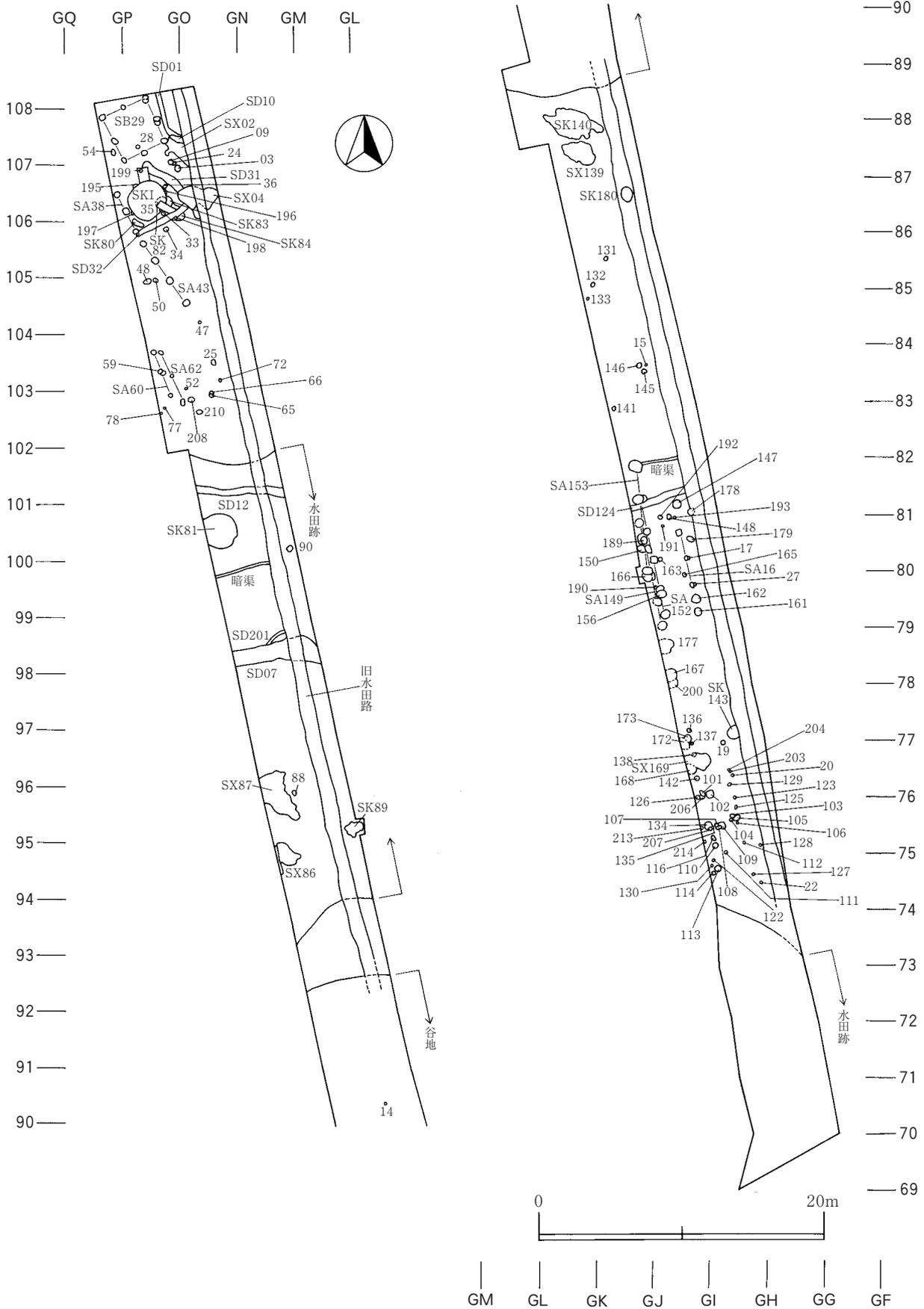
<p>【第1週】5月13日～5月16日 13日、作業員説明会、発掘器材の搬入、事務所・休憩棟等の整備終了後、遺跡周辺の環境整備を行った。14日から2区の発掘調査を開始し、粗掘り・遺構確認作業・基本層序を観察するため東壁の精査を行った。15日からグリッド杭打設を開始した。この週は遺構を検出できなかったが、遺物(土師器片・須恵器片)が中コンテナ2.5箱分出土した。</p>
<p>【第2週】5月19日～5月23日 2区の調査と並行して、19日から3区、23日から5区の発掘調査を開始した。2区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行った。5区は粗掘り・遺構確認作業を行った。2区で底部に「豊」と書かれた墨書土器(須恵器片)が1点出土した。1・2・3・5区のグリッド杭打設を終了した。</p>
<p>【第3週】5月26日～5月30日 2・3区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。5区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行い、南北に延びる溝跡を4条検出した。</p>
<p>【第4週】6月2日～6月6日 1区の発掘調査を開始し、粗掘り・遺構確認作業を行った。2・3区は遺構の精査、5区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。</p>
<p>【第5週】6月9日～6月13日 1区は粗掘り・遺構確認作業、3・5区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。大野所長から、3区に十和田a火山灰降下後の水田跡が見られるので慎重に調査するよう指導された。10日、北上市立埋蔵文化財センター職員君島氏・杉本氏が整理作業員28名を引率して、発掘作業員研修のために来跡した。</p>
<p>【第6集】6月17日～6月20日 1区は粗掘り・遺構確認作業、2・3区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査、5区は遺構の精査を行った。1区は乾燥し地面のひび割れが激しいため、遺構の保護のため散水シートをかけた。17～19日、秋田県立横手工業高校生9名がボランティア活動の発掘体験学習を行った。</p>
<p>【第7週】6月23日～6月27日 2・3区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行った。5区は粗掘り・遺構確認作業を行った。3区で25日に南側水田跡の畦畔を検出し、27日にSK03から斎串が出土した。</p>
<p>【第8週】6月30日～7月4日 1区は北側の粗掘り・遺構確認作業を行った。2・3区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行った。2区北側で点在する火山灰を検出し、その範囲から水田跡である可能性が高まった。3区南側で柱列1列を検出した。7月1日、佐々木孝志雄物川町町長が現場視察のために来跡した。</p>
<p>【第9週】7月7日～7月11日 1区は遺構確認作業、2区は北側のSKI35等の遺構の精査、南側の粗掘り・遺構確認作業を行った。3区は北側の粗掘り・遺構確認作業、南側の遺構確認作業・遺構の精査を行った。2区で墨書土器(須恵器杯)が1点出土した。10日、雄物川北小学校狩野教諭と児童7名が総合的な学習のために来跡した。</p>
<p>【第10週】7月14日～7月18日 1区は北側の遺構確認作業を行った。2区は北側で検出した遺構の精査を行い、竪穴状遺構を切る土坑3基・掘立柱建物跡1棟を検出した。また、水田跡と思われる部分を掘り下げたところ、SK81を検出した。SK81内からは鋳・下駄・曲物等の木製品と、須恵器杯が出土した。3区は北側の水田跡の確認作業、南側の遺構確認作業・遺構の精査を行った。4区は15・16日に立木の伐採を行った。17日から3区北側の調査のため小島文化財主事、横山調査・研究員が発掘調査に参加した。</p>
<p>【第11週】7月22日～7月25日 2区はSK81・139・140等、検出した遺構の精査を行った。SK140からは多量の土師器杯が出土し、「財上」と書かれた墨書土器も出土した。南端で畦畔を検出した。3区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行った。北側で水田跡の畦畔を検出した。22日、4区の抜根除去作業を重機で行ったが遺構を破壊する恐れがあったため、人手での作業に切り替えることになった。5区は遺構確認作業と溝跡4条の精査を行った。22日、4・6・7区の地割りの確認のために、平鹿地域振興局石井技師・文化財保護室深浦学芸主事が来跡した。23日、2区、70ライン以南の調査を終了し、原因者に引き渡した。24日、雄物川町郷土資料館真田氏・島田氏が雄物川高校生3名を引率し、職場体験の一環として来跡した。</p>
<p>【第12週】7月28日～8月1日 2区は遺構の精査を行った。SK140から「六千」と書かれた墨書土器(土師器杯)、SA153P1・P3・P4からは柱材が出土した。3区は水田跡等の遺構確認作業、5区は遺構の精査を行った。6区は草刈り等の環境整備を行った。</p>

第3表 調査の経過（2）

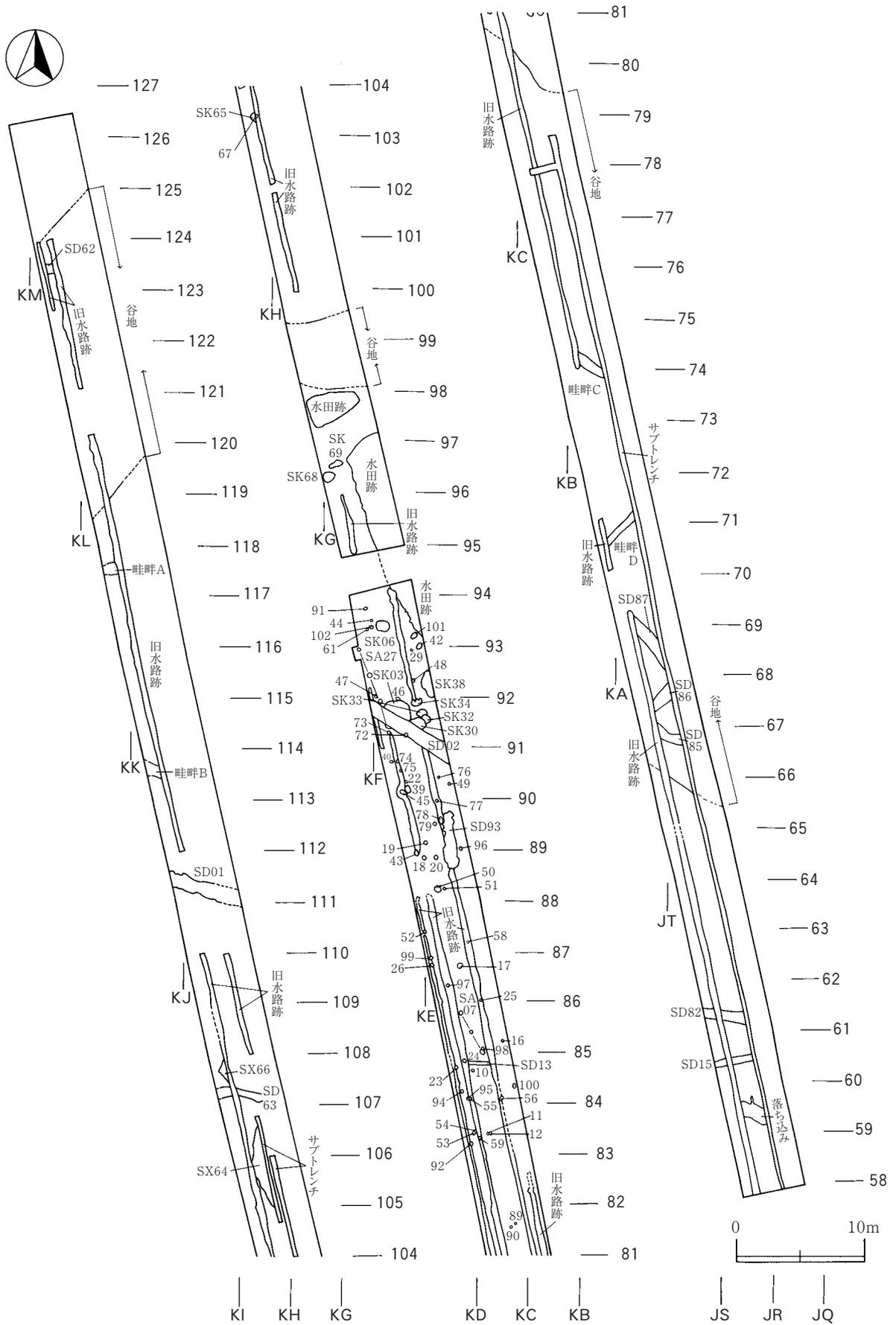
<p>【第13週】8月4日～8月8日 1区は北側の粗掘り・遺構確認作業を行った。4日、2区の調査を終了し、原因者に引き渡した。3区は水田跡の確認作業・遺構の精査を行った。8日、3区北側の調査を終了した。5区は北側の遺構の精査、南側は遺構確認作業を行った。北側のSK21から縄文土器が出土した。</p>
<p>【第14週】8月18日～8月22日 1区は粗掘り・遺構確認作業、3区は粗掘り・水田跡等の確認作業を行った。5区は遺構の精査を行った。21日、3区北側を文化財保護室を通して原因者側へ引き渡した。</p>
<p>【第15週】8月25日～8月28日 1区は南側の遺構確認作業を行い、多くの遺構を検出した。3区の南側は遺構の精査、5区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。5区の南側からは遺構が検出されなかったため、全景写真撮影をして調査を終了した。6区の調査を開始し、粗掘り・遺構確認作業を行った。26日、雄物川町文化財保護協会23名が遺跡見学のために来跡、文化財保護室武藤学芸主事が現場状況視察のために来跡した。</p>
<p>【第16週】9月1日～9月4日 1区は南側の遺構確認作業・遺構の精査を行い、南西部でSD01を検出した。3・5区は遺構の精査を行った。2日、3・5区の調査を終了した。6区は遺構確認作業・遺構の精査を行い、東側で十和田火山灰降下後に耕作したと思われる時期不明の水田跡、溝跡3条を確認した。</p>
<p>【第17週】9月8日～9月12日 1区は中央部から南側にかけて遺構確認作業、南西側は遺構の精査を行った。4区は調査を開始するための草刈り等の環境整備を行った。6区は遺構確認作業・遺構の精査を行い、12日、東側の調査を終了した。北側中央部に柱穴様ピットを集中して検出した。9日から7区の調査を開始し、粗掘りを行った。10日、原因者の平鹿地域振興局丸山副主幹・石井技師、文化財保護室桜田主幹・深浦学芸主事が来跡し、調査日数の延長に関して協議を行った。</p>
<p>【第18週】9月16日～9月19日 1区は北側の遺構確認作業・遺構の精査、中央部から南側にかけては水田跡の確認作業を行った。4区の調査を開始し、土層観察用ベルトを設定、及び南西部の粗掘りを行った。6区は遺構の精査を行い、17日に調査を終了した。7区は粗掘りを終了し、遺構確認作業を行った。</p>
<p>【第19週】9月22日～9月26日 1区は粗掘り・遺構確認作業・遺構の精査を行った。4区は神社となっていた南側を粗掘りしたところ、現代のゴミが多く出土し、盛土されていたことがわかった。また、地山面からマウンドに伴う周溝を検出し、古墳の可能性が出てきた。7区は遺構確認作業を行った。表土中から土器片等が少量出土したのみで、遺構が全く検出されなかった。北側と南側では地山面まで攪乱されており、基本土層図の作成と写真撮影を行い、24日に調査を終了した。</p>
<p>【第20週】9月29日～10月3日 1区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。北端からは縄文時代の土坑を検出した。この週より中央部にトレンチ6本を設定し、その断面から水田跡の有無を観察することにした。同時に次週よりベルトコンベアーを導入することになった。4区は表土及び抜根除去作業を行った。30日に文化財保護室磯村学芸主事・藤沢学芸主事、10月1日に文化財保護室桜田主幹・武藤学芸主事・深浦学芸主事・雄物川町郷土資料館島田氏が4区の現場状況視察のために来跡した。</p>
<p>【第21週】10月6日～10月10日 1区は東側の遺構確認作業・遺構の精査を行った。L46～54、LP46～55グリッドに設定したトレンチを地山まで掘り下げたが、水田跡は検出されなかった。4区は、表土及び抜根除去、及び東側から中央部に延びる盛土の除去作業を行った。また、周溝を精査したところ、神社構築時に使用された材の切れ端が多量に出土した。6日にベルトコンベアー・発電機を搬入、7日に仮設置と配線を行い、9日から運転を開始した。現場状況視察のため、6日に富樫元博物館館長・澤野横手市役所職員、7日に小松正男秋田市役所職員、8日に文化財保護室船木室長・磯村学芸主事、10日に雄物川町派遣社会教育主事青谷透氏が来跡した。</p>
<p>【第22週】10月14日～10月17日 1区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。MG48～60・MJ48～60グリッドに設定したトレンチを地山まで掘り下げたが、水田跡は検出されなかった。4区は盛土を除去したところ、神社を構築する際の塚であることが分かり、このマウンドをSY01とした。17日、文化財保護室深浦学芸主事が現場状況視察のために来跡した。</p>
<p>【第23週】10月20日～10月24日 1区は遺構確認作業・遺構の精査を行った。北側で検出した柱穴様ピットの配置から掘立柱建物跡であることを確認し、SB59とした。MA48～59、MD45～60グリッドに設定したトレンチを地山まで掘り下げたが、水田跡は検出されなかった。これにより中央部には水田跡は無いものと判断した。4区はSY01と周溝の精査を行った。10月23日、福地小学校竹内和子教諭・柴田幸子教諭・雄物川町派遣社会教育主事青谷透氏・体験生活支援センター杉山淳子氏・小松連蔵氏が児童22名を引率し、遺跡見学のために来跡した。</p>
<p>【第24週】10月27日～10月31日 1区は北側で検出した柱穴様ピットの配置から掘立柱建物跡であることを確認してSB62・64とし、SB59とともに精査を行った。4区はSY01の精査を行った。31日、1・4区の調査を終了し、同区の測量杭の除去作業を行った。遺物・調査発掘器財等の搬出作業を行い、全ての調査を終了した。</p>



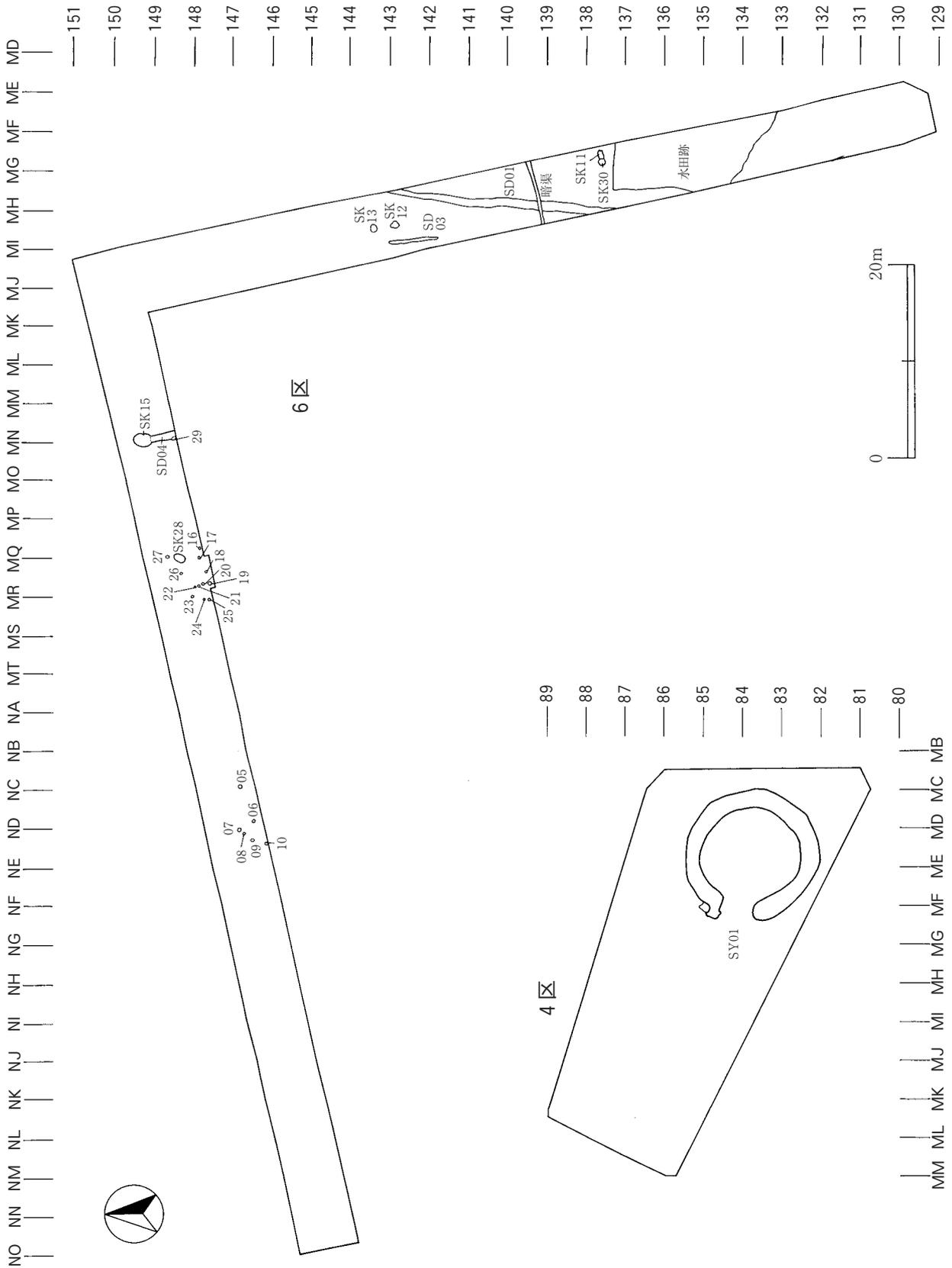
第6図 1区遺構配置図



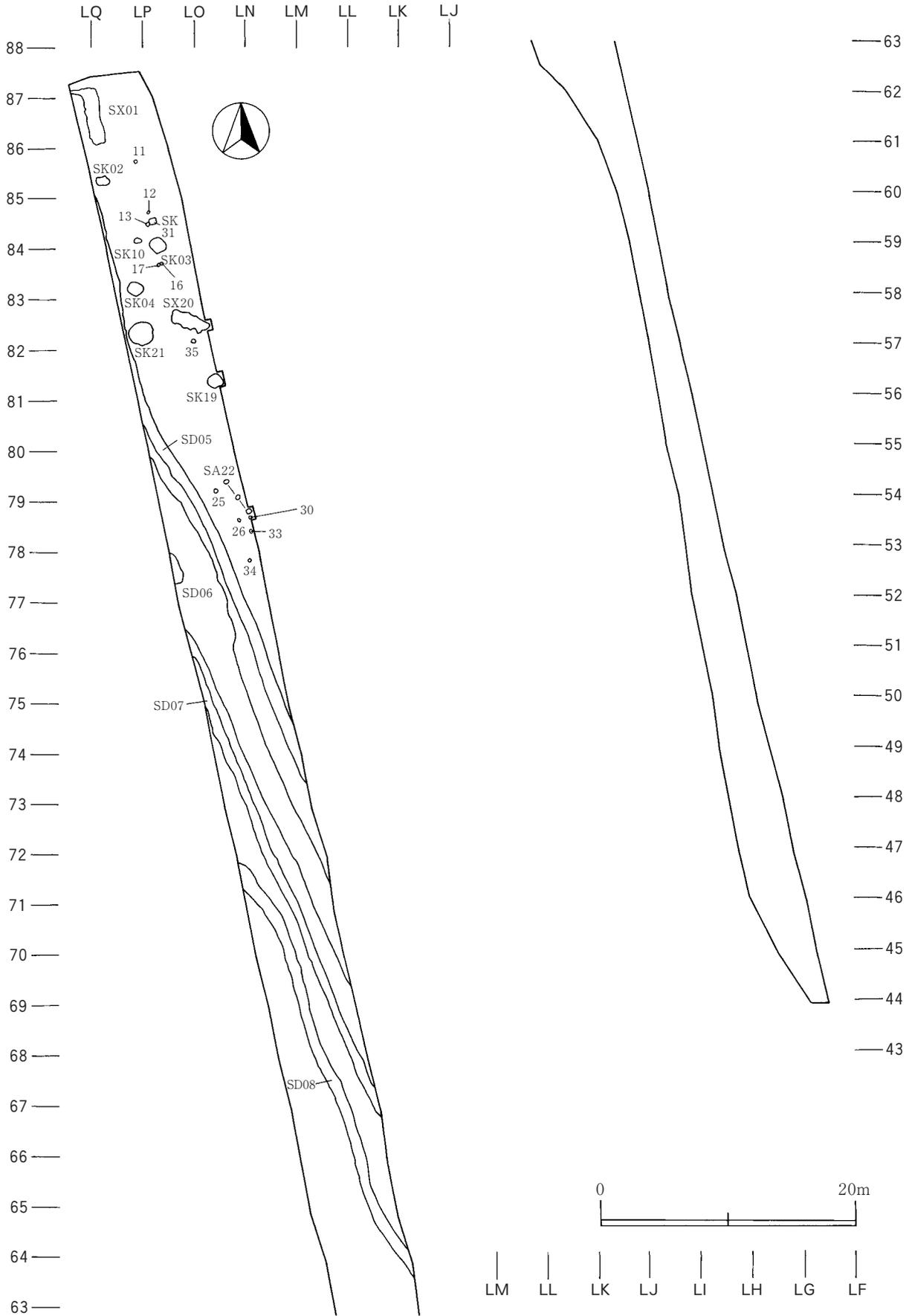
第7図 2区遺構配置図



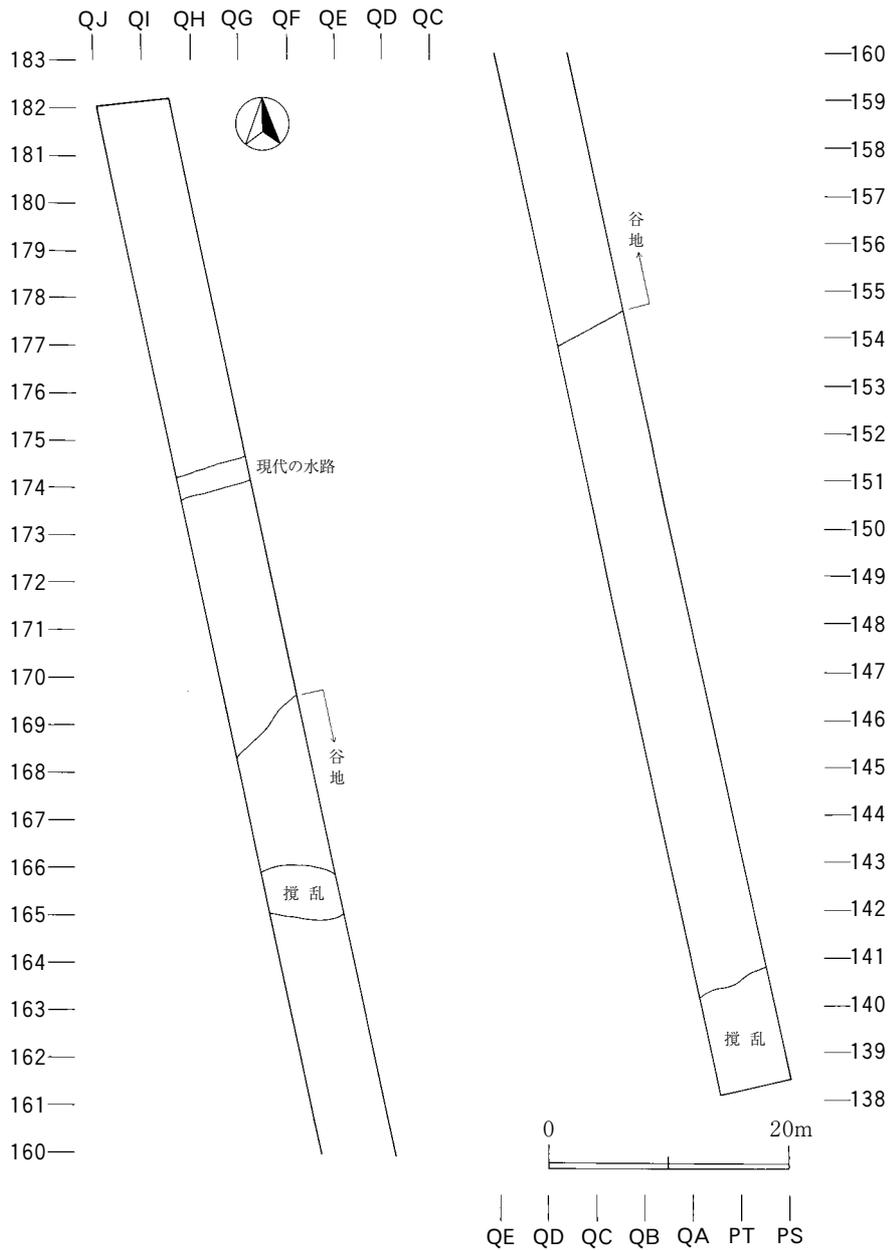
第8図 3区遺構配置図



第9図 4区・6区遺構配置図



第10図 5区遺構配置図



第11図 7区遺構配置図

#### 第4節 整理作業の方法と経過

調査終了後、整理作業を秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。出土した遺物については、洗浄・注記・接合した後、実測・採拓・トレース・写真撮影を行った。遺構については、現場で記録した実測図を点検・修正し、第2原図を作成した。調査において十和田a火山灰が検出され、水田跡遺構が確認されたために採取試料のテフラ分析、花粉分析、プラント・オパール分析を、遺跡の古環境に関する資料を得るために炭化物・木材の年代測定を依頼した。また、出土した木製品の中で特に重要と考えられるものは、樹種同定をした後、高級アルコール法・糖アルコール保存法により保存処理を行った。以上の経過を経て、原稿を作成し編集作業を行った。

## 第4章 調査の記録

### 第1節 基本層序

調査区ごと（1～7区）に基本層序を観察するためのベルトを設定した。発掘調査前の現況が水田であった1・2・3・5・6・7区では、土壤中に酸化・沈殿した赤褐色の鉄分が混入している。また、十和田a火山灰を含有している層が広く分布している。

1・2・3・5・6・7区については、安定して堆積している部分を6地点選び図化した（第12・13図）。4区については、遺構が確認された部分のみ図化した（第61図）。各調査区の基本層序及び設定か所は、後述のとおりである。

#### 1 1区の基本層序

1区の基本層序の観察用ベルトを調査区西側（MJ 42～MK 63グリッドの約90m）と調査区中央部（LR 64～LQ 42グリッドの約90m）の2か所に設定した。I層は、調査区全体を覆う表土・耕作土層である。調査区北側と南側の遺構が検出された範囲では、耕作により地山（Ⅶ層）上面まで削平されており、表土から地山までの層厚が約10～20cmである。II層は、調査区中央部から東側にかけての範囲では削平されており、確認することができなかった。IV層は、十和田a火山灰の粒・塊が散在している層である。Ⅶ層は、調査区中央部の落ち込み部分や深いところではオリーブ灰色土になる。

1区の基本層序の特徴は次のとおりである。

I層：黒褐色土（10YR 3/2）、しまり強、粘性中、表土、耕作土、層厚10～38cm。

II層：黒褐色土（10YR 2/2）、しまり強、粘性弱、遺物包含層、層厚4～20cm。

III層：黒色土（10YR 2/1）、しまり強、粘性強、遺物包含層、層厚4～24cm。

IV層：黒褐色土（10YR 3/1）、しまり強、粘性強、火山灰含有層、層厚5～25cm。

V層：黒色土（10YR 2/1）、しまり強、粘性強、層厚4～25cm。

VI層：黒褐色土（10YR 3/1）、しまり弱、粘性強、粘土、層厚2～14cm。

Ⅶ層：暗灰黄色土（2.5Y 5/2）、しまり強、粘性強、地山。

#### 2 2区の基本層序

2区の基本層序の観察用ベルトを調査区東側（GN 108～GG 71グリッドの約150m）に設定した。I層は、調査区全体を覆う表土・耕作土層である。IV層は、74ライン以南と87～102ラインとの範囲に広がり、十和田a火山灰の粒・塊を含有している層である。Ⅵ・Ⅶ層は、調査区中央部分にある谷地の堆積土である。表土からⅧ層（地山）上面までの層厚が102ライン以北では約30～40cm、74～86ラインでは約30～50cmであり、Ⅷ層上面が遺構確認面となる。また、74～86ラインでは、Ⅷ層に礫が多量に混入している。

2区の基本層序の特徴は次のとおりである。

- I層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2 ~ 3 / 2)、しまり強、粘性弱、表土、耕作土層厚 8 ~ 46 cm。
- II層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2 ~ 2 / 3)、しまり強、粘性弱、遺物包含層、層厚 2 ~ 8 cm。
- III層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2)、しまり強、粘性強、遺物包含層、層厚 2 ~ 18 cm。
- IV層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2 ~ 3 / 2)、しまり強、粘性強、火山灰含有層、層厚 4 ~ 16 cm。
- V層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2)、しまり強、粘性強、地山粒・塊を含む、層厚 4 ~ 16 cm。
- VI層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり強、粘性強、炭化物粒微量混入。
- VII層：黒色土 (10Y R 1.7 / 1)、しまり強、粘性強。
- VIII層：暗灰黄色土 (2.5Y 5 / 2)、しまり強、粘性強、地山。

### 3 3区の基本層序

3区の基本層序の観察用ベルトを調査区東側 (K L 126 ~ J R 58 グリッドの約 280 m) に設定した。I層は、I a層とI b層に分けられる。I a層は、調査区全体を覆う表土・耕作土層である。I b層は、旧水路を作った際の盛土で、調査区の南側に見られる。また、耕作や旧水路によってIV層上面まで攪乱されているため、III層は断片的に存在する。IV層は、十和田 a 火山灰の粒・塊を含有している層である。V ~ VI層は、主に調査区北側で確認された。

3区の基本層序の特徴は次のとおりである。

- I a層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり強、粘性弱、表土、耕作土、層厚 4 ~ 46 cm。
- I b層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり強、粘性弱、地山塊多量混入、盛土、層厚 4 ~ 38 cm。
- II層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2)、しまり強、粘性弱、遺物包含層、層厚 4 ~ 34 cm。
- III層：黒色土 (10Y R 2 / 1)、しまり強、粘性中、遺物包含層、層厚 2 ~ 24 cm。
- IV層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり中、粘性中、火山灰含有層、層厚 2 ~ 38 cm。
- V層：黄灰色土 (2.5Y 4 / 1)、しまり強、粘性強、層厚 4 ~ 20 cm。
- VI層：黄灰色土 (2.5Y 4 / 1)、しまり強、粘性強、地山塊混入、層厚 8 ~ 20 cm。
- VII層：オリーブ黒色土 (5 Y 3 / 1)、しまり強、粘性強、層厚 6 ~ 32 cm。
- VIII層：暗灰黄色土 (2.5Y 5 / 2)、しまり強、粘性中、地山。

### 4 4区の基本層序

4区は、調査区全体の現況が神社跡地であったために、基本層序を設定するに至らなかった。1層が表土にあたり、2 ~ 4層が神社の参道を造る際の昭和時代の盛土である。また、5 ~ 8層は、神社を造る際の昭和時代の盛土である。

### 5 5区の基本層序

5区の基本層序の観察用ベルトを調査区東側 (L P 87 ~ L F 44 グリッドの約 180 m) に設定した。I層は、調査区全体を覆う表土層である。II層とIII層は北側から中央部にかけて確認され部分的に断続している。IV層とV層は、主に中央部に堆積している。VI層は、地山層で遺構確認面である。また、調査区南側は、I層とVI層のみである。II ~ V層には、土壤中に酸化・沈殿した赤褐色の鉄分が多量

に混入している。表土から地山までの深さは、約 20～30 cm であり、十和田 a 火山灰を含有している層は、確認出来なかった。

5 区の基本層序の特徴は、次のとおりである。

I 層：暗褐色土 (10Y R 3 / 3)、しまり中、粘性中、表土、層厚 8～16 cm。

II 層：黒褐色土 (10Y R 2 / 3)、しまり弱、粘性中、層厚 4～10 cm。

III 層：黒色土 (10Y R 2 / 1)、しまり弱、粘性中、遺物包含層、層厚 3～10 cm。

IV 層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり弱、粘性中、酸化鉄多量混入、層厚 6～10 cm。

V 層：黒色土 (10Y R 1.7 / 1)、しまり中、粘性中、酸化鉄多量混入、層厚 6～20 cm。

VI 層：灰黄褐色土 (10Y R 6 / 2)、しまり弱、粘性中、地山、遺構確認面。

## 6 6 区の基本層序

6 区の基本層序の観察用ベルトを調査区東側 (M I 150～ME 130 グリッドの約 90 m) と北側 (N N 144～M I 149 の約 100 m) の 2 か所に設定した。調査区東側と調査区北側 N G ライン以東では、表土から地山までの深さが 14～42 cm であり、そのほとんどが耕作により地山上面まで削平されている。そのため、III 層は部分的にしか存在せず、十和田 a 火山灰を含有する IV 層の広がり、調査区東南端の 131 ライン以南のみである。また、III 層は、調査区北側の N J ライン以西では、泥炭層になっている。

6 区の基本層序の特徴は次のとおりである。

I 層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり強、粘性中、表土、耕作土、遺物包含層、層厚 10～26 cm。

II 層：黒褐色土 (10Y R 3 / 3)、しまり強、粘性弱、酸化鉄多量混入、層厚 2～20 cm。

III 層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2)、しまり強、粘性中、層厚 2～20 cm。

IV 層：黒色土 (10Y R 1.7 / 1)、しまり弱、粘性強、火山灰含有層、層厚 2～18 cm。

V 層：黄褐色土 (2.5Y 5 / 3)、しまり強、粘性弱、地山、遺構確認面。

## 7 7 区の基本層序

7 区の基本層序の観察用ベルトを調査区東側 (Q H 181～P S 138 グリッドの約 180 m) に設定した。表土から地山までの深さは、約 20～50 cm である。十和田 a 火山灰を含有している層は、確認できなかった。表土から地山までの深さが約 30 cm の所では、V 層が灰黄褐色土になる。

7 区の基本層序の特徴は次のとおりである。

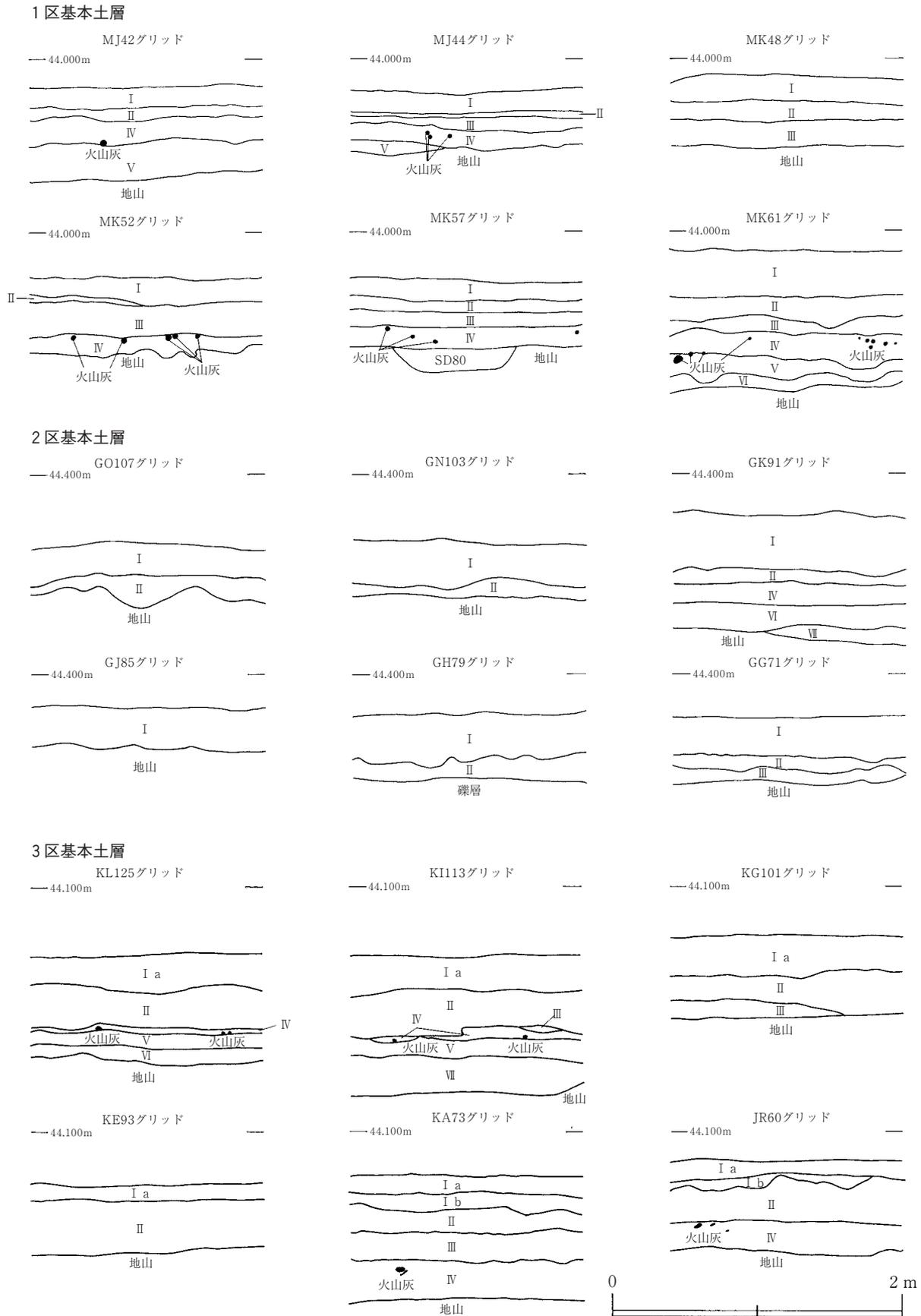
I 層：黒褐色土 (10Y R 3 / 2)、しまり強、粘性弱、表土、耕作土、層厚 10～20 cm。

II 層：黒褐色土 (10Y R 2 / 2)、しまり強、粘性強、層厚 4～10 cm。

III 層：黒褐色土 (10Y R 3 / 1)、しまり強、粘性強、層厚 4～40 cm。

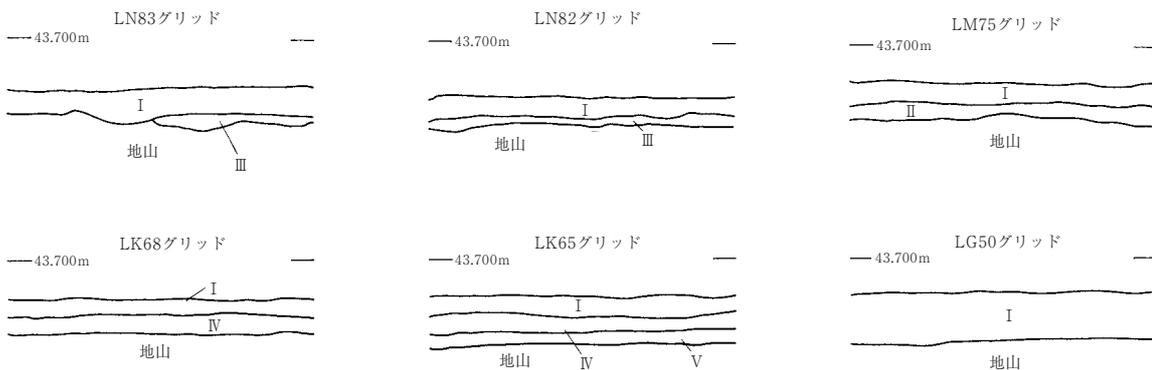
IV 層：黒色土 (10Y R 2 / 1)、しまり強、粘性強、層厚 10～16 cm。

V 層：オリーブ灰色土 (2.5GY 5 / 1)、しまり強、粘性強、地山。

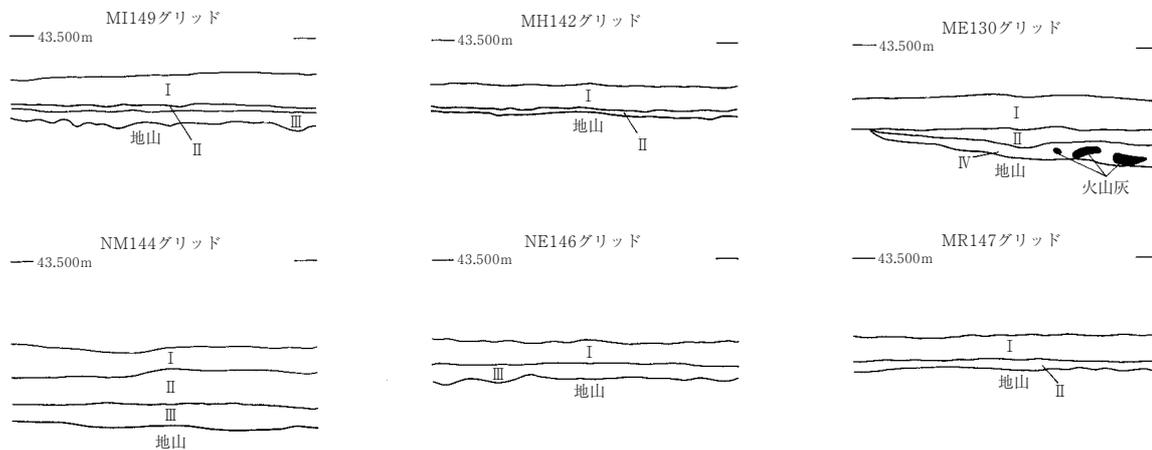


第12図 1・2・3区基本土層図

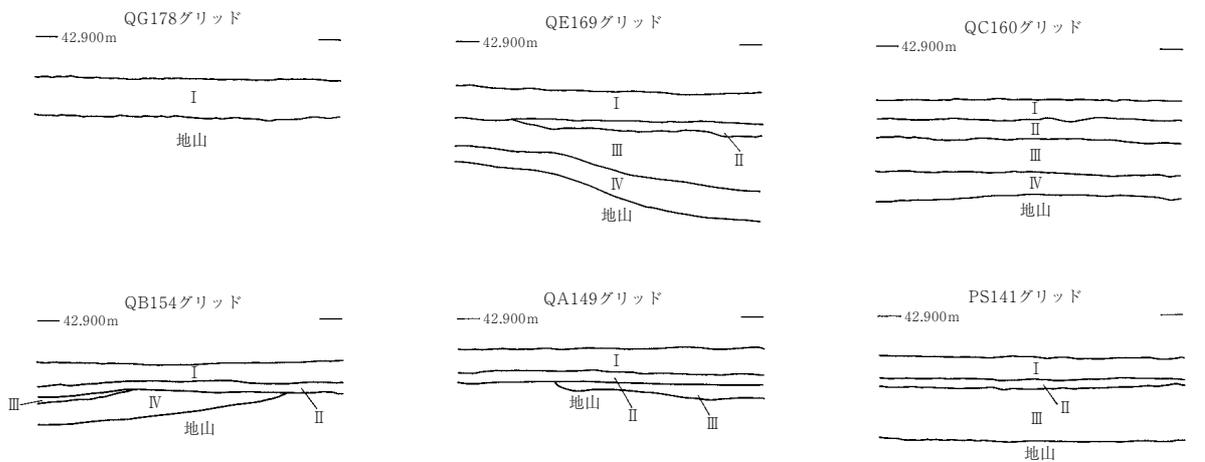
5区基本土層



6区基本土層



7区基本土層



第13図 5・6・7区基本土層図

## 第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、大見内遺跡（1・2・3・5・6・7区）で検出した遺構は、縄文時代の土坑5基、平安時代の掘立柱建物跡5棟・柱列12列・竪穴状遺構1基・土坑60基・溝跡28条・水田跡6か所、性格不明遺構10基・柱穴様ピット248基、中世の溝跡1条の合計376遺構である。ただし、7区では、遺構が検出されなかった。2・3・6区で検出された水田跡は、畦畔を伴う区画としては検出できなかったため、その範囲を遺構配置図で示し、断面図を基本層序と共に図化した。また、水田跡を範囲として示したために、遺構数をあえて「か所」と表示した。

館野遺跡（4区）で検出した遺構は、江戸時代の塚1基である。

各調査区で検出した時代ごとの遺構数は、第4表のとおりである。

大見内遺跡から出土した遺物は、整理用コンテナ（中コンテナ）で67箱分である。内訳は、縄文時代の土器・石器が2箱分、平安時代の土師器が28箱分・須恵器が13箱分・木製品が17箱分、中世陶器が1箱分、近世以降の陶器・木材などが6箱分である。

館野遺跡から出土した遺物は、江戸時代の銭貨・陶磁器など1箱分である。

大見内遺跡からは、今回の調査及び2002（平成14）年の確認調査において土師器・須恵器が多量に出土したため、土師器と須恵器を第5表のように分類した。特に、土師器は、ロクロ不使用のものとロクロ使用のものに分け、さらに器形で細分化した。

本節では、検出した遺構と出土遺物について各調査区ごとに記述した。柱穴様ピットの規模については、観察表にまとめた。

第4表 各調査区の検出遺構数

遺構の種類	時期	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	合計
掘立柱建物跡	平安	4棟	1棟	—	—	—	—	—	5棟
柱列	平安	1列	8列	2列	—	1列	—	—	12列
竪穴状遺構	平安	—	1基	—	—	—	—	—	1基
土坑	縄文	2基	—	—	—	1基	2基	—	5基
	平安	31基	9基	10基	—	6基	4基	—	60基
溝跡	平安	2条	8条	11条	—	4条	3条	—	28条
	中世	1条	—	—	—	—	—	—	1条
塚	江戸	—	—	—	1基	—	—	—	1基
水田跡	平安	—	2か所	3か所	—	—	1か所	—	6か所
性格不明遺構	平安	—	6基	2基	—	2基	—	—	10基
柱穴様ピット	平安	64基	98基	56基	—	11基	19基	—	248基
合計		105遺構	133遺構	84遺構	1遺構	25遺構	29遺構	なし	377遺構

第5表 土師器・須恵器の分類と出土状況

A：非ロクロ土師器		1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	確認調査
坏 a	深く、口縁部が内湾し、底部が広く突出するもの	—	—	—	—	—	—	—	2
坏 b	深く、口縁部が内湾し、底部が狭いもの	2	4	—	—	—	—	—	6
長胴甕 a	口縁部がわずかに外反するもの	—	—	—	—	—	—	—	1
長胴甕 b	口縁部が多きく外反するもの	2	—	—	—	—	—	—	—
長胴甕 c	その他	—	—	1	—	—	—	—	—
鉢		1	—	—	—	—	—	—	1

B：ロクロ土師器（非黒色処理）		1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	確認調査
坏 a	浅く、口縁部が直線的に外傾するもの	—	3	—	—	—	—	—	1
坏 b	浅く、口縁部が外反するもの	—	4	—	—	—	—	—	—
坏 c	やや深く、口縁部が直線的に外傾するもの	1	4	—	—	—	—	—	4
坏 d	やや深く、口縁部が外反するもの	—	2	—	—	—	—	—	2
坏 e	深く、口縁部が直線的に外傾するもの	—	24	—	—	—	—	—	25
坏 f	深く、口縁部が外反するもの	—	7	—	—	—	—	—	4
坏 g	深くて底径がやや大きく、口縁部が直線的に外傾するもの	1	—	—	—	—	—	—	2
坏 h	深くて底径が小さく、口縁部が直線的に外傾するもの	1	1	—	—	—	—	—	6
坏 i	深くて底径が小さく、口縁部が外反するもの	1	3	—	—	—	—	—	22
坏 j	深くて底径が小さく、口縁部が大きく外反するもの	—	—	—	—	—	—	—	2
坏 k	その他	—	1	—	—	—	—	—	5
台付坏 a	深く、口縁部が直線的に外傾し、高台が比較的高いもの	—	—	—	—	—	—	—	2
台付坏 b	深く、口縁部が外反し、台が低いもの	—	—	—	—	—	—	—	1
椀		1	—	—	—	—	—	—	—
皿 a	口縁部が直線的に外傾するもの	—	2	—	—	—	—	—	—
皿 b	口縁部が外反するもの	—	—	—	—	—	—	—	1
塀		—	1	—	—	—	—	—	—
長胴甕 a	口縁部が外反するもの	2	—	—	—	—	—	—	—
長胴甕 b	口縁部が、外に屈折してから直立するもの	—	—	—	—	—	—	—	1
長胴甕 c	口縁部が「く」の字状に外反してから、口唇部を摘み出すもの	2	—	—	—	—	—	—	—
小型甕 a	口縁部が「く」の字状に外反してから、口唇部を摘み出すもの	—	—	—	—	—	—	—	1
小型甕 b	口縁部が「く」の字状に外反してから、口唇部を摘み出すもの	1	—	—	—	—	—	—	—
羽釜		1	—	—	—	—	—	—	—

C：ロクロ土師器（黒色処理）		1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	確認調査
坏 a	口縁部が直線的に外傾するもの	—	2	—	—	—	—	—	1
坏 b	口縁部が外反するもの	—	—	—	—	—	—	—	1
坏 c	その他	—	1	—	—	—	—	—	—
台付坏 a	深く、口縁部が直線的に外傾するもの	—	—	—	—	—	—	—	2
台付坏 b	深く、口縁部が外反するもの	—	3	—	—	—	—	—	—
台付坏 c	その他	—	2	—	—	—	—	—	—
椀		—	1	—	—	—	—	—	—
段皿		—	1	—	—	—	—	—	—

D：須恵器		1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	確認調査
坏 a	深く、底部はヘラ切りのもの	—	—	—	—	—	—	—	1
坏 b	浅く、口縁部が直線的に外傾し、底部はヘラ切りのもの	—	—	—	—	—	1	—	1
坏 c	浅く、口縁部が直線的に外傾し、底部は回転糸切りのもの	—	—	—	—	—	—	—	1
坏 d	深く、口縁部が内湾し、底部は回転糸切りのもの	—	—	—	—	—	—	—	2
坏 e	深く、口縁部が直線的に外傾し、底部は回転糸切りのもの	3	8	—	—	—	1	—	1
坏 f	深く、口縁部が外傾し、底部は回転糸切りのもの	—	2	1	—	—	—	—	—
坏 g	その他	2	—	1	—	—	—	—	1
台付坏		—	2	—	—	—	—	—	—
蓋		1	—	—	—	—	—	—	—
長頸瓶		1	1	—	—	—	—	—	—
壺		2	2	1	1	—	—	—	—
甕		2	3	1	—	—	—	—	—
大甕		—	1	—	—	—	—	—	—

1 1区の検出遺構と遺物

(1) 縄文時代

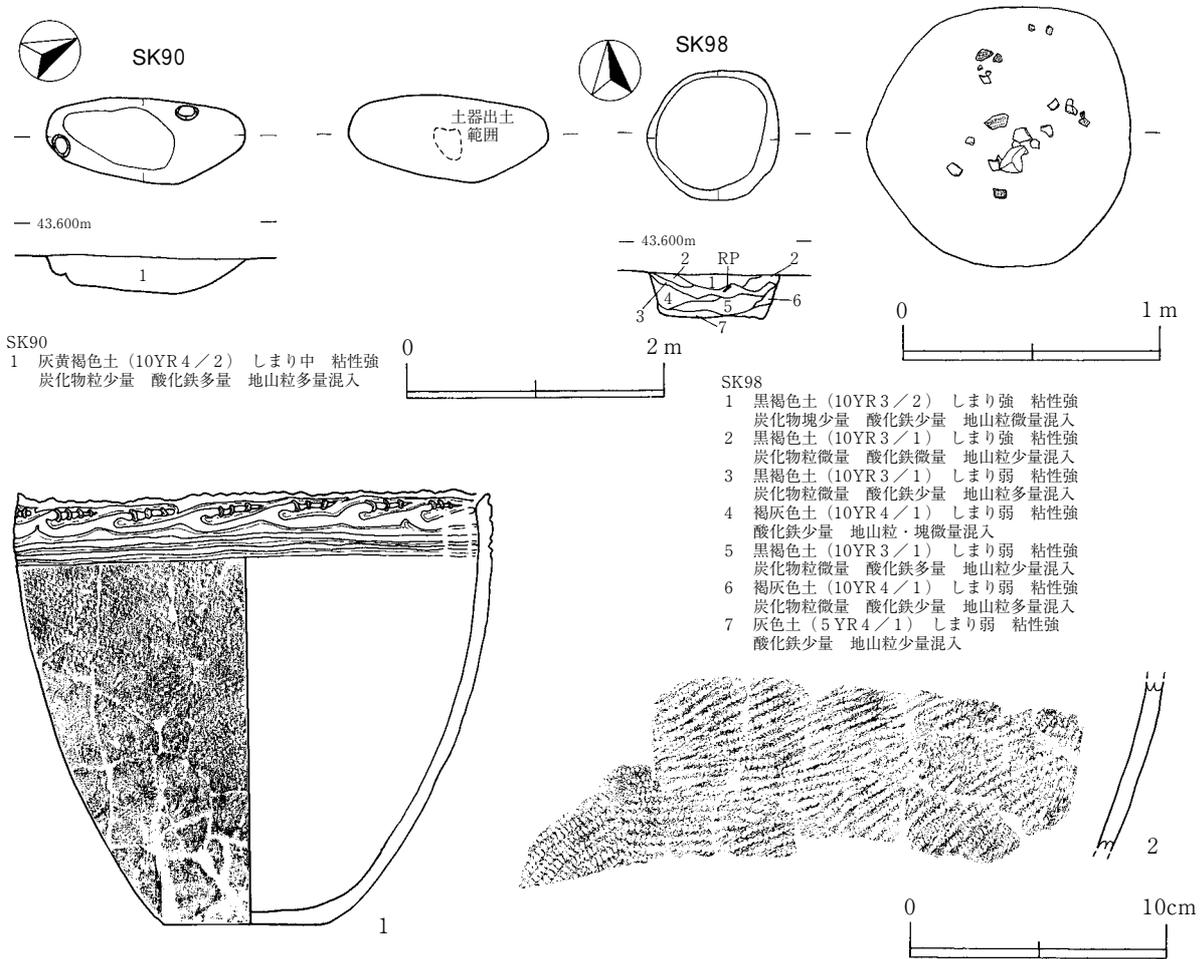
①土坑

S K 90 土坑 (第14図、図版5)

L Q 60 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸 1.56 m、短軸 0.27 m の楕円形である。確認面からの深さは 0.31 m である。壁は、北側は緩やかに立ち上がり、南側はやや急に立ち上がる。底面は、平坦であるが北側にむかって緩やかに傾斜する。出土遺物は、縄文土器(深鉢1点、破片7点)である。

S K 98 土坑 (第14図)

L S 64 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸 1.09 m、短軸 1.00 m の円形である。確認面からの深さは 0.35 m である。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は、縄文土器(破片12点)である。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	縄文土器	深鉢	1区SK90	18.3	6.2	17.2	炭化物顕著
2	縄文土器	深鉢	1区SK98 RP11・17・20、LS64	—	—	—	—

第14図 1区 S K 90・98と出土遺物

## (2) 平安時代

## ①掘立柱建物跡

## S B 06 掘立柱建物跡 (第15図、図版3)

L R 44・45、L S 44・45グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。桁行4間×梁行2間の掘立柱建物で南北棟である。建物規模は、桁行総長が西側柱列で5.90 mあり、柱間距離は北から1.50 m、1.45 m、1.70 m、1.25 mである。東側柱列は3間で、北から1.50 m、1.60 m、2.80 mである。梁行総長は北側柱列で見ると4.80 mあり、柱間距離は東から2.50 m、2.30 mである。柱穴は径30～40 cmの円形で、深さが20～42 cmあり、径15～20 cmの柱痕が見られる。建物方位は東側柱列でN-5°-Wである。西にあるS A 24柱列は本建物に伴う板塀かと考えられる。出土遺物は、土師器坏の破片(P 1から4点、P 6から5点、P 11から1点)である。

## S B 59 掘立柱建物跡 (第16図、図版3)

MA 60・61、MB 60・61グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。2間×2間の掘立柱建物で総柱である。ほぼ正方形で、建物規模は、東側柱列で総長3.70 mあり、柱間距離は北から2.00 m、1.70 m、北側柱列では総長3.70 m、柱間距離は東から1.70 m、2.00 mである。柱穴は一辺40～50 cmの方形で、深さ10～25 cmである。柱痕は認められない。建物方位は北側柱列でN-75°-Eである。出土遺物はない。

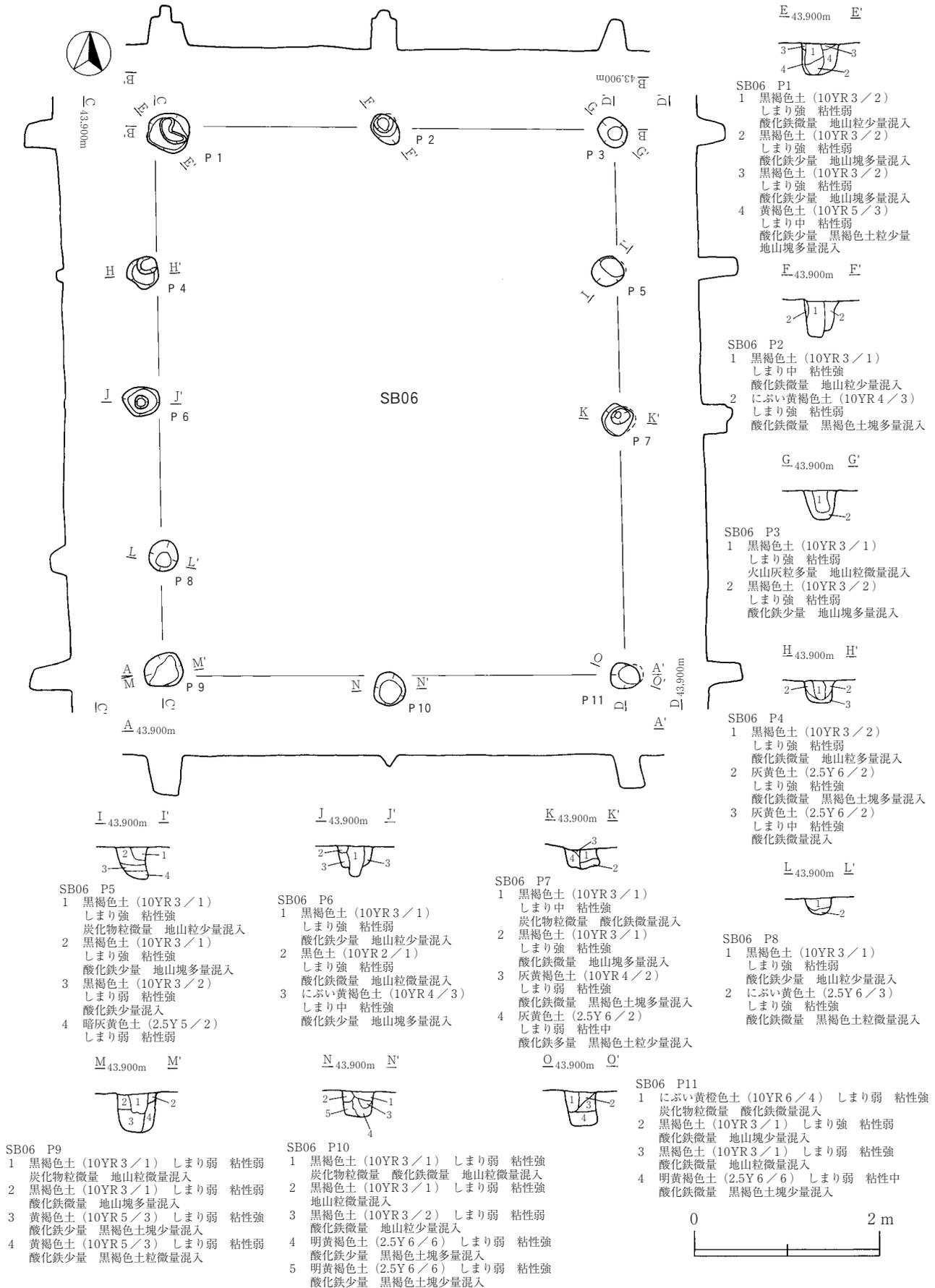
## S B 62 掘立柱建物跡 (第17・18図、図版3)

L S 62・63、L T 62・63、MA 62・63グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。S B 64掘立柱建物跡の2.0 m北に隣接する。桁行3間×梁行2間、東側に庇が付く掘立柱建物で、南北棟である。建物規模は、桁行総長が西側柱列で4.80 mあり、柱間距離は北から1.50 m、1.80 m、1.50 mである。梁行総長は南側柱列で6.15 mあり、身舎の柱間距離は西から2.55 m、2.10 mで、この東に柱間距離1.50 mの庇が付く。北側の棟柱は検出できなかった。身舎の柱穴は一辺40～54 cmの方形で、深さ34～46 cm、庇の柱穴は南東隅柱は径50～60 cmの円形であるが、他の3本は径が30～40 cmと小さい。庇柱穴の深さは35～42 cmである。身舎・庇ともに径20 cmの柱痕が見られる。南東隅柱がS K 120に切られている。建物方位は南側柱列でN-73°-Eである。出土遺物は、土師器坏の破片(P 1から1点、P 11から2点)である。

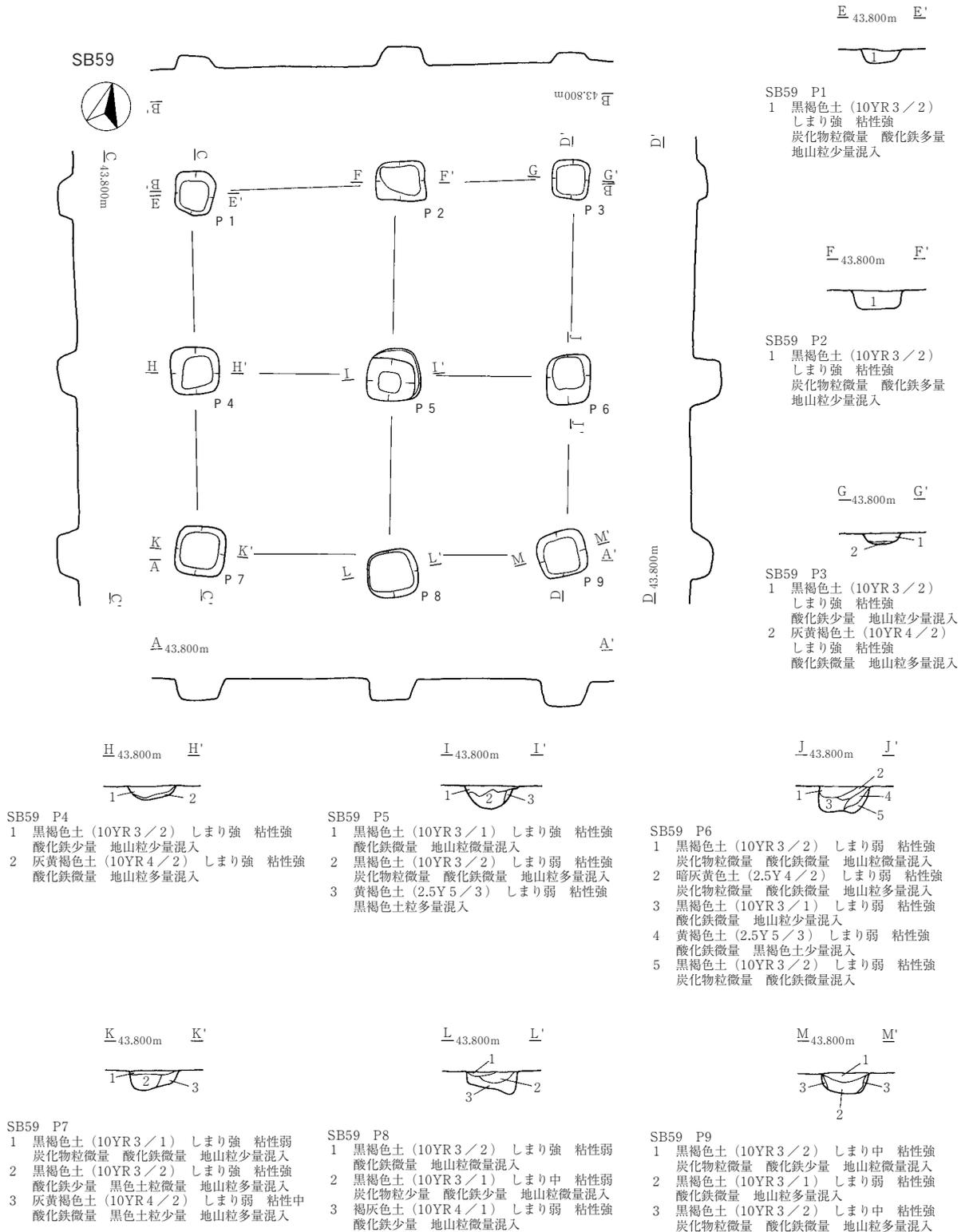
## S B 64 掘立柱建物跡 (第19図、図版3)

L S 61・62、L T 61・62、MA 61グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。S B 62掘立柱建物跡の2.0 m南に隣接する。桁行2間×梁行2間の掘立柱建物で東西棟である。建物規模は、桁行総長が東側柱列で5.35 m、柱間距離は北から2.45 m、2.90 mである。梁行総長は北側柱列では4.00 mあり、柱間距離は東から2.10 m、1.90 mであるが、南側梁行総長は3.48 mと北側に比べて短い。柱穴は一辺28～55 cmの方形であるが、東側柱列のP 7は径40 cmの円形である。柱穴の深さは26～52 cmである。北側柱列のP 3・P 8には径20～25 cmの柱痕が見られる。建物方位は南側柱列でN-76°-Eである。出土遺物はない。

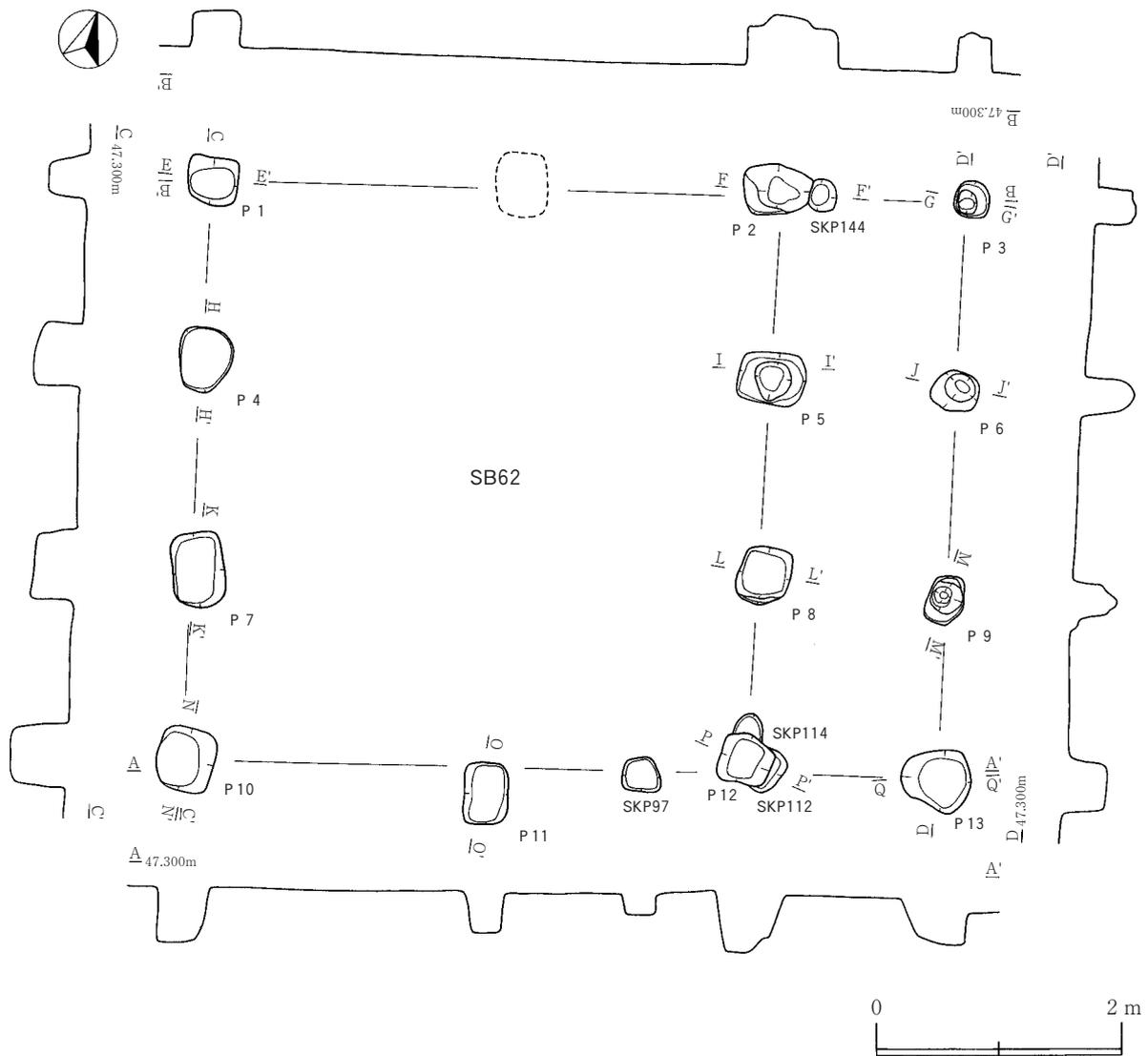
第4章 調査の記録



第15図 1区SB06



第16図 1区SB59

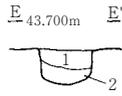


第17図 1区SB62 (1)

②柱列

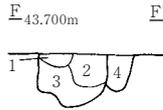
SA 24 柱列 (第20図、図版3)

LS 44 ~ 46 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。SB 06 掘立柱建物の西に位置する3間の柱列である。総長は8.10 mで、柱間距離は北から2.10 m、3.10 m、2.90 mである。柱穴は径24 ~ 30 cmの円形で、深さ14 ~ 20 cmあり、径10 ~ 15 cmの柱痕が見られる。P 2 ~ 4 は、SB 06 の梁行柱筋にのる。SB 06 との距離はP 4 で0.8 m、P 2 で1.3 mあり、SB 06 に対して北ほどわずかに開く。SB 06 に伴う板塀と考えられる。柱列方位はN - 8° - Wである。出土遺物はない。



SB62 P1

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 黒色土粒微量 地山塊少量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR6/2) しまり弱 粘性強  
黒褐色土多量 酸化鉄少量混入

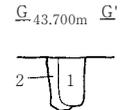


SB62 P2

- 1 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり強 粘性弱  
酸化鉄微量 黒褐色土塊微量混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山塊多量混入
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量混入

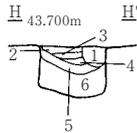
SKP144

- 4 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中 粘性強  
酸化鉄少量 地山粒少量混入



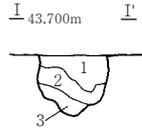
SB62 P3

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山塊少量混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量混入



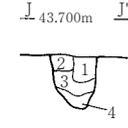
SB62 P4

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山粒微量混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山粒多量混入
- 3 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 黒褐色土粒微量混入
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量混入
- 5 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり強 粘性強  
酸化鉄少量混入
- 6 灰黄褐色土 (10YR6/2) しまり弱 粘性強  
酸化鉄少量 黒褐色土塊微量 地山塊多量混入



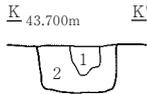
SB62 P5

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山塊少量混入
- 2 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり中 粘性強  
酸化鉄微量 黒褐色土粒微量混入
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 地山塊少量混入



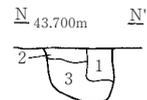
SB62 P6

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性中  
火山灰微量 炭化物粒微量 酸化鉄微量  
地山塊微量混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性中  
酸化鉄微量 地山塊多量混入
- 3 におい黄褐色土 (10YR5/3) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 灰黄褐色土多量 黒褐色土多量混入
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 地山粒微量混入



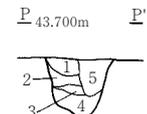
SB62 P7

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山塊少量混入
- 2 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり強 粘性強  
酸化鉄少量 黒褐色土少量混入



SB62 P10

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり強 粘性中  
火山灰粒微量 炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山粒少量混入
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) しまり強 粘性弱  
火山灰粒微量 酸化鉄少量 黒褐色土粒微量 地山粒多量混入
- 3 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり弱 粘性強  
酸化鉄少量 黒褐色土塊多量混入

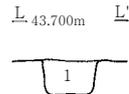


SB62 P12

- 1 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり強 粘性中  
酸化鉄少量 黒褐色土塊多量 地山塊多量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 地山塊少量混入
- 3 暗灰黄色土 (2.5Y5/2) しまり弱 粘性強  
酸化鉄少量混入
- 4 褐灰色土 (10YR4/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄少量 地山塊多量混入

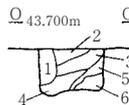
SKP112

- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱 粘性強  
酸化鉄少量 黒褐色土粒少量 地山塊多量混入



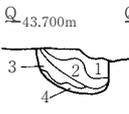
SB62 P8

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり中 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山塊多量混入



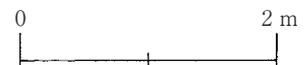
SB62 P11

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄多量 地山塊少量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり弱 粘性強  
黒褐色土・地山塊多量混入
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 地山粒微量混入
- 4 におい黄色土 (2.5Y6/4) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 灰黄褐色土多量混入
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量混入
- 6 におい黄色土 (2.5Y6/4) しまり弱 粘性強  
酸化鉄微量 黒褐色土粒少量混入

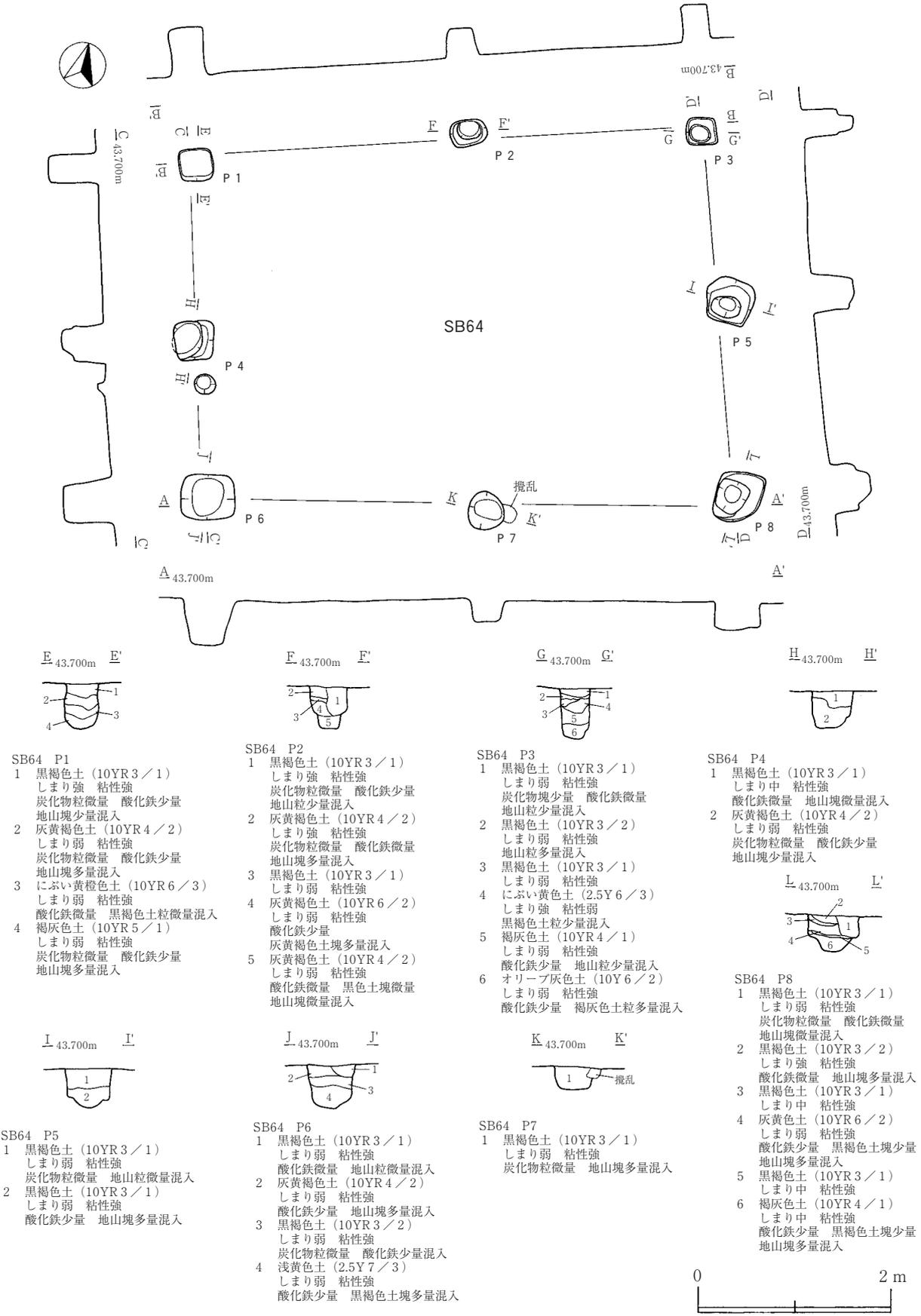


SB62 P13

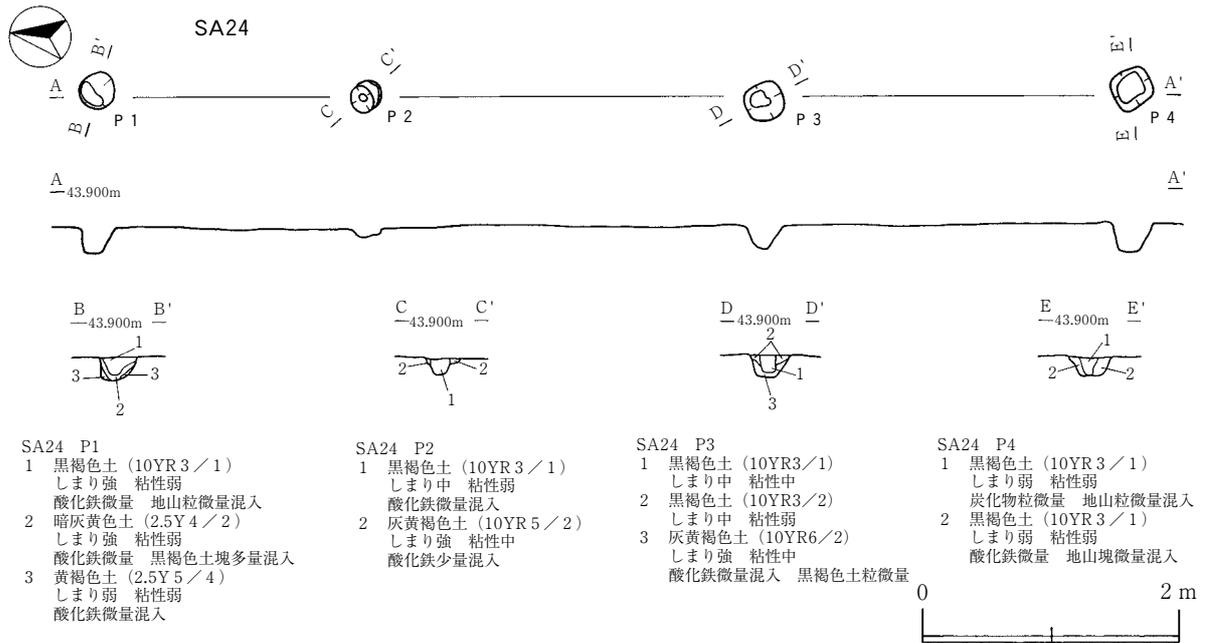
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり強 粘性中  
火山灰粒微量 炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山粒微量混入
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱 粘性中  
酸化鉄微量 地山塊多量混入
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/1) しまり中 粘性強  
酸化鉄微量 地山粒少量混入
- 4 におい黄色土 (2.5Y6/3) しまり強 粘性強  
酸化鉄微量 灰黄褐色土粒少量混入



第18図 1区SB62(2)



第19図 1区SB64



第20図 1区S A24

③土坑

S K 02 土坑 (第21図)

L Q 45・46、L R 45・46 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1・3層に火山灰が混入している。平面形は、長軸 1.19 m、短軸 0.83 m の略楕円形である。確認面からの深さは 0.15 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は南側でやや窪むがほぼ平坦である。出土遺物は、土師器 (坏破片 3 点、甕破片 7 点) である。

S K 03 土坑 (第21図)

L Q 44・45 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。西側を暗渠に切られている。平面形は、長軸 1.40 m、短軸 1.29 m の方形である。確認面からの深さは、0.15 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は東側でやや窪むがほぼ平坦である。出土遺物は、土師器 (坏 1 点、坏破片 3 点、両面を黒色処理した土師器坏 1 点、甕破片 9 点) である。第5表の分類項目に当てはめると、第21図の3はロクロ土師器の坏 i、4は両面を黒色処理した土師器の坏 a である。

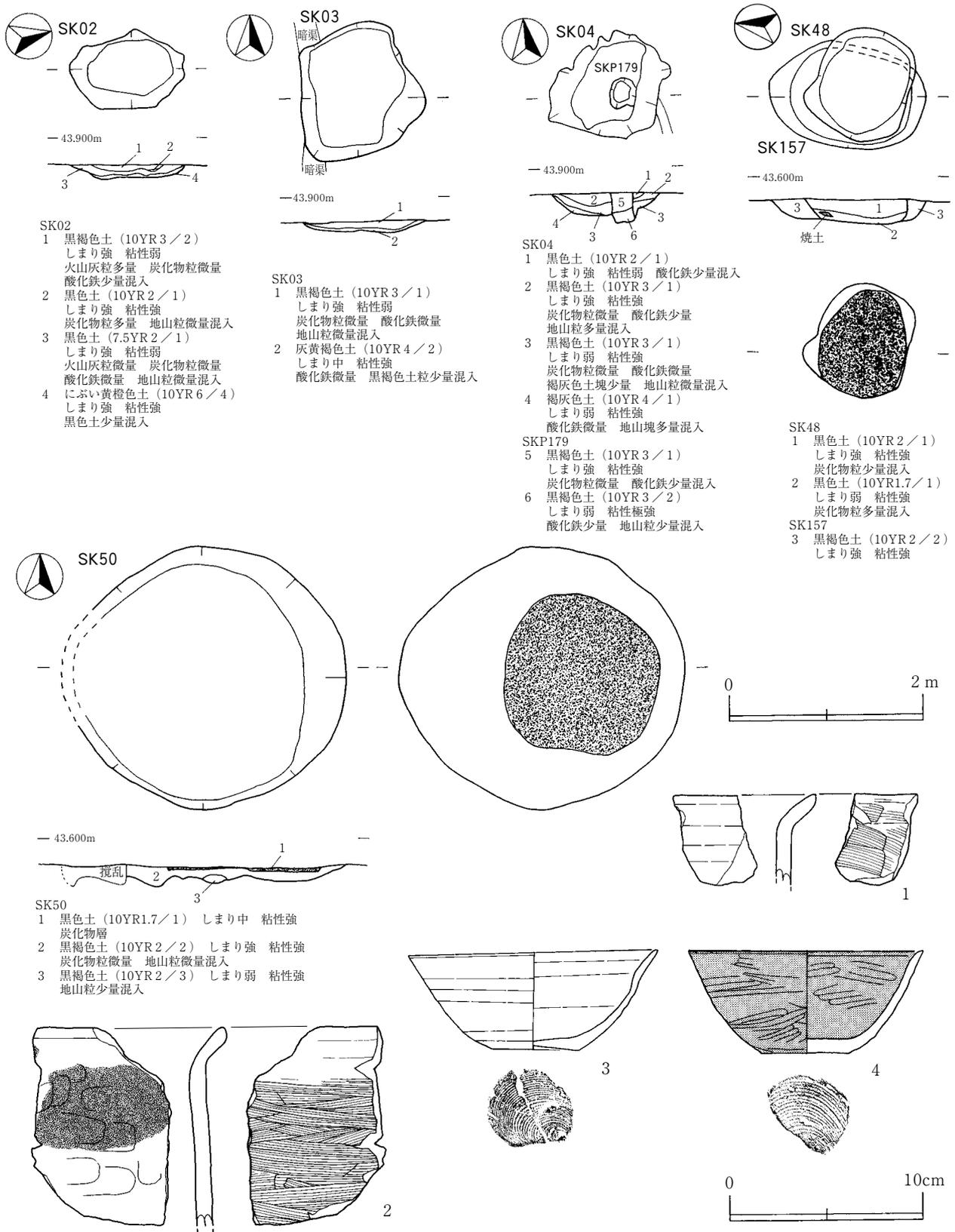
S K 04 土坑 (第21図)

L Q 44、L R 44 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K P 179 と重複し、本遺構が古い。平面形は、長軸 1.13 m、短軸 1.12 m の不整形である。確認面からの深さは 0.23 m である。壁は緩やかに立ち上がる。底面には若干凹凸があるが、ほぼ平坦である。S K P 179 と重複する部分は底面から 12 cm ほど窪む。出土遺物はない。

S K 48 土坑 (第21図、図版5)

ME 46 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 157 と重複し、本遺構が新しい。覆土に炭化物が粒状に混入し、特に2層に多量に混入する。2層には焼土もブロック状に混入する。平面形は、長軸 1.18 m、短軸 1.08 m の隅丸方形である。確認面からの深さは 0.26 m である。底面は浅く窪み、壁は緩やかに立ち上がるが南側では急である。出土遺物はない。

第4章 調査の記録



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	長胴甕	1区SK50	—	—	—	内:カキメ、底:ロクロ調整
2	土師器	甕	1区SK03 RP3-5	—	—	—	内外:ナデ、外:すず付着
3	土師器	坏	1区SK03 RP4	12.8	4.5	5.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
4	土師器	坏	1区SK03 1層 RP6	(12.1)	(4.5)	5.2	内外:ロクロ→ミガキ→黒色処理、底:回転糸切り

第21図 1区SK02・03・04・48・50・157と出土遺物

## S K 50 土坑 (第21図)

MD 42・43 グリッドのⅥ層上面で確認した。重複はない。覆土の1層は、厚さ2～4 cmの非常に細かい炭化物粒の層である。西端部は風倒木により攪乱を受けているため、平面形は円形であると推定され、残存部で長軸2.94 m、短軸2.74 mである。確認面からの深さは0.08～0.22 mである。壁は、南側を除いて緩やかに立ち上がり、南側はやや急に立ち上がる。底面には凹凸がある。出土遺物は、土師器（長胴甕の口縁部1点）である。

## S K 52 土坑 (第22図、図版5)

MB 43、MC 43 グリッドのⅥ層上面で確認した。S K 53 と重複し、本遺構が新しい。覆土に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.91 m、短軸1.41 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.20 mである。壁は緩やかに立ち上がる。底面には若干凹凸があるが、ほぼ平坦である。出土遺物は、土師器（坏破片1点、甕破片1点）である。

## S K 53 土坑 (第22図、図版5)

MB 43、MC 43 グリッドのⅥ層上面で確認した。S K 52 と重複し、本遺構が古い。S K 52 と同様に覆土に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.74 m、短軸1.66 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.15 mである。壁は急に立ち上がる。底面には凹凸があり、南側では浅く窪む。出土遺物はない。

## S K 54 土坑 (第22図)

MA 62・63、MB 62・63 グリッドのⅦ層（地山）上面で確認した。重複はない。覆土の3・5層は炭化物層である。平面形は、長軸2.57 m、短軸2.17 mの不整形である。確認面からの深さは0.20 mである。壁は、北側を除いて急に立ち上がり、北側は緩やかに立ち上がる。底面には若干凹凸がある。出土遺物は、土師器（坏破片17点、甕破片15点）である。

## S K 55 土坑 (第22図、図版5)

MA 63 グリッドのⅦ層（地山）上面で確認した。重複はない。覆土に火山灰が混入する。平面形は、長軸2.22 m、短軸2.05 mの円形である。確認面からの深さは0.20 mである。壁は緩やかに立ちあがり、底面には凹凸がある。出土遺物は、縄文土器片1点、土師器（坏2点、坏破片40点、内面を黒色処理した坏破片2点、甕口縁部1点、甕底部1点、甕片35点）、須恵器（坏破片2点、甕破片2点）である。第5表の分類項目に当てはめると、第22図の1はロクロ土師器の坏h、2は坏cである。

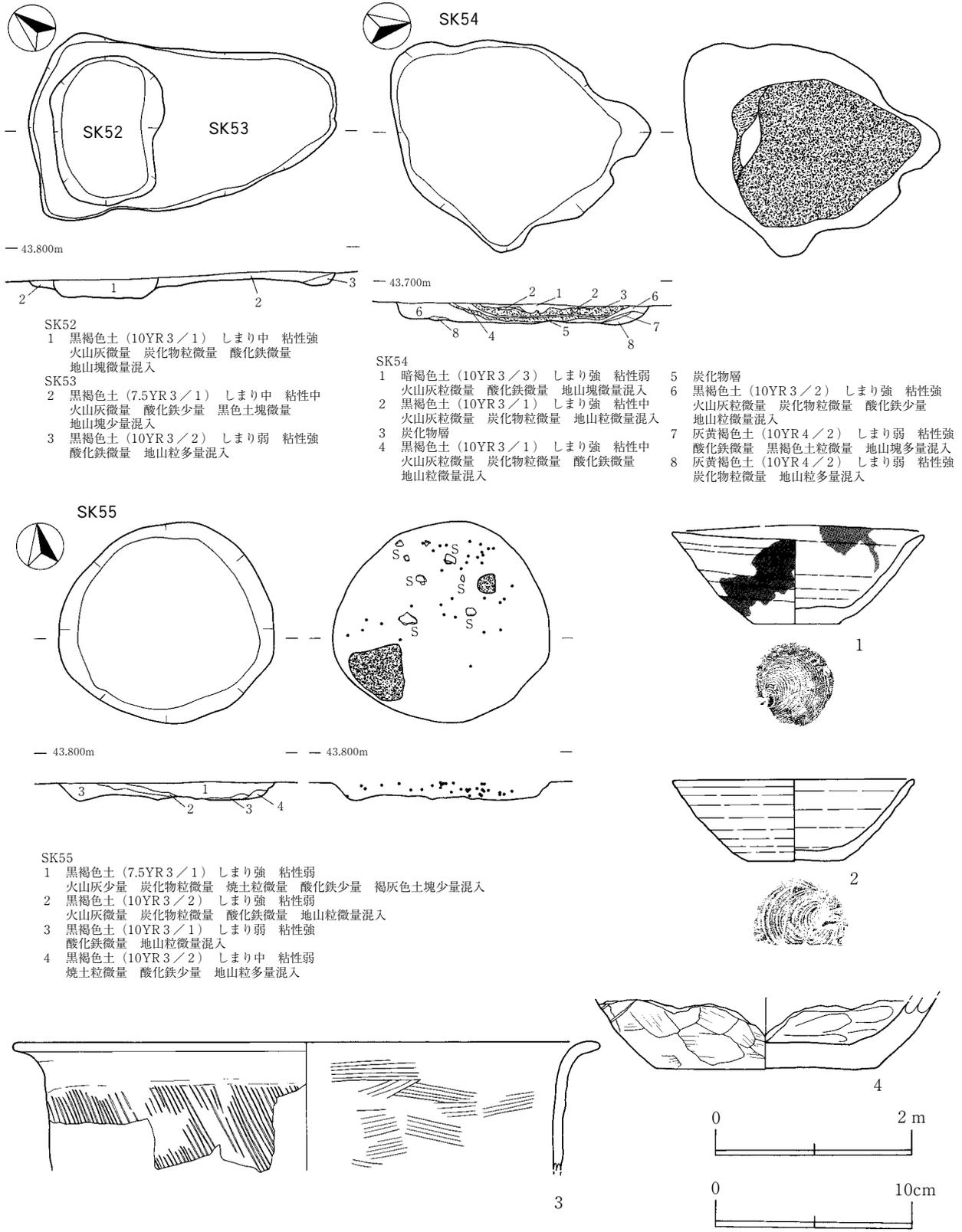
## S K 68 土坑 (第23図)

LS 61、LT 61 グリッドのⅦ層（地山）上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.81 m、短軸1.75 mの隅丸方形である。確認面からの深さは0.27 mである。壁は急に立ち上がる。底面は、東側は平坦で、西側には凹凸がある。出土遺物はない。

## S K 83 土坑 (第23図、図版5)

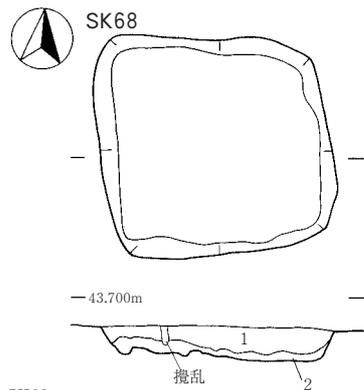
L J 44、L K 43・44 グリッドのⅦ層（地山）上面で確認した。重複はない。覆土の1～3層に火山灰が混入する。平面形は、長軸2.84 m、短軸1.54 mの楕円形である。確認面からの深さは0.13 mであり、P 1の深さは0.18 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、縄文土器片1点、磨製石斧1点、土師器（坏底部1点、坏破片62点、内面を黒色処理した坏破片2点、甕破片21点、底部に網代痕のある甕の底部1点）、須恵器（甕破片5点）である。

第4章 調査の記録

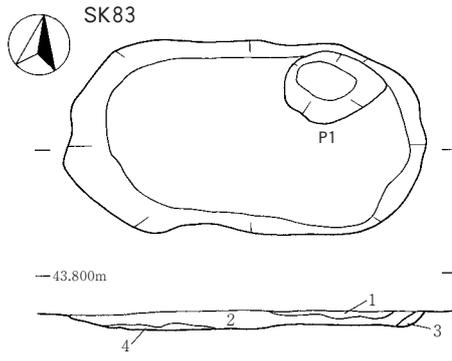


番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	1区SK55 RP1	12.7	4.5	5.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	坏	1区SK55 1層 RP15-21	(12.4)	4.8	4.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	甕	1区SK55 RP3-8-15-23-31	(29.4)	—	—	内外:カキメ
4	土師器	甕	1区SK55 RP6-24	—	—	—	内:ナデ、外:ヘラケズリ

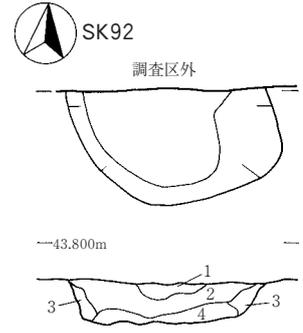
第22図 1区SK52・53・54・55と出土遺物



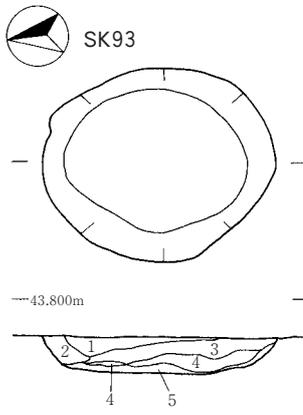
- SK68  
 1 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性中  
 炭化物塊微量 酸化鉄少量 地山塊少量混入  
 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり弱 粘性強  
 酸化鉄少量 黒褐色土粒微量 地山粒少量混入



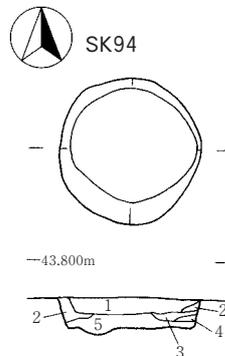
- SK83  
 1 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱 粘性弱  
 火山灰少量 炭化物粒微量 酸化鉄微量混入  
 2 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性弱  
 火山灰多量 炭化物粒微量 酸化鉄微量混入  
 3 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性弱  
 火山灰微量 炭化物粒微量 酸化鉄微量混入  
 4 黄灰色土 (2.5Y 5/1) しまり弱 粘性強  
 炭化物粒微量 酸化鉄少量混入



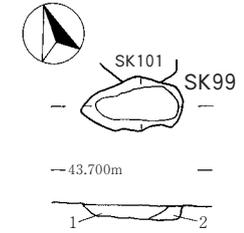
- SK92  
 1 黒色土 (10YR 1.7/1)  
 しまり中 粘性強  
 火山灰粒多量 炭化物粒微量  
 酸化鉄微量混入  
 2 黒褐色土 (10YR 3/1)  
 しまり弱 粘性強  
 火山灰粒多量 炭化物粒少量  
 酸化鉄少量 地山塊微量混入  
 3 灰黄褐色土 (10YR 4/2)  
 しまり強 粘性強  
 炭化物粒微量 酸化鉄少量  
 黒褐色土塊微量 地山塊微量混入  
 4 黒褐色土 (10YR 3/2)  
 しまり弱 粘性強  
 炭化物粒微量 酸化鉄少量混入



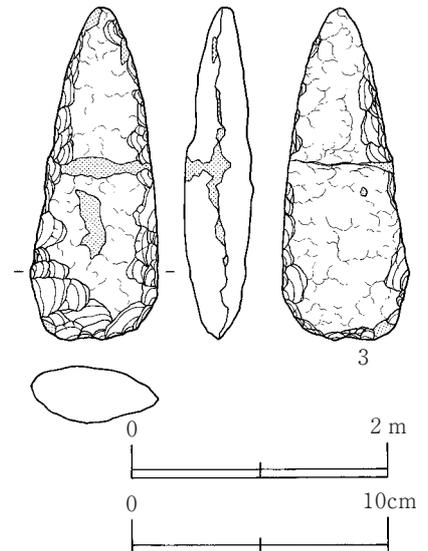
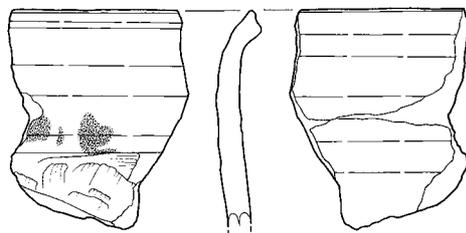
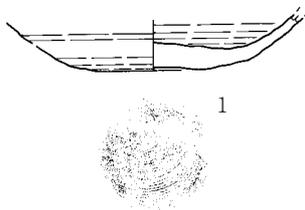
- SK93  
 1 黒色土 (10YR 1.7/1) しまり強 粘性弱  
 火山灰粒多量 炭化物粒微量 酸化鉄微量  
 地山粒少量混入  
 2 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性強  
 火山灰粒少量 炭化物粒微量 酸化鉄少量  
 地山粒少量混入  
 3 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) しまり強 粘性弱  
 火山灰粒少量 酸化鉄多量  
 灰黄褐色土塊少量混入  
 4 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり弱 粘性強  
 火山灰粒多量 炭化物粒微量 酸化鉄微量混入  
 5 灰黄褐色土 (10YR 5/2) しまり弱 粘性中  
 酸化鉄多量 地山塊多量混入



- SK94  
 1 黒褐色土 (10YR 3/2)  
 しまり強 粘性弱  
 火山灰粒少量 炭化物粒微量  
 酸化鉄微量混入  
 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2)  
 しまり強 粘性強  
 酸化鉄微量 地山塊多量混入  
 3 黄灰色土 (2.5Y 4/1)  
 しまり弱 粘性弱  
 火山灰粒微量 炭化物粒微量  
 酸化鉄微量混入  
 4 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)  
 しまり弱 粘性強  
 炭化物粒微量 酸化鉄微量混入  
 5 黒褐色土 (10YR 3/2)  
 しまり弱 粘性強  
 火山灰粒少量 炭化物粒微量  
 酸化鉄微量 地山塊少量混入



- SK99  
 1 黒褐色土 (10YR 3/2)  
 しまり中 粘性中  
 火山灰少量 炭化物粒微量  
 酸化鉄微量 地山粒微量混入  
 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2)  
 しまり中 粘性強  
 酸化鉄少量 地山塊多量混入



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	土師器	坏	1区SK83 RP1	—	4.7	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	壳	1区SK83	—	—	—	内外:ロクロ調整
番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特 徴
3	石製品	磨製石斧	1区SK83	13.2	6.0	2.7	摩耗顕著

第23図 1区SK68・83・92・93・94・99と出土遺物

S K 92 土坑 (第23 図)

M J 63・64 グリッド位置し、Ⅶ層 (地山) 上面で確認した。北側が調査区外にかかる。現状では重複はない。覆土の1・2層に火山灰が混入する。平面形は略円形であると推定され、現状で長軸1.58 m、短軸0.92 mである。確認面からの深さは0.36 mである。壁は、東側は緩やかに立ち上がり、西側は急に立ち上がる。底面には凹凸がある。出土遺物はない。

S K 93 土坑 (第23 図)

M I 63・64 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1～4層には火山灰が混入し、各層の境目には小石が混入している。平面形は、長軸1.83 m、短軸1.74 mの円形である。確認面からの深さは0.29 mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

S K 94 土坑 (第23 図、図版5)

M I 63、M J 63 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.14 m、短軸1.11 mの円形である。確認面からの深さは0.29 mである。壁は急に立ち上がる。底面は、ほぼ平坦であるが西側で浅く窪んでいる。出土遺物はない。

S K 99 土坑 (第23 図)

L T 62 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 101 と重複し、本遺構が新しい。覆土1層に火山灰が混入する。平面形は、長軸0.80 m、短軸0.43 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.14 mである。壁は、東側を除いて緩やかに立ち上がり、東側はほぼ垂直に立ち上がる。底面には若干凹凸がある。出土遺物はない。

S K 100 土坑 (第24 図、図版5)

L T 62・63 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 101・102・119 と重複し、本遺構が最も新しい。覆土の1層に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.67 m、短軸1.20 mの楕円形である。確認面からの深さは0.17 mである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、東側はほぼ平坦であるが、西側には凹凸がある。出土遺物は、土師器 (坏1点、坏破片3点、甕片破21点)、須恵器 (坏破片1点) である。第5表の分類項目に当てはめると、第24 図の1はロクロ土師器の坏gである。

S K 101 土坑 (第24 図)

L T 62・63 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 99・100 と重複し、本遺構が最も古い。S K 100 に北西側が削平されているため、平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸0.83 m、短軸0.54 mである。確認面からの深さは、最大0.21 mである。壁は緩やかに立ち上がるが、確認面下0.1 mで段になっている。底面は、ほぼ平坦であるが西側に窪みがある。出土遺物はない。

S K 102 土坑 (第24 図)

L T 63 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 100 と重複し、本遺構が古い。S K 100 に南側が削平されているため、平面形は円形であると推定され、残存部で長軸0.78 m、短軸0.42 mである。壁は、確認面下0.1 m程で段になりながら、急に立ち上がる。底面は南側に向かってやや傾斜する。出土遺物はない。

S K 103 土坑 (第24 図)

L S 63・64、L T 63・64 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K P 107 と重複し、本遺構が新しい。覆土の1層に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.00 m、短軸0.76 mの略楕円形である。

確認面からの深さは0.12 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

#### S K 104 土坑 (第24図)

L T 64 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。覆土の1層に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.14 m、短軸0.94 mの不整形である。確認面からの深さは0.14 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

#### S K 119 土坑 (第24図、図版5)

L T 62・63 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。S K 100と重複し、本遺構が古い。覆土の1層に火山灰が混入する。平面形は、長軸1.66 m、短軸1.06 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.32 mである。壁はやや急に立ち上がる。底面には凹凸があり、東側へわずかに傾斜している。出土遺物は、土師器(甕破片4点)である。

#### S K 120 土坑 (第24図)

L S 62 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。S B 62 P 13と重複し、本遺構が新しい。平面形は、長軸1.86 m、短軸1.46 mの不整形である。確認面からの深さは0.08～0.14 mである。壁は急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

#### S K 125 土坑 (第25図)

ME 64 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。北側が調査区外にかかる。現状では重複はない。平面形は略円形であると推定され、現状で長軸2.50 m、短軸1.26 mである。確認面からの深さは0.05～0.21 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物は、土師器(甕破片4点)、須恵器(蓋1点)である。

#### S K 132 土坑 (第25図)

MF 62 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。覆土に小石の混入が多い。平面形は、長軸0.99 m、短軸0.84 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.19 mである。壁は、東側と西側は緩やかに立ち上がり、南側と北側はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。出土遺物はない。

#### S K 133 土坑 (第25図)

MF 62・63、MG 62・63 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。覆土に石が多量に混入する。平面形は、長軸1.36 m、短軸1.26 mの略円形である。確認面からの深さは0.32 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干凹凸がある。出土遺物はない。

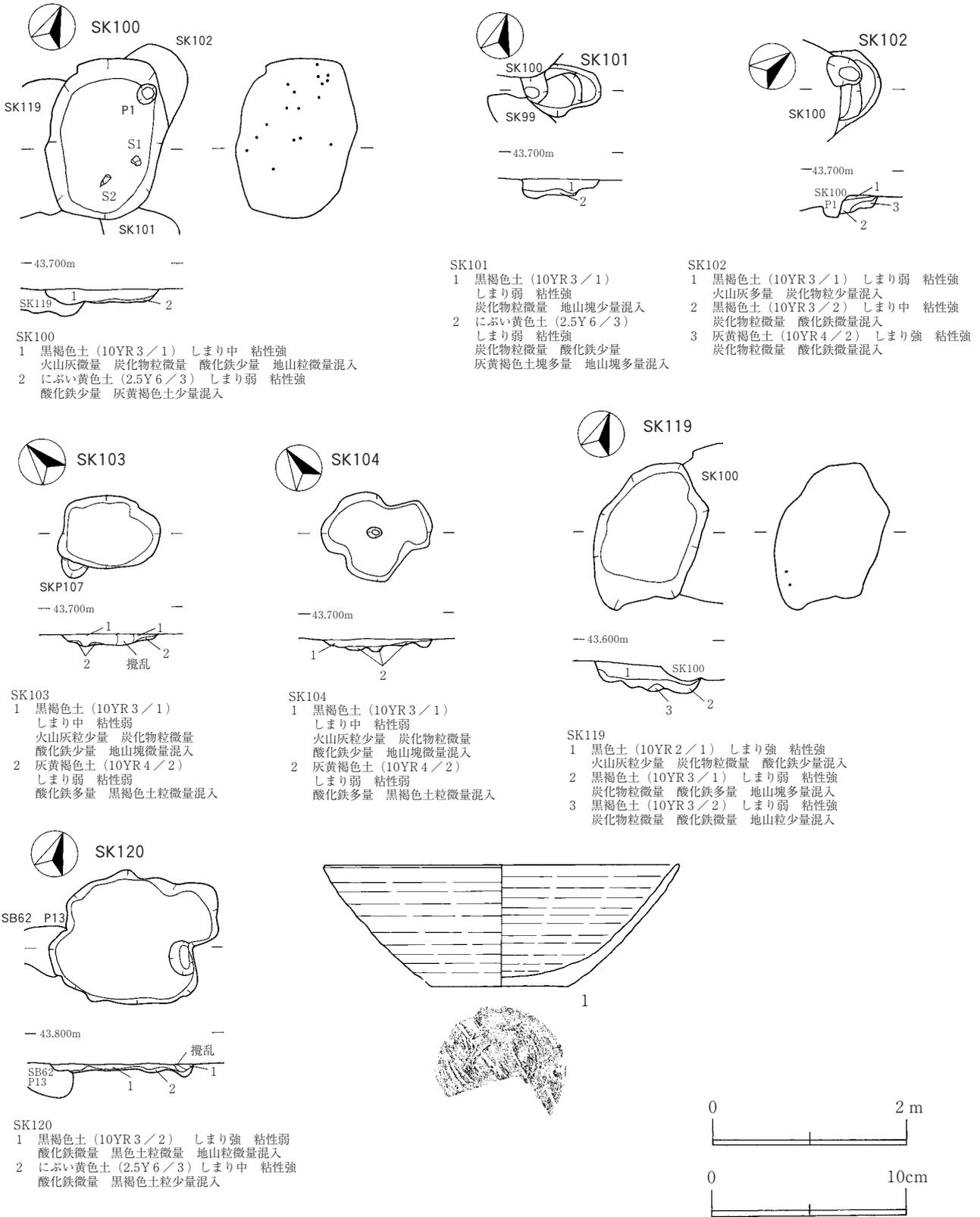
#### S K 146 土坑 (第25図)

MD 64 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はないが、中央部を暗渠に切られている。平面形は、長軸1.06 m、短軸0.83 mの不整形である。確認面からの深さは0.24 mである。壁は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央に窪みがある。出土遺物はない。

#### S K 150 土坑 (第25図)

MD 48・49 グリッドのⅦ層(地山)上面で確認した。重複はない。覆土の2層には焼土粒が多量に混入し、3層は厚さ2～6 cmの炭化物層である。平面形は、長軸1.16 m、短軸1.06 mの方形である。確認面からの深さは0.30 mである。壁は垂直に立ち上がり、南東壁の一部はオーバーハングす

第4章 調査の記録



第24図 1区SK100・101・102・103・104・119・120と出土遺物

番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	1区SK100 RP10-12	(18.4)	7.1	6.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り

る。底面は平坦であるが、中央に窪みがある。出土遺物はない。

#### S K 151 土坑 (第25図)

MD 47 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の4層は厚さ約2cmの炭化物層である。覆土中に焼土粒の混入はないが、四方の壁と底面の一部は赤化しており、被熱痕がある。平面形は、長軸0.76m、短軸0.73mの方形である。確認面からの深さは0.19mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、中央よりやや西側で浅く窪む。出土遺物はない。

#### S K 152 土坑 (第25図)

MD 46・47 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.11m、短軸0.84mの楕円形である。確認面からの深さは0.16mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

#### S K 155 土坑 (第25図)

MC 48 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1層は厚さ3～8cmの炭化物層であり、焼土塊が混入する。平面形は、長軸0.73m、短軸0.63mの略円形である。確認面からの深さは0.21mである。壁は、東側は急に立ち上がり、西側は緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、中央よりやや南側で若干窪む。出土遺物ない。

#### S K 157 土坑 (第21図、図版5)

ME 46 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K 48 と重複し、本遺構が古い。平面形は、長軸1.61m、短軸1.08mの楕円形である。確認面からの深さは0.23mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### ④溝跡

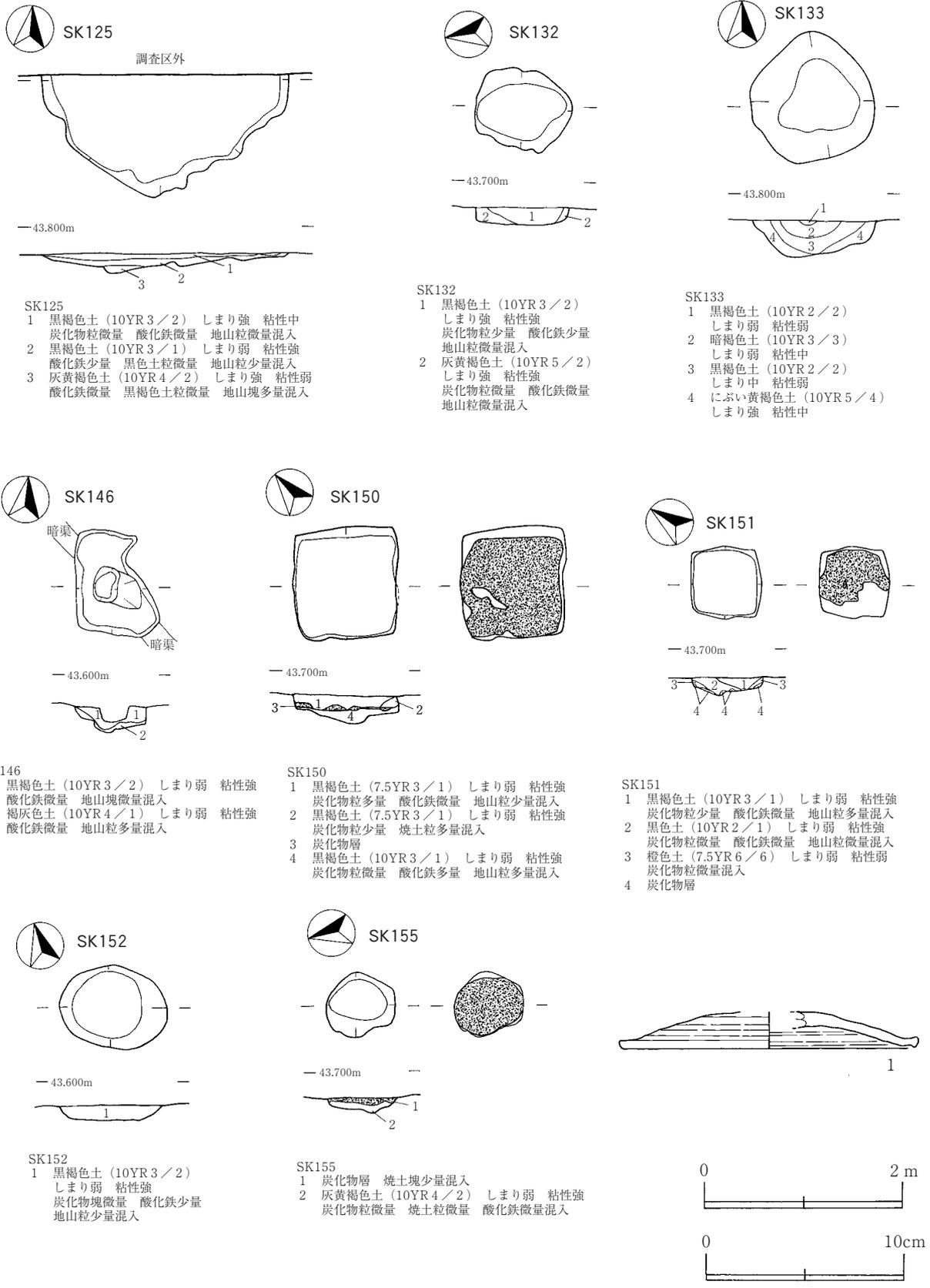
#### S D 77 溝跡 (第26図、図版4)

L J 43、L K 43、L L 43、L M 42・43、L N 43、L O 42・43 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。S K P 87・117 と重複し、本遺構が古い。また、本遺構の東端と西端は砂利と重複する。覆土には、砂粒等が多量に混入する。確認長17.35m、幅0.08～0.38m、深さ0.03～0.12mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、土師器 (坏破片1点)、須恵器 (甕破片1点) である。

#### S D 80 溝跡 (第26図、図版4)

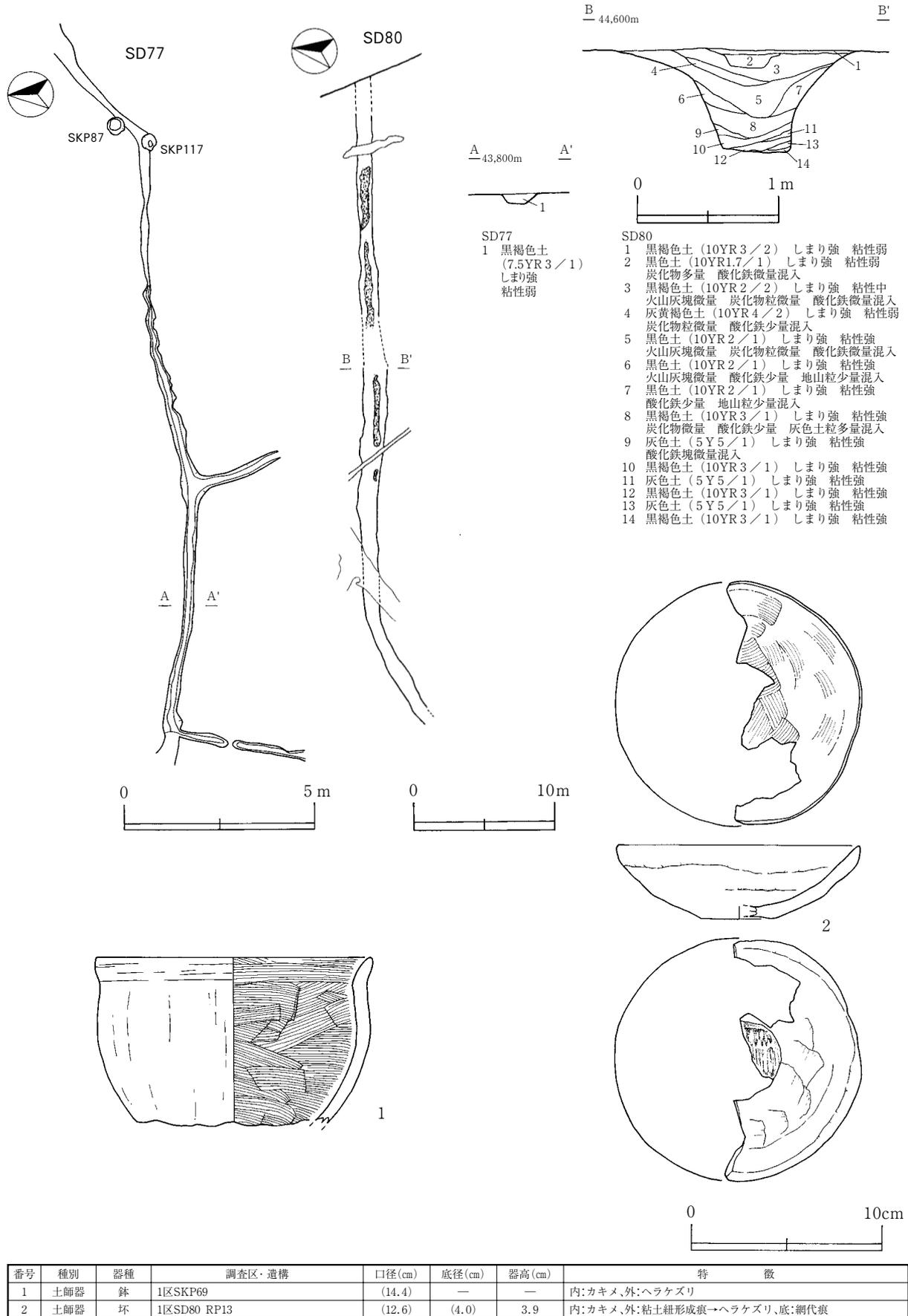
L N 60、L O 60、L P 59・60、L Q 59・60、L R 59、L S 59、L T 59、MA 59、MB 59、MC 58・59、MD 57・58、MG 57・58、M J 57、MK 57 グリッドのⅦ層 (地山) 上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかり、東西方向に更に延びるものと推定される。重複はないが、暗渠に切られるなど部分的に攪乱を受けている。確認長72.40m、幅0.70～1.70m、深さ0.16～0.73mである。出土遺物は、土師器 (網代痕のある坏1点、内面を黒色処理した坏破片1点、坏破片37点、甕破片11点、小型甕1点)、須恵器 (坏破片12点、甕破片7点)、近世以降の陶磁器破片1点である。第5表の分類項目に当てはめると、第26図の2は非ロクロ土師器の坏b、第27図の1はロクロ土師器の小型甕b、2・3は須恵器の坏eである。

第4章 調査の記録

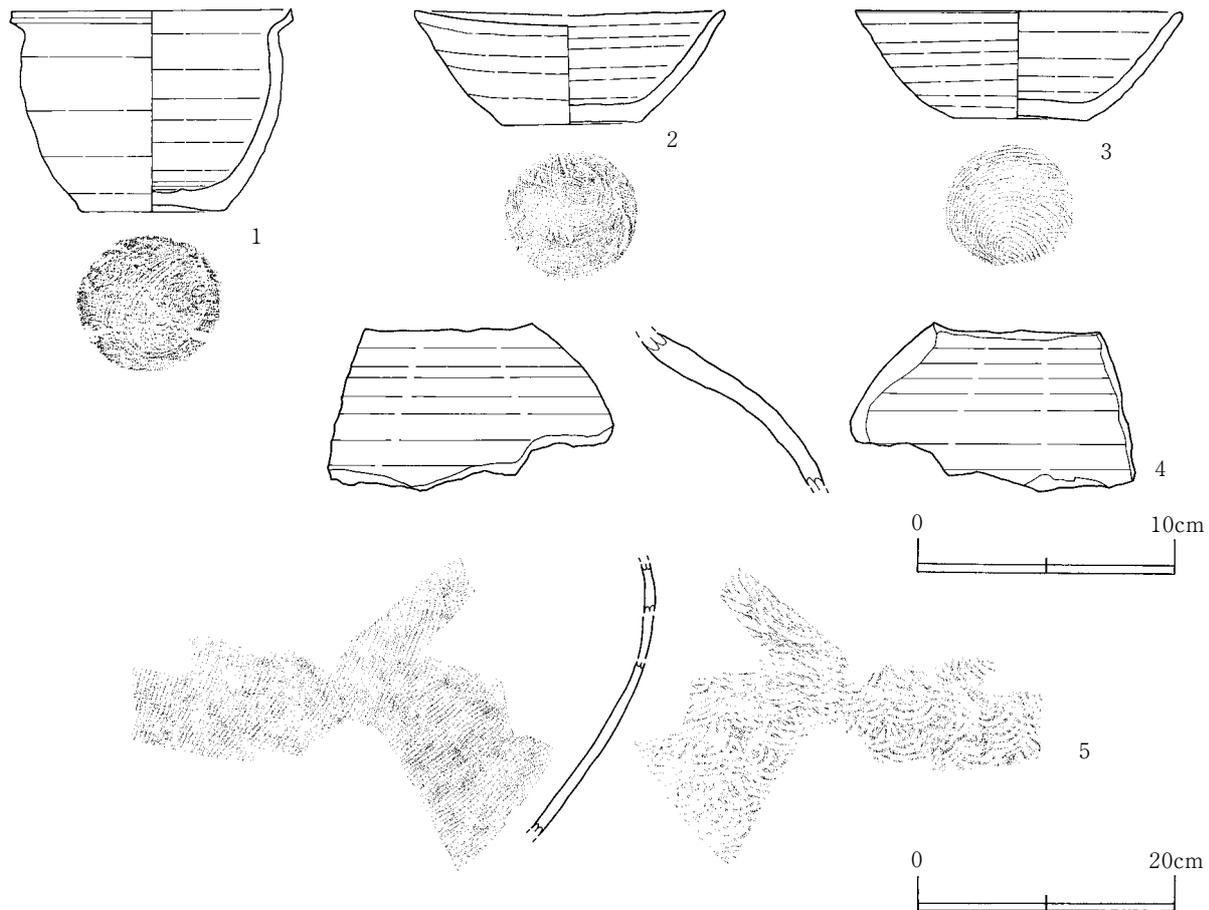


番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	須恵器	蓋	1区SK125 RP1・2・4、ME46	(15.2)	—	—	外:ロクロ調整→一部ヘラケズリ

第25図 1区SK125・132・133・146・150・151・152・155と出土遺物



第26図 1区SD77・80と出土遺物



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	小型甕	1区SD80 RP8-9、LT59	(10.8)	5.6	8.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	須恵器	坏	1区SD80 RP6	12.2	5.4	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、火だすき
3	須恵器	坏	1区SD80 RP3、LP59	12.7	5.3	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、火だすき
4	須恵器	長頸瓶	1区SD80 RP16	—	—	—	内外:ロクロ調整
5	須恵器	甕	1区SD80 RP4、LR59	—	—	—	内外:タタキ

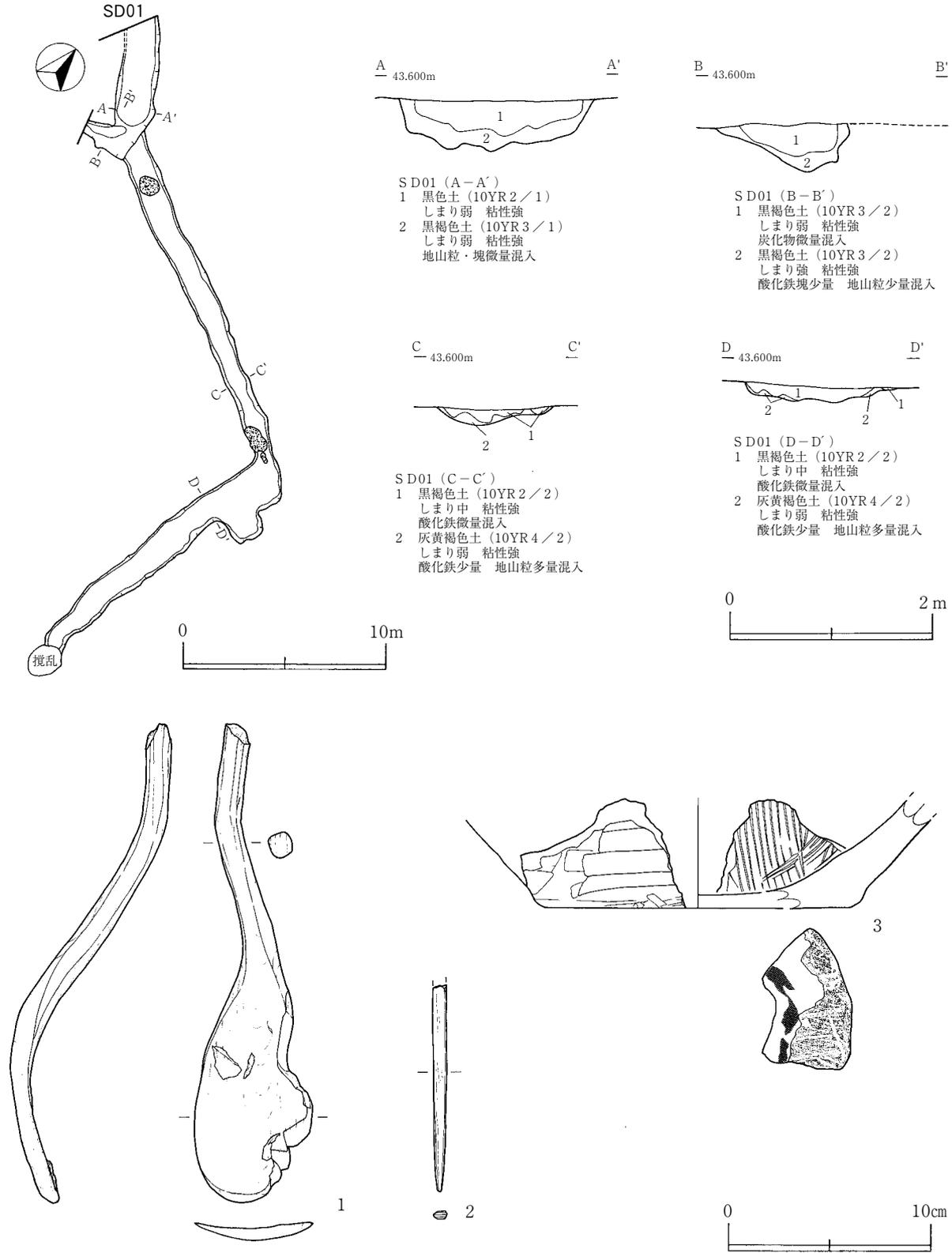
第27図 1区SD80出土遺物

⑤柱穴様ピット

1区では、64基の柱穴様ピットを検出した。詳細を観察表にまとめた。SKP 05・22・23・81は、SA 24である板塀の一部の可能性がある。SKP 15・20・33・72・158もSB 06に伴う板塀の一部の可能性がある。それ以外に規則的な配列は認められなかった。出土遺物は、土師器坏の破片(SKP 18から22点、SKP 33から1点、SKP 37から6点、SKP 91から1点、SKP 131から1点)、土師器甕の破片(SKP 10から1点、SKP 11から2点、SKP 33から1点、SKP 69から19点、SKP 131から1点)、土師器の鉢(SK P 69から1点)である。

第6表 1区柱穴様ピット計測一覧

遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 05	L R 46	不整形	32	22	20	43.44	
S K P 10	L R 45	楕円形	36	29	40	43.24	
S K P 11	L Q 44・45	楕円形	30	24	19	43.45	
S K P 15	L R 43	方形	25	24	22	43.43	
S K P 16	L R 43	略円形	38	31	36	43.29	S K P 17より古い。
S K P 17	L R 43	楕円形	41	34	47	43.17	S K P 16より新しい。
S K P 18	L R 42・43	円形	48	46	26	43.39	
S K P 19	L R 43	楕円形	36	21	38	43.28	
S K P 20	L R 43	方形	23	21	38	43.28	
S K P 21	L R 42	方形	25	24	17	43.47	
S K P 22	L S 46	円形	26	21	8	43.55	S K P 23より古い。
S K P 23	L S 46	方形	31	28	35	43.29	S K P 22より新しい。
S K P 33	L S 43	楕円形	38	30	38	43.29	
S K P 37	MA 42	楕円形	54	39	29	43.35	
S K P 38	MA 42	円形	23	23	12	43.51	
S K P 39	MA 41・42	円形	55	48	27	43.34	
S K P 40	MB 42	楕円形	45	34	28	43.28	
S K P 47	MH 44・45	方形	30	28	26	43.17	
S K P 49	MF 44	円形	32	29	22	43.16	
S K P 56	MB 63・64	略円形	64	55	20	43.29	
S K P 57	MA 64	方形	34	29	11	43.38	
S K P 61	MA 64	円形	22	20	15	43.33	
S K P 66	L T 61	円形	22	21	9	43.39	
S K P 69	L Q 42	円形	32	30	13	43.49	
S K P 70	L Q 42	円形	25	21	13	43.49	
S K P 71	MA 63	円形	23	20	9	43.41	
S K P 72	L Q 43	方形	25	(24)	25	43.41	S K P 158より新しい。
S K P 78	L K 42・43	略円形	52	46	27	43.27	
S K P 81	L R 46	円形	46	44	15	43.46	
S K P 82	L R 47、L S 47	方形	48	46	29	43.25	
S K P 84	L O 42	隅丸方形	31	23	5	43.54	
S K P 85	L O 42	楕円形	26	20	7	43.52	
S K P 87	L K 43	円形	46	45	25	43.26	S D 77より新しい。
S K P 88	MD 64	方形	39	32	11	43.42	
S K P 91	L K 44	円形	25	23	33	43.17	
S K P 95	L J 42	楕円形	33	26	34	43.19	
S K P 97	L T 62	方形	30	28	16	43.34	
S K P 107	L T 63	(円形)	29	(17)	16	43.27	S K 103より古い。
S K P 108	L S 64	楕円形	44	31	11	43.31	S K P 109より新しい。
S K P 109	L S 64	円形	26	(24)	13	43.29	S K P 108より古い。
S K P 110	L T 64	方形	46	46	12	43.33	S K P 111より新しい。
S K P 111	L T 64	楕円形	(26)	23	11	43.34	S K P 110より古い。
S K P 112	L S 62	方形	36	27	30	43.22	S B 62 P 12より新しい。
S K P 114	L S 62	(楕円形)	(14)	14	28	43.24	S B 62 P 12より古い。
S K P 115	L S 63	方形	28	26	18	43.20	
S K P 117	L K 43	略円形	44	38	26	43.26	S D 77より新しい。
S K P 118	L K 43	方形	59	51	24	43.29	
S K P 122	L J 45	不整楕円形	30	22	12	43.29	
S K P 123	L J 45	楕円形	36	22	21	43.31	
S K P 124	ME 64	方形	33	30	29	43.23	
S K P 126	LM 58	円形	34	30	20	43.03	
S K P 127	L S 64	楕円形	18	(13)	12	43.31	S K P 159より古い。
S K P 128	ME 64	方形	41	35	9	43.42	
S K P 131	L J 42	方形	40	32	28	43.25	
S K P 141	ME 64	楕円形	39	30	22	43.28	
S K P 144	L T 63	円形	26	24	29	43.13	S B 62 P 2より古い。
S K P 154	L S 60	方形	28	27	15	43.31	
S K P 158	L Q 43	方形	23	(20)	27	43.38	S K P 72より古い。
S K P 159	L S 64	方形	31	19	7	43.36	S K P 127より新しい。
S K P 160	MA 64	円形	29	27	13	43.35	
S K P 161	L R 59	円形	26	23	29	43.16	
S K P 162	LN 42	楕円形	27	21	21	43.37	
S K P 163	L S 60	円形	26	24	11	43.37	
S K P 179	L Q 44	略円形	35	28	32	43.28	S K 04より新しい。



番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特徴
1	木製品	匙	1区SD01 RW4	24.0	5.9	1.5	
2	木製品	箸	1区SD01、MI48	10.3	0.7	0.5	

番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
3	中世陶器	擂鉢	1区SD01 RP5	—	—	—	内:卸目、外:ロクロ調整、底:アスファルト付着

第28図 1区SD01と出土遺物

## (3) 鎌倉時代～室町時代

## S D 01 溝跡 (第28図、図版4)

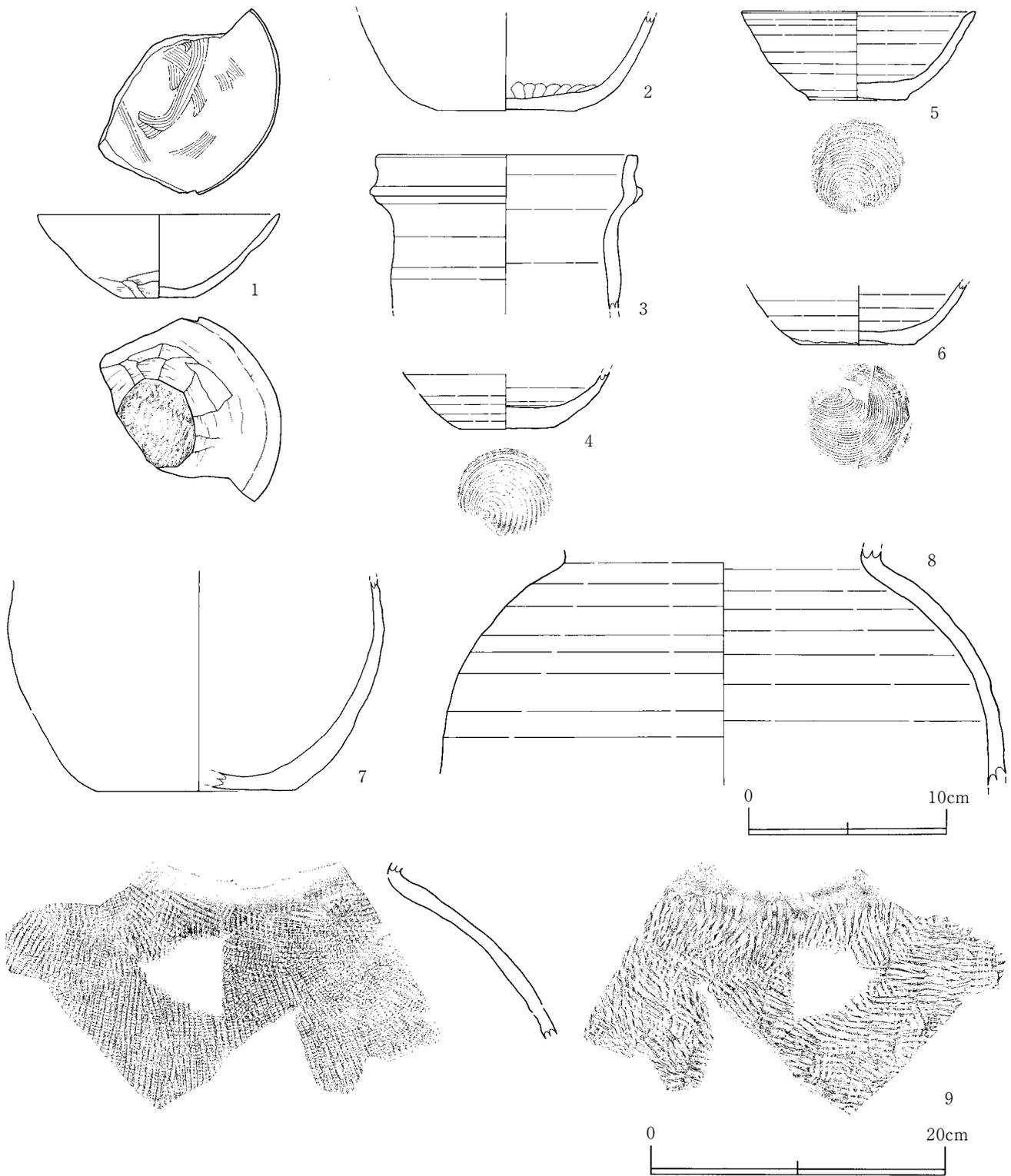
ME 45・46、MF 43～47、MG 43・46・47、MH 47・48、MI 47・48、MJ 48・49、MK 49・50、MG 44 グリッドのⅢ層下面で確認した。重複関係はない。北西側が調査区外にかかり、西に更に延びるものと推定される。確認長 37.50 m、幅 0.80～2.70 m、深さ 0.09～0.32 m である。くの字状に曲折しており、MJ 48 グリッドで二又になっている。北西方向に延びていく部分は、幅 1.50～1.90 m、深さ 0.30～0.57 m である。西に延びていく部分は幅 0.70～1.40 m、深さ 0.25～0.49 m である。壁は急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物は、土師器（甕破片 1 点）、須恵器（甕破片 1 点）、中世陶器（播鉢破片 2 点）である。また、北西端部から木製品（箸、曲物の破片等）、くの字状に曲折した部分から木製品（匙 1 点）が出土した。

## (4) 遺構外出土遺物

1 区の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器、平安時代の土師器・須恵器、中世陶器、近世以降の古銭・陶磁器などで整理用コンテナで 11 箱である。縄文時代の土器は、胴部破片 68 点、深鉢の破片 31 点である。非ロクロの土師器は、坏 1 点、坏破片 18 点、網代痕のある坏底部の破片 1 点である。ロクロの土師器は、坏破片 2,034 点、内面を黒色処理した坏破片 27 点、同台付坏の底部破片 1 点、椀 1 点、羽釜の口縁部 1 点、甕破片 2,549 点である。須恵器は、坏 3 点、坏破片 35 点、甕破片 278 点、壺 2 点、壺破片 15 点、甕または壺の破片 161 点である。中世陶器は、播鉢の破片 8 点である。第 5 表の分類項目に当てはめると掲載した土師器と須恵器の遺物は下記ようになる。

第 29 図の 1 は、非ロクロ土師器の坏 b である。

第 29 図の 5 は、須恵器の坏 e である。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	1区MC42 II層	—	(3.6)	4.3	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
2	土師器	椀	1区MC44 II層	—	(7.1)	—	内外:ヘラミガキ
3	土師器	羽釜	1区MB42 II層	—	—	—	内外:ロクロ調整
4	須恵器	坏	1区MJ57 II層埋土中	—	4.9	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、火だすき
5	須恵器	坏	1区LS56 II層	11.8	5.2	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、
6	須恵器	坏	1区LJ62、LT62・63	—	5.8	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、火だすき
7	須恵器	壺	1区LN48 II層	—	(10.0)	—	内外:ロクロ調整、外:ヘラケズリ
8	須恵器	壺	1区LP45、LT56、MB41・43、MC44・46、ME46	—	—	—	内外:ロクロ調整
9	須恵器	甕	1区MB42・43、MC42、MD42 II層	—	—	—	内外:タタキ

第29図 1区遺構外出土遺物

## 2 2区の検出遺構と遺物

## (1) 平安時代

## ①掘立柱建物跡

## S B 29 掘立柱建物跡 (第30図、図版6)

G O 107・108、G P 107・108 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。建物規模は、北側柱列が総長3.30 mで、柱間距離は1.65 m等間である。東側柱列も総長は3.30 m、柱間距離は北から1.60 m、1.70 mあり、ほぼ正方形である。柱穴は一辺30～40 cmの略方形で、深さは12～40 cmである。P 6・P 9には径21～24 cmの柱痕が見られる。北東隅柱および東側中央柱はそれぞれに同位置で重複があり、建て替えかと考えられる。建物方位は東側柱列でN-23°-Wである。出土遺物は、土師器坏の破片(P 6から4点)、土師器甕の破片(P 5から1点)である。

## ②柱列

## S A 16 柱列 (第31図、図版6)

G I 79～81 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。2間の柱列である。総長3.80 mで、柱間距離は1.90 m等間である。柱穴は長辺32～45 cm、短辺23～40 cmの略方形で、深さ23～32 cmである。柱痕は認められない。方位はN-12°-Wである。東側の調査範囲外にある掘立柱建物の西側柱列である可能性がある。出土遺物は、土師器坏の破片(P 1から9点)、土師器甕の破片(P 1から1点)である。

## S A 38 柱列 (第31図、図版6)

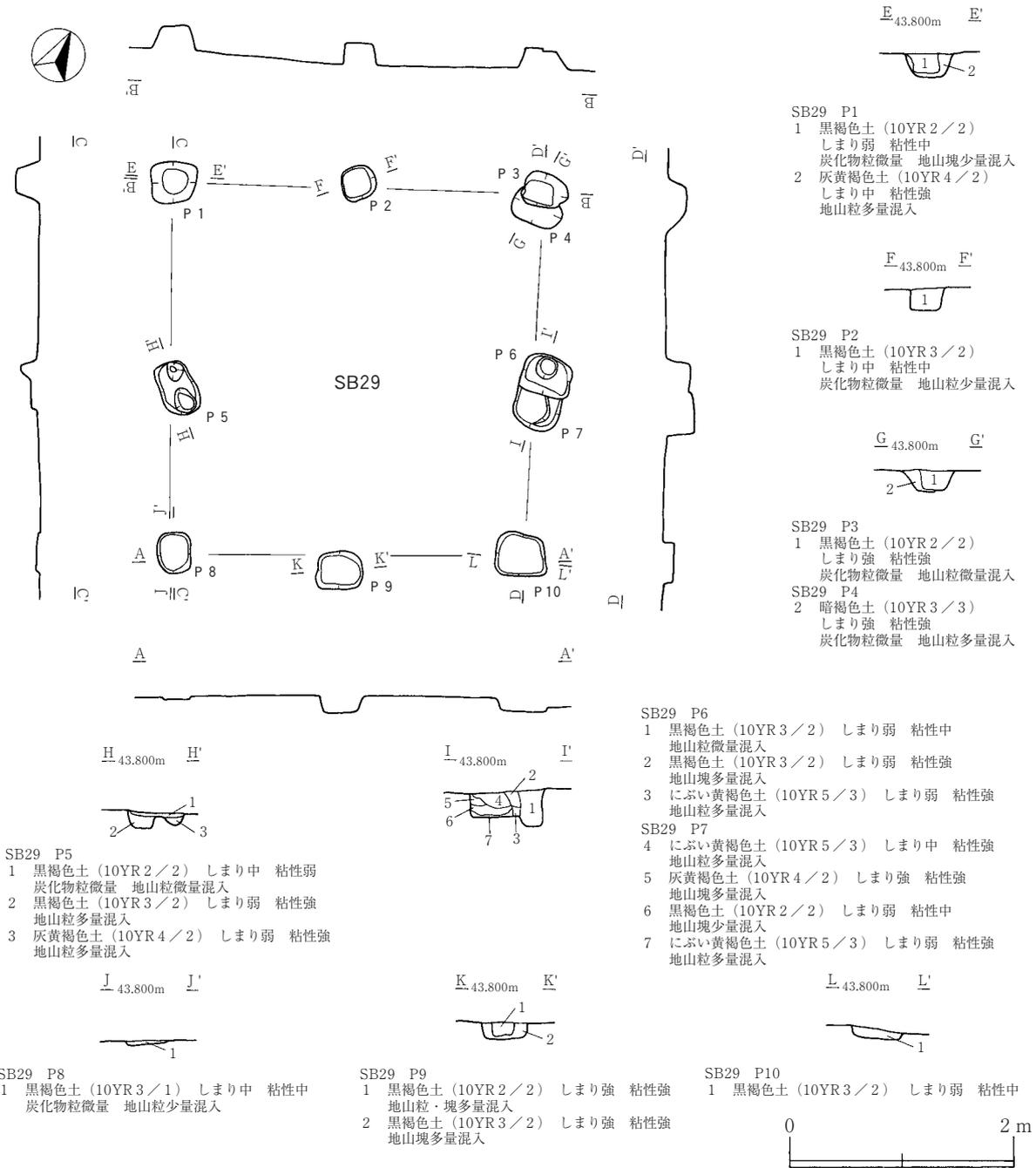
G O 105・106、G P 106 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S K I 35の西に隣接しS A 43柱列の北西にほぼ同一方向で並ぶ2間の柱列である。総長は2.90 m、柱間距離は北から1.34 m、1.56 mである。柱穴は一辺34～40 cmの方形で、深さ24～30 cmである。柱痕は認められない。方位はN-26°-Wである。西側の調査範囲外にある掘立柱建物の東側柱列である可能性がある。出土遺物は、土師器坏の破片(P 1から5点、P 2から7点)、土師器甕の破片(P 1から1点、P 2から1点、P 3から4点)である。

## S A 43 柱列 (第31図、図版6)

G N 104、G O 104・105 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S A 38柱列の南東にほぼ同一方向で並ぶ3間の柱列である。総長5.12 m、柱間距離は北から1.50 m、1.70 m、1.92 mでばらつきがある。柱穴は長軸約50 cmの略円形あるいは長方形で、深さ10～30 cmである。P 3の底面に柱による窪みがあり、径15 cmの柱痕が土層断面で観察された。方位はN-35°-Wである。出土遺物は、土師器甕の破片(P 2から2点)である。

## S A 60 柱列 (第31図)

G O 102・103 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S A 62柱列の西に0.5 m離れてほぼ同一方向に並ぶ2間の柱列である。総長は3.24 m、柱間距離は北から1.50 m、1.74 mである。柱穴はP 1が一辺37 cmの方形で深さ42 cm、P 3は径24 cmの円形で深さ14 cmである。P 2は径・深さとも約30 cmで、S K P 59によって切られている。柱痕は認められない。方位はN-22°-Wである。西側の調査範囲外にある掘立柱建物の東側柱列である可能性がある。出土遺物はない。



第30図 2区S B29

S A 62 柱列 (第31図)

G N 102、G O 103 グリッドのⅧ層 (地山) 上面で確認した。S A 60 柱列の東に 0.5 m 離れて並ぶ 2 間の柱列である。総長は 3.78 m、柱間距離は北から 1.80 m、1.98 m である。柱穴は径 26 ~ 40 cm の略円形で、深さは 22 ~ 28 cm である。柱痕は認められない。方位は N - 24° - W である。出土遺物はない。

**S A 149 柱列**（第32図、図版6）

G I 78・79、G J 79・80グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。S A 152・153と重複し、本遺構が最も古い。4間の柱列で、総長は7.50 m、柱間距離はP 1とP 2の間が1.80 m、P 4とP 5の間が1.70 mである。柱穴は径約60 cmの円形または楕円形で、深さ16～46 cmである。P 2はS K P 150を切り、P 3はS K P 166およびS A 153柱列のP 4に切られて一部しか残っていない。柱痕は認められない。方位はN-16°-Wである。西側調査範囲外にある掘立柱建物の東側柱列である可能性がある。出土遺物は、土師器坏の破片（P 1から1点、P 3から4点、P 4から2点、P 5から1点）、土師器甕の破片（P 1から2点、P 4から1点）である。

**S A 152 柱列**（第32図、図版6）

G I 79・80、G J 80・81グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。S A 149・153と重複し、本遺構が最も新しい。4間の柱列で、総長は8.34 m、柱間距離は北から2.34 m、1.98 m、2.20 m、1.82 mである。柱列は北端のP 1が最も大きく長軸76 cm、短軸66 cmの楕円形で、深さ20 cm、P 3は一辺約50 cmの方形である。P 1とP 2がそれぞれS A 153柱列のP 2とP 3を切っている。P 4はS K P 156に切られている。柱痕は認められない。方位はN-11°-Wである。西側調査範囲外にある掘立柱建物の東側柱列である可能性がある。出土遺物は、土師器坏の破片（P 2から3点）、土師器甕の破片（P 1から2点、P 2から1点）、須恵器坏の破片（P 2から1点）である。

**S A 153 柱列**（第32図、図版6・8）

G J 79～81グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。S A 149・152と重複し、S A 149より新しく、S A 152より古い。3間の柱列で、総長は7.65 m、柱間距離はP 1とP 2の間が2.42 m、P 3とP 4の間が2.62 mである。P 2はS A 152柱列のP 1に切られ、P 3はS A 152柱列のP 2とS K P 189に切られている。P 4はS A 149柱列のP 3とS K P 166を切る。柱穴はP 1の場合、長軸95 cm、短軸78 cm、P 4は長軸72 cm、短軸58 cmの楕円形で、深さはそれぞれ56 cm、62 cmと規模が大きい。方位はN-5°-Wである。西側調査範囲外にある掘立柱建物の東側柱列である可能性がある。出土遺物は、P 1・3・4から径20～26 cmの柱材、土師器坏の破片（P 1から12点、P 3から1点、P 4から23点）、土師器甕の破片（P 1から5点、P 3から1点、P 4から8点）、須恵器坏の破片（P 4から1点）である。

## ③ 竪穴状遺構

**S K I 35 竪穴状遺構**（第33図、図版6・8）

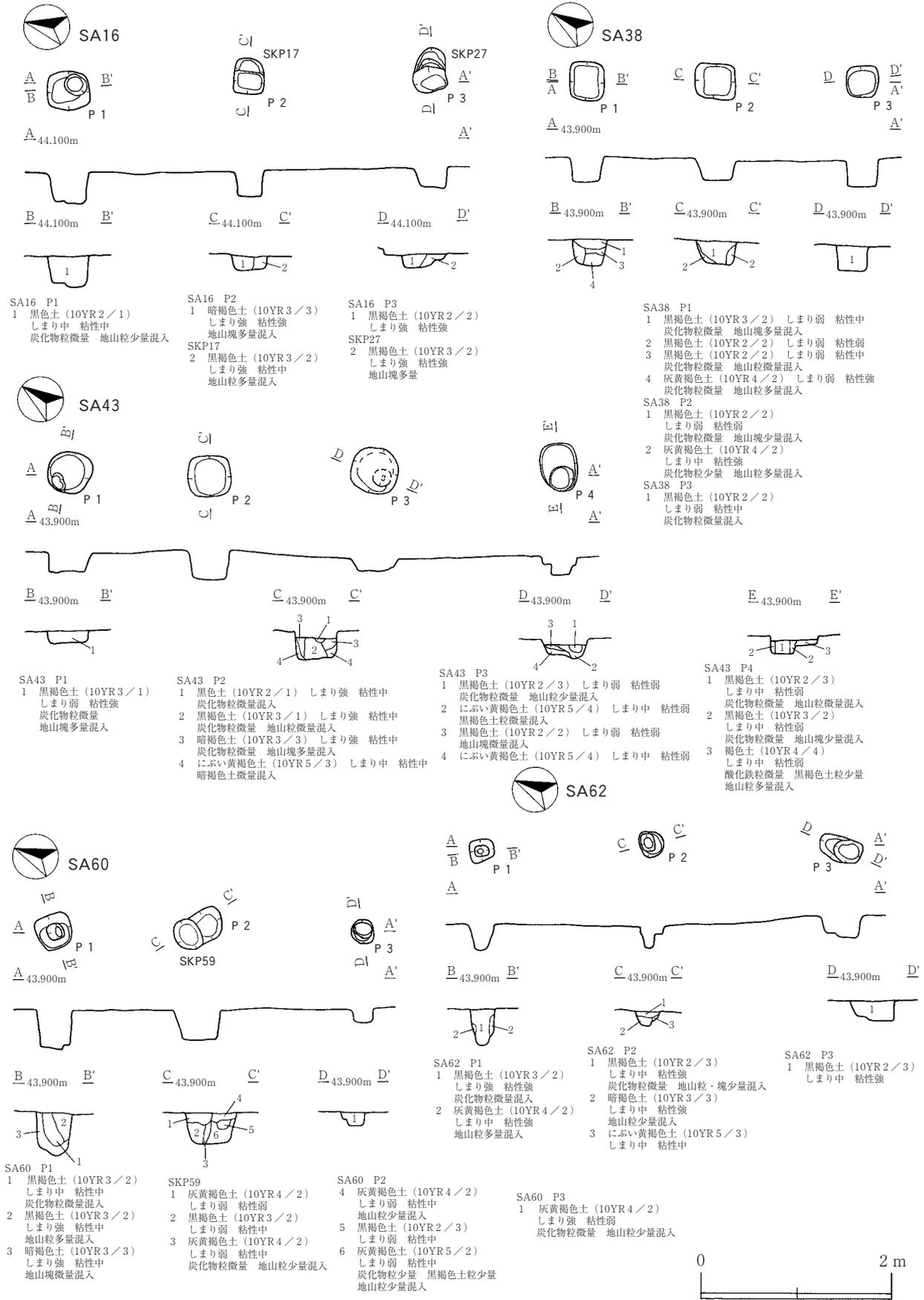
G O 106グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。S K 82・83、S K P 195・196・197と重複し、本遺構が最も新しい。確認調査時のトレンチが南北に入っており、一部壊されている。平面形は、長軸2.73 m、短軸2.51 mの隅丸方形である。確認面からの深さは0.37 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物は、土師器（坏破片16点、甕破片57点）、須恵器（坏破片3点、甕破片1点）である。

## ④ 土坑

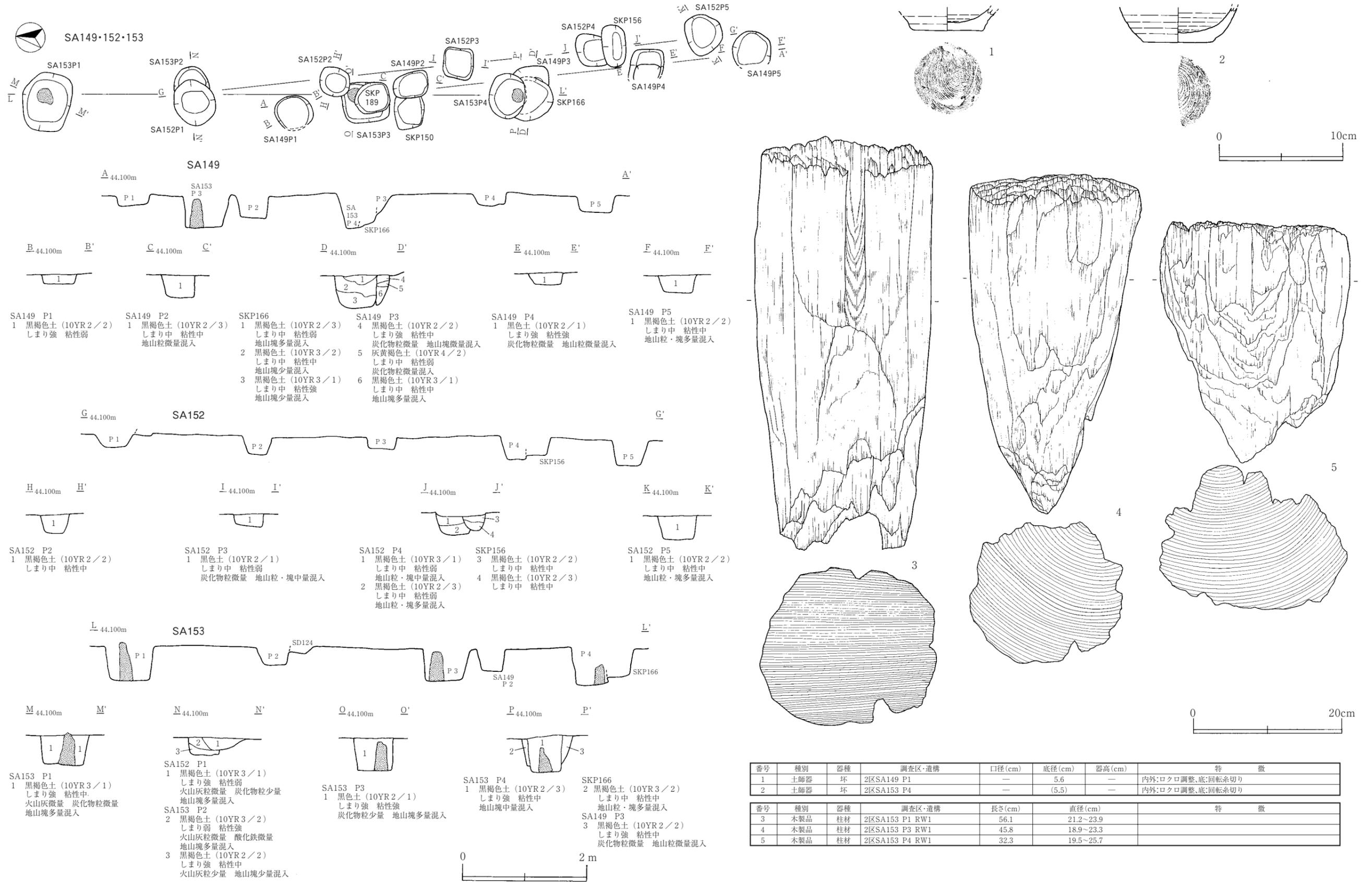
**S K 80 土坑**（第33図）

G O 105・106グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸0.84 m、短軸0.31 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.13 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は

第4章 調査の記録



第31図 2区S A16・38・43・60・62



第32図 2区SA149・152・153と出土遺物

平坦である。出土遺物はない。

#### S K 81 土坑（第33図、巻頭図版、図版7）

G N 100 グリッドの北側水田跡の下のV層下面で確認した。西側は調査区外にかかる。現状では重複はない。覆土は、一括埋め戻しで人為的堆積土である。平面形は円形であると推定され、現状で長軸2.43 m、短軸2.17 mである。確認面からの深さは0.81 mである。壁は急に立ち上がり、底面は平坦で南西側から北東側へ緩やかに傾斜している。出土遺物は、木製品（鋤、下駄、曲物、箸、木片等100点以上）、土師器（坏1点、甕破片3点）、須恵器（坏3点、坏破片8点、長頸瓶1点）である。鋤は、株式会社吉田生物研究所に依頼した樹種同定の結果、クルミ科クルミ属オニグルミで作られていることが分かった。同様の鋤が山形県米沢市の古志田東遺跡から出土している。鋤や下駄など多数の木製品は、人為的堆積土に含まれていたことから、何らかの理由で廃棄されたものと考えられる。また、本遺構から出土した須恵器坏破片と北側に隣接するS D 12から出土した須恵器坏破片は、同一個体で「豊」と書かれた墨書土器である。第5表の分類項目に当てはめると掲載した土師器坏と須恵器坏は下記のようになる。

第34図の1は、ロクロ土師器の坏eである。

第34図の2～4は、須恵器の坏eである。

#### S K 82 土坑（第33図）

G O 106 グリッドのⅧ層（地山）面で確認した。S K I 35、S K 83と重複し、S K I 35より古く、S K 83より新しい。トレンチによって南東側が削平されているため、平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸0.89 m、短軸0.59 mである。確認面からの深さは0.23 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### S K 83 土坑（第33図）

G O 106 グリッドのⅧ層（地山）面で確認した。S K I 35、S K 82・84と重複し、S K I 35、S K 82より古く、S K 84より新しい。トレンチによって南側が削平されているため、平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸0.54 m、短軸0.38 mである。確認面からの深さは0.33 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### S K 84 土坑（第33図）

G N 106、G O 106 グリッドのⅧ層（地山）面で確認した。S K 83、S D 32、S K P 33・198と重複し、S K 83、S D 32、S K P 33より古く、S K P 198より新しい。平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸1.85 m、短軸1.08 mである。確認面からの深さは0.23 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### S K 89 土坑（第36図）

G K 95、G L 95 グリッドのⅧ層（地山）面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.30 m、短軸1.05 mの不整形である。確認面からの深さは0.28 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

#### S K 140 土坑（第36図、図版8）

G J 87、G K 87・88 グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。重複はない。覆土の2・4・9・11・13・15・16・17層に砂粒が混入し、6・8・9・12層に火山灰が混入する。5層では水流痕が

見られ、覆土堆積に流水の影響を認めることができる。平面形は、長軸 4.33 m、短軸 2.04 m の不整形である。確認面からの深さは 0.40 m である。壁は急に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、南側が一段低くなる。出土遺物は、土師器（底部に網代痕のある坏 4 点、坏 55 点、墨書土器 6 点、坏底部破片 46 点、坏破片 758 点、内面を黒色処理した台付坏 2 点、同台付坏の破片 3 点、両面を黒色処理した坏の破片 4 点、甕破片 27 点、鉢口縁部破片 2 点）、須恵器（甕破片 13 点）である。墨書土器の 1 つには、第 40 図 8 のように口縁部を人為的に割られているものがあつた。本遺構は、調査区中央部の谷地の南側に位置しており、多量の土師器坏の完形品や墨書土器が出土したことなどを合わせて考えると祭祀が行われていた可能性が高い。第 5 表の分類項目に当てはめると掲載した土師器は下記のようなになる。

第 37 図の 1～3・9 は、非ロクロ土師器の坏 b である。

第 37 図の 4・5 は、ロクロ土師器の坏 a である。

第 37 図の 6～8 はロクロ土師器の坏 b で、6 は「上」と書かれた墨書土器である。

第 38 図の 1・3～12 はロクロ土師器の坏 e で、1・9 は「上」と書かれた墨書土器である。

第 38 図の 2 は、ロクロ土師器の坏 d である。

第 39 図の 1～7 はロクロ土師器の坏 e で、7 は「財上」と書かれた墨書土器である。

第 39 図の 8～12 はロクロ土師器の坏 f で、12 は「六十」と書かれた墨書土器である。

第 40 図の 1 は、ロクロ土師器の坏 h である。

第 40 図の 2～4 は、ロクロ土師器の坏 i である。

第 40 図の 5 は、ロクロ土師器の皿 a である。

第 40 図の 6・7 は、内面を黒色処理したロクロ土師器の台付坏で、6 が台付坏 b、7 が台付坏 c である。

#### S K 143 土坑（第 36 図）

G H 77 グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。重複はない。東側が現代の溝によって削平されているため、平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸 0.88 m、短軸 0.78 m である。確認面からの深さは 0.22 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

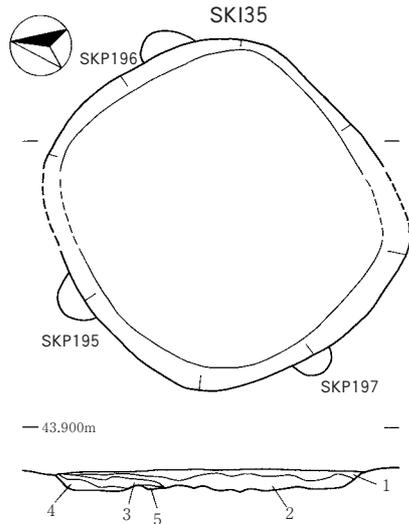
#### S K 180 土坑（第 36 図、図版 8）

G J 86 グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸 1.01 m、短軸 0.81 m の楕円形である。確認面からの深さは 0.12 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は、土器師（坏 1 点、坏破片 2 点、甕の胴部から口縁部 1 点、甕破片 5 点）、須恵器（甕破片 4 点）である。

#### ⑤溝跡

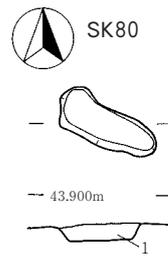
#### S D 01 溝跡（第 41 図）

G N 107、G O 107・108 グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。北側が調査区外にかかる。南側は現代の溝に壊されているが、南北方向に更に延びるものと推定される。S X 02、S D 10 と重複し、本遺構が最も新しい。確認長 3.92 m、幅 0.30～0.45 m、深さ 0.04～0.10 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は、砥石 1 点である。



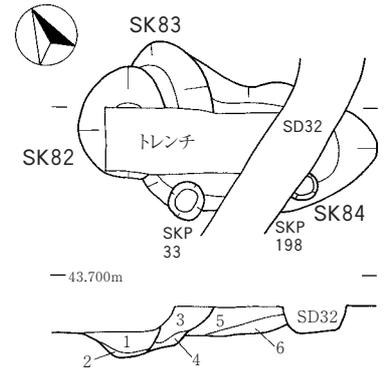
SKI35

- 1 黒色土 (10YR2/1) しまり強 粘性弱  
地山粒多量混入
- 2 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強 粘性強
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性強  
地山との混合土
- 4 黒色土 (10YR2/1) しまり強 粘性強  
地山粒微量混入
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性強  
地山との混合土



SK80

- 1 灰黄褐色土 (10YR5/2)  
しまり強 粘性弱  
地山粒多量混入



SK82

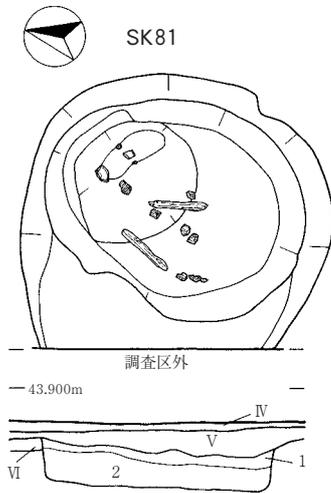
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄中量 地山塊微量混入
- 2 オリーブ黒色土 (7.5Y3/2) しまり弱 粘性強

SK83

- 3 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒多量 地山粒少量混入
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量混入

SK84

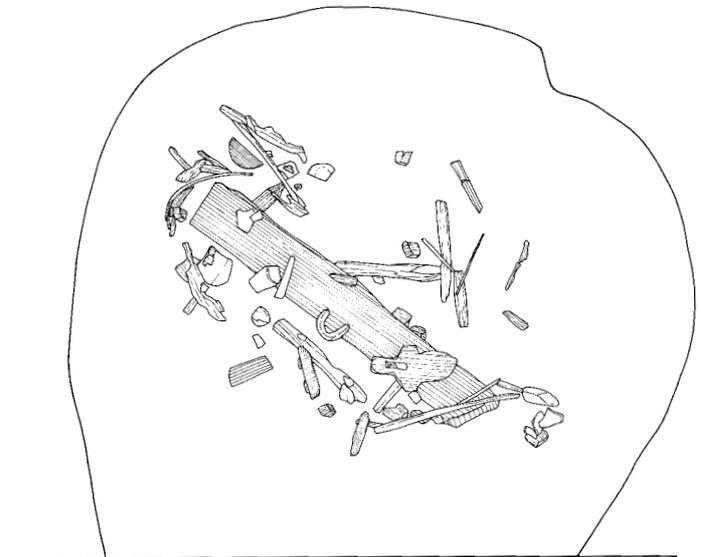
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山粒少量混入
- 6 黒褐色土 (10YR3/2) しまり中 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山塊少量混入



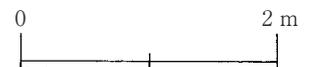
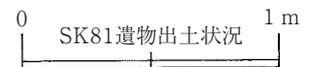
SK81

- 1 黄褐色土 (2.5Y5/3)  
しまり強 粘性弱  
酸化鉄少量混入  
黒褐色土との混合土
- 2 黒色土 (10YR2/1)  
しまり強 粘性強  
炭化物微量 酸化鉄少量混入

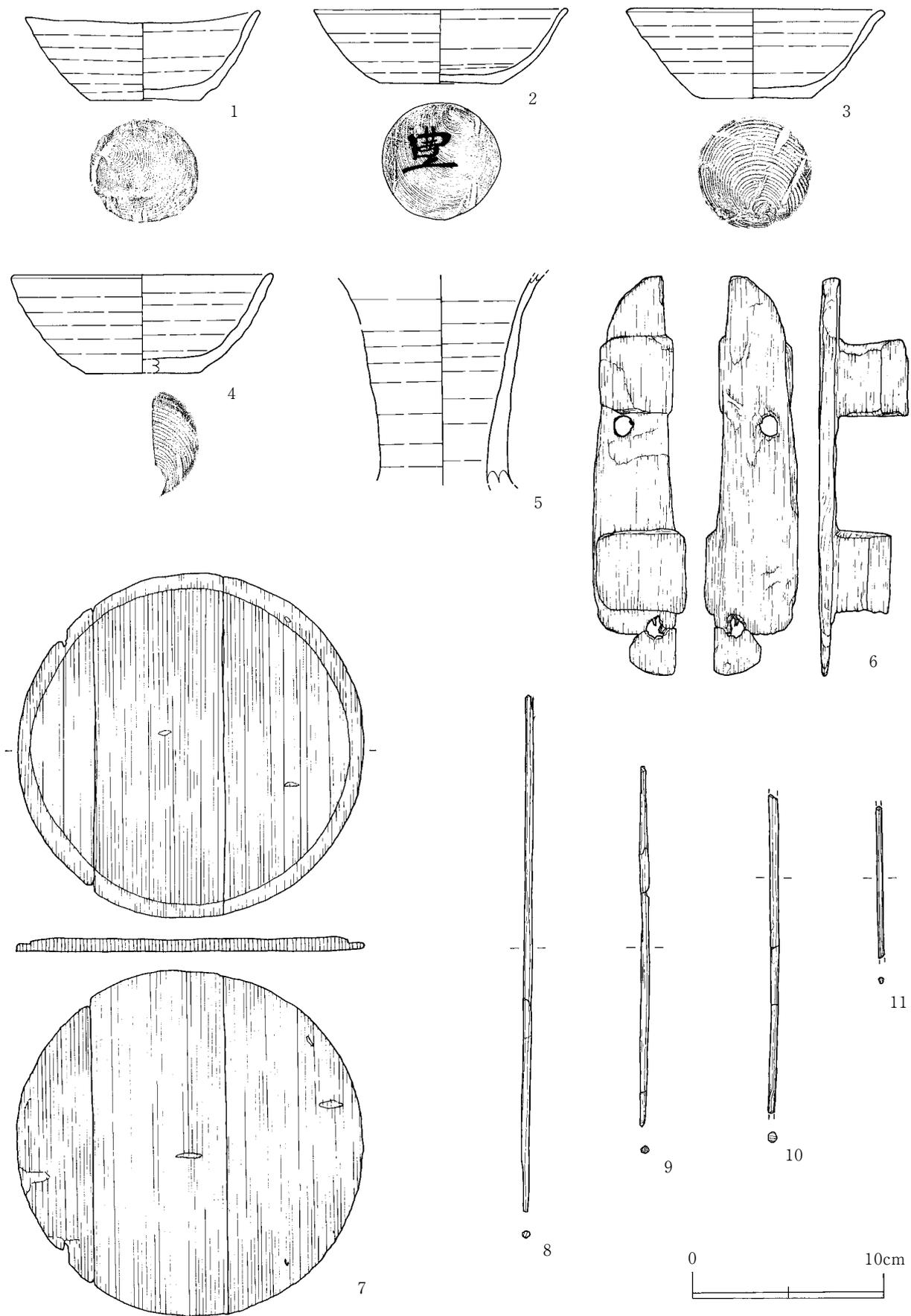
SK81遺物出土状況



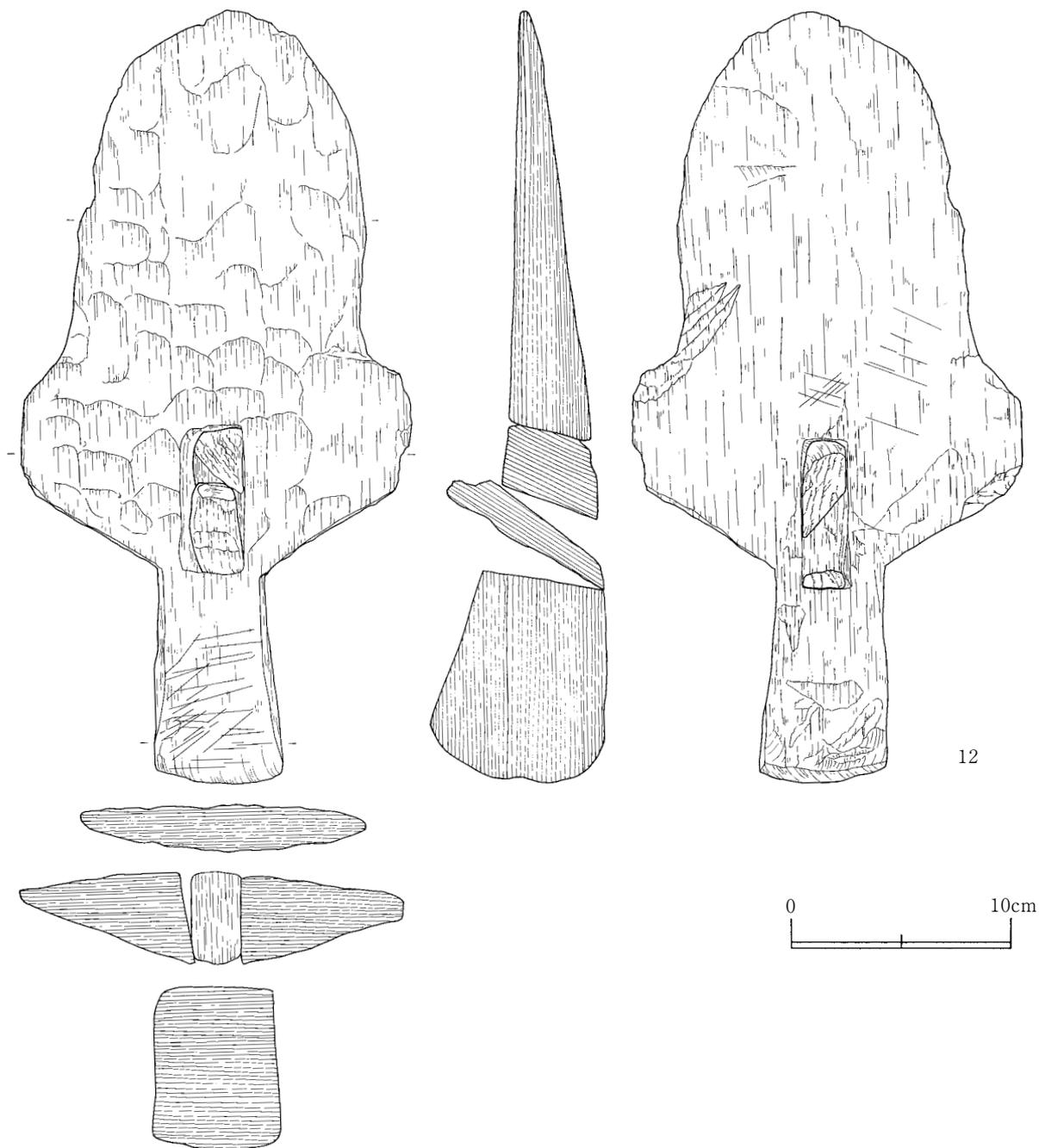
調査区外



第33図 2区SKI35、SK80・81・82・83・84



第34図 2区SK81出土遺物(1)

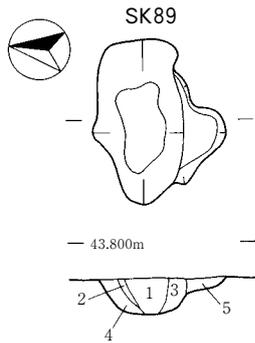


番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	土師器	坏	2区SK81 RP6	12.2	5.9	4.8	内外:口クロ調整、底:回転糸切り
2	須恵器	坏	2区SK81, SD12	13.1	6.2	4.5	内外:口クロ調整、底:回転糸切り、墨書
3	須恵器	坏	2区SK81 RP3・5・8	13.5	6.0	4.8	内外:口クロ調整、底:回転糸切り
4	須恵器	坏	2区SK81 RP1・2	13.6	6.0	5.3	内外:口クロ調整、底:回転糸切り
5	須恵器	長頸瓶	2区SK81 RP4	—	—	—	

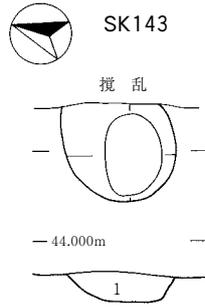
番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特 徴
6	木製品	下駄	2区SK81 RW3	21.1	(4.9)	4.7	
7	木製品	曲物	2区SK81 RW7・8・18	18.3	18.3	0.7	
8	木製品	箸	2区SK81 RW5	27.3	0.5	0.4	
9	木製品	箸	2区SK81 RW6	19.2	0.5	0.4	
10	木製品	箸	2区SK81	16.9	5.0	5.0	
11	木製品	箸	2区SK81	8.2	3.0	0.4	
12	木製品	鉞	2区SK81 RW1	35.5	17.8	7.9	

第35図 2区SK81出土遺物(2)

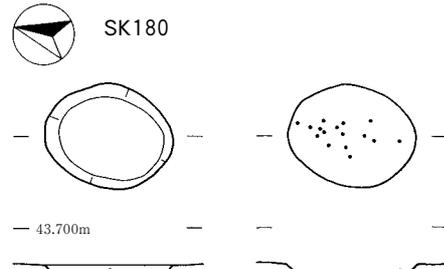
第4章 調査の記録



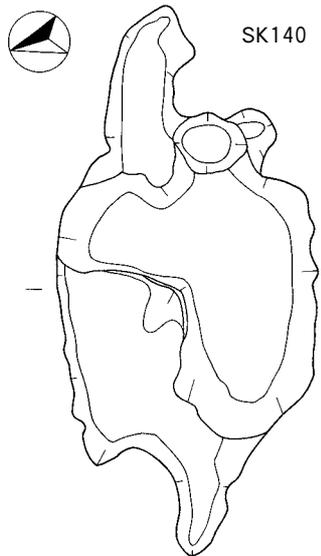
- SK89
- 1 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量混入
  - 2 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量混入
  - 3 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山粒少量混入
  - 4 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性中  
炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山粒多量混入
  - 5 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強 粘性強  
酸化鉄少量 黒色土塊少量混入



- SK143
- 1 黒褐色土 (10YR 2/2)  
しまり弱 粘性中  
地山粒・塊少量混入

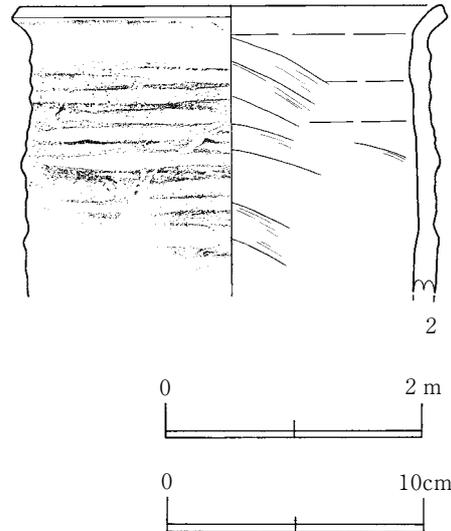


- SK180
- 1 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量混入



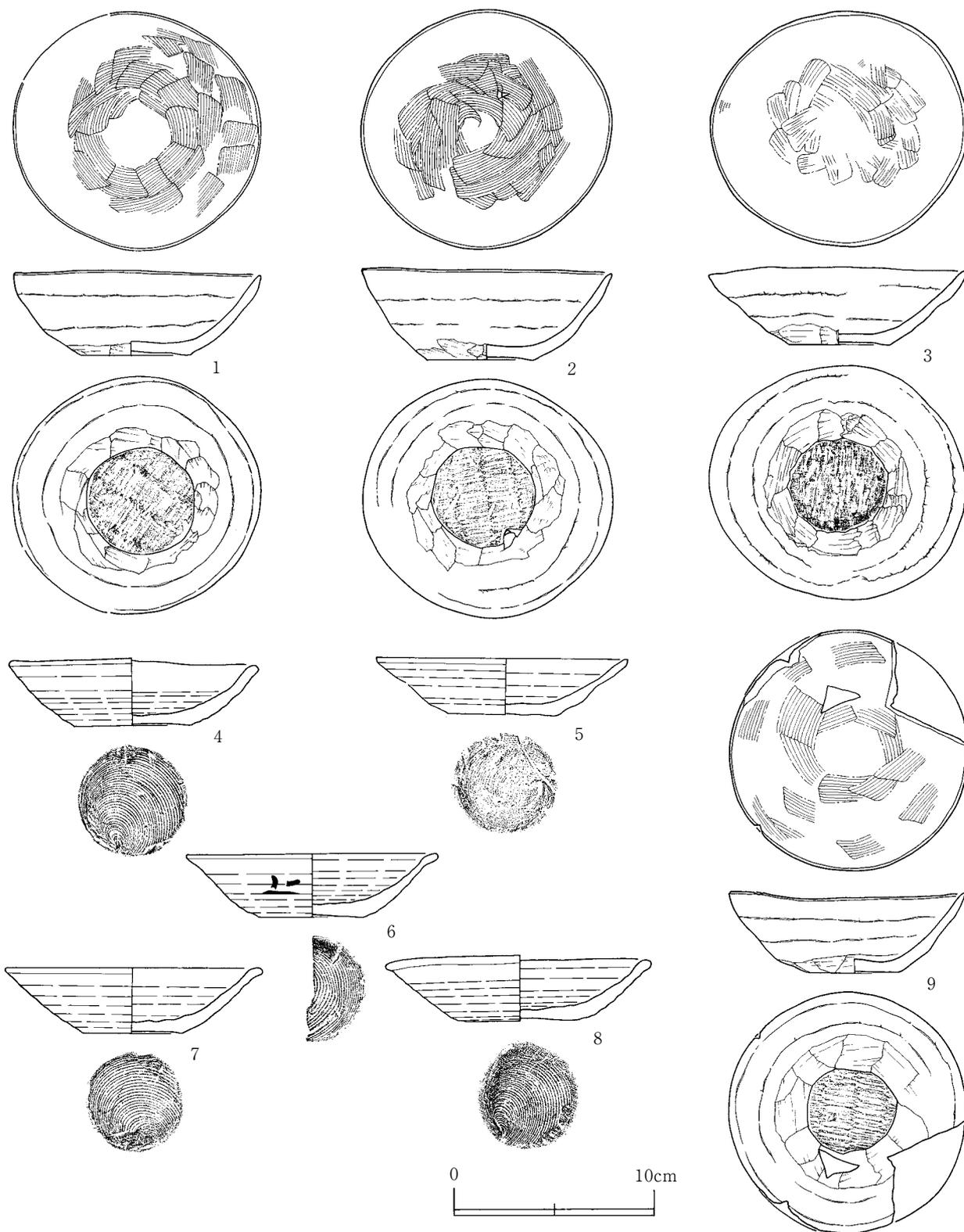
- SK140
- 1 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強 粘性弱  
黒褐色土塊微量混入
  - 2 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性中  
にぶい黄橙色土粒少量混入
  - 3 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱 粘性強  
地山塊少量混入
  - 4 褐色土 (10YR 4/4) しまり弱 粘性弱 砂層  
黒褐色土粒少量混入
  - 5 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性強
  - 6 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性弱  
火山灰粒微量 炭化物粒微量混入
  - 7 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性弱
  - 8 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり弱 粘性弱  
火山灰粒多量 火山灰塊微量 炭化物粒微量混入

- 9 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性中  
火山灰塊微量 黒褐色土粒少量混入
- 10 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり弱 粘性弱
- 11 褐色土 (10YR 4/4) しまり弱 粘性弱 砂層  
黒褐色土粒少量混入
- 12 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性中  
火山灰粒微量 酸化鉄微量混入
- 13 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性弱
- 14 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性中  
地山塊多量混入
- 15 黒褐色土 (10YR 3/2) しまり弱 粘性弱
- 16 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性弱  
炭化物粒微量混入
- 17 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり弱 粘性弱



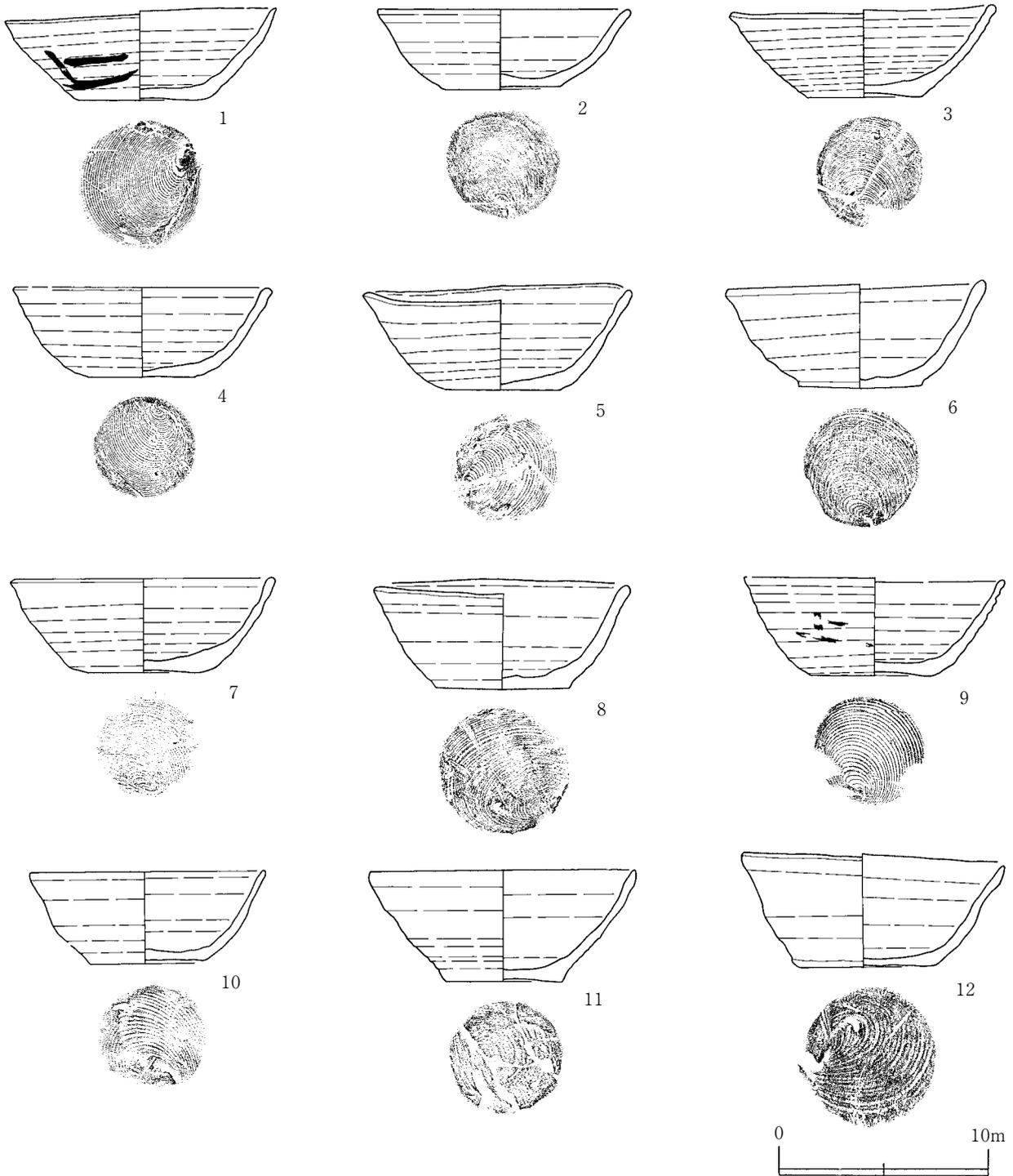
番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区SK180 RP1・10・14	(12.5)	6.4	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	甕	2区SK180 RP3・4	(16.4)	—	—	

第36図 2区SK89・140・143・180と出土遺物



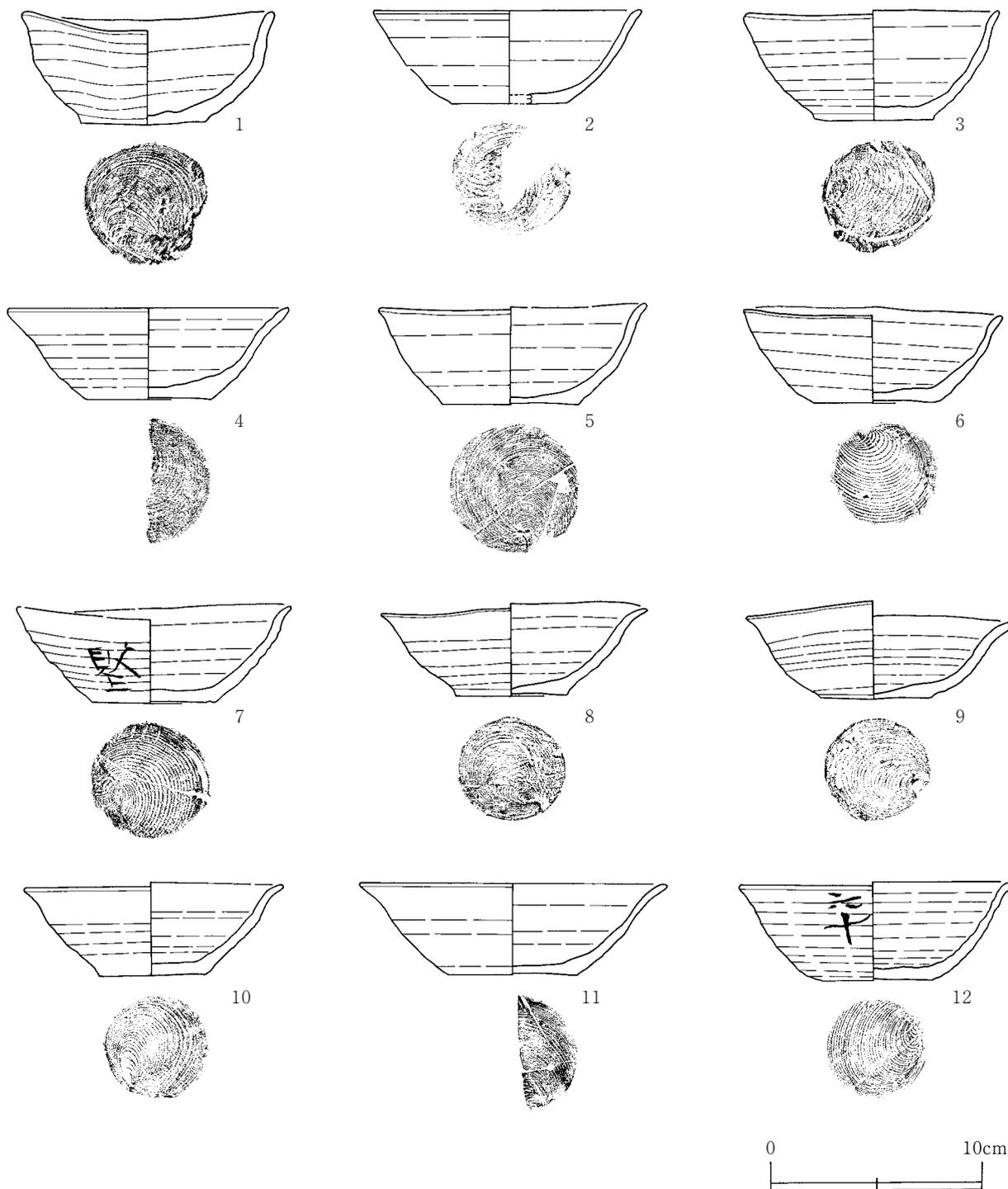
番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区SK140 RP22-34	12.1	5.5	4.3	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
2	土師器	坏	2区SK140 RP22	12.3	5.2	4.8	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
3	土師器	坏	2区SK140 RP58-75	12.6	5.0	3.9	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
4	土師器	坏	2区SK140 RP102	12.4	5.8	3.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
5	土師器	坏	2区SK140 RP7	(12.4)	5.3	3.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
6	土師器	坏	2区SK140 RP92	(12.5)	(5.4)	3.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
7	土師器	坏	2区SK140 RP88	12.3	4.9	3.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
8	土師器	坏	2区SK140 RP104	13.3	5.6	3.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
9	土師器	坏	2区SK140 RP81、ハ-2トレンチ	11.8	4.4	4.2	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕

第37図 2区SK140出土遺物(1)



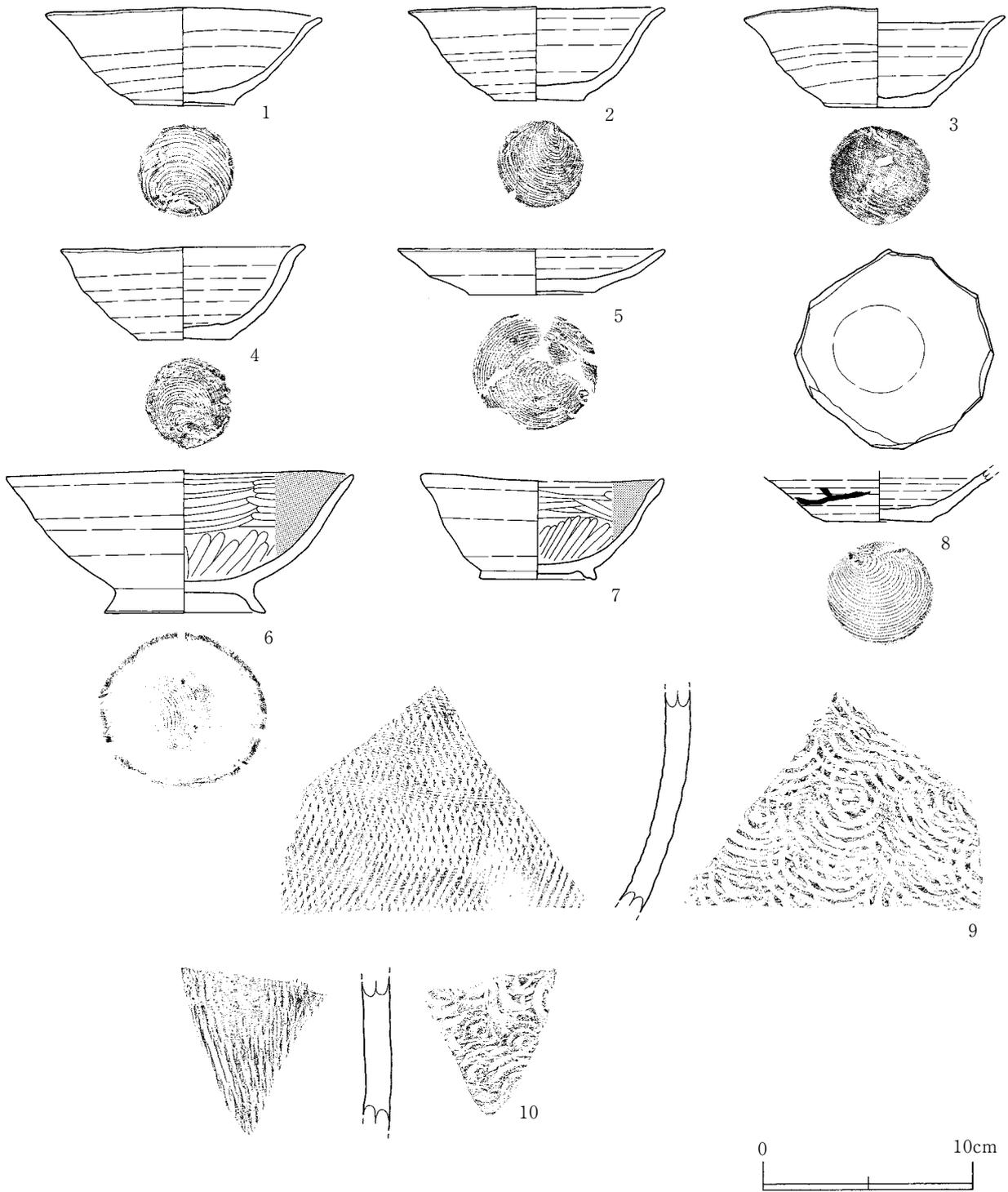
番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区SK140 RP64・65・68・69・108	12.9	5.8	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転系切り、墨書
2	土師器	坏	2区SK140 RP42、GK87 II層	(12.0)	5.5	3.9	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
3	土師器	坏	2区SK140 焼土中 RP1・15・16・77・95	12.4	5.4	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
4	土師器	坏	2区SK140 RP76	12.4	5.1	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
5	土師器	坏	2区SK140 RP48	12.2	6.4	5.3	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
6	土師器	坏	2区SK140 RP106	12.0	5.9	5.1	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
7	土師器	坏	2区SK140 RP103	12.5	5.2	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
8	土師器	坏	2区SK140 RP39・61・62	12.5	5.3	5.2	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
9	土師器	坏	2区SK140 RP80・91	12.4	5.5	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転系切り、墨書
10	土師器	坏	2区SK140 RP49・52	(10.3)	5.4	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
11	土師器	坏	2区SK140	12.6	5.7	5.4	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
12	土師器	坏	2区SK140 RP73・79・99	12.6	6.5	5.6	内外:ロクロ調整、底:回転系切り

第38図 2区SK140出土遺物(2)



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区SK140 RP105	11.5	5.8	5.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	坏	2区SK140、GK88 Ⅲ・Ⅳ層	(12.6)	5.5	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	坏	2区SK140 RP9・40	13.1	5.6	5.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
4	土師器	坏	2区SK140 RP8	(13.1)	(5.9)	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
5	土師器	坏	2区SK140 RP35	12.7	6.5	4.9	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
6	土師器	坏	2区SK140 RP63・70	12.1	5.3	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
7	土師器	坏	2区SK140 RP19・101	12.9	4.7	5.9	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
8	土師器	坏	2区SK140 RP60	12.6	5.3	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
9	土師器	坏	2区SK140 RP31	12.7	5.3	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
10	土師器	坏	2区SK140 RP25・41・86	12.2	5.1	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
11	土師器	坏	2区SK140 RP29	(14.3)	(5.5)	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
12	土師器	坏	2区SK140 RP89	12.9	4.9	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書

第39図 2区SK140出土遺物(3)



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区SK140 RP32	13.2	4.8	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
2	土師器	坏	2区SK140 RP57	12.2	4.3	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
3	土師器	坏	2区SK140 RP27・56	12.3	5.0	4.9	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
4	土師器	坏	2区SK140 RP33	11.7	4.5	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
5	土師器	皿	2区SK140 RP77	12.7	6.1	2.4	内外:ロクロ調整、底:回転系切り
6	土師器	台付坏	2区SK140 RP23・26・83・85	16.5	7.7	6.9	内外:ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理、底:回転系切り
7	土師器	台付坏	2区SK140 RP6	11.6	5.7	5.2	内外:ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理、底:回転系切り
8	土師器	坏	2区SK140 RP100	—	5.2	—	内外:ロクロ調整、底:回転系切り、墨書
9	須恵器	甕	2区SK140 RP97	—	—	—	内外:タタキ
10	須恵器	甕	2区SK140 RP90	—	—	—	内外:タタキ

第40図 2区SK140出土遺物(4)

## S D 07 溝跡 (第41図、図版8)

G L 98、G M 98、G N 98 グリッドのⅣ層上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかる。東側が現代の溝に壊されているが、東西方向に更に延びるものと推定される。S D 201 と重複するが、新旧関係は不明である。確認長6.19 m、幅1.13～1.66 m、深さ0.36～0.51 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸底である。出土遺物は、縄文土器の破片1点、土師器の破片14点、漆器の椀が1点である。

## S D 10 溝跡 (第41図)

G N 107、G O 107 グリッドでS D 01 調査中に確認した。東側が調査区外にかかる。東側は現代の溝に壊されているが、東に更に延びるものと推定される。S D 01、S X 02 と重複し、S D 01 より古く、S X 02 より新しい。確認長1.02 m、幅0.38～0.49 m、深さ0.13～0.19 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

## S D 12 溝跡 (第41図)

G M 101、G N 101 グリッドのⅥ層上面で確認した。重複はない。東側と西側が調査区外にかかる。東西方向に更に延びるものと推定される。確認長6.02 m、幅0.39～0.66 m、深さ0.07～0.66 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は、土師器(坏2点、坏破片41点、内面を黒色処理した坏1点、同坏破片7点、同台付坏1点、甕破片24点)、須恵器(坏3点、墨書土器1点、坏破片3点、甕3点)である。本遺構から出土した須恵器坏破片と南側に隣接するS K 81 から出土した須恵器坏破片は、同一個体で「豊」と書かれた墨書土器である。第5表の分類項目に当てはめると掲載した土師器坏と須恵器坏は下記のようになる。

第42図の2はロクロ土師器の坏d、第42図の3はロクロ土師器の坏cである。

第42図の5は、内面を黒色処理したロクロ土師器の坏aである。

第42図の6は須恵器の坏e、第42図の8・9は須恵器の坏fである。

## S D 31 溝跡 (第41図)

G N 106、G O 106・107 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S X 04 と重複し、本遺構が古い。トレンチによって一部が削平されている。確認長3.23 m、幅0.48～0.59 m、深さ0.01～0.10 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は土師器(甕の底部1点)である。

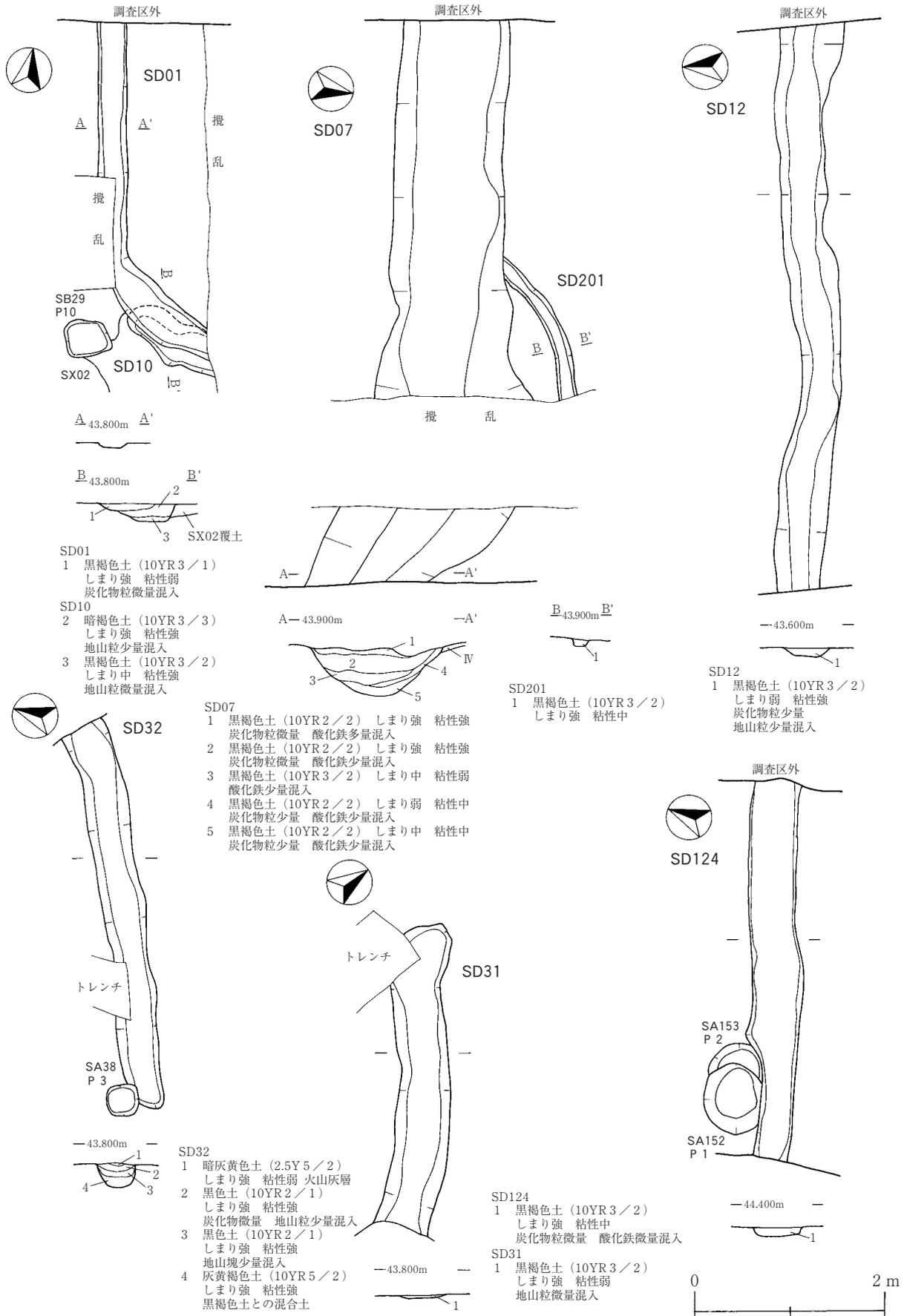
## S D 32 溝跡 (第41図)

G N 106、G O 105・106 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S K 84、S X 04、S A 38 P 3 と重複し、S X 04、S A 38 P 3 より古く、S K 84 より新しい。遺構中央部に焼土の投げ込みが見られた。トレンチによって一部が削平されている。確認長4.16 m、幅0.35～0.49 m、深さ0.10～0.33 mである。壁は急に立ち上がり、底面は丸底である。出土遺物は、土師器(坏破片10点、甕破片18点)である。

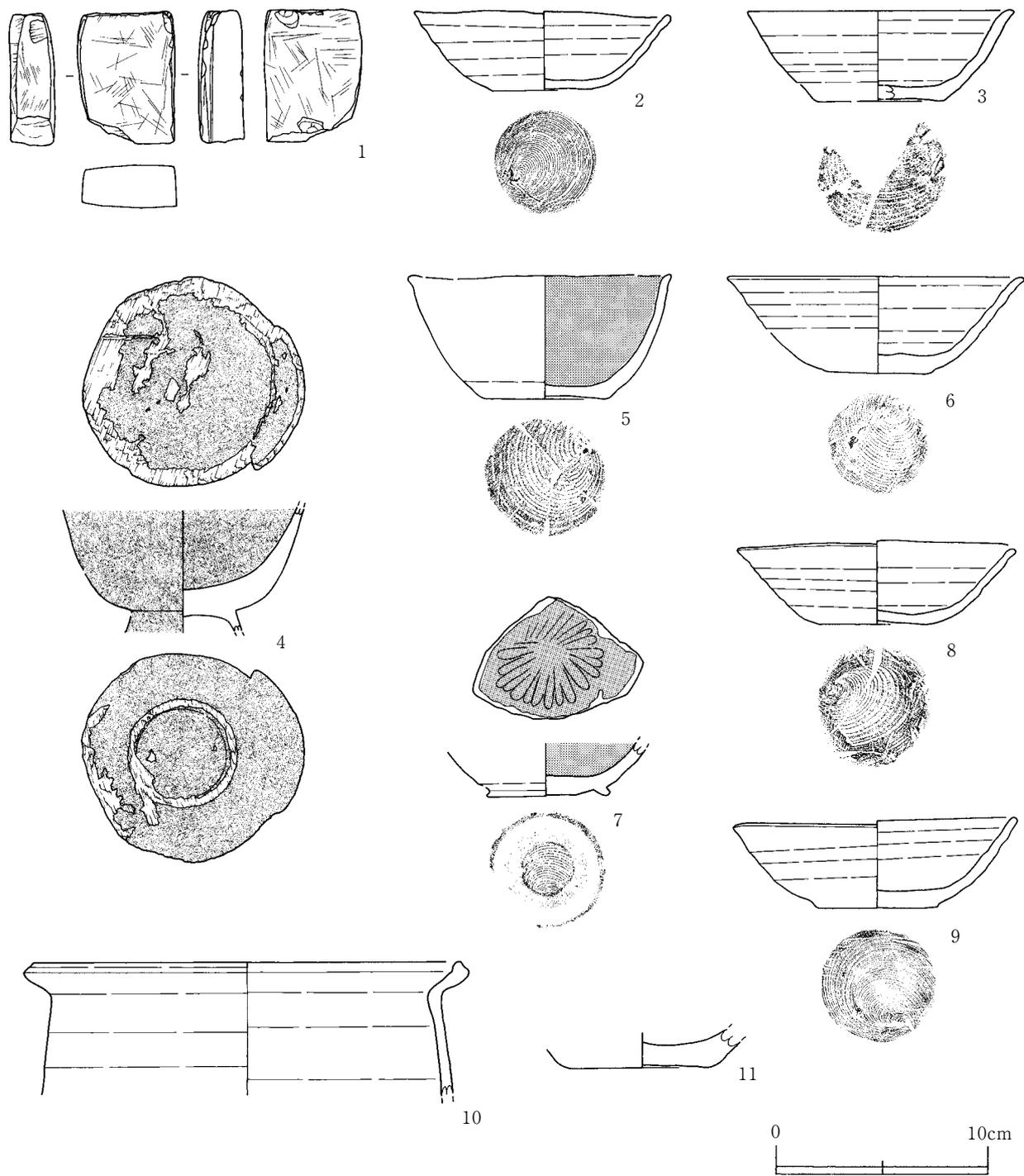
## S D 124 溝跡 (第41図、図版8)

G I 81、G J 81 グリッドのⅧ層で確認した。東側と西側が調査区外にかかる。東西方向に更に延びるものと推定される。S A 152 P 1、S A 153 P 2 と重複し、本遺構が最も新しい。確認長4.05 m、幅0.33～0.54 m、深さ0.03～0.37 mである。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。東から西へ行くほど浅くなっていく。出土遺物は、土師器(坏1点、坏破片6点、内面を黒色処理し

第4章 調査の記録

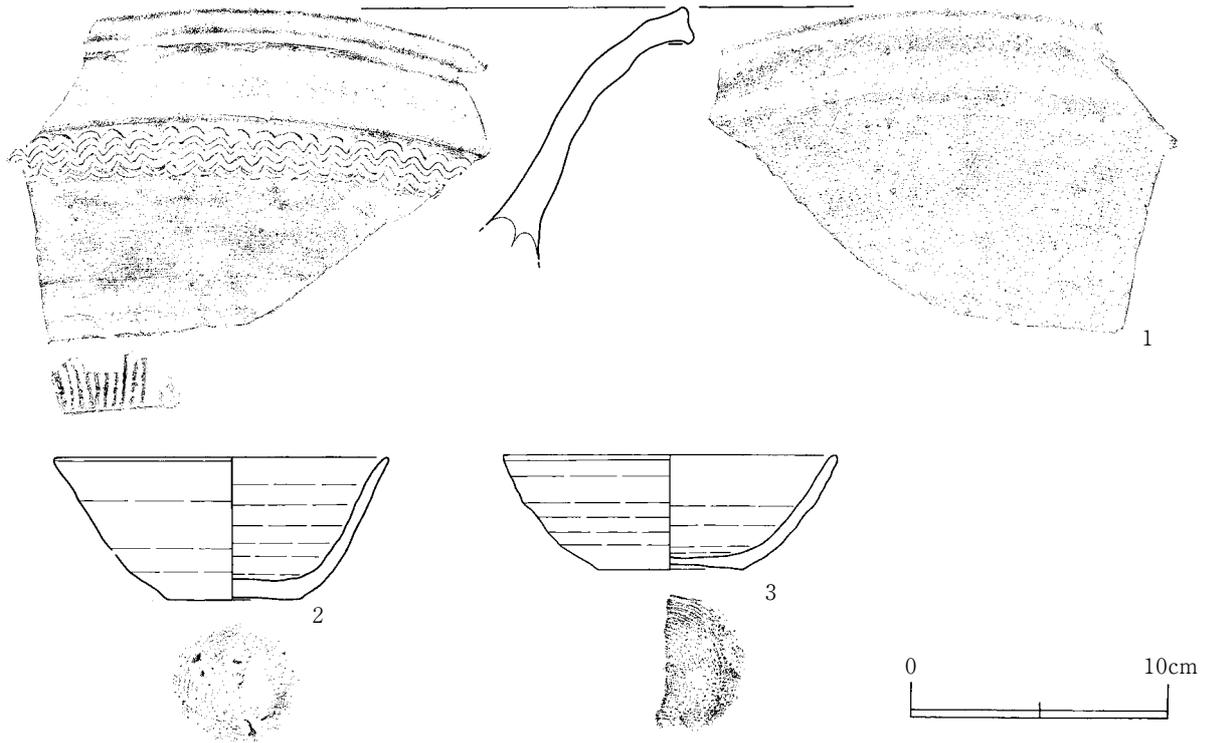


第41図 2区SD01・07・10・12・31・32・124・201



番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特 徴
1	石製品	砥石	2区SD01	6.3	4.6	2.2	
番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
2	土師器	坏	2区SD12	11.8	4.8	3.9	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	坏	2区SD12 RP1・2・3・5	(12.6)	6.0	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
4	漆器	椀	2区SD07 2層	(11.4)	(5.3)	(6.0)	
5	土師器	坏	2区SD12 RP2・3・4, GN101 IV層	12.4	5.8	6.0	内外:ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
6	須恵器	坏	2区SD12	(13.9)	5.1	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
7	土師器	台付坏	2区SD12	—	5.8	—	内外:ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
8	須恵器	坏	2区SD12 RP1	13.0	5.1	4.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
9	須恵器	坏	2区SD12 1層	13.1	5.7	4.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
10	土師器	甕	2区SD12 RP5	(20.1)	—	—	内外:ロクロ調整
11	土師器	甕	2区SD31 RP1	—	6.6	—	

第42図 2区SD01・07・12・31出土遺物



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	須恵器	大甕	2区SD124 RP2	—	—	—	内外:ロクロ調整
2	土師器	坏	2区SD124 RP1	(13.2)	5.3	5.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	坏	2区SKP03	(13.0)	(5.6)	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り

第43図 2区SD124・SKP03出土遺物

た坏の破片1点)、須恵器(甕の口縁部の破片1点)である。第5表の分類項目に当てはめると、第43図の2はロクロ土師器の坏eである。

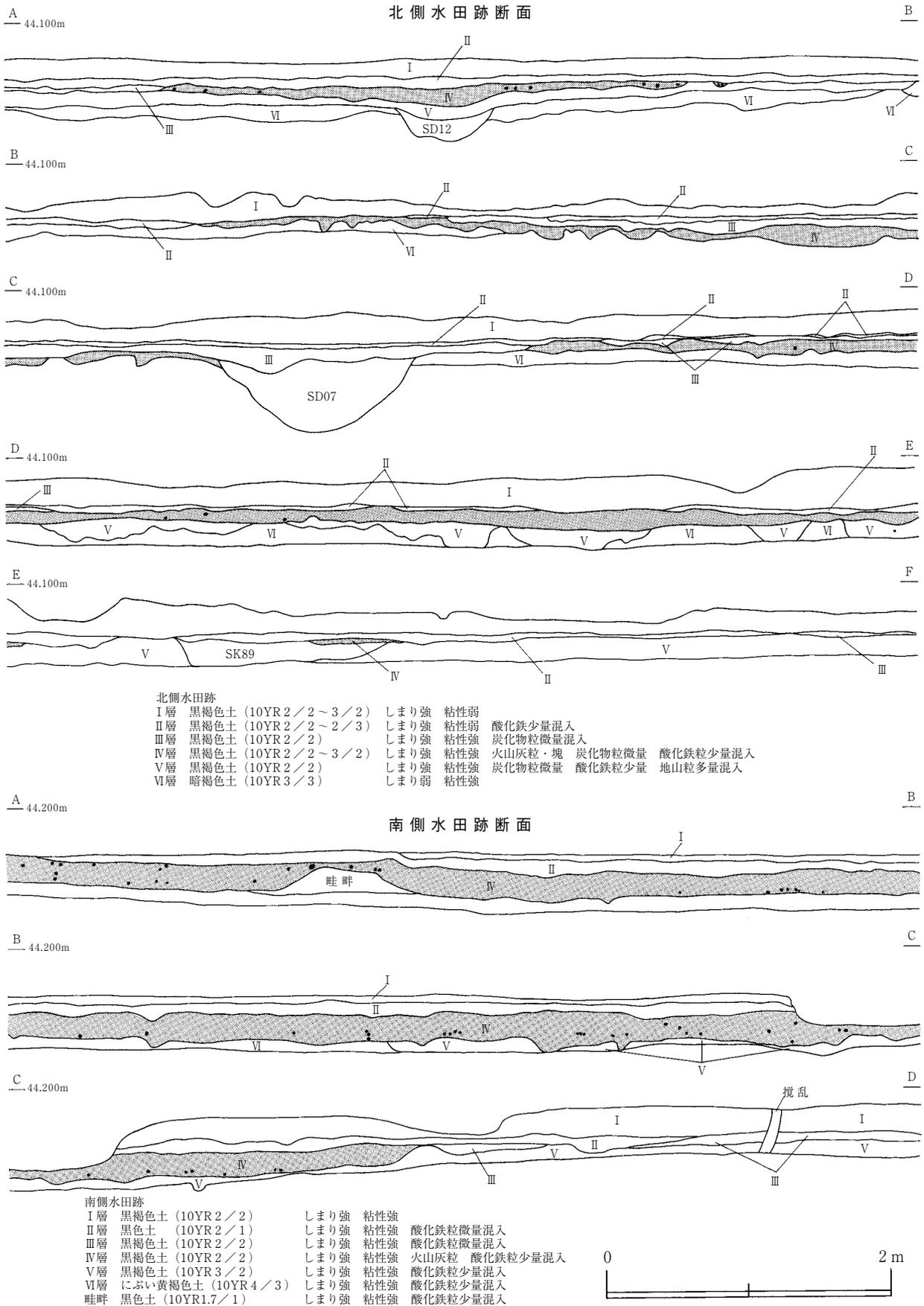
#### SD 201 溝跡 (第41図)

GM 98 グリッドのV層上面で確認した。東側は現代の溝跡によって壊されており、東に更に延びるものと推定される。SD 07と重複するが、新旧関係は不明である。確認長1.62m、幅0.14～0.20m、深さ0.04～0.09mである。壁は緩やかに立ち上がり、平面は平坦である。出土遺物はない。

#### ⑥水田跡

##### 北側水田跡 (第7・44図、図版7)

95～102ラインの調査区北側のIV層上面で確認した。IV層が水田耕作土になり、火山灰が含有する。この火山灰は、分析の結果、十和田a火山灰であることが分かった。この火山灰は層状には堆積しておらず、IV層上面で粒状・塊状に散在して確認された。このことから十和田a火山灰降下後に耕作されていた水田跡と考えられる。断面等を観察したが畦畔は検出できなかった。また、畦畔が確認できなかったため、区画等も確認できなかった。この水田跡の下からSK 81土坑とSD 12溝跡が確認されており、それらの遺構の性格や出土遺物から稲作が行われていた水田跡である可能性は高い。この水田跡の中央部にSD 07溝跡がIV層を切って確認されたことから、SD 07溝跡は灌漑用水路的な役割を果たしたことも考えられる。しかし、SD 07溝跡からの出土遺物が少ないことからはっきりとは断定しがたい。



第44図 2区水田跡断面図

#### 南側水田跡（第7・44図、図版7・8）

74ライン以南の調査区南側のⅣ層上面で確認した。Ⅳ層が水田耕作土になり、火山灰が含有する。北側水田跡同様の十和田a火山灰降下後に耕作されていた水田跡と考えられる。調査区東側の基本土層では確認できなかったが、調査区西側の断面では、南端に畦畔と考えられる台形の高まりを確認できた。この畦畔は東側に延びると考えられるが、調査区内のその方向に地下水を汲み上げるためのポンプがあり攪乱を受けていたために、平面では明瞭に確認できなかった。しかし、この畦畔を包むように十和田a火山灰の粒・塊を含有するⅣ層が確認されたことや、プラント・オパール分析結果（第5章の第4節）からも稲作が行われていた可能性が高いことから、平安時代の水田跡と考えることができる。出土遺物は、須恵器壺の底部（第47図11）である。遺構外出土遺物になるがGG73グリッドから出土した土師器（第47図1・2・3の内面を黒色処理した土師器坏3点、第47図5の台付坏の底部1点）もこの水田跡に関係があるものと思われる。

#### ⑦性格不明遺構

##### S X 02 性格不明遺構（第45図）

GN107、GO107グリッドのⅧ層（地山）で確認した。SD01・10、SB29P10と重複し、本遺構が最も古い。北側がSD10とSB29P10に切られ、東側が現代の溝によって壊されている。平面形は不整形であると推定され、残存部で長軸1.87m、短軸0.97mである。確認面からの深さは0.17mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦であるが中央に向かって低くなる。出土遺物は、土師器（坏破片50点、甕破片12点）である。

##### S X 04 性格不明遺構（第45図）

GN106、GO106グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。東側が調査区以外にかかる。SD31・32と重複し、本遺構が最も新しい。現代の溝によって一部壊されている。平面形は、長軸2.82m、短軸1.62mの不整形である。確認面からの深さは1.29mである。壁は急に立ち上がり、底面は平坦であるが東側が一段低くなっている。出土遺物は、縄文土器（破片1点）、土師器（坏破片79点、甕破片38点）、須恵器（坏破片3点、台付坏の底部1点）である。須恵器の台付坏は、底部に「豊」と書かれた墨書土器である。

##### S X 86 性格不明遺構（第45図）

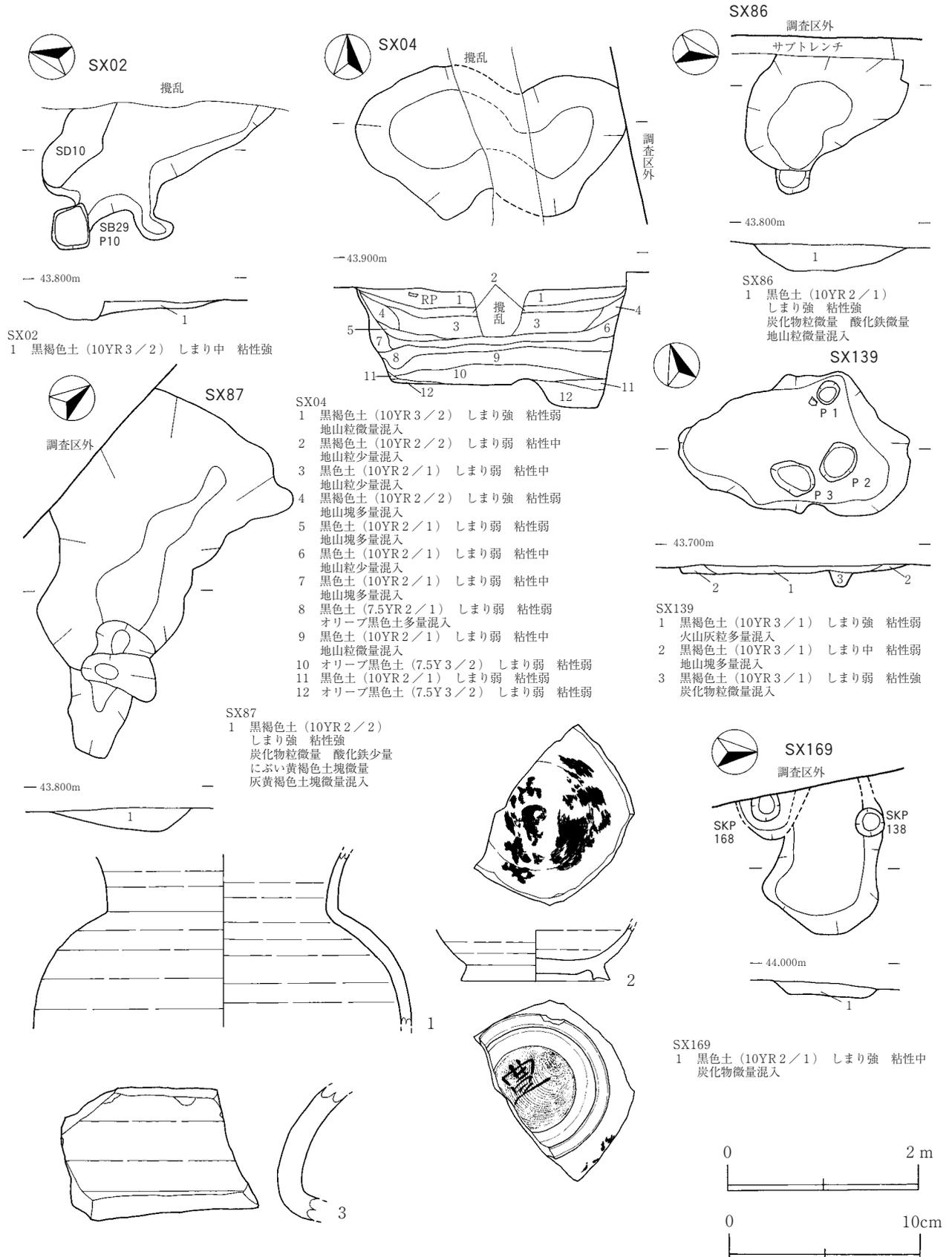
GL94、GM94・95グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。西側はサブトレンチによって壊されており、調査区外にかかる可能性がある。現状では重複はない。平面形は略楕円形であると推定され、残存部で長軸1.64m、短軸1.48mである。確認面からの深さは0.47mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

##### S X 87 性格不明遺構（第45図）

GL95、GM95・96グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。西側が調査区外にかかる。現状では重複はない。平面形は不整形と推定され、現状で長軸3.89m、短軸2.13mである。確認面からの深さは0.42mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

##### S X 139 性格不明遺構（第45図）

GJ87、GK87グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。重複はない。覆土の1・2層に火山灰



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	須恵器	壺	2区SX04 1層	—	—	—	
2	須恵器	台付坏	2区SX04	—	7.8	—	内外:ロクロ調整、内:墨痕、底:回転糸切り、墨書
3	須恵器	甕	2区SX139 RP1	—	—	—	

第45図 2区 SX02・04・86・87・139・169と出土遺物

第7表 2区柱穴様ピット計測一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 03	G O 106・107	方形	46	36	22	43.34	
S K P 09	G O 107	方形	41	35	20	43.35	S K P 24より新しい。
S K P 14	G K 90	円形	16	15	10	43.04	
S K P 15	G J 83	円形	18	17	15	43.64	
S K P 17	G I 80	方形	31	(14)	26	43.81	S A 16 P 2より古い。
S K P 19	G H 76	円形	31	27	10	43.97	
S K P 20	G H 76	楕円形	24	20	25	43.85	
S K P 22	G H 74	方形	24	20	15	43.95	
S K P 24	G O 107	楕円形	32	29	16	43.39	S K P 09より古い。
S K P 25	G N 103	方形	36	30	23	43.42	
S K P 27	G I 79	楕円形	36	21	20	43.88	S A 16 P 3より古い。
S K P 28	G O 107	方形	24	23	4	43.47	
S K P 33	G O 106	方形	29	28	27	43.31	S K 84より新しい。
S K P 34	G O 105	方形	34	31	23	43.36	
S K P 36	G O 106	楕円形	36	28	19	43.34	
S K P 47	G N 104	方形	21	20	4	43.50	
S K P 48	G O 104・105	楕円形	47	34	51	43.06	
S K P 50	G O 104・105	楕円形	35	29	9	43.46	
S K P 52	G N 103	円形	22	20	18	43.35	
S K P 54	G P 107	方形	42	32	20	43.29	
S K P 59	G O 103	楕円形	35	(28)	33	43.25	S A 60 P 2より新しい。
S K P 65	G N 102	楕円形	36	27	28	43.26	S K P 66より新しい。
S K P 66	G N 102・103	(円形)	35	(18)	16	43.39	S K P 65より古い。
S K P 72	G N 103	円形	24	20	24	43.28	
S K P 77	G O 102	方形	18	18	9	43.52	
S K P 78	G O 102	円形	15	13	12	43.52	
S K P 88	G L 95、G M 95	楕円形	40	31	23	43.34	
S K P 90	G M 100	円形	42	38	12	43.48	
S K P 101	G I 76	楕円形	39	32	20	43.71	S K P 206より新しい。
S K P 102	G H 75・76、G I 75・76	方形	53	51	29	43.60	
S K P 103	G H 75	楕円形	34	25	11	43.80	
S K P 104	G H 75	円形	24	24	16	43.75	
S K P 105	G H 75	方形	48	38	24	43.66	
S K P 106	G H 75	楕円形	20	16	4	43.85	
S K P 107	G H 75	円形	31	28	20	43.70	S K P 108・109より新しい。
S K P 108	G H 75	(円形)	38	26	18	43.74	S K P 107より古く、S K P 109より新しい。
S K P 109	G H 75	方形	46	(45)	26	43.65	S K P 107・108より古い。
S K P 110	G H 75	方形	37	34	23	43.69	
S K P 111	G H 74・75	円形	26	22	28	43.65	
S K P 112	G H 75	方形	24	17	7	43.80	
S K P 113	G H 74	方形	42	39	21	43.61	
S K P 114	G H 74	円形	28	25	16	43.76	
S K P 116	G H 75、G I 75	円形	37	33	13	43.81	
S K P 122	G H 74	円形	22	20	18	43.80	
S K P 123	G H 75・76	円形	25	24	13	43.77	
S K P 125	G H 75	楕円形	35	16	8	43.83	
S K P 126	G I 75・76	楕円形	33	26	24	43.67	S K P 206より新しい。
S K P 127	G H 74	楕円形	24	19	15	43.71	
S K P 128	G H 75	円形	20	20	15	43.72	

第8表 2区柱穴様ピット計測一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 129	GH76	楕円形	26	18	7	43.80	
S K P 130	GH74、G I 74	円形	20	18	10	43.79	
S K P 131	G J 85	円形	24	23	21	43.69	
S K P 132	G K 85	円形	32	29	27	43.62	
S K P 133	G K 84	方形	20	16	15	43.62	
S K P 134	G I 75	方形	55	48	22	43.63	S K P 135・207より古い。
S K P 135	GH75、G I 75	円形	23	(15)	10	43.74	S K P 134より新しく、S K P 207より古い。
S K P 136	G I 77	方形	30	27	11	43.72	
S K P 137	G I 76	円形	20	20	8	43.76	
S K P 138	G I 76	(円形)	(30)	(29)	16	43.66	S X 169より新しい。
S K P 141	G J 82	楕円形	33	26	20	43.58	
S K P 142	G I 76	円形	34	32	45	43.36	
S K P 145	G J 83	方形	32	30	23	43.50	
S K P 146	G J 83	不整楕円形	39	30	15	43.59	
S K P 147	G I 81	円形	61	58	20	43.53	
S K P 148	G I 80	楕円形	39	30	13	43.63	
S K P 150	G J 80	方形	(58)	48	33	43.41	S A 149 P 2より古い。
S K P 156	G I 79	楕円形	68	51	29	43.50	
S K P 161	G I 79	円形	49	49	49	43.28	
S K P 162	G I 79	円形	63	56	31	43.46	
S K P 163	G I 80	方形	31	29	10	43.67	
S K P 165	G I 79	方形	32	23	15	43.60	
S K P 166	G J 79	略円形	85	(38)	52	43.24	S A 149 P 3より新しく、S A 153 P 4より古い。
S K P 167	G I 78	(円形)	(85)	(54)	31	43.83	S K P 200より新しい。
S K P 168	G I 76	(楕円形)	73	48	29	43.52	S X 169より新しい。
S K P 172	G I 76・77	(楕円形)	77	33	23	43.61	S K P 173と重複。新旧不明。
S K P 173	G I 76・77	方形	58	(44)	18	43.67	S K P 172と重複。新旧不明。
S K P 177	G I 78	(略円形)	102	(82)	29	43.82	
S K P 178	G I 80・81	方形	46	(46)	26	43.47	
S K P 179	G I 80	楕円形	51	34	11	43.63	
S K P 189	G J 80	方形	56	49	22	43.50	S A 153 P 3より新しい。
S K P 190	G I 79、G J 79	(方形)	20	16	5	43.72	S A 152 P 4より古い。
S K P 191	G I 80	楕円形	22	16	7	43.66	
S K P 192	G I 80	方形	28	27	8	43.66	
S K P 193	G I 80	方形	20	20	14	43.60	
S K P 195	G O 106	(円形)	38	(18)	15	43.38	S K I 35より古い。
S K P 196	G O 106	(円形)	42	(17)	10	43.42	S K I 35より古い。
S K P 197	G O 106	(方形)	28	(16)	14	43.44	S K I 35より古い。
S K P 198	G O 106	円形	25	20	10	43.30	S K 84より古い。
S K P 199	G O 106	楕円形	30	26	20	43.07	
S K P 200	G I 77・78	(円形)	(52)	(51)	22	43.64	S K P 167より古い。
S K P 203	GH76	楕円形	17	14	13	43.74	S K P 204より新しい。
S K P 204	GH76	方形	18	16	4	43.83	S K P 203より古い。
S K P 206	G I 75・76	楕円形	(43)	33	16	43.75	S K P 101・126より古い。
S K P 207	GH75、G I 75	円形	29	25	19	43.76	S K P 134・135より新しい。
S K P 208	GN102	方形	40	36	26	43.31	
S K P 210	GN102	楕円形	36	29	11	43.55	
S K P 213	G I 75	(円形)	20	(11)	13	43.73	
S K P 214	G I 75	(円形)	18	(8)	11	43.73	

を含む。平面形は、長軸 2.43 m、短軸 1.47 m の略楕円形である。確認面からの深さは 0.13 m である。壁は、北西側は急に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。本遺構に伴う柱穴を 3 基検出した。柱穴の確認面からの深さは、0.11 ~ 0.21 m である。出土遺物は、土師器（坏破片 11 点、甕破片 1 点）、須恵器（甕破片 1 点）である。柱穴内からの出土遺物はない。

S X 169 性格不明遺構（第 45 図）

G I 76 グリッドのⅧ層（地山）上面で確認した。西側が調査区外にかかる。S K P 138・168 と重複し、本遺構が最も古い。平面形は略楕円形であると推定され、現状で長軸 1.61 m、短軸 1.22 m である。確認面からの深さは 0.18 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

⑧柱穴様ピット

2 区では、98 基の柱穴様ピットを検出した。その大部分は 74 ~ 82 ラインに位置している。西側調査範囲外にある掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられるが、現状では規則的な配列は認められない。詳細を観察表にまとめた。出土遺物は、土師器（坏の破片、内面を黒色処理した坏の破片、甕の破片）、須恵器（坏の破片、甕の破片）である。この詳細も表にまとめた。

第9表 2区柱穴様ピット遺物出土状況

遺構番号	グリッド	土師器				須恵器	
		坏破片	坏内黒破片	台付坏	甕破片	坏破片	甕破片
S K P 03	G O 106・107	—	—	—	1	—	—
S K P 28	G O 107	—	—	—	—	1	—
S K P 54	G P 107	1	—	—	—	—	—
S K P 59	G O 103	2	—	—	1	—	—
S K P 101	G I 76	4	—	—	—	—	1
S K P 105	G H 75	13	—	—	—	—	—
S K P 110	G H 75	8	1	—	—	—	—
S K P 112	G H 75	2	—	—	—	—	—
S K P 114	G H 74	—	—	—	1	—	—
S K P 116	G H 75、G I 75	2	—	—	—	—	—
S K P 122	G H 74	1	—	—	—	—	—
S K P 126	G I 75・76	10	1	—	—	—	—
S K P 134	G I 75	13	—	—	—	1	—
S K P 147	G I 81	3	—	1	1	—	—
S K P 148	G I 80	1	—	—	—	—	—
S K P 150	G J 80	6	1	—	1	—	1
S K P 156	G I 79	1	1	—	1	—	—
S K P 166	G J 79	30	—	—	1	—	—
S K P 167	G I 78	2	1	—	1	—	—
S K P 168	G I 76	8	—	—	—	—	—
S K P 178	G I 80・81	3	—	—	—	—	—
S K P 189	G J 80	11	—	—	—	—	—
S K P 195	G O 106	—	—	—	1	—	—
S K P 198	G O 106	—	—	—	1	—	—

## (2) 2区遺構外出土遺物

2区の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器や石器、平安時代の土師器・須恵器、近世以降の古銭・陶磁器で、整理用コンテナで9箱分である。縄文時代の土器は、破片51点である。縄文時代の石器は石斧1点である。非ロクロの土師器は、坏の口縁部3点、網代痕のある甕の底部破片2点である。ロクロの土師器は、坏5点（このうち墨書土器1点）、坏破片5,952点（このうち墨書土器の破片14点）、皿1点、埴の口縁部1点、甕破片1,722点、内面を黒色処理した坏1点、同坏破片57点、同台付坏2点、同台付坏の底部破片3点、同碗1点、である。須恵器は、坏4点（このうち墨書土器1点）、坏破片132点（このうち墨書土器の破片1点）、甕破片244点、壺の底部1点、甕または壺の破片6点である。第5表の分類項目に当てはめると掲載した土師器坏と須恵器坏は下記のようになる。

第46図3はロクロ土師器の坏bで、「上」と書かれた墨書土器である。

第46図4は、ロクロ土師器の坏cである。

第46図5・6は、ロクロ土師器の坏eである。

第46図7は、ロクロ土師器の坏kである。

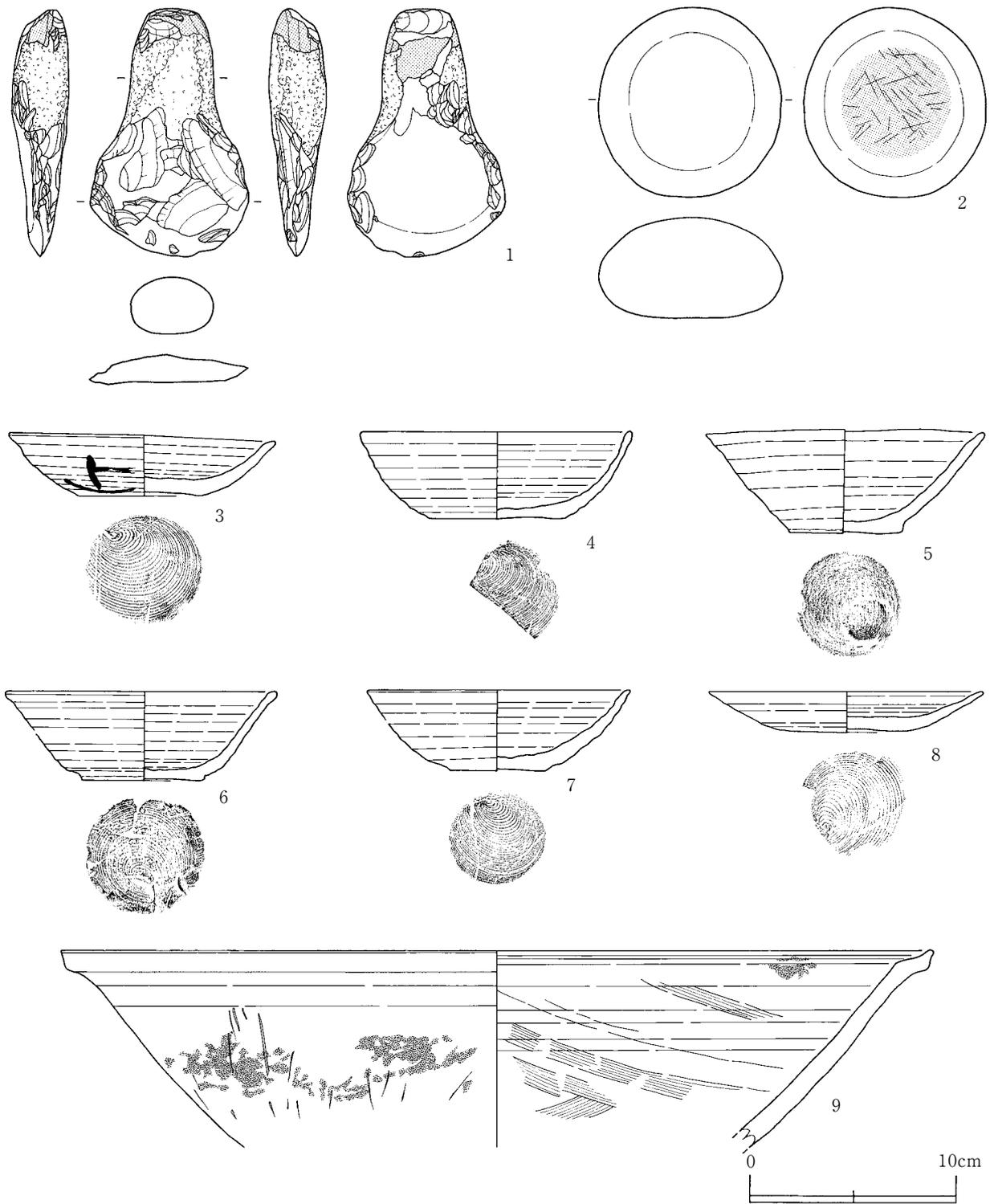
第46図8は、ロクロ土師器の皿bである。

第47図2は、内面を黒色処理した土師器の台付坏bである。

第47図の6・7・8は、須恵器の坏eである。

第47図の9は、須恵器の坏fである。

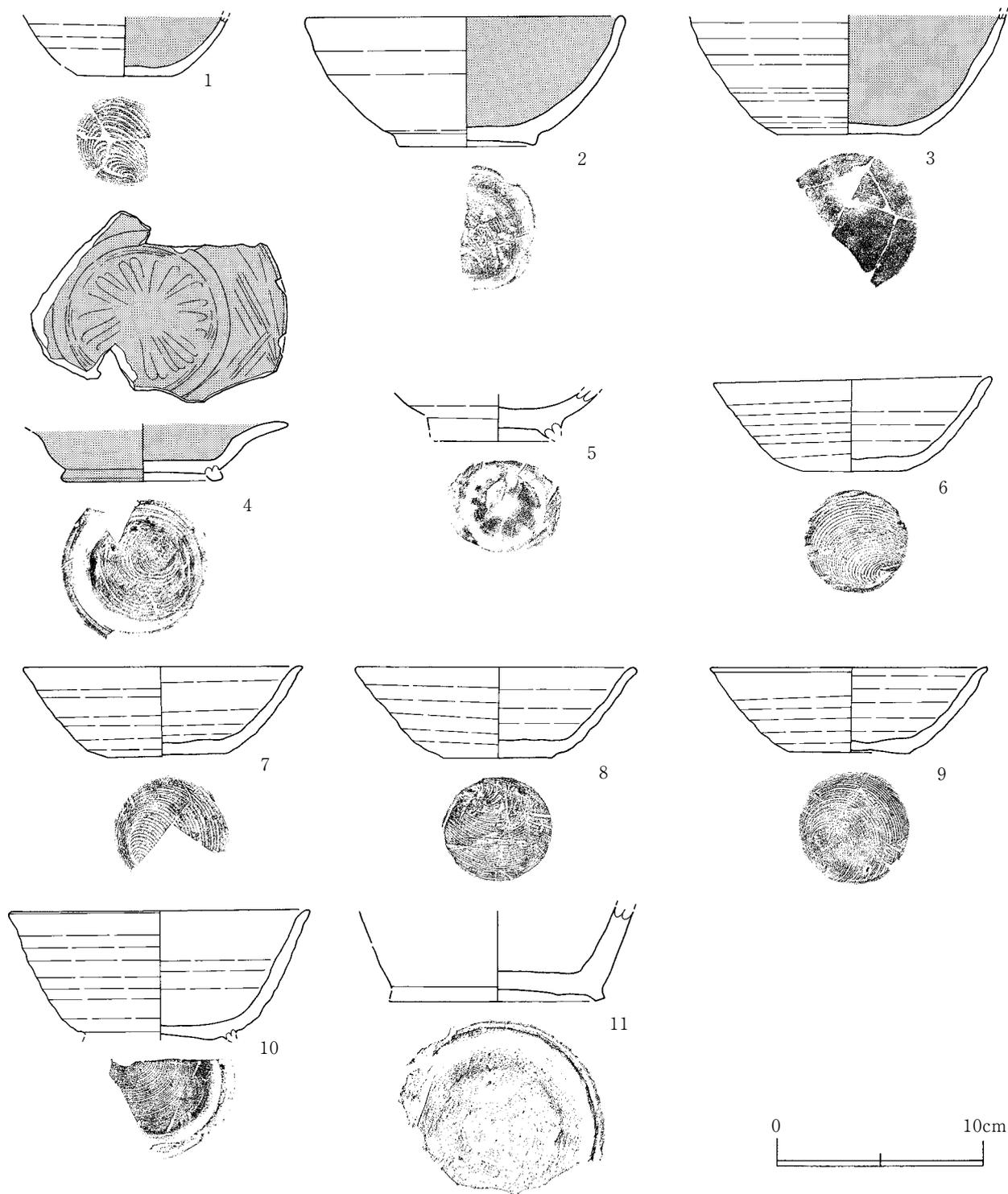
第47図の10は、台が欠損しているが、須恵器の台付坏である。



番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特 徴
1	石製品	石斧	2区GJ87 II層	12.1	7.8	2.8	
2	石製品	擦石	2区GH73 V層	9.3	8.9	4.9	

番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
3	土師器	杯	2区GJ87 II層	12.9	5.4	3.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
4	土師器	杯	2区GK88 II層	(13.0)	(6.6)	4.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
5	土師器	杯	2区GJ87 II層	13.6	5.6	5.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
6	土師器	杯	2区GH73 III・IV層	(13.2)	5.9	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
7	土師器	杯	2区GK87 II層	—	6.2	4.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
8	土師器	皿	2区GK90	(13.3)	6.6	2.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
9	土師器	塀	2区GI81 III層上面	(42.3)	—	—	内外:ロクロ調整、炭化物附着

第46図 2区遺構外出土遺物(1)



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	2区GG73 II層	—	4.5	—	内外:ロクロ調整→ミガキ、内:黒色処理、外:ヘラケズリ、底:回転糸切り
2	土師器	台付坏	2区GG72 III層、GG73 II層	(15.2)	(6.5)	6.5	内外:ロクロ調整→ミガキ、内:黒色処理、底:回転糸切り
3	土師器	碗	2区GG73 III層	—	(6.9)	—	内外:ロクロ調整→ミガキ、内:黒色処理、外:ヘラケズリ、底:ヘラケズリ
4	土師器	段皿	2区GK89	—	(7.8)	(2.8)	内外:ロクロ調整→ミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
5	土師器	台付坏	2区GG73 II層	—	(6.3)	—	内外:ロクロ調整、内:ミガキ→黒色処理、底:放射状痕跡
6	須恵器	坏	2区GN101 RP1	13.2	4.9	4.7	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
7	須恵器	坏	2区GN101 II層	13.2	5.7	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
8	須恵器	坏	2区GN101 IV層	13.4	5.3	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
9	須恵器	坏	2区GN101 II・IV層	13.1	5.9	4.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
10	須恵器	台付坏	2区GN101 地山漸移層	14.4	—	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨痕
11	須恵器	壺	2区GG71 IV層	—	(10.8)	—	内外:ロクロ調整、底:指頭圧痕

第47図 2区遺構外出土遺物(2)

### 3 3区の検出遺構と遺物

#### (1) 平安時代

##### ① 柱列

###### S A 07 柱列 (第48図)

K C 84・85、K D 85 グリッドのⅧ層 (地山) 上面で確認した。2間の柱列で、総長3.50 m、柱間距離は1.75 m等間である。柱穴は径25～30 cmの円形で、深さは両端のP 1・P 3がそれぞれ32 cm、38 cmであるが、中央のP 2は18 cmと浅い。P 3がS K P 98を切っている。P 1には径18 cmの柱痕が見られる。方位はN-29°-Wである。出土遺物は、土師器坏の破片 (P 3から4点) である。

###### S A 27 柱列 (第48図)

K E 91、K F 92 グリッドのⅧ層 (地山) で確認した。3間の柱列で、総長6.40 m、柱間距離は北から2.25 m、2.15 m、2.00 mである。柱穴はP 1・P 2は一辺25～30 cmの方形であるが、P 3は径33 cmの略円形、P 4は長軸50 cm、短軸36 cmの略方形をなす。深さは23～30 cmあり、いずれにも径15～20 cmの柱痕が確認される。P 4は、S K 03を切り、S D 02に切られている。P 1より北の調査範囲外にも柱穴が存在する可能性があるが未確認である。方位はN-21°-Wである。出土遺物は、土師器坏の破片 (P 3から1点) である。

##### ② 土坑

###### S K 03 土坑 (第49図、図版12)

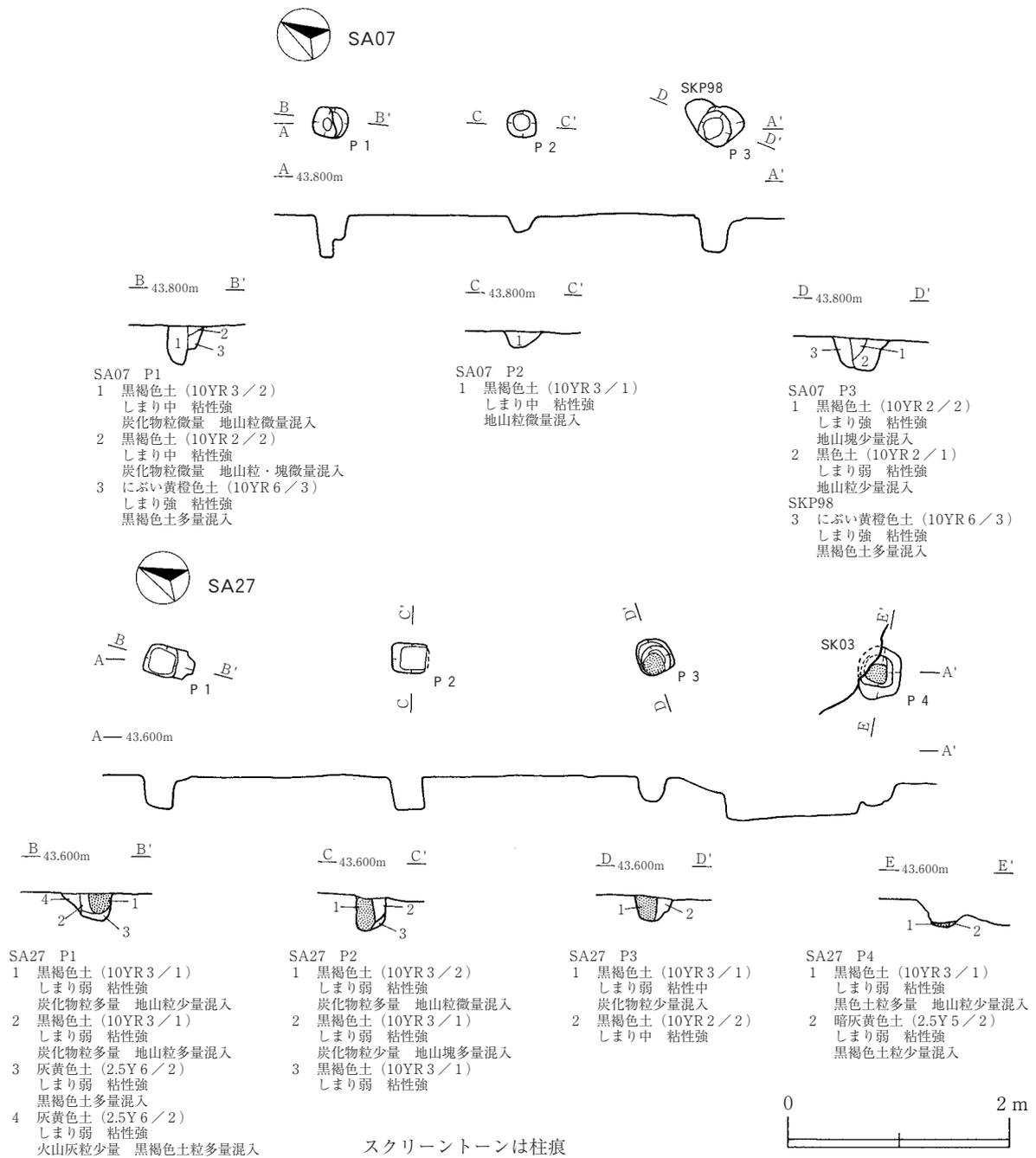
K E 91 グリッドのⅧ層 (地山) 上面で確認した。S D 02、S A 27 P 4と重複し、本遺構が最も古い。覆土の1層は火山灰の層である。11・12層に石の混入が見られる。S D 02に南西側の上部が削平されているため、平面形は略楕円形であると推定され、残存部で長軸2.54 m、短軸1.82 mである。確認面からの深さは0.57 mである。壁は底面から垂直に立ち上がり、確認面下0.15 mから緩やかに立ち上がる。底面は中央部のやや東側が窪んでいる。出土遺物は、土師器 (坏の底部1点、坏破片4点、甕破片6点)、須恵器 (坏破片2点、甕の口縁部から胴部1点、甕破片13点)、斎串1点、桃の種72点 (完全な形のもの46点、破損しているもの26点) である。斎串は、10層と12層の境目から斜めに刺さった状態で出土した。斎串や多数の桃の種が出土したことから、本遺構は祭祀に用いられたものと考えられる。また、覆土の1層から十和田a火山灰が検出されたことから、915年以前のものと考えられる。

###### S K 06 土坑 (第50図)

K E 93 グリッドのⅧ層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の2層には石の混入が多くその下は砂利層になっている。平面形は、長軸1.03 m、短軸0.87 mの略楕円形である。確認面からの深さは0.19 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

###### S K 30 土坑 (第50図)

K D 91、K E 91 グリッドのⅧ層 (地山) 上面で確認した。S D 02、S K 32と重複し、S D 02より古く、S K 32より新しい。S D 02に南西側が削平されているため、平面形は略円形であると推定され、残存部で長軸1.17 m、短軸1.07 mである。確認面からの深さは0.20 mである。壁は、北東側は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、東側に向かってやや傾斜する。出土遺物は、土師器 (坏破片3点) である。



第48図 3区SA07・27

SK 32 土坑 (第50図、図版12)

KD 91、KE 91 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。SK 30・33と重複し、SK 30より古く、SK 33より新しい。SK 30に南西側が削平されているため、平面形は楕円形と推定され、残存部で長軸0.66 m、短軸0.61 mである。確認面からの深さは0.13 mである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦であり、確認面下7 cmほどのところで段になっている。出土遺物はない。

S K 33 土坑 (第50図)

K D 91、K E 91 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。S K 32 と重複し、本遺構が古い。覆土の10層には焼土粒・塊が多量に混入するが、壁や底面に被熱痕はない。S K 32 に南東側を削平されているため、平面形は略楕円形であると推定され、残存部で長軸0.89 m、短軸0.62 mである。確認面からの深さは0.09 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

S K 34 土坑 (第50図)

K E 91 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。重複はない。覆土の1層に焼土粒が多量に混入するが、壁や底面には被熱痕はない。平面形は、長軸0.92 m、短軸0.58 mの不整形である。確認面からの深さは0.10 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

S K 38 土坑 (第50図)

K D 92、K E 92 グリッドのⅢ層上面で確認した。東側が調査区外にかかる。現状で重複はない。平面形は楕円形であると推定され、現状で長軸2.06 m、短軸0.57 mである。確認面からの深さは0.14～0.30 mである。壁は垂直に立ち上がり、その後緩やかに立ち上がる。底面は段がついたり窪んだりして、凹凸になっている。出土遺物は、土師器(坏破片1点)である。

S K 65 土坑 (第50図)

K H 103 グリッドのⅦ層上面で確認した。S K P 67 と重複し、本遺構が新しい。現代の溝に東側を削平されている。覆土の1層に火山灰が混入する。平面形は楕円形であると推定され、残存部で長軸0.70 m、短軸0.31 mである。確認面からの深さは0.19 mである。壁は急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

S K 68 土坑 (第50図、図版12)

K F 96 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.00 m、短軸0.54 mの不整楕円形である。確認面からの深さは0.61 mである。壁は底面から確認面下20 cmまで垂直に立ち上がる。さらに上部西側は垂直に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、西側が窪んでいる。出土遺物は、土師器(破片1点)である。

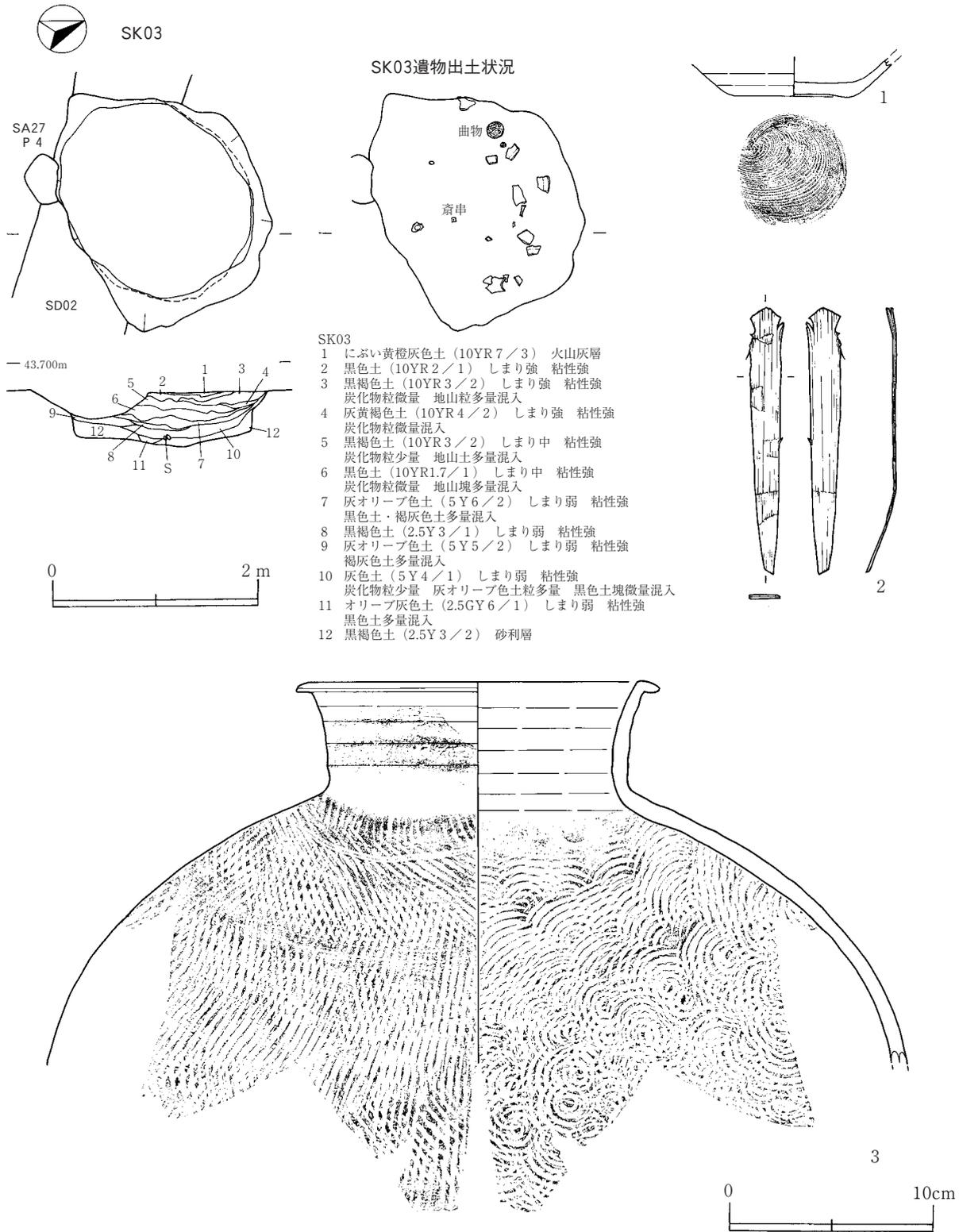
S K 69 土坑 (第50図)

K F 96 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸0.92 m、短軸0.83 mの略円形である。確認面からの深さは0.39 mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

③溝跡

S D 01 溝跡 (第52図、図版12)

K H 110・111、K I 110・111、K J 111 グリッドのⅣ層上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかり、東西方向に更に延びるものと推定される。現状で重複はない。覆土の3・4・6層に火山灰が混入する。確認長3.52 m、幅0.85～1.25 m、深さ0.26～0.44 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、土師器(坏破片12点、甕破片7点)、流木と思われる木材4点である。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	須恵器	坏	3区SK03	—	5.6	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、転用硯
3	須恵器	甕	3区SK03、SD02、KE91	(17.9)	—	—	内外:タタキ

番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特徴
2	木製品	斎串	3区SK03 RW5	13.2	1.7	0.4	

第49図 3区SK03と出土遺物



## S D 02 溝跡 (第51図、図版12)

K D 90・91、K E 91、K F 91 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかり、東西方向に更に延びるものと推定される。S K 03・30、S A 27 P 4、S K P 72 と重複し、S K 03・30、S A 27 P 4 より新しく、S K P 72 より古い。確認長6.50 m、幅1.01～1.33 m、深さ0.20～0.24 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、土師器(坏破片15点、甕破片2点)、須恵器(坏1点、坏破片2点、甕破片4点)、砥石1点、曲物1点である。第5表の分類項目に当てはめると、第51図の1は須恵器の坏gである。

## S D 13 溝跡 (第52図)

K C 84、K D 84 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。現代の溝に東側と西側が削平されている。現状で重複はない。確認長1.78 m、幅0.26～0.28 m、深さ0.04～0.07 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

## S D 15 溝跡 (第52図)

J R 60、J S 60 グリッドのⅣ層上面で確認した。現代の溝に東側が削平されており、西側は調査区外にかかる。東には延びないが、西に更に延びるものと推定される。現状で重複はない。確認長2.81 m、幅0.45～0.61 m、深さ0.10～0.19 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

## S D 62 溝跡 (第52図)

K L 123 グリッドのⅢ層上面で確認した。現代の溝に東側が削平されており、西側が調査区外にかかる。現状で重複はない。確認長1.25 m、幅0.72～0.95 m、深さ0.17～0.26 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面にはわずかに凹凸がある。出土遺物はない。

## S D 63 溝跡 (第52図)

K H 107、K I 107 グリッドのⅥ層上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかり、東西方向に更に延びるものと推定される。現状で重複はない。確認長2.91 m、幅0.52～0.86 m、深さ0.06～0.26 mである。壁は急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

## S D 82 溝跡 (第52図)

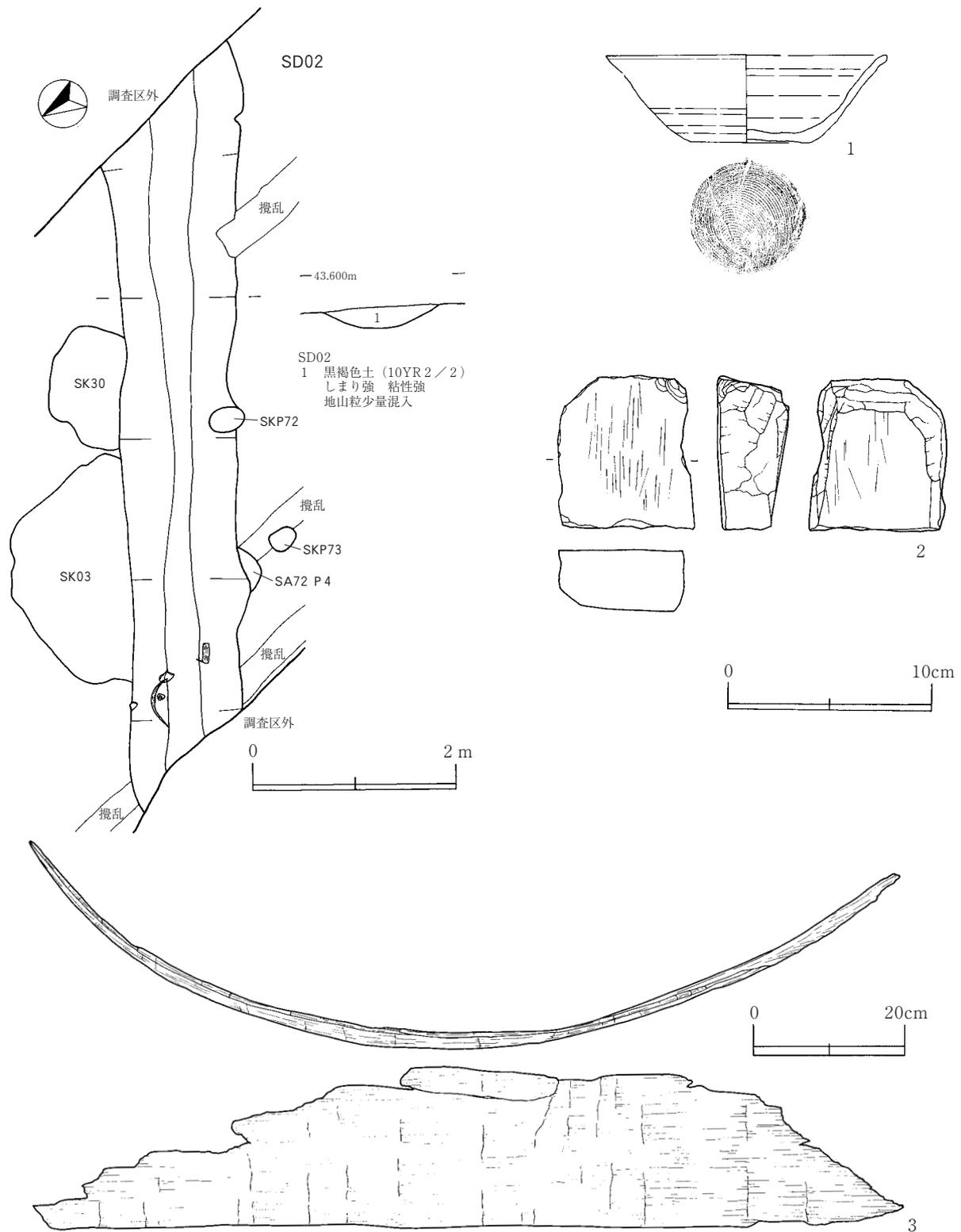
J R 61、J S 61 グリッドのⅣ層上面で確認した。東側と西側が調査区外にかかり、東西方向に更に延びるものと推定される。現状で重複はない。確認長2.94 m、幅0.74～0.94 m、深さ0.07～0.18 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

## S D 85 溝跡 (第53図)

J S 65、J T 65 グリッドのⅣ層上面で確認した。北にS D 86 が隣接する。現代の溝に西側が削平されている。現状で重複はない。確認長2.02 m、幅0.55～0.73 m、深さ0.08 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

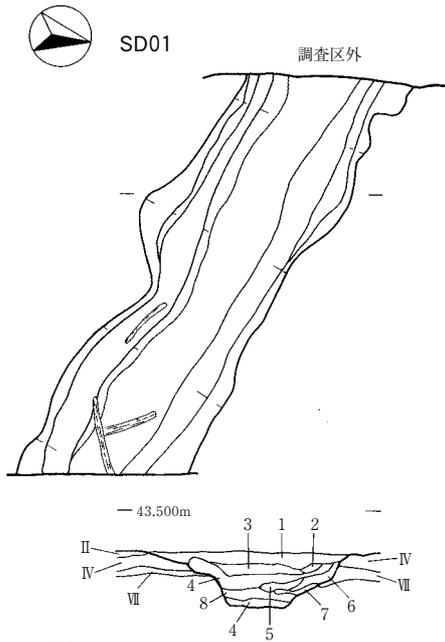
## S D 86 溝跡 (第53図)

J T 67 グリッドのⅣ層上面で確認した。南にS D 85、北にS D 87 が隣接する。現代の溝に西側が削平されている。現状で重複はない。確認長1.82 m、幅0.82～1.09 m、深さ0.02～0.07 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

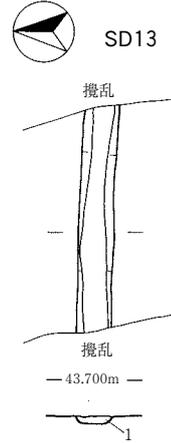


番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	須恵器	坏	3区SD02	13.7	6.0	4.3	内外:ロク口調整、底:回転糸切り
番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特 徴
2	木製品	曲物	3区SD02 RW1	—	—	0.4	
3	石製品	砥石	3区SD02	7.6	6.7	3.6	

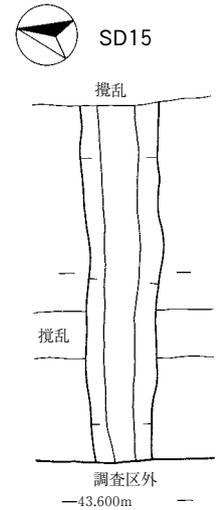
第51図 3区SD02と出土遺物



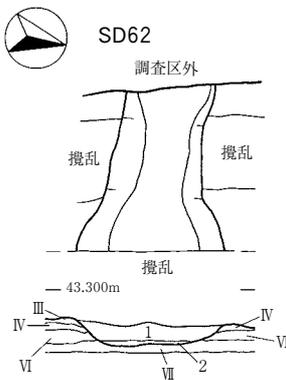
- SD01
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強 粘性弱  
火山灰粒少量 酸化鉄多量混入
  - 2 黒色土 (10YR2/1) しまり中 粘性中
  - 3 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中  
火山灰粒微量 酸化鉄少量混入
  - 4 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中  
火山灰粒微量混入
  - 5 黒色土 (10YR2/1) しまり弱 粘性中
  - 6 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中  
火山灰粒微量混入
  - 7 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中  
黒褐色土塊混入
  - 8 黒褐色土 (10YR2/2) しまり中 粘性中  
地山塊少量混入
  - 9 オリーブ灰色土 (10Y4/2) しまり中 粘性中  
黒褐色土多量混入



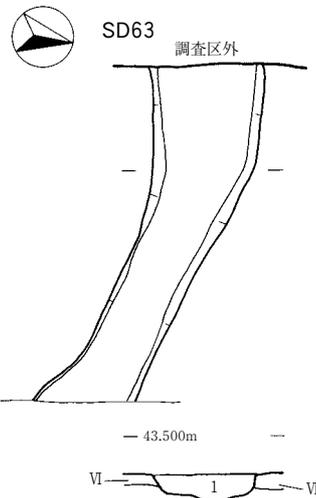
- SD13
- 1 黒褐色土 (10YR3/1)  
しまり弱 粘性弱  
地山粒微量混入



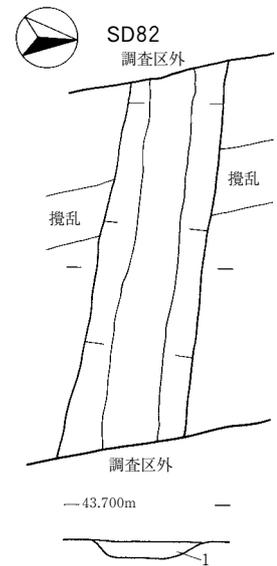
- SD15
- 1 黒褐色土 (10YR2/2)  
しまり弱 粘性中  
地山粒微量混入



- SD62
- 1 黒色土 (10YR2/1)  
しまり中 粘性弱  
黒褐色土少量 黄灰色土少量混入
  - 2 黄灰色土 (2.5Y4/1)  
しまり中 粘性中  
地山粒少量混入



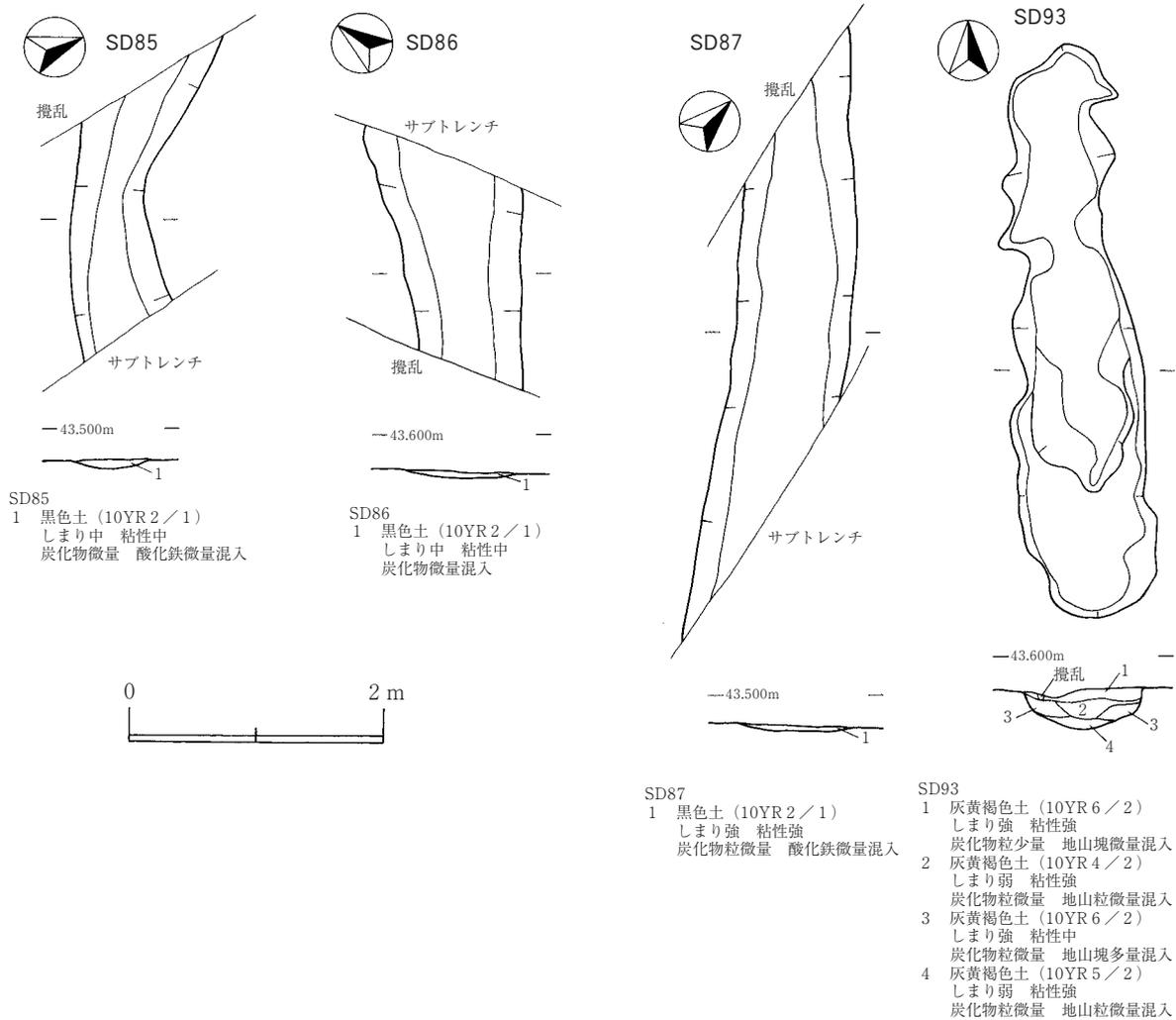
- SD63
- 1 黒褐色土 (10YR3/1)  
しまり弱 粘性弱  
火山灰粒微量混入



- SD82
- 1 黒褐色土 (10YR2/2)  
しまり弱 粘性中  
地山粒微量混入



第52図 3区SD01・13・15・62・63・82



第53図 3区SD85・86・87・93

SD87 溝跡 (第53図)

J T 68・69グリッドのIV層上面で確認した。南にSD86が隣接する。東側と西側が調査区外にかかり、現代の溝に西側が削平されている。現状で重複はない。確認長3.26 m、幅0.88～0.93 m、深さ0.02～0.05 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

SD93 溝跡 (第53図、図版12)

K D 88・89グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。重複はない。長さ4.57 m、幅0.62～1.07 m、深さ0.04～0.41 mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は中央部から北側が窪んでおり、段になっている各底面は平坦である。出土遺物はない。

## ④水田跡

## 北側水田跡（第8・54・55図、図版11）

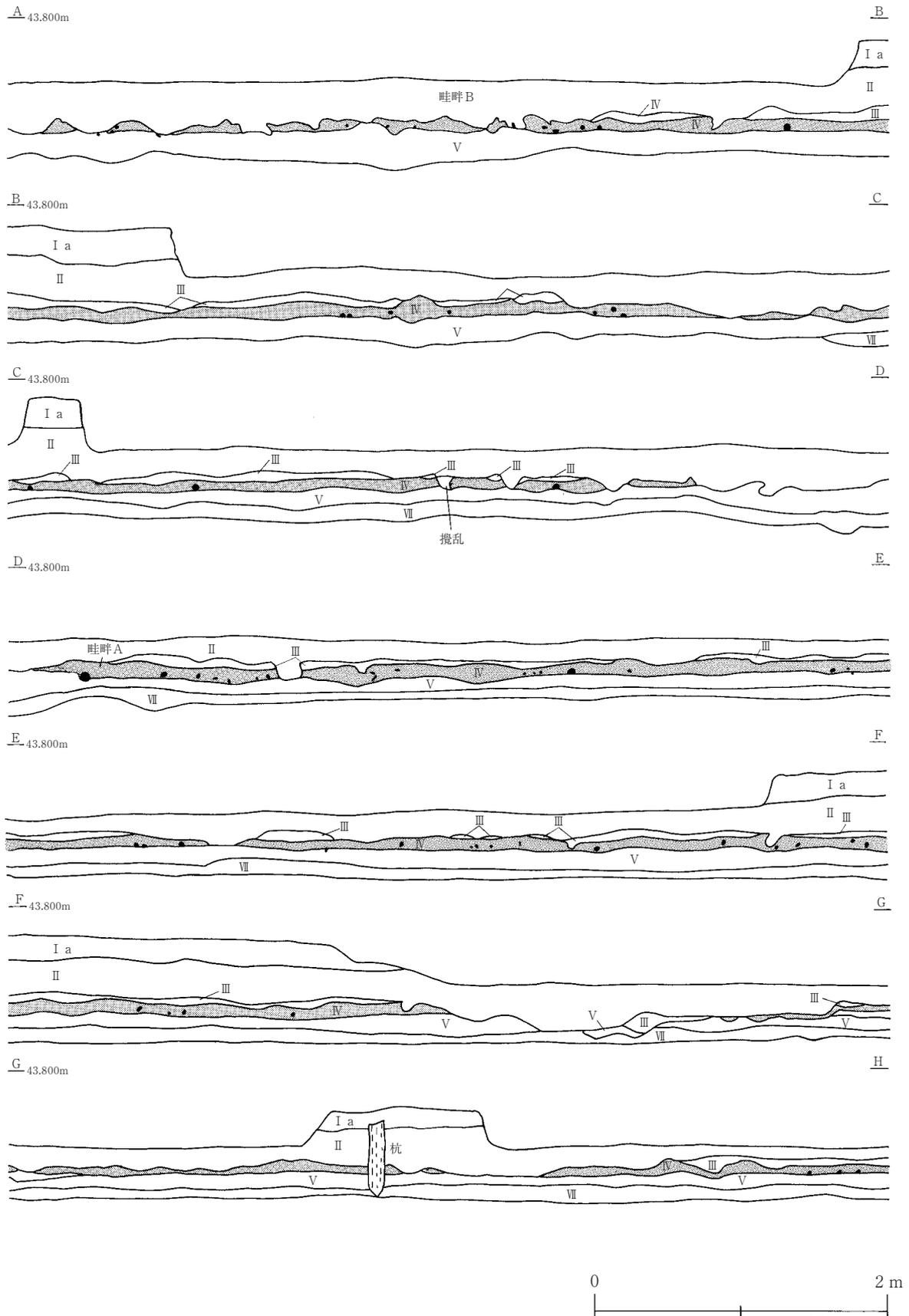
113ライン以北の調査区北側のⅣ層上面で確認した。Ⅳ層が水田耕作土になり、火山灰が含有する。2区で検出された水田跡と同様に十和田a火山灰降下後に耕作されていた水田跡と考えられる。第54・55図の断面図は、調査区西側の基本土層断面図（113ラインから126ライン）である。北側水田跡では、KK 117グリッドで畦畔A、KJ 113グリッドで畦畔Bを検出した。これらの畦畔は、Ⅳ層そのものが畦畔になっていることから、耕作土であるⅣ層を盛り上げて作られたものと考えられる。畦畔の上部は後世の耕作等により削平されており、西側でわずかに残っているだけで、東側では確認できなかった。畦畔AとBの間は約15mあり、この間に畦畔が存在しないとすれば、6区で検出された水田跡と同程度の規模の水田跡と考えられる。3区は調査区の東西幅が6mしかなく、更に東西両側が現代の溝で攪乱を受けているため、平面的には検出できなかった。出土遺物はない。

## 南側水田跡（第8・56・57・58図、図版10・11）

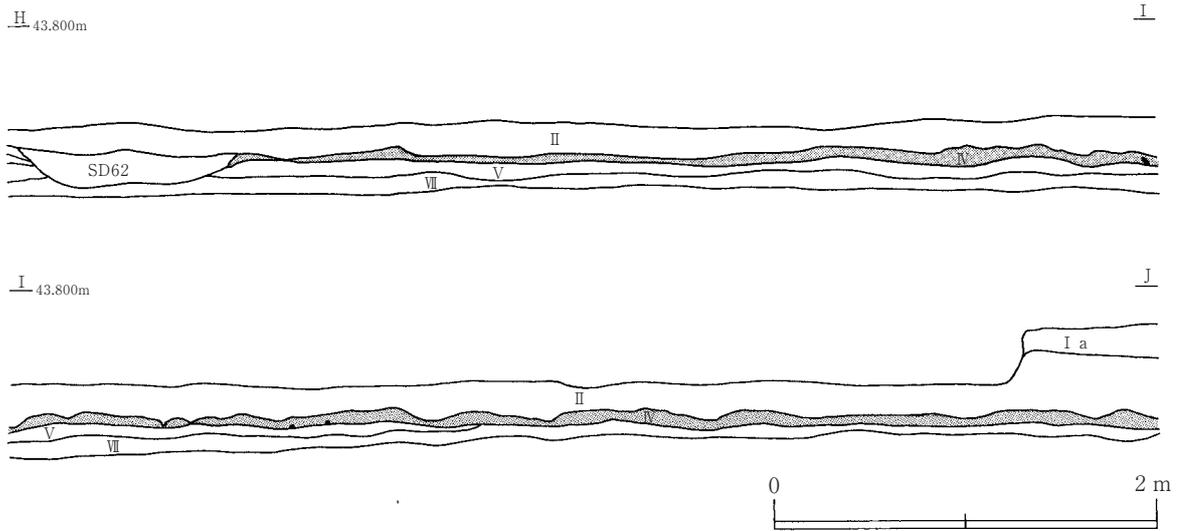
78ライン以南の調査区南側に位置し、Ⅳ層上面で確認した。Ⅳ層が水田耕作土になり、火山灰が含有する。2区や3区北側で検出された水田跡と同様に十和田a火山灰降下後に耕作されていた水田跡と考えられる。第56～58図の断面図は、調査区東側の基本土層断面図（81ラインから58ライン）である。南側水田跡では、KA 73・74グリッドで畦畔C、JT 70・71、KA 70・71グリッドで畦畔Dを検出した。畦畔のCは火山灰の塊を含有し、台形状をしている。畦畔Dは、畦畔A・Bと同じようにⅣ層そのものが畦畔になっており、畦畔A～Cより幅がある。また、JT 67グリッドで畦畔と思われる畦畔Eを検出した。この畦畔EはSD 86の東側へ延びる部分と一致するが、断面ではSD 86を確認することができなかったため、畦畔Eと共に削平されたものと考えられる。出土遺物はない。

## 中央部水田跡（第59図）

93～98ラインの調査区中央部のⅣ層下面で確認した。Ⅳ層と覆土には火山灰が含有する。北端は谷地にかかっており、北側の範囲がはっきりしない。現代の農道の北側と南側に検出された水田跡は同一のものと考えることができる。農道の北側の水田跡は断面でも確認できたが、農道の南側の水田跡はⅧ層（地山）上面まで攪乱を受けており、断面では確認できなかった。農道の南側の水田跡の深さは、最大0.06mである。出土遺物はない。



第54図 3区北側水田跡断面図(1)



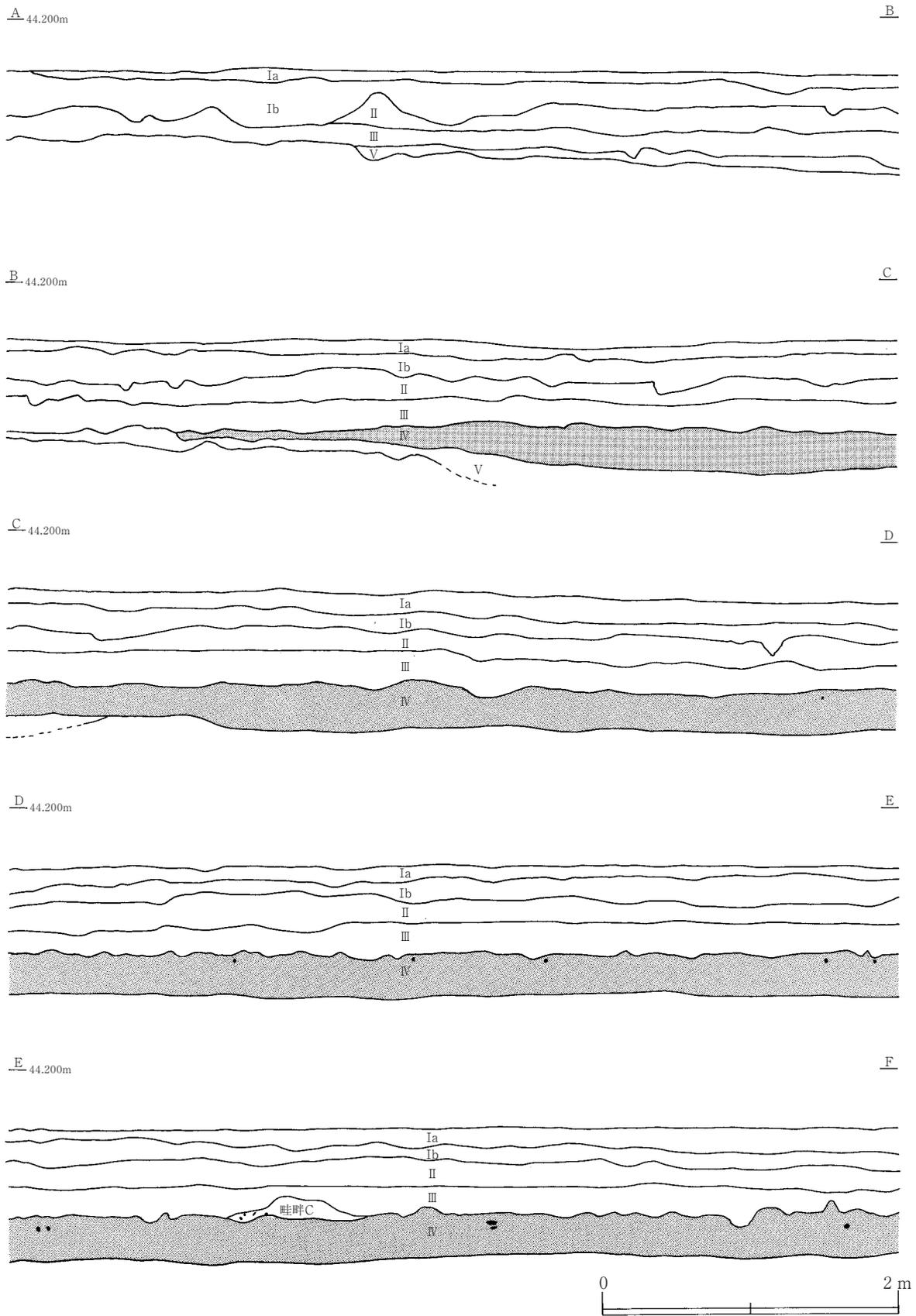
3区北側水田跡断面図

- I a層：黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性弱 砂利多量混入
- II 層：黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性弱
- III 層：黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性中
- IV 層：黄灰色土 (2.5Y 4/1) しまり中 粘性中 火山灰粒・塊微量混入
- V 層：黄灰色土 (2.5Y 4/1) しまり強 粘性強
- VI 層：黄灰色土 (2.5Y 4/1) しまり強 粘性強 地山塊少量混入
- VII 層：オリーブ黒色土 (5Y 3/1) しまり強 粘性強
- VIII 層：灰色土 (7.5Y 5/1) しまり強 粘性中 地山

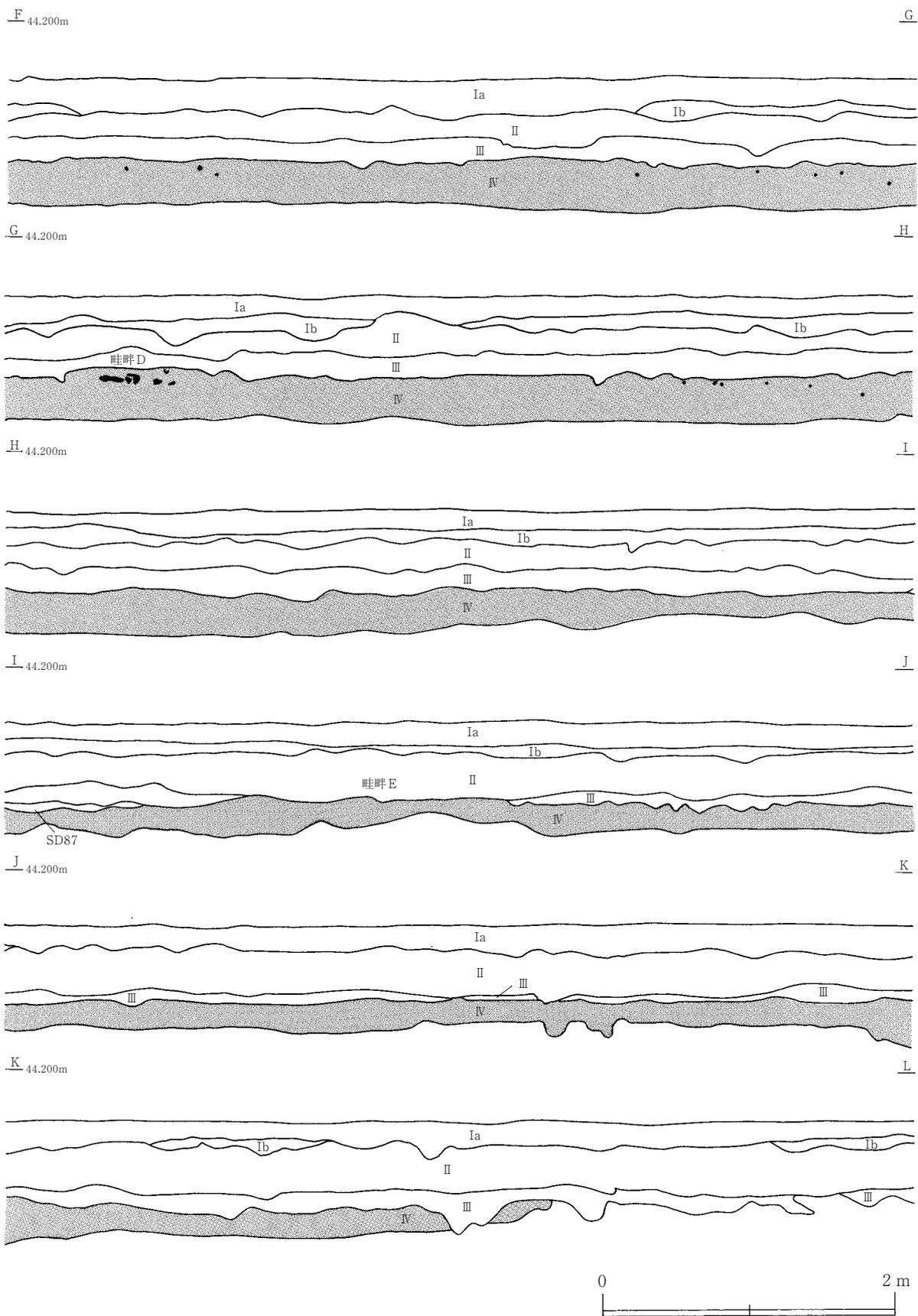
3区南側水田跡断面図

- I a層：黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性弱 砂利多量混入
- I b層：黒褐色土 (10YR 3/2) しまり強 粘性弱 炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山塊多量混入
- II 層：黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性弱 炭化物粒微量 酸化鉄少量混入
- III 層：黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性中 酸化鉄少量混入
- IV 層：黒褐色土 (10YR 3/2) しまり中 粘性強 火山灰粒・塊微量混入
- V 層：黒褐色土 (10YR 3/2) しまり中 粘性強 炭化物粒微量 酸化鉄多量混入
- VIII 層：暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) しまり強 粘性中 地山

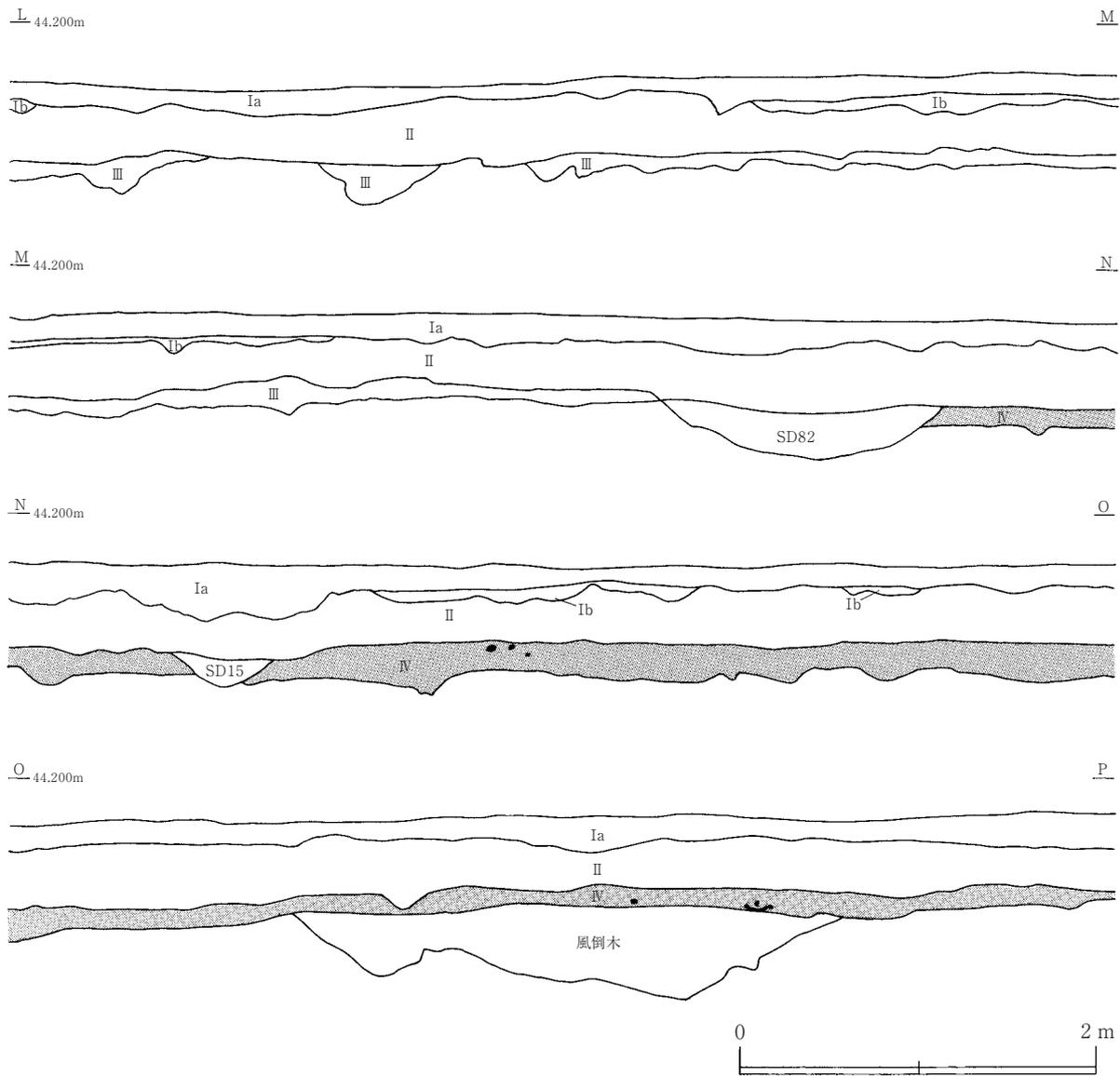
第55図 3区北側水田跡断面図 (2)



第56図 3区南側水田跡断面図(1)



第57図 3区南側水田跡断面図(2)



第58図 3区南側水田跡断面図(3)

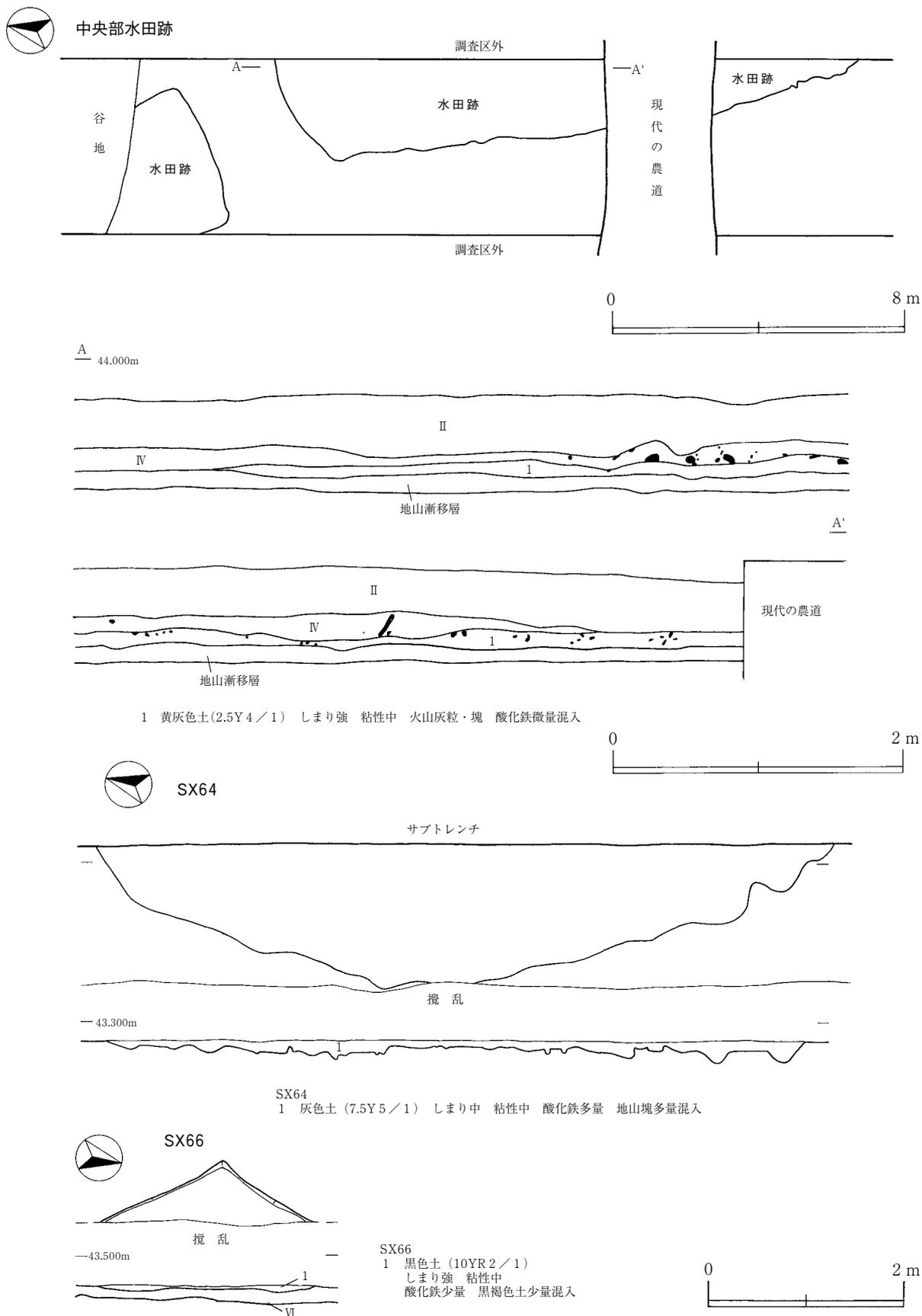
⑤性格不明遺構

S X 64 性格不明遺構 (第59図)

K H 104 ~ 106 グリッドのⅧ層(地山)上面で確認した。東側が調査区外にかかり、現代の溝に西側の一部が削平されている。現状で重複はない。略楕円形であると推定され、現状で長軸7.52 m、短軸1.50 m、深さ0.04 ~ 0.24 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。水田跡の可能性も考えられる。出土遺物はない。

S X 66 性格不明遺構 (第59図)

K I 107 グリッドのⅥ層上面で確認した。現代の溝に東側が削平されており、現状で重複はない。平面形は、南北方向2.20 m、東西方向0.64 m、深さ0.06 mで三角形をしている。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、南側と北側でわずかに窪んでいる。出土遺物はない。



第59図 3区中央部水田跡、S X 64・66

第10表 3区柱穴様ピット計測一覧

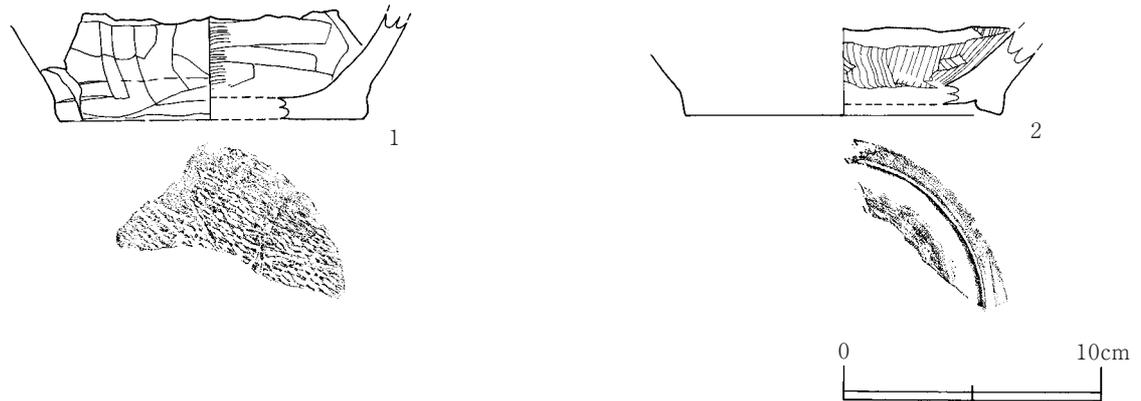
遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 10	K D 84	楕円形	27	20	18	43.24	
S K P 11	K C 83	円形	19	19	15	43.26	S K P 12より古い。
S K P 12	K C 83	円形	22	21	15	43.25	S K P 11より新しい。
S K P 16	K C 85	楕円形	22	17	16	43.20	
S K P 17	K D 86	円形	41	35	32	43.15	
S K P 18	K E 88	楕円形	31	27	31	43.04	
S K P 19	K D 99、K E 89	楕円形	29	25	40	43.05	
S K P 20	K D 88	楕円形	34	26	24	43.11	
S K P 22	K E 90	方形	19	16	29	43.05	
S K P 23	K D 84	方形	30	22	16	43.23	
S K P 24	K D 84	方形	29	24	19	43.17	
S K P 25	K C 86	楕円形	20	15	22	43.13	
S K P 26	K D 86	方形	28	26	24	43.16	
S K P 29	K E 92	方形	27	18	23	43.03	
S K P 39	K E 90	方形	51	49	27	43.08	
S K P 40	K E 90	楕円形	30	24	28	43.02	
S K P 42	K E 92・93	(楕円形)	(52)	(34)	28	42.96	
S K P 43	K E 88	不整楕円形	46	34	26	43.05	
S K P 44	K F 93	楕円形	22	18	8	43.11	
S K P 45	K E 90	方形	49	32	19	43.11	
S K P 46	K E 91・92	方形	27	26	22	43.07	
S K P 47	K E 92	楕円形	26	18	15	43.20	
S K P 48	K E 92	方形	33	21	18	43.07	
S K P 49	K D 90	方形	22	18	16	43.22	
S K P 50	K D 88	円形	53	48	27	43.04	
S K P 51	K D 88	楕円形	26	20	9	43.22	
S K P 52	K D 87、K E 87	方形	24	24	12	43.34	
S K P 53	K D 83	楕円形	28	20	17	43.20	S K P 54より新しい。
S K P 54	K D 83	(方形)	19	9	11	43.26	S K P 53より古い。
S K P 55	K D 84	方形	26	(20)	29	43.09	S K P 95より新しい。
S K P 56	K C 84	楕円形	39	20	12	43.21	
S K P 58	K D 87	楕円形	22	18	12	43.22	
S K P 59	K C 83	楕円形	33	26	5	43.26	
S K P 61	K F 93	楕円形	20	14	24	42.97	
S K P 67	K H 103	方形	20	20	15	42.92	S K 65より古い。
S K P 72	K E 91	楕円形	35	25	23	43.09	
S K P 73	K E 91	方形	27	22	25	43.10	
S K P 74	K E 90	略円形	27	22	25	43.08	
S K P 75	K E 90	円形	24	21	7	43.17	
S K P 76	K D 90	方形	18	16	13	43.26	
S K P 77	K D 89	方形	23	21	11	43.19	
S K P 78	K D 89	不整楕円形	64	36	17	43.18	
S K P 79	K D 89	円形	28	26	13	43.22	
S K P 89	K C 81	方形	15	15	23	43.21	
S K P 90	K C 81	方形	20	14	24	43.20	
S K P 91	K F 93	楕円形	30	19	27	42.95	
S K P 92	K D 83	方形	26	25	13	43.23	
S K P 94	K D 84	楕円形	28	20	13	43.25	
S K P 95	K D 84	円形	25	24	8	43.25	S K P 55より古い。
S K P 96	K D 88・89	方形	34	28	14	43.22	
S K P 97	K D 86	方形	26	18	24	43.14	
S K P 98	K C 85	(楕円形)	27	(20)	7	43.38	S A 07 P 3より古い。
S K P 99	K D 86	楕円形	33	26	18	43.23	
S K P 100	K C 84	楕円形	36	21	18	43.15	
S K P 101	K E 93	方形	54	38	21	43.01	
S K P 102	K F 93	楕円形	38	27	26	42.93	

⑥柱穴様ピット

3区では、56基の柱穴様ピットを検出した。その大部分が81～91ラインに集中している。詳細を観察表にまとめた。S A 07・27の柱列以外は、規則的な配列は認められず、柱痕も確認できなかった。出土遺物は、土師器坏の破片（S K P 17から9点、S K P 55から1点）、土師器甕の破片（S K P 12から2点、S K P 55から1点）、須恵器坏の破片（S K P 55から1点）である。

(2) 遺構外出土遺物

3区の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器、平安時代の土師器・須恵器、近世以降の古銭・陶磁器で、整理用コンテナで5箱分である。縄文時代の土器は、破片19点である。非ロクロの土師器は、網代痕のある甕の底部1点である。ロクロの土師器は、坏破片328点、台付坏破片2点、甕破片1,251点、内面を黒色処理した坏破片17点、同台付坏の底部破片2点である。須恵器は、坏破片78点（このうち墨書土器の破片1点）、蓋の破片2点、甕破片89点、壺の破片1点である。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	甕	3区KD91・KE92排土中	—	(11.9)	—	内:ナデ、外:ヘラケズリ、底:網代痕
2	須恵器	壺	3区KK118	—	(12.5)	—	内:カキメ、外:ロクロ調整

第60図 3区遺構外出土遺物

#### 4 4区の検出遺構と遺物

##### (1) 江戸時代

###### ①塚

館野遺跡である4区の現況は、神社跡地である。また、調査前の状況は、杉林になっていたため、原因者による杉林の伐採が終了してから、調査を開始した。抜根作業は、人力で行った。表土には、参道に用いられた敷石やごみなどがあったため、昭和時代の盛土を全て除去しながら調査を進めた。結果、調査区東側で江戸時代の塚1基を検出した。塚の北側は、昭和時代の攪乱や木の根による破壊を受けていたため、比較的保存状態が良好な南側半分を残し、半截した。雄物川町郷土資料館が所蔵する「文久二年薄井村絵図」には、館野遺跡と思われる神社が描かれており、江戸時代の文久二年には、既に存在していたものと考えられる。

###### S Y01塚 (第61図、図版13・14)

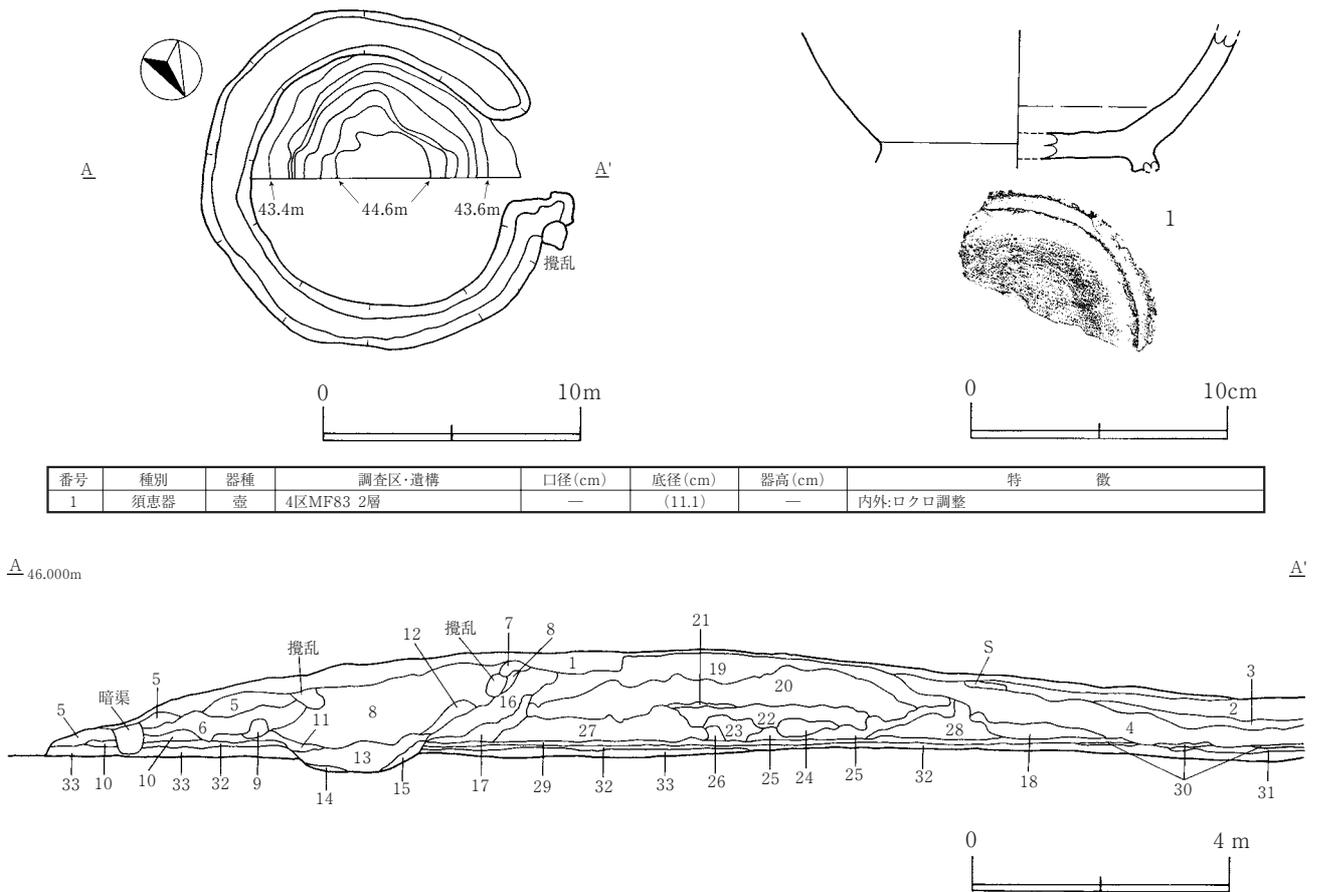
MC82～85、MD82～85、ME82～85、MF82～84グリッドで確認した。基底部は、直径約10m、高さ約1.4mである。塚の頂上部分の東側の一部分は、神社を造る際に削りとられている。塚の盛土には、地山土が混入していることから、周溝を造った際に出た土を利用し塚を造っていることがわかった。盛土下には、塚を造った当時の表土(29・32・33層)が堆積しており、人為的な掘り込みなどの施設は確認できなかった。

また、この塚は、西北西側に開口部のある周溝を伴い、その規模は、外周径約13.1～14.0m、内周径約9.5～10.5m、幅約1.4～2.2m、深さ約0.2～0.3mである。この周溝からは、神社を建てる際の建築部材と思われる木材が多量に出土した。

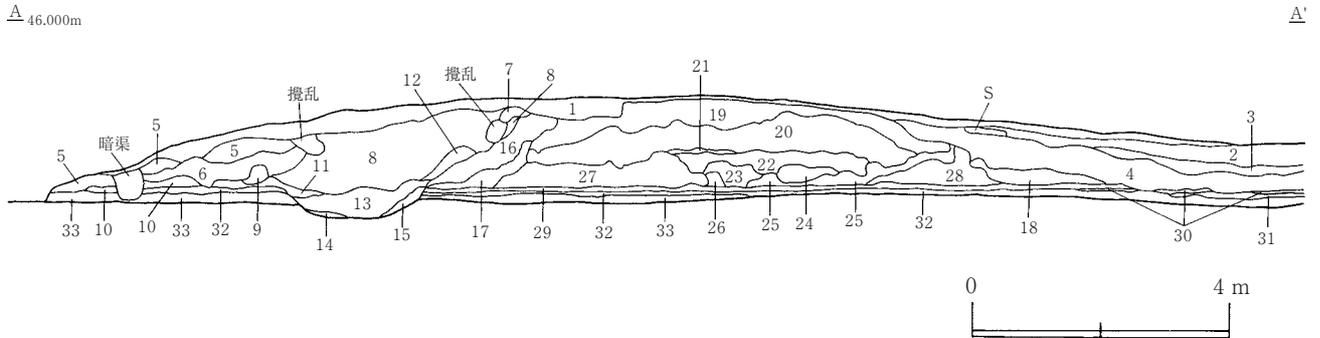
塚の16層からは銭貨「寛永通寶」が1点出土し、周溝からは近世以降の播鉢の破片が1点出土している。このことから、この塚は、江戸時代に神社を建てる際に構築されたものと考えられる。

##### (2) 遺構外出土遺物

4区の遺構外出土遺物は、平安時代の土師器と須恵器、江戸時代以降の銭貨と陶器である。土師器は、坏の破片3点、内面を黒色処理した坏の破片1点、甕の破片13点が出土した。須恵器は、坏の破片4点、壺の底部1点、甕または壺の破片6点が出土した。この内、第61図に壺の底部1点を図化した。銭貨は、「寛永通寶」が2点出土した。陶器は、播鉢・皿・茶碗などの破片8点が出土した。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	須恵器	壺	4区MF83 2層	—	(11.1)	—	内外:ロクロ調整



SY01

- 1 黒褐色土 (7.5YR 2/2) しまり弱 粘性弱 腐植土 木の根・植物根多量混入
- 2 黒褐色土 (10YR 2/2) しまり強 粘性弱 地山との混合土 酸化鉄を微量に含んだ地山との混合土 昭和時代の盛土
- 3 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根少量混入 昭和時代の盛土
- 4 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄少量 木の根少量 黒色土との混合土 昭和時代の盛土
- 5 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根少量 昭和時代の盛土
- 6 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量混入 灰黄褐色土との混合土 昭和時代の盛土
- 7 黒褐色土 (7.5YR 3/2) しまり強 粘性弱 酸化鉄多量 木の根少量混入 昭和時代の盛土
- 8 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根少量混入 黒色土との混合土 昭和時代の盛土
- 9 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根少量 地山塊径10~30mm微量混入
- 10 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根少量混入
- 11 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根微量混入
- 12 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄少量 木の根少量 におい黄褐色土径50mm混入
- 13 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性強 酸化鉄少量 木の根微量混入
- 14 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性強 酸化鉄微量混入
- 15 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性強 酸化鉄微量混入 木の根微量混入
- 16 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根少量 地山塊径10~20mm微量混入
- 17 黄褐色土 (2.5Y 5/3) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量混入 黒色土・黒褐色土との混合土
- 18 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 炭化物粒微量 酸化鉄粒径3~10mm少量 木の根少量混入 黒褐色土・におい黄褐色土との混合土
- 19 黄褐色土 (2.5Y 5/3) しまり強 粘性弱 酸化鉄少量混入 黒色土・灰黄褐色土との混合土塊径100~200mm混入
- 20 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根微量 酸化鉄少量混入 灰黄褐色土・におい黄褐色土・黒褐色土との混合土
- 21 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 木の根少量 酸化鉄少量混入
- 22 黄褐色土 (2.5Y 5/3) しまり強 粘性弱 木の根微量 酸化鉄少量混入 黒色土・黒褐色土との混合土
- 23 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量混入 黒褐色土との混合土
- 24 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 炭化物粒径1~5mm微量 酸化鉄微量 木の根微量 地山塊径20~100mm微量混入
- 25 黒色土 (7.5YR 1.7/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根少量混入
- 26 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根微量混入
- 27 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根少量混入 黒褐色土・褐灰色土との混合土
- 28 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根少量混入
- 29 黒色土 (7.5YR 2/1) しまり強 粘性弱 酸化鉄微量 木の根微量混入
- 30 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性強 酸化鉄微量 木の根微量混入
- 31 黒色土 (10YR 1.7/1) しまり強 粘性強 酸化鉄少量 木の根少量混入
- 32 黒色土 (10YR 2/1) しまり強 粘性強 酸化鉄微量 下部に行く程黒褐色土 (10YR 3/1)
- 33 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性強 酸化鉄多量混入

第61図 4区SY01と遺構外出土遺物

## 5 5区の検出遺構と遺物

### (1) 縄文時代

#### ①土坑

##### S K 21 土坑 (第62図)

L O 82、L P 82 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1層には火山灰が混入する。1～2層は平安時代、4～7層は縄文時代の堆積土と思われる。平面形は、長軸2.06 m、短軸2.02 mの略円形である。確認面からの深さは0.48 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、縄文土器 (深鉢の底部2点、破片13点) である。1層で十和田 a 火山灰が認められたが、遺構の底部より縄文土器が出土したため縄文時代の土坑と考えられる。

### (2) 平安時代

#### ①柱列

##### S A 22 柱列 (第62図、図版15・16)

L M 78、L N 79 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。2間の柱列である。総長2.90 mで、柱間距離は北から1.60 m、1.30 mである。柱穴は一辺約30 cmの方形で、深さ17～22 cmである。P 1から径15 cm、P 2から径17 cmの柱材が出土した。方位はN-36°-Wである。東側調査範囲外にある掘立柱建物の西側柱列である可能性がある。

#### ②土坑

##### S K 02 土坑 (第63図、図版16)

L P 85 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1・2層には火山灰が混入する。平面形は、長軸1.16 m、短軸0.72 mの不整形である。確認面からの深さは0.42 mである。壁は南側を除いて緩やかに立ち上がり、南側は急に立ち上がる。底面には凹凸があり、東側に段をもつ。出土遺物はない。

##### S K 03 土坑 (第63図、図版16)

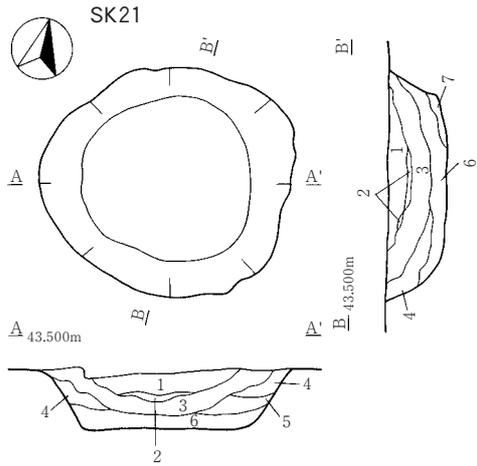
L O 83・84 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の2層は、厚さ2～3 cmの炭化物の層である。平面形は、長軸1.32 m、短軸1.22 mの方形である。確認面からの深さは0.22 mである。壁は急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

##### S K 04 土坑 (第63図、図版16)

L O 83、L P 83 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の2・4層は、厚さ2～5 cmの炭化物の層である。1層上面には焼土の広がり認められた。平面形は、長軸1.25 m、短軸1.18 mの略円形である。確認面からの深さは0.34 mである。壁は急に立ち上がる。底面には凹凸があり、北側と東側に段をもつ。出土遺物はない。

##### S K 10 土坑 (第63図)

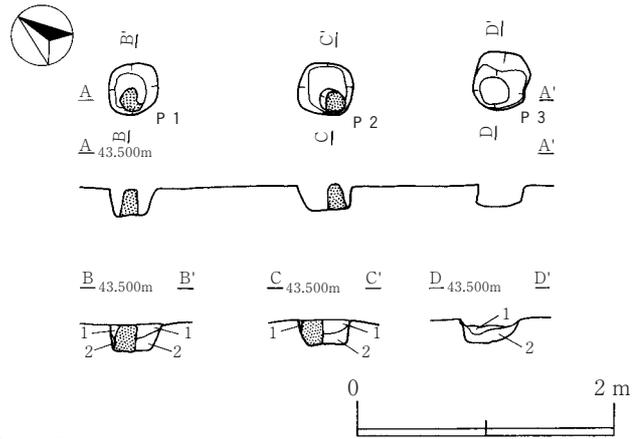
L O 84、L P 84 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸0.46 m、短軸0.42 mの楕円形である。確認面からの深さは0.16 mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。



SK21

- 1 黒色土 (10YR1.7/1) しまり強 粘性弱  
火山灰粒多量 炭化物粒微量 酸化鉄少量混入
- 2 黒色土 (10YR 2/1) しまり弱 粘性強  
地山粒微量混入
- 3 褐灰色土 (10YR 4/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄多量 地山粒少量混入
- 4 灰黄褐色土 (10YR 6/2) しまり強 粘性強  
酸化鉄多量 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 多量混入
- 5 褐灰色土 (10YR 4/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄多量 地山粒多量混入
- 6 褐灰色土 (10YR 4/1) しまり弱 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量 地山塊多量混入
- 7 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり弱 粘性強  
暗灰黄色土微量 地山粒微量混入

SA22



SA22 P1

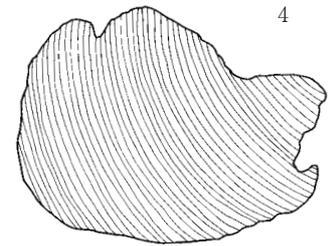
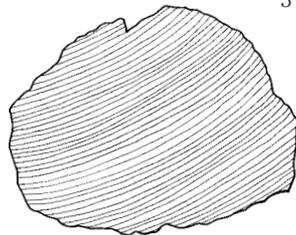
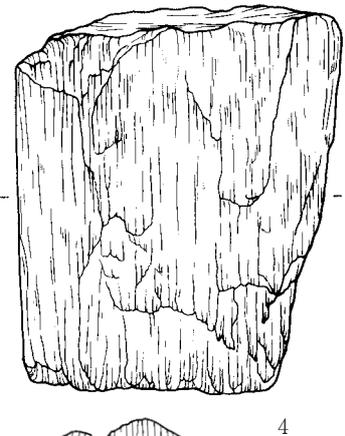
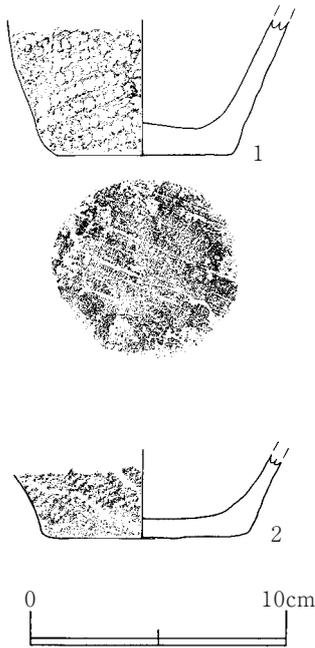
- 1 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性強  
炭化物粒少量 酸化鉄微量 地山粒少量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒少量 酸化鉄微量 地山粒多量混入

SA22 P2

- 1 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性強  
炭化物粒少量 酸化鉄微量 地山粒少量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒少量 酸化鉄微量 地山粒多量混入

SA22 P3

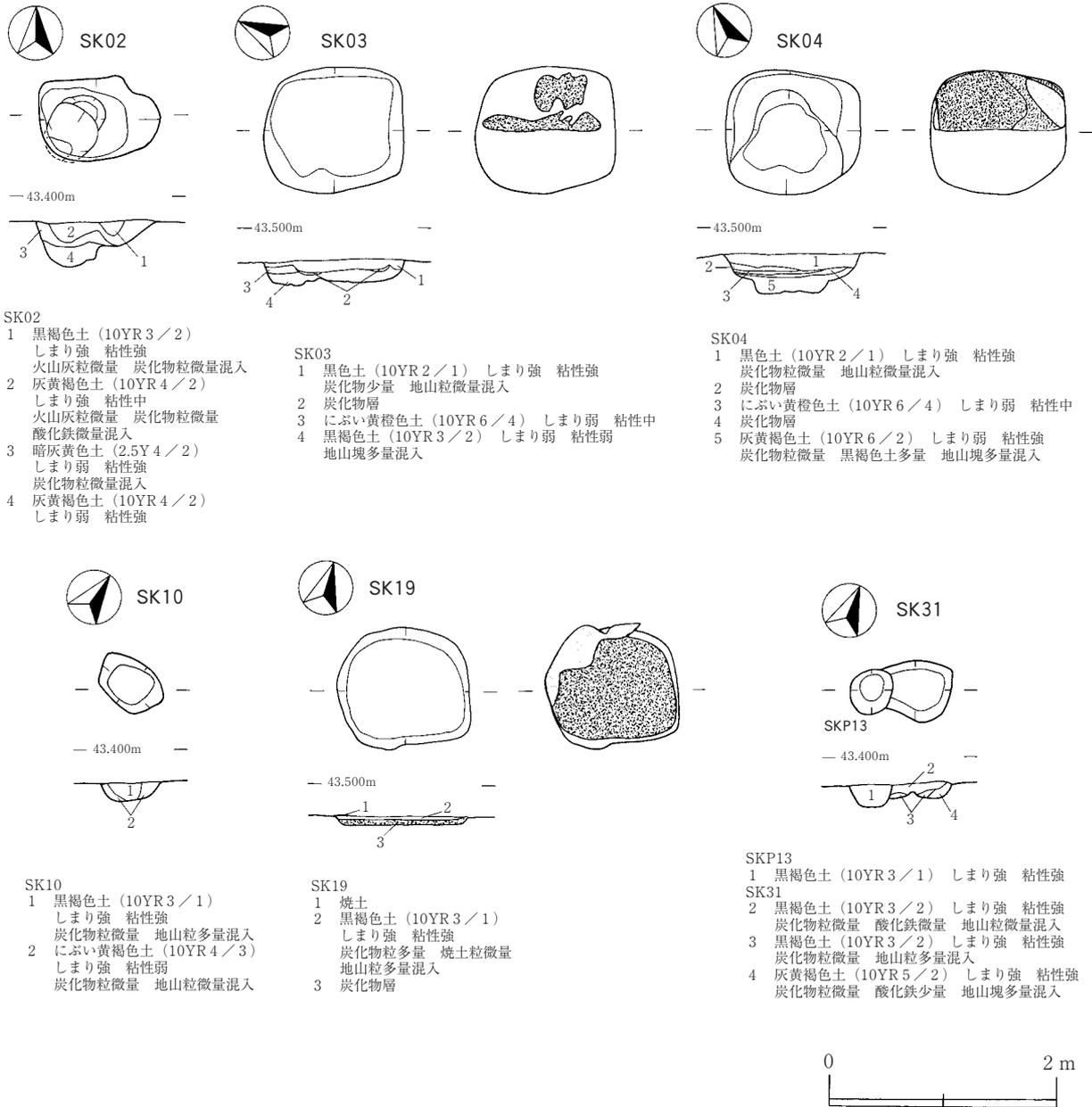
- 1 黒褐色土 (10YR 3/1) しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量 地山粒少量混入
- 2 灰黄褐色土 (10YR 4/2) しまり強 粘性強  
炭化物粒少量 酸化鉄微量 地山粒多量混入



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	縄文土器	深鉢	5区SX20・SK21	—	6.7	—	
2	縄文土器	深鉢	5区SK21	—	7.8	—	

番号	種別	器種	調査区・遺構	長さ(cm)	直径(cm)	特 徴
3	木製品	柱材	5区SA22 P2	25.7	12.1~15.3	
4	木製品	柱材	5区SA22 P1	20.5	12.6~17.1	

第62図 5区SK21、SA22と出土遺物



第63図 5区SK02・03・04・10・19・31

SK19土坑 (第63図)

LN 81 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。重複はない。覆土の1層は焼土、3層は厚さ5cmの炭化物の層である。平面形は、長軸1.28m、短軸1.08mの略円形である。確認面からの深さは0.06mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

SK31土坑 (第63図)

LO 84 グリッドのVI層 (地山) 上面で確認した。SKP13と重複し、本遺構が古い。平面形は、長軸0.58m、短軸0.52mの不整形である。確認面からの深さは、0.14mである。壁はやや急に立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物はない。

## ③溝跡

## S D 05 溝跡 (第64図、図版15)

L L 73・74、L M 73～77、L N 76～79、L O 79～81、L P 80～84 グリッドのVI層(地山)上面で確認した。南東端・北西端は調査区外にかかり、南東から北西に延びる。重複はない。確認長57.50 m、幅0.70～1.00 m、深さ0.14～0.24 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、縄文土器(破片1点)、土師器(坏破片1点、甕破片13点)、須恵器(坏破片1点)である。

## S D 06 溝跡 (第64図、図版15)

L K 69、L L 69～72、L M 71～75、L N 74～78、L O 76～79 グリッドのVI層(地山)上面で確認した。南東端・北西端は調査区外にかかり、南東から北西に延びる。重複はない。確認長44.92 m、幅約1.64～3.32 m、深さ0.42～0.84 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干凹凸があるがほぼ平坦である。北西端が部分的に窪んでいる。出土遺物は、縄文土器(破片12点)、縄文時代の石器(搔器2点、剥片2点)、土師器(坏破片7点、甕破片56点)、須恵器(坏破片8点)である。

## S D 07 溝跡 (第64図、図版15)

L K 66～68、L L 68～71、L M 70～73、L N 73～75 グリッドのVI層(地山)上面で確認した。南東端・北西端は調査区外にかかり、南東から北西に延びる。重複はない。確認長38.87 m、幅0.58～0.94 m、深さは0.15～0.22 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。出土遺物はない。

## S D 08 溝跡 (第64図、図版15)

L J 63・64、L K 64～67、L L 66～70、L M 69～71、L N 71 グリッドのVI層(上面)で確認した。南東端・北西端は調査区外にかかり、南東から北西に延びる。重複はない。確認長33.54 m、幅0.86～2.04 m、深さ0.14～0.22 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。出土遺物はない。

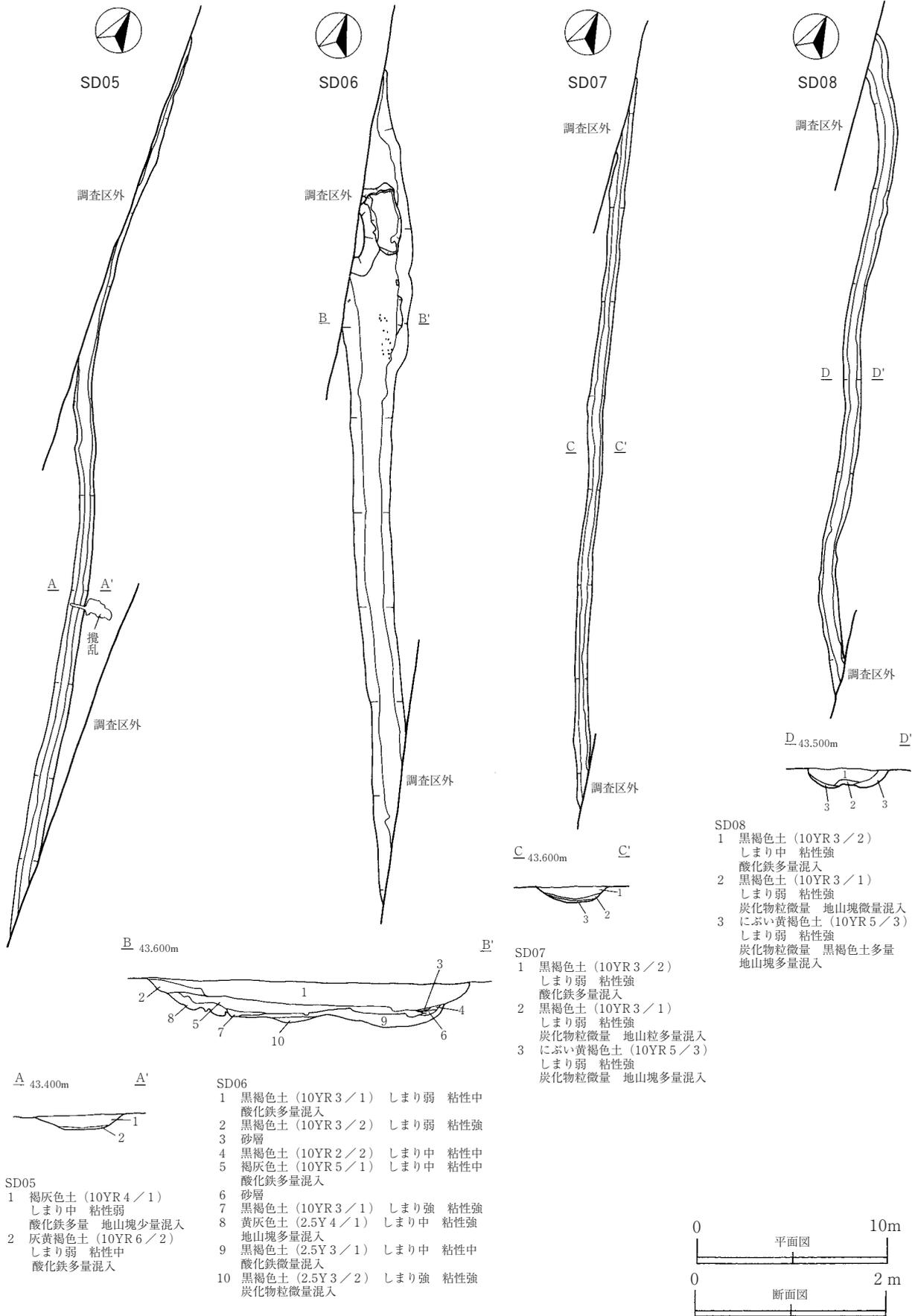
## ④性格不明遺構

## S X 01 性格不明遺構 (第65図、図版16)

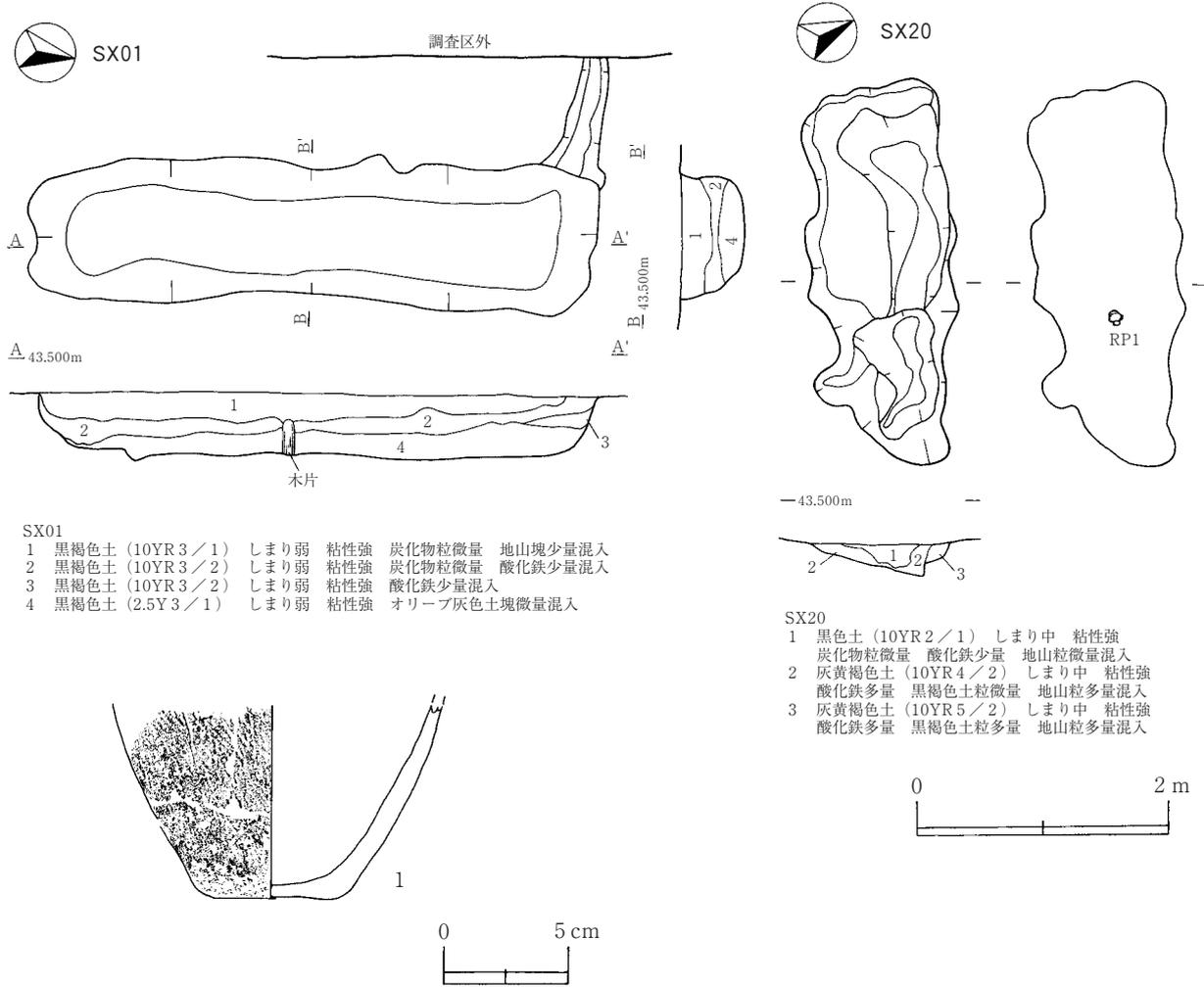
L P 86、L P 87、L Q 86、L Q 87 グリッドのVI層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸4.54 m、短軸1.02 mの細長い隅丸長方形である。確認面からの深さは0.50 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。出土遺物は、木片(1点)である。1層下面から打ち込まれた形で出土した。

## S X 20 性格不明遺構 (第65図、図版16)

L N 82、L O 82 グリッドのVI層(地山)上面で確認した。平面形は、長軸約3.18 m、短軸約1.22 mの不整形である。確認面から底面の深さは0.26 mである。壁は、北側は急に立ち上がり、南側は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸があり、東側が窪んでいる。出土遺物は、縄文土器(底部～胴部1点、底部1点、破片57点)、土師器(破片3点)である。遺構内から土師器が出土したことで平安時代のものと思われるが、縄文時代の遺構であった可能性もある。



第64図 5区 S D 05・06・07・08



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	縄文土器	深鉢	5区SX20 RP1	—	5.7	—	

第65図 5区SX01・20と出土遺物

⑤柱穴様ピット

5区では、調査区北端部で6基、北東部で5基、合計11基の柱穴様ピットを検出した。詳細を観察表にまとめた。調査当初、SKP 22～24として確認されたSA 22以外に規則的な配列は認められず、柱痕も確認できなかった。出土遺物はない。

(3) 遺構外出土遺物

5区の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器と石器、平安時代の土師器・須恵器である。縄文時代の土器は、晩期の深鉢形土器の胴部破片32点である。石器は、搔器2点、剥片6点である。土師器は、坏破片8点や甕破片33点である。須恵器は、坏破片12点、甕破片5点である。

第11表 5区柱穴様ピット計測一覧

遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 11	L P 85	方形	28	24	5	43.17	
S K P 12	L O 84	楕円形	30	24	3	43.17	
S K P 13	L O 84	円形	40	36	15	43.03	S K 31より新しい。
S K P 16	L P 83	円形	26	22	12	43.10	
S K P 17	L P 83	楕円形	26	22	5	43.17	
S K P 25	L N 79	方形	36	32	24	43.29	
S K P 26	L N 78	方形	30	22	19	43.06	
S K P 30	L M 78	方形	24	22	19	43.06	
S K P 33	L M 78	方形	32	24	19	43.05	
S K P 34	L M 77	方形	29	28	21	43.00	
S K P 35	L N 82、L O 82	楕円形	41	40	13	42.81	

6 6区の検出遺構と遺物

(1) 縄文時代

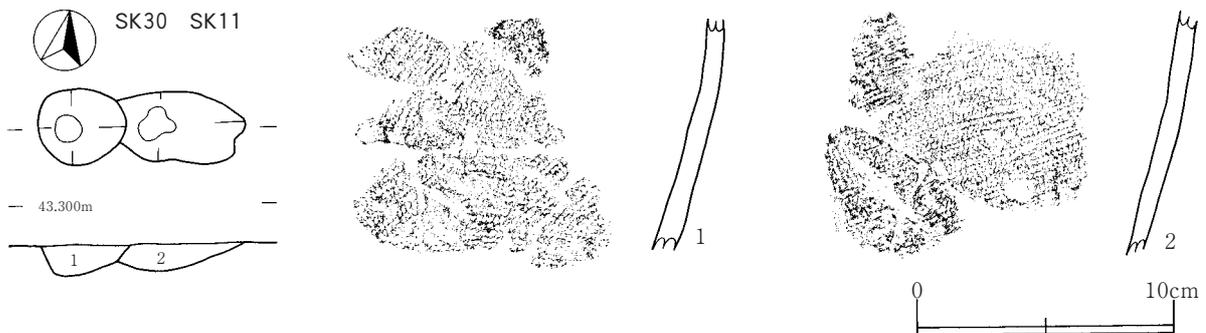
①土坑

S K 11 土坑 (第 66 図、図版 18)

MF 137 グリッドのV層 (地山) 上面で確認した。S K 30 と重複し、本遺構が古い。平面形は、推定で長軸 1.20 m、短軸 0.55 m の歪な楕円形である。確認面からの深さは 0.21 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は、縄文土器 (破片 65 点) である。

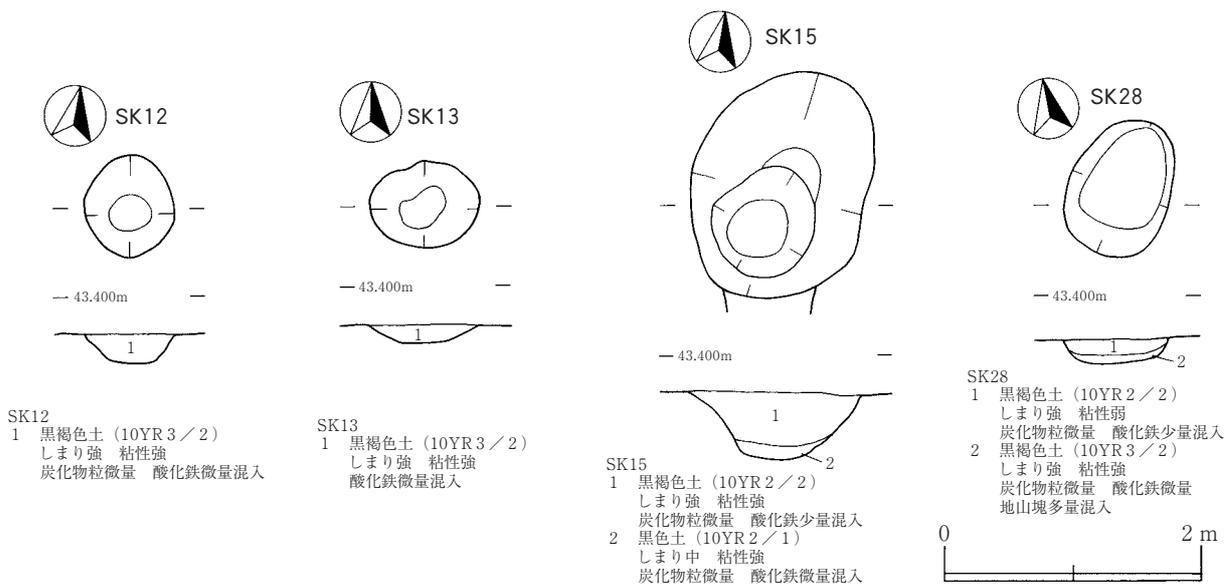
S K 30 土坑 (第 66 図、図版 18)

MF 137 グリッドのV層 (地山) 上面で確認した。S K 11 と重複し、本遺構が新しい。平面形は、長軸 0.68 m、短軸 0.61 m の円形である。確認面からの深さは 0.24 m である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。



- SK30  
1 黒褐色土 (10YR3/1)  
しまり強 粘性強  
酸化鉄微量混入
- SK11  
2 黒褐色土 (10YR3/1)  
しまり強 粘性強  
酸化鉄少量混入

番号	種別	器種	調査区・遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特 徴
1	縄文土器	深鉢	6区SK11 RP1	—	—	—	
2	縄文土器	深鉢	6区SK11 RP1	—	—	—	



- SK12  
1 黒褐色土 (10YR3/2)  
しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量混入

- SK13  
1 黒褐色土 (10YR3/2)  
しまり強 粘性強  
酸化鉄微量混入

- SK15  
1 黒褐色土 (10YR2/2)  
しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄少量混入  
2 黒色土 (10YR2/1)  
しまり中 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量混入

- SK28  
1 黒褐色土 (10YR2/2)  
しまり強 粘性弱  
炭化物粒微量 酸化鉄少量混入  
2 黒褐色土 (10YR3/2)  
しまり強 粘性強  
炭化物粒微量 酸化鉄微量  
地山塊多量混入

第66図 6区S K 11・12・13・15・28・30と出土遺物

(2) 平安時代

①土坑

平安時代の土坑として4基を検出した。出土遺物はなかったが、後述する平安時代の遺構のS D 01の覆土等と比較検討した結果、4基とも平安時代の遺構とした。

S K 12 土坑 (第66図、図版18)

MH 142・143グリッドのV層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸0.82 m、短軸0.70 mの円形である。確認面からの深さは0.25 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

S K 13 土坑 (第66図)

MH 143グリッドのV層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸0.86 m、短軸0.68 mの円形である。確認面からの深さは0.14 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

S K 15 土坑 (第66図、図版18)

MM 149、MN 149グリッドのV層(地山)上面で確認した。S D 04と重複し、本遺構が古い。平面形は、長軸1.90 m、短軸1.43 mの楕円形である。確認面からの深さは0.55 mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

S K 28 土坑 (第66図、図版18)

MP 148、MQ 148グリッドのV層(地山)上面で確認した。重複はない。平面形は、長軸1.11 m、短軸0.82 mの楕円形である。確認面からの深さは0.21 mである。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

②溝跡

S D 01 溝跡 (第67図)

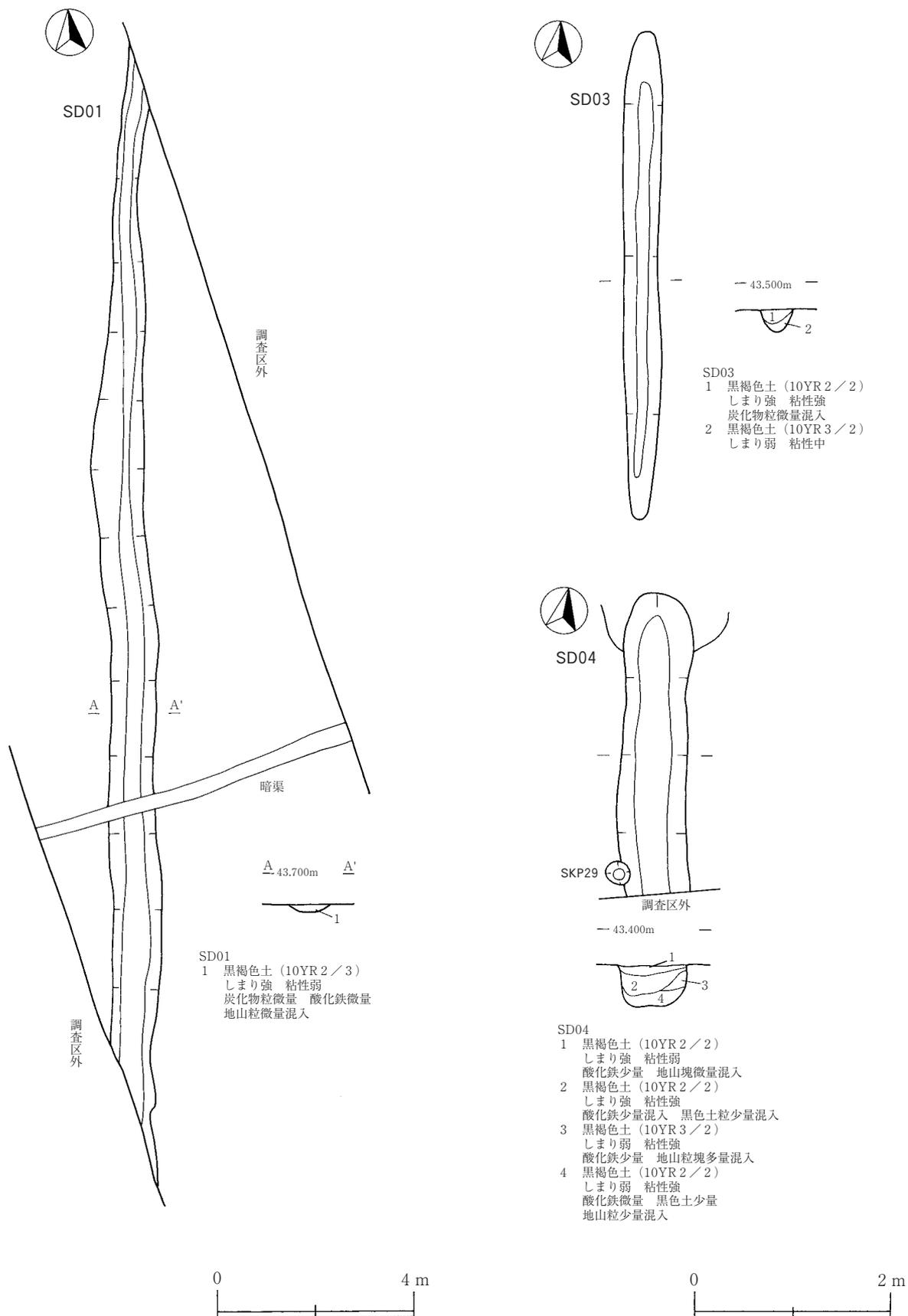
MG 137～143、MH 137～139グリッドのV層(地山)上面で確認した。北端と南端が調査区外にかかり、南から北へ延びる溝跡である。重複はないが、暗渠に切られている。確認長21.36 m、幅0.23～0.54 m、深さ約0.03～0.17 mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物は、縄文土器(破片1点)、土師器(甕破片3点)、須恵器(坏破片1点)、近世陶磁器の破片1点である。

S D 03 溝跡 (第67図、図版18)

MH 141～143グリッドのV層(地山)上面で確認した。重複はない。長さ5.02 m、幅0.28～0.31 m、深さ0.17～0.25 mである。壁は急に立ち上がる。礫層に掘られているため底面には凹凸がある。出土遺物はない。

S D 04 溝跡 (第67図、図版18)

MM 148・149、MN 149グリッドのV層(地山)上面で確認した。南側が調査区外にかかり、南へ更に延びるものと推定される。S K 15、S K P 29と重複し、S K 15より新しく、S K P 29より古い。確認長3.08 m、幅0.62～0.71 m、深さは0.24～0.52 mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。



第67図 6区 S D 01・03・04

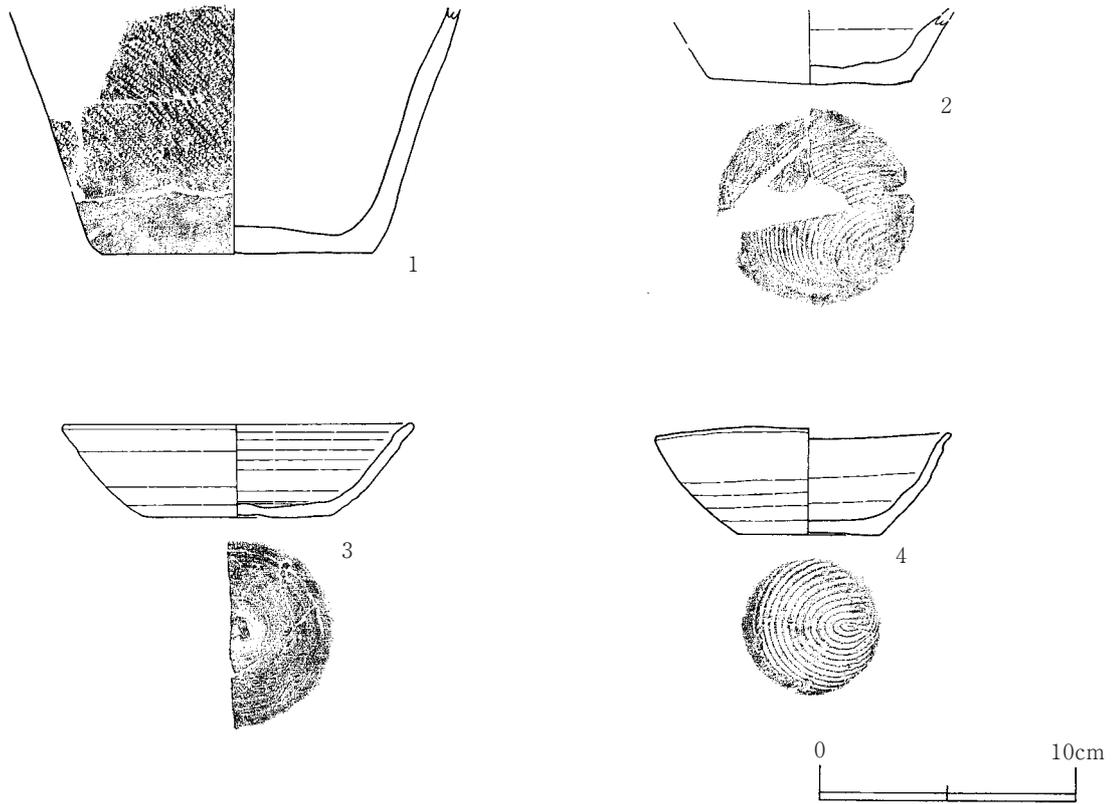


第12表 6区柱穴様ピット計測一覧

遺構番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	新旧関係
S K P 05	N B 146	円形	40	36	33	42.50	
S K P 06	N C 146	円形	38	36	22	42.63	
S K P 07	N D 146	円形	34	32	26	42.59	
S K P 08	N D 146	円形	24	22	4	42.84	
S K P 09	N D 146	楕円形	34	28	9	42.75	
S K P 10	N D 146	円形	32	32	20	42.63	
S K P 16	M P 147	円形	26	22	15	42.99	
S K P 17	M P 147、M Q 147	円形	26	22	11	43.01	
S K P 18	M Q 147	円形	24	20	12	42.98	
S K P 19	M Q 147	円形	42	40	14	42.96	
S K P 20	M Q 147	円形	22	22	8	43.04	
S K P 21	M Q 147	円形	22	22	5	43.08	
S K P 22	M Q 148	円形	22	20	11	43.00	
S K P 23	M Q 148、M R 148	円形	22	20	5	43.04	
S K P 24	M R 147	円形	18	16	4	43.07	
S K P 25	M R 147	円形	24	22	8	43.05	
S K P 26	M Q 148	円形	22	22	6	43.03	
S K P 27	M P 148	円形	26	26	11	42.97	
S K P 29	M M 148	円形	26	24	25	42.84	S D 04より新しい。

## (3) 遺構外出土遺物

6区の遺構外出土遺物は、縄文時代の土器、平安時代の土師器・須恵器、近世以降の陶磁器である。縄文時代の土器は、晩期の深鉢形土器の底部2点、胴部破片29点である。土師器は、網代痕のある坏底部破片1点、坏破片93点、内面を黒色処理した坏破片4点、甕破片465点である。須恵器は、坏破片44点、甕破片46点である。第5表の分類項目に当てはめると、第69図の3は須恵器の坏b、第69図の4は土師器の坏dである。



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	縄文土器	深鉢	6区MH147・148	—	10.4	—	
2	土師器	甕	6区MK145 I層	—	8.0	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	須恵器	坏	6区NJ145 II層	—	7.3	3.7	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り
4	土師器	坏	6区西側工事箇所表採	11.5	5.5	4.2	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り

第69図 6区遺構外出土遺物

### 7 7区の検出遺構と遺物

7区では、遺構が検出されなかった。出土遺物は、平安時代の土師器・須恵器、近世以降の陶磁器である。土師器は、坏の破片4点、甕の破片22点が出土した。須恵器は、甕の破片3点が出土した。

## 第3節 確認調査出土遺物

平成14年度の確認調査において、縄文土器、平安時代の土師器・須恵器・木製品、中世以降の陶磁器などの遺物が出土した。これらの遺物の中には、完形品が多数あったため、厳選したものを第70～74図に掲載した。第5表の分類項目に当てはめると掲載した土師器と須恵器の遺物は下記のようになる。技法等の特徴は観察表に記した。

第70図の1・2は、非ロクロ土師器の坏aである。

第70図の3・4・5・6、第71図の7・8は、非ロクロ土師器の坏bである。坏aの底部をヘラケズリしたものである。第71図の7は、「内」と書かれた墨書土器である。

第71図の9は、非ロクロ土師器の長胴甕aである。底部の繊維圧痕の形状は、坏aと坏bのものと類似している。

第71図の10は、ロクロ土師器の坏aである。

第71図の11・12は、ロクロ土師器の坏cである。

第72図の1は、ロクロ土師器の坏dである。

第72図の2～6は、ロクロ土師器の坏eである。

第72図の7・8は、ロクロ土師器の坏fである。

第72図の9は、ロクロ土師器の坏gである。

第72図の10・11は、ロクロ土師器の坏hである。10は「上」、11は「六千」と書かれた墨書土器である。

第72図の12はロクロ土師器の坏iで、「上」と書かれた墨書土器である。

第73図の1は、ロクロ土師器の坏jである。

第73図の2・3は、ロクロ土師器の台付坏aである。

第73図の4は、ロクロ土師器の台付坏bである。

第73図の5は、ロクロ土師器の皿bである。

第73図の6・7は、内面を黒色処理したロクロ土師器の坏aである。

第73図の8は、内面を黒色処理したロクロ土師器の坏bである。

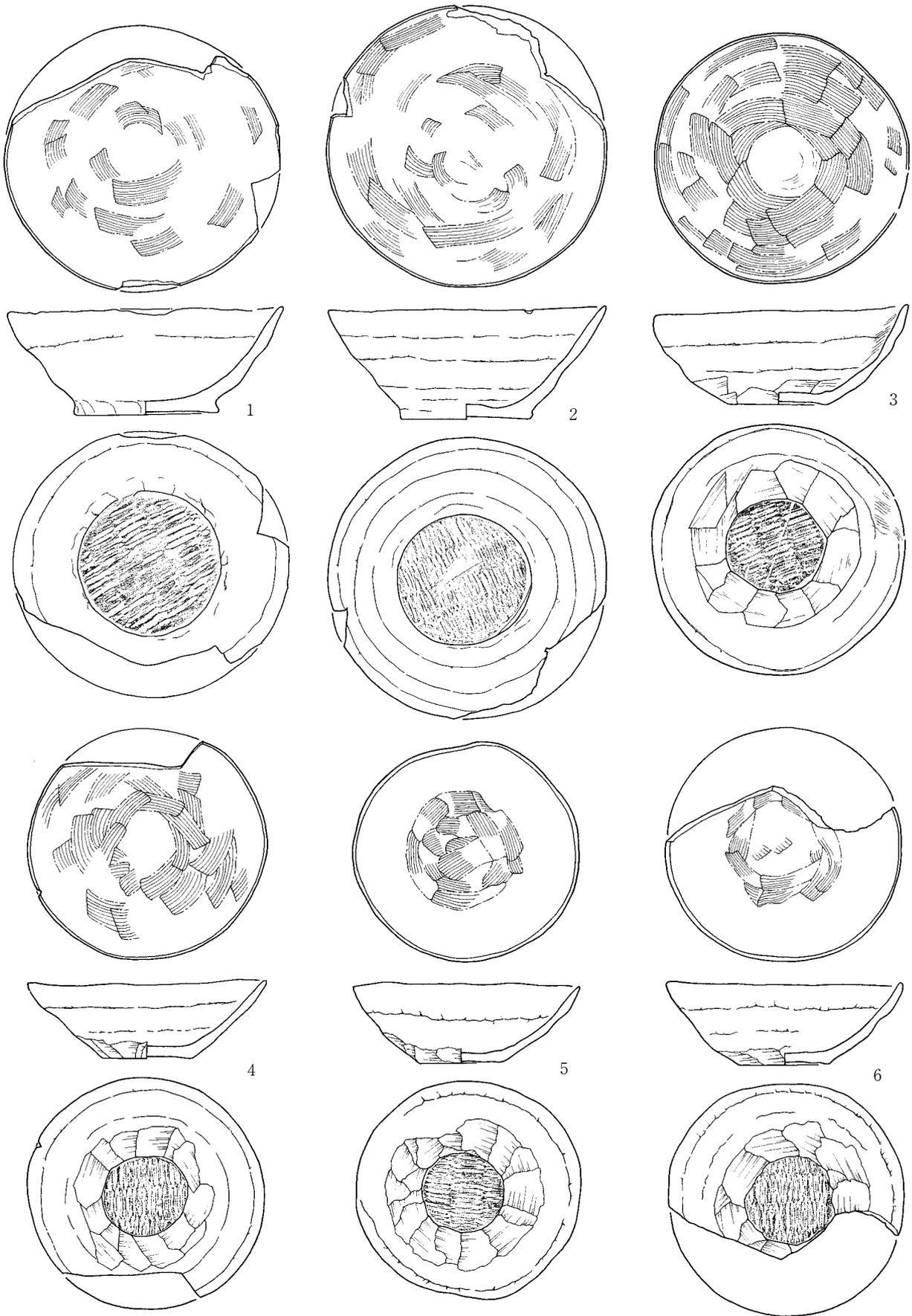
第73図の9は、内外両面を黒色処理したロクロ土師器の坏bである。

第73図の10は、須恵器の坏cである。

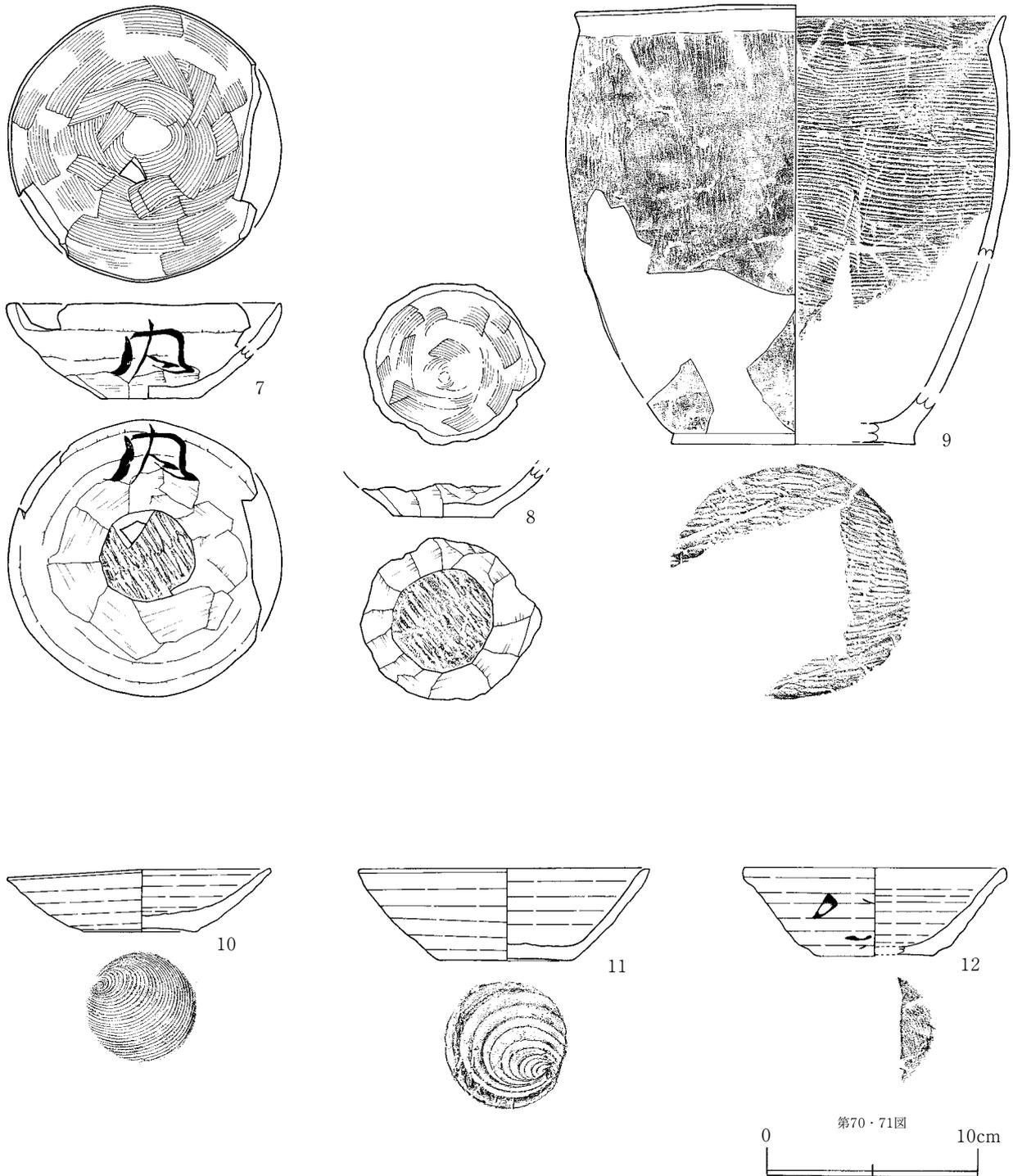
第73図の11は須恵器の坏eで、「九千」と書かれた墨書土器である。

第73図の12は須恵器の坏dで、「九千」と書かれた墨書土器である。

第74図の1は、須恵器の坏bである。



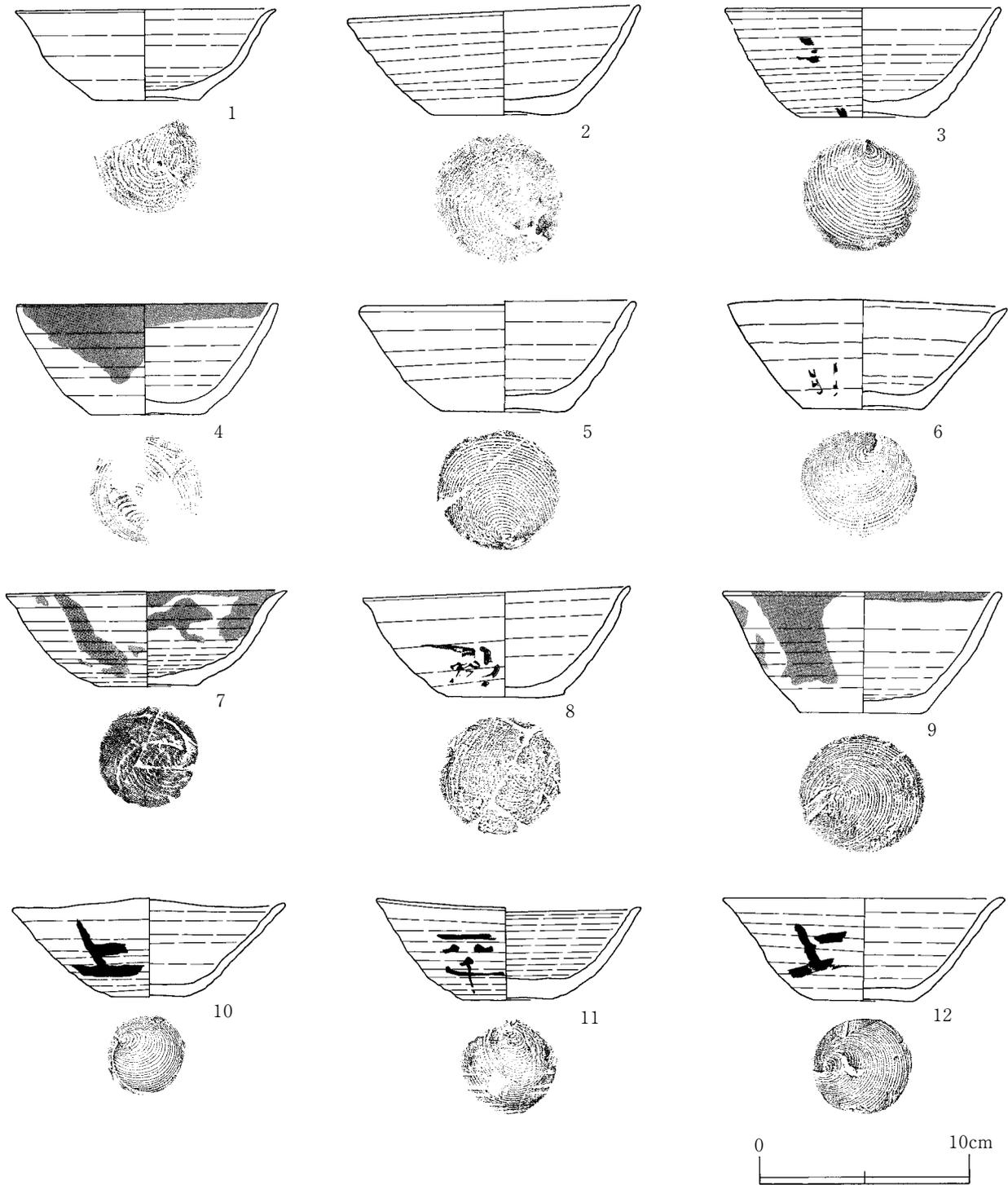
第70図 確認調査出土遺物（1）



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	土師器	坏	34トレンチ	14.5	7.7	5.6	内:カキメ、外:粘土紐形成痕、底:網代痕
2	土師器	坏	34トレンチ	14.6	6.8	6.1	内:カキメ、外:粘土紐形成痕、底:網代痕
3	土師器	坏	34トレンチ	13.3	5.2	5.4	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
4	土師器	坏	34トレンチ	12.5	4.6	4.2	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
5	土師器	坏	34トレンチ	11.8	4.2	4.3	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
6	土師器	坏	34トレンチ	12.4	4.6	4.5	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕
7	土師器	坏	34トレンチ	13.0	4.8	4.7	内:カキメ、外:粘土紐形成痕→ヘラケズリ、底:網代痕、墨書
8	土師器	坏	ハ-2トレンチ	—	4.8	—	内:カキメ、外:ヘラケズリ、底:網代痕
9	土師器	長胴甕	34トレンチ	20.5	11.5	21.2	内外:カキメ、外:炭化物付着、底:網代痕
10	土師器	坏	34トレンチ	12.5	5.5	3.1	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
11	土師器	坏	34トレンチ	13.9	6.3	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
12	土師器	坏	35トレンチ	(12.5)	(5.5)	4.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書

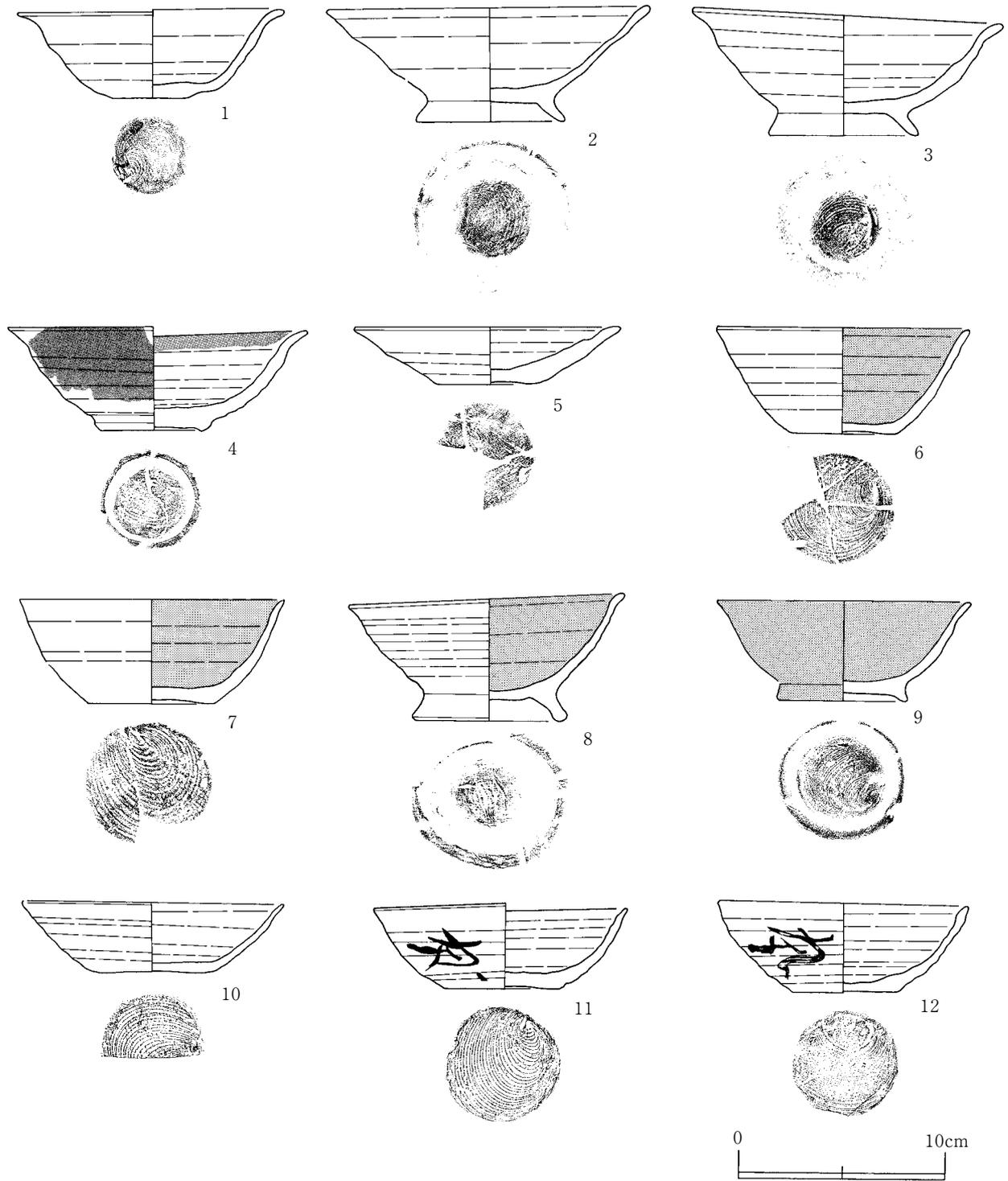
第71図 確認調査出土遺物(2)

第4章 調査の記録



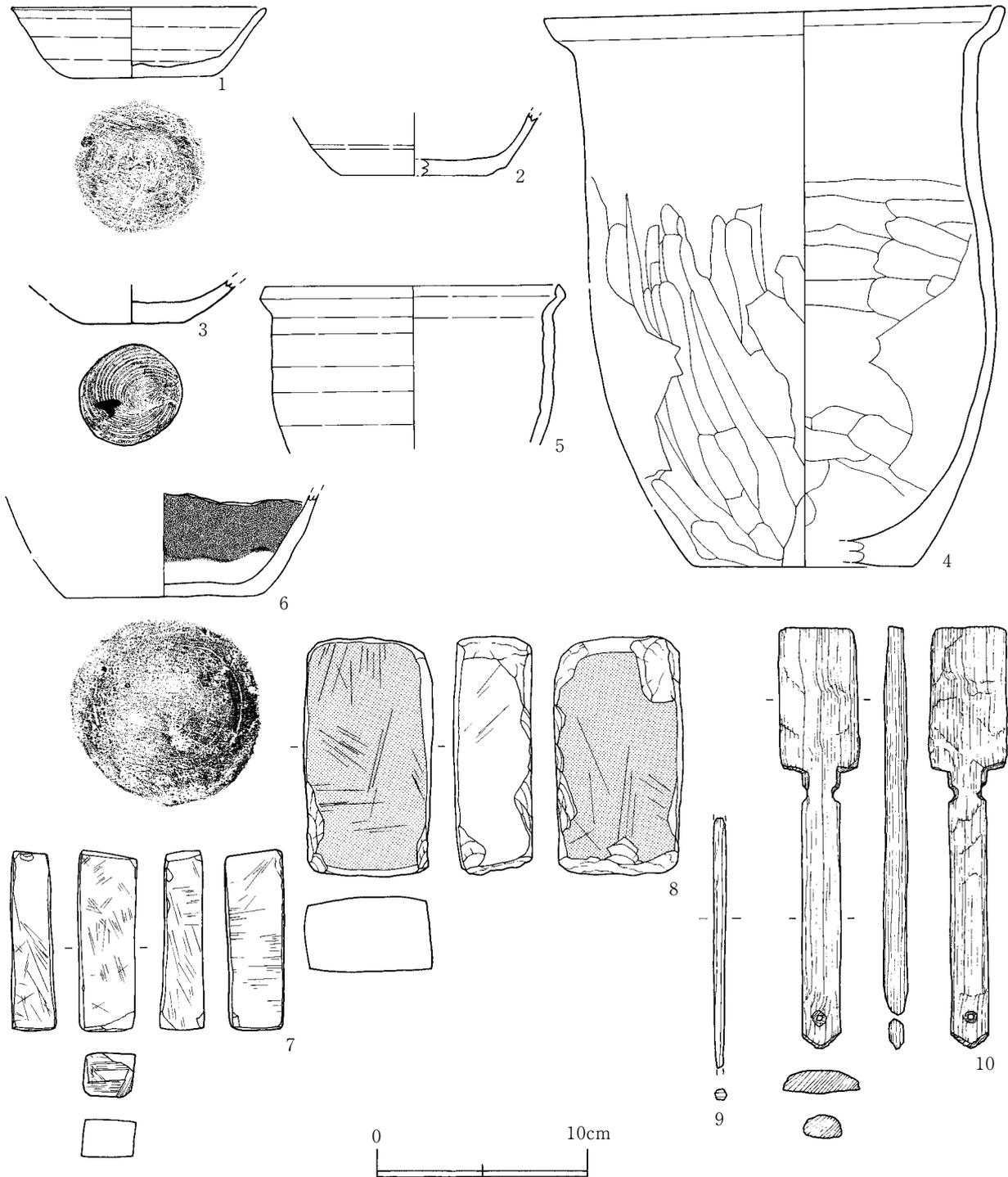
番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	34トレンチ	(12.4)	5.1	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	坏	34トレンチ	14.0	6.4	5.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	坏	34トレンチ	(13.1)	5.9	5.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
4	土師器	坏	35トレンチ	(12.3)	5.4	5.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、炭化物付着
5	土師器	坏	35トレンチ	13.3	6.0	5.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
6	土師器	坏	35トレンチ	(13.5)	5.7	5.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
7	土師器	坏	34トレンチ	13.5	5.1	4.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、炭化物付着
8	土師器	坏	35トレンチ	12.7	5.6	5.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
9	土師器	坏	35トレンチ	13.3	6.1	5.9	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、炭化物付着
10	土師器	坏	34トレンチ	12.8	3.7	4.8	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
11	土師器	坏	34トレンチ	12.6	4.9	5.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
12	土師器	坏	34トレンチ	13.3	4.8	5.0	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書

第72図 確認調査出土遺物(3)



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴
1	土師器	坏	34トレンチ	12.9	3.9	4.4	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
2	土師器	台付坏	34トレンチ	(15.4)	7.1	5.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
3	土師器	台付坏	34トレンチ	(14.7)	7.2	6.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
4	土師器	台付坏	34トレンチ	14.5	5.8	5.1	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
5	土師器	皿	34トレンチ	12.9	5.2	2.9	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
6	土師器	坏	49・50トレンチ	(12.2)	5.0	5.3	内外:ロクロ調整、内:ヘラミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
7	土師器	坏	35トレンチ	(12.8)	6.2	5.1	内外:ロクロ調整、内:ヘラミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
8	土師器	台付坏	34トレンチ	13.2	7.6	6.3	内外:ロクロ調整、内:ヘラミガキ→黒色処理、底:糸切り
9	土師器	台付坏	34トレンチ	(12.2)	6.3	4.9	内外:ロクロ調整→ヘラミガキ→黒色処理、底:回転糸切り
10	須恵器	坏	34トレンチ	(12.6)	5.0	3.6	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り
11	須恵器	坏	35トレンチ	(12.2)	5.8	4.3	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
12	須恵器	坏	34トレンチ	12.0	5.1	4.5	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書

第73図 確認調査出土遺物(4)



番号	種別	器種	調査区・遺構	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	須恵器	坏	34トレンチ	12.0	6.5	3.5	内外:ロクロ調整、底:回転ヘラ切り
2	須恵器	坏	35トレンチ	—	—	—	内外:ロクロ調整、底:ヘラケズリ
3	須恵器	坏	50トレンチ	—	—	—	内外:ロクロ調整、底:回転糸切り、墨書
4	土師器	甕	35トレンチ	(21.6)	(5.2)	(27.2)	内:ヘラナデ、外:ヘラケズリ・炭化物付着
5	土師器	甕	ハ-2トレンチ	(14.0)	—	—	内外:ロクロ調整
6	土師器	甕	35トレンチ	—	9.4	—	内:ナデ、外:ヘラケズリ、内外:炭化物付着、底:ヘラケズリ

番号	種別	器種	調査区・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特徴
7	石製品	砥石	35トレンチ	11.5	7.1	3.7	
8	石製品	砥石	35トレンチ	8.7	2.7	2.2	
9	木製品	箸	34トレンチ	12.1	0.7	0.6	
10	木製品	筥	34トレンチ	20.2	3.8	1.2	

第74図 確認調査出土遺物(5)

《参考文献》

- 青森県教育委員会 『垂柳遺跡』 青森県文化財調査報告書第88集 1985（昭和60）年
- 仙台市教育委員会 『富沢遺跡』 仙台市文化財調査報告書第150集 1991（平成3）年
- いわき市教育委員会 『番匠地遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第42冊 1996（平成8）年
- 米沢市教育委員会 『古志田東遺跡』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集 2001（平成13）年
- 秋田県教育委員会 『横山遺跡』 秋田県文化財調査報告書第363集 2003（平成15）年
- 工楽善通 『水田の考古学』 東京大学出版会 1991（平成3）年
- 北上市教育委員会 『森下遺跡』 北上市埋蔵文化財調査報告書第4集 1992（平成4）年
- 山形県教育委員会 『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第76集 1984（昭和59）年
- 山形県教育委員会 『境田B遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第111集 1987（昭和62）年
- 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI』 秋田県文化財調査報告書第209集 1991（平成3）年
- 秋田考古学協会 『秋田考古学』 第48号 2004（平成16）年
- 秋田県教育委員会 『江原嶋1遺跡』 秋田県文化財調査報告書第310集 2001（平成13）年
- 秋田県教育委員会 『大見内遺跡』 秋田県文化財調査報告書第374集 2004（平成16）年
- 秋田県教育委員会 『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第136集 1986（昭和61）年
- 秋田県教育委員会 『高速交通関連道路整備事業（和田御所野）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第195集 1990（平成2）年
- 秋田県教育委員会 『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第204集  
1992（平成4）年
- 秋田県教育委員会 『脇神館跡』 秋田県文化財調査報告書第284集 1999（平成11）年

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

#### 1 試料

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した試料は、1区SD01の1層（試料No.1）、1区SK48の2層（試料No.2）、3区SK03の3層（試料No.3）、5区SK04の4層（試料No.4）、5区SK19の3層（試料No.5）より採取した炭化物5点である。

#### 2 方法

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### 3 結果

第13表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を示す。<sup>14</sup>C年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。また、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は<sup>14</sup>C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

第13表 放射性炭素年代測定および暦年代較正結果

測定番号 (測定法)	試料データ	δ <sup>13</sup> C (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP±1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ暦年代範囲
PLD-2668 (AMS)	炭化物 No.1 1区SD01 1層	-25.7	650±35	cal AD 1,300 cal AD 1,370 cal AD 1,380	cal AD 1,295 - 1,315 (35.8%) <u>cal AD 1,355 - 1,390 (64.2%)</u>
PLD-2669 (AMS)	炭化物 No.2 1区SK48 2層	-24.8	1,225±35	cal AD 780	cal AD 725 - 740 (13.3%) cal AD 770 - 785 (11.4%) <u>cal AD 790 - 830 (41.8%)</u> cal AD 835 - 875 (33.5%)
PLD-2670 (AMS)	炭化物 No.3 3区SK03 3層	-26.0	1,225±35	cal AD 780	cal AD 725 - 740 (14.5%) cal AD 770 - 785 (11.7%) <u>cal AD 790 - 830 (41.2%)</u> cal AD 840 - 875 (32.7%)
PLD-2671 (AMS)	炭化物 No.4 5区SK04 4層	-24.5	1,130±40	cal AD 895 cal AD 925 cal AD 940	<u>cal AD 890 - 975 (100%)</u>
PLD-2672 (AMS)	炭化物 No.5 5区SK19 3層	-26.1	1,170±35	cal AD 885	<u>cal AD 805 - 895 (80.8%)</u>

## 引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## 第2節 テフラ分析

今村美智子 (パレオ・ラボ)

## 1 試料

試料は、1区SK83の1層(試料No.6・No.12)、1区基本土層のIV層(試料No.7・No.13)、2区北側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層(試料No.8・No.14)、2区南側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層(試料No.9・No.15)、3区SK03の1層(試料No.10・No.16)、3区北側水田跡の耕作土である3区基本土層のIV層(試料No.11・No.17)から採取された6点である。鉍物組成分析は、試料6点(No.6～11)、屈折率分析は、試料6点(No.12～17)を用いて分析を行った。

## 2 方法

## (1) 鉍物組成分析

各試料は1～20g程度秤量し、50度に設定した恒温乾燥機でよく乾燥した後、乾燥重量を秤量し3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)、4.5φ(0.044mm)のふるいを重ね、湿式ふるいを行なった。各ふるいの残渣について乾燥後秤量し、4φ以上の残渣の乾燥重量より含砂率を求めた。4φの残渣については、重液(テトラプロモエタン:比重2.90～2.96)を用いて重鉍物と軽鉍物の分離を行ない、軽鉍物と重鉍物の乾燥重量を秤量した。分離した各試料の乾燥重量を秤量し、重・軽鉍物比とした。分離をした軽鉍物と重鉍物については、封入剤(レークサイトセメント)を用いてプレパラートを作成した。軽鉍物は、長石(Pl)、火山ガラス(Gl)、不明(Opq)に分類し、重鉍物はかんらん石(Ol)、イデイングサイト(In)、単斜輝石(Cpx)、斜方輝石(Opx)、角閃石(Hor)、磁鉄鉍(Mag)に分類し、風化粒子などの不明鉍物以外の鉍物が200以上になるまで分類・計数を行なった。なお火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に基づき、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破碎型(c0:塊状・フレーク状)の5形態に分類した(第75図)。

## (2) 屈折率測定

ガラスの屈折率については横山ほか(1986)の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)を用いて屈折率(n)を測定し、その結果を範囲(range)であらわした。

## 3 結果

## (1) テフラの鉍物組成分析(第14表、第76図)

重・軽鉍物比は、軽鉍物の割合が90%以上となり、とくに試料No.8(2区基本土層のIV層)では99.5%、試料No.10(3区SK03の1層)では98.1%と非常に高い割合を示す。重鉍物の鉍物組成は斜方輝石、単斜輝石を主体とする組成である。いずれの試料も54～69%を斜方輝石が占めている。

ついで単斜輝石が多く、19～33%の値となる。角閃石はほとんど見られず、1%未満である。軽鉱物の鉱物組成は、いずれの地点も火山ガラスが55%以上の値となる。とくに試料No.9（2区基本土層のIV層）と試料No.10（3区SK03の1層）では97～99%を火山ガラスが占める。ガラスの形態分類は、いずれの地点も軽石型スポンジ状（p2）が多く30%以上の値となり、とくに試料No.9（2区基本土層のIV層）と試料No.10（3区SK03の1層）では70%以上の高い値となる。ついで軽石型繊維状（p1）が多く10～20%の値となり、平板型Y字状（b2）と急冷破碎型（c0）は1～8%の値となる。また、バブル型平板状（b1）は1%未満である。

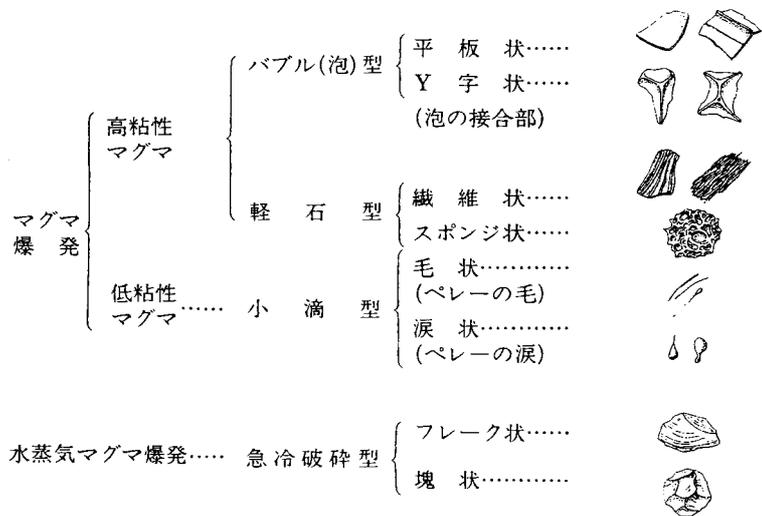
(2) 屈折率測定（第15表、第77図）

屈折率の測定には含有率の高い軽石型火山ガラスを用いた。試料No.12（1区SK83の1層）の屈折率は範囲1.5023-1.5084、平均値1.5058を示し、試料No.13（1区基本土層のIV層）の屈折率は範囲1.5019-1.5086、平均値1.5054を示し、試料No.14（2区基本土層のIV層）の屈折率は範囲1.5019-1.5080、平均値1.5054を示し、試料No.15（2区基本土層のIV層）の屈折率は範囲1.5021-1.5103、平均値1.5061を示し、試料No.16（3区SK03の1層）の屈折率は範囲1.5024-1.5081、平均値1.5051を示し、試料No.17（3区基本土層のIV層）の屈折率は範囲1.5010-1.5086、平均値1.5042を示す。

4 考察

今回分析を行った6地点から採取された試料に見られる軽石型火山ガラスを主としたテフラは、火山ガラスの形態的特徴と重鉱物組成、および火山ガラスの屈折率値から（大池，1972）の十和田aと推定される。町田ほか（1984）によると十和田aの降下テフラは主に軽石と火山ガラス片により構成され、斜方輝石と単斜輝石を含むことが特徴として挙げられている。今回分析を行った試料中にも軽石型の形態を主とした火山ガラスが多く含まれ、重鉱物組成分析でも斜方輝石と単斜輝石がよく観察される。また、軽石型火山ガラスを用いた屈折率測定結果は、範囲がおおよそ1.501-1.509となり、十和田aの従来値1.500-1.508（町田・新井，2003）におおよそ重なる。これらのことから、分析を行った試料中に含まれる火山ガラスなどのテフラは、十和田aと同定される。十和田カルデラを給源とする十和田aは、東北地方一帯をおおむね分布していることが報告されている（町田・新井，2003）。また、噴出年代は915年と推定されている（町田・新井，2003）。

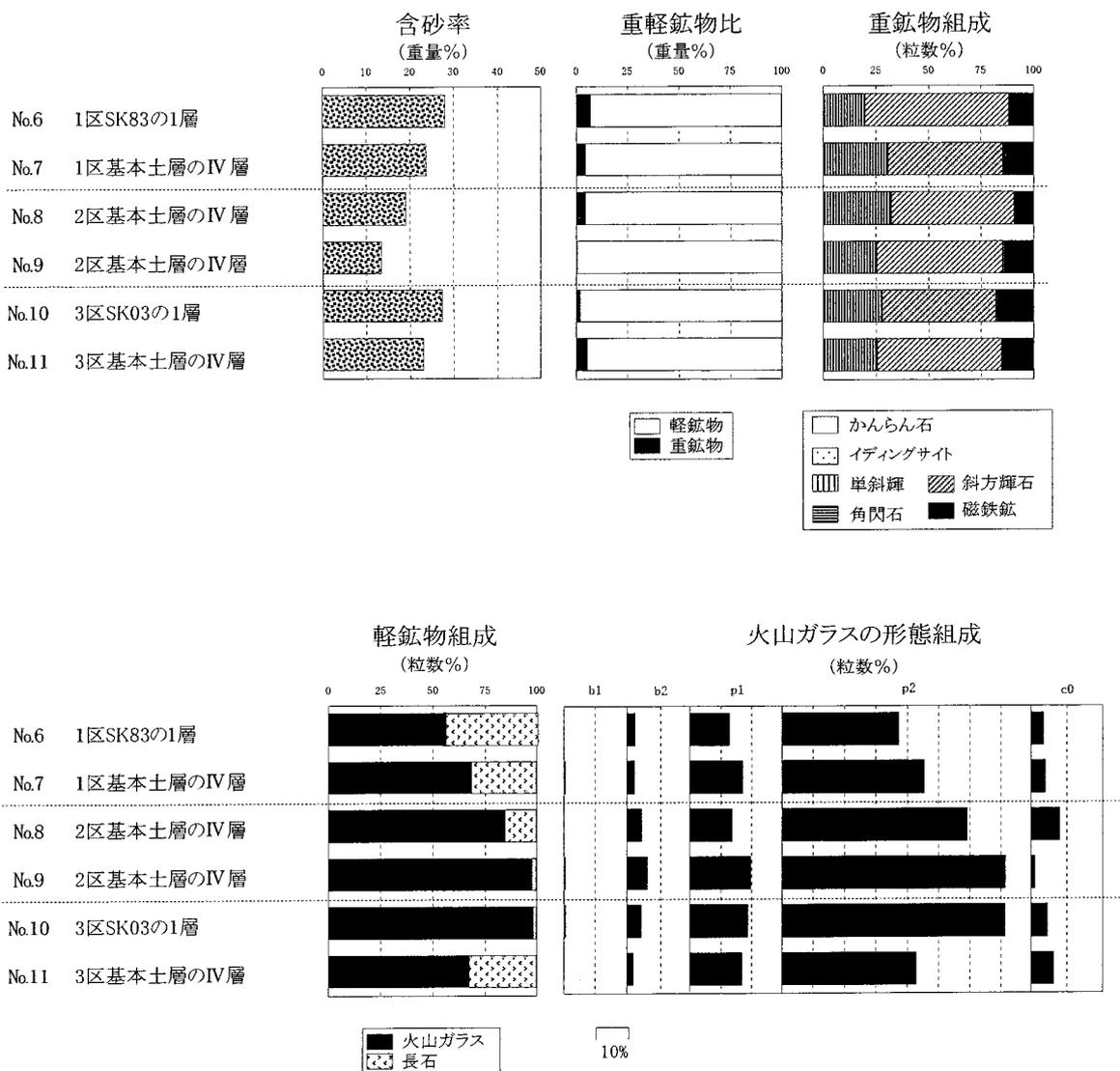
1区SK83の1層（試料No.6・No.12）、1区基本土層のIV層（試料No.7・No.13）、2区基本土層のIV層（試料No.8・No.14）、2区基本土層のIV層（試料No.9・No.15）、3区SK03の1層（試料No.10・No.16）、3区基本土層のIV層（試料No.11・No.17）の6地点から採取された試料を分析した結果、これらの堆積物中に含まれるテフラは915年に噴出した十和田aを起源とする堆積物であると同定される。



第75図 火山ガラスの形態分類

第14表 堆積物の鉱物分析結果一覧

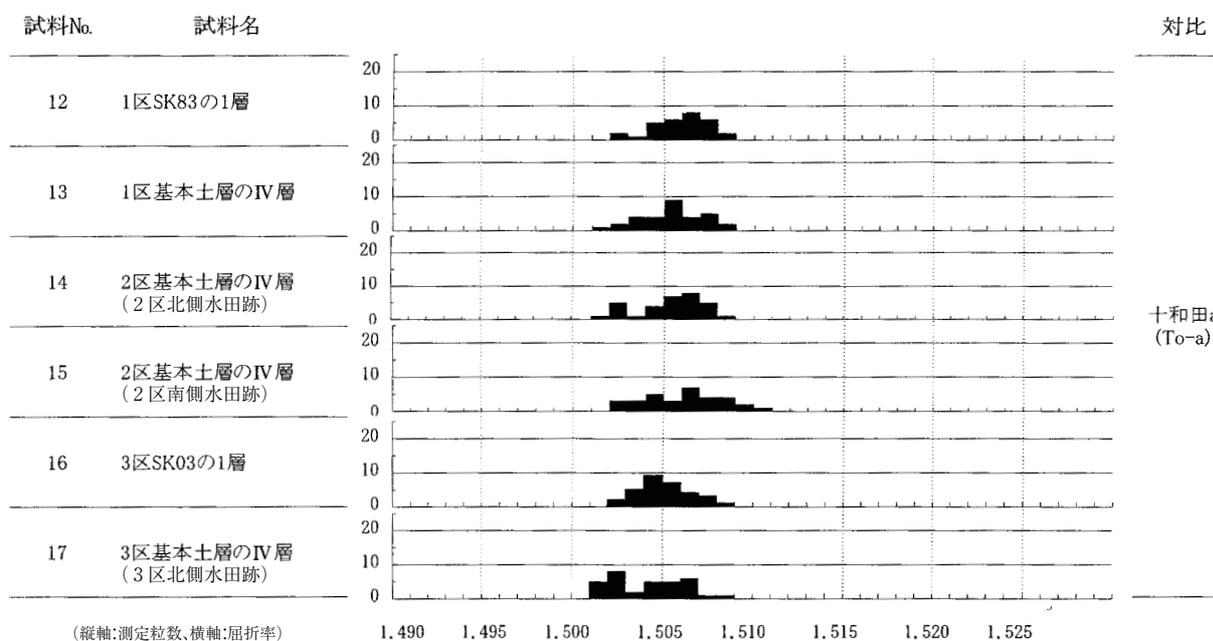
試料 No	試料名	含砂率 (重量%)	重・軽鉱物組成 (重量%)		重鉱物組成 (粒数)							軽鉱物組成 (粒数)		火山ガラス形態分類 (粒数)				
			重鉱物	軽鉱物	カン ラン石 Ol	イ ディング サイト In	単 斜 輝 石 Cpx	斜 方 輝 石 Opx	角 閃 石 Ho	磁 鉄 鉱 Mag	長 石 Pl	火 山 ガ ラ ス Vg	平 板 状 b1	Y 字 状 b2	繊 維 状 p1	ス ポ ン ジ 状 p2	破 碎 型 c0	
6	1区SK83の1層	28.0	6.7	93.3	-	-	56	193	1	32	137	170	-	7	39	114	10	
7	1区基本土層のIV層	23.7	4.3	95.7	-	-	70	123	-	33	117	254	1	8	63	168	14	
8	2区基本土層のIV層 (2区北側水田跡)	19.0	4.3	95.7	-	-	78	141	1	21	55	301	-	15	48	210	28	
9	2区基本土層のIV層 (2区南側水田跡)	13.4	0.5	99.5	-	-	57	134	2	31	7	320	1	19	64	233	3	
10	3区SK03の1層	27.3	1.9	98.1	-	-	80	154	2	49	4	265	1	11	50	191	12	
11	3区基本土層のIV層 (3区北側水田跡)	23.1	5.3	94.7	-	-	63	145	-	37	90	186	-	5	46	118	17	



第76図 4Φ残渣の鉱物組成

第15表 火山ガラスの屈折率測定結果

試料番号	試料名	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
12	1区SK83の1層	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5023 - 1.5084	1.5058
13	1区基本土層のV層	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5019 - 1.5086	1.5054
14	2区基本土層のIV層 (2区北側水田跡)	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5019 - 1.5080	1.5054
15	2区基本土層のIV層 (2区南側水田跡)	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5021 - 1.5103	1.5061
16	3区SK03の1層	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5024 - 1.5081	1.5051
17	3区基本土層のIV層 (3区北側水田跡)	軽石型ガラス(p1,p2)	1.5010 - 1.5086	1.5042



第77図 火山ガラスの屈折率とそのタイプ

参考文献

町田洋・新井房夫(2003) 新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺. 財団法人東京大学出版会, 336 p.

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学ー考古学研究と関係するテフラのカタログー. 渡辺直径編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, 865-928.

大池昭二(1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究, 11, 228-235

横山卓雄・檀原徹・山下透(1986) 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25, 21-30

### 第3節 花粉化石分析

鈴木茂 (パレオ・ラボ)

#### 1 試料

試料は、1区～3区より採取された土壌試料5点(試料No 18～22)である。No 18(1区SK55の3層)は黒色の砂質粘土、No 19(2区北側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層)は黒～黒灰色砂質粘土、No 20(2区南側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層)も黒～黒灰色の砂質粘土、No 21(3区南側水田跡の耕作土である3区基本土層のIV層)はやや砂質の黒灰色粘土、No 22(3区基本土層のIII層)は黒色の粘土である。

#### 2 方法

試料(湿重3～4g)を遠沈管に採り、10%の酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

#### 3 結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉24、草本花粉22、形態分類を含むシダ植物胞子5の計51である。これら花粉・胞子の一覧を第16表に、また花粉・胞子の分布を第78図に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示したが、No 18(1区SK55の3層)については得られた樹木花粉数が非常に少なく分布図と示すことができなかった。また、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、各試料ともスギが最も多く、出現率は50～60%を示している。次いで10%前後のブナが多く、No 19(2区基本土層のIV層)では20%近くに達している。コナラ属コナラ亜属も10%前後を示しており、その他マツ属複雑管束亜属やサワグルミ属ークルミ属が5%前後得られ、クマシデ属ーアサダ属も多くの試料で1%を越えている。草本類では20%前後を示すイネ科が最も多く、No 21(3区基本土層のIV層)では40%近くに達している。その他ではカヤツリグサ科がNo 22(3区基本土層のIII層)で10%を越え、クワ科とヨモギ属はNo 20(2区基本土層のIV層)で10%近くを示している。また水生植物のガマ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属(いずれも抽水植物)が各試料より若干検出されており、No 22(3区基本土層のIII層)では単条型胞子が多産している。

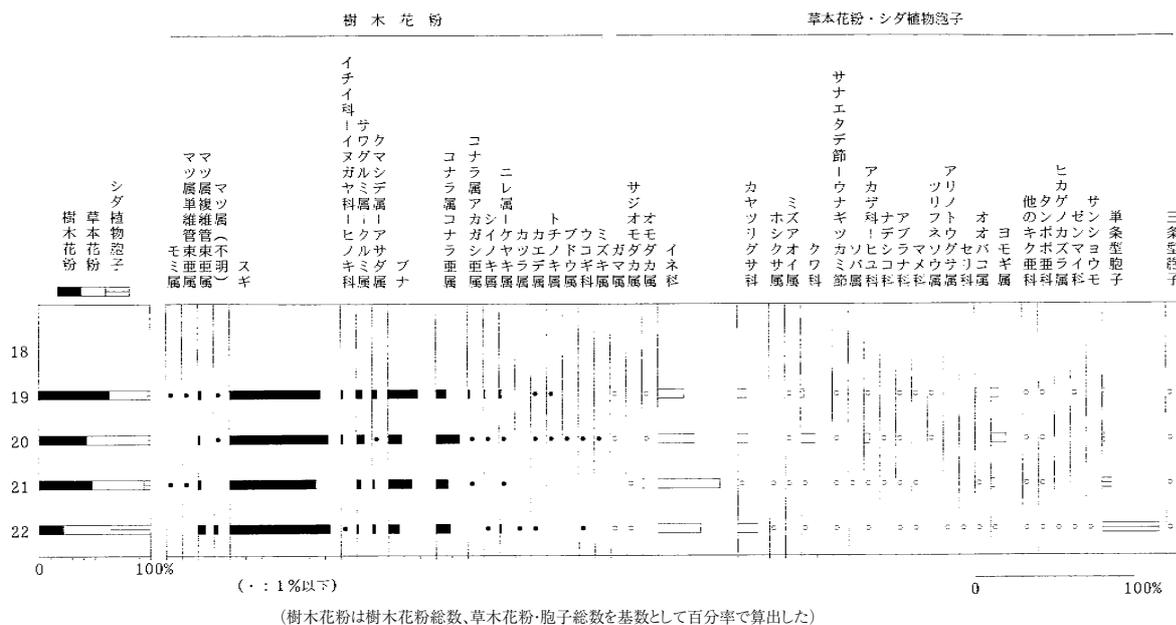
#### 4 考察

各試料ともスギが最も多く検出されており、遺跡周辺ではスギ林が広く成立していたとみられる。またブナやコナラ亜属などの落葉広葉樹林もクマシデ属ーアサダ属、ニレ属ーケヤキ属などを交えて遺跡周辺丘陵部に広がっていたであろう。さらにコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹類も若干生育していたとみられる。マツ属複雑管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨ

ウマツ類)がNo.22で約5%の出現率を示し、他の3試料も1%を越えて検出されており、遺跡周辺において一部ニヨウマツ類の二次林が形成されていたと推測される。これは水田稲作などから推察される古代人の活発な活動により一部空き地がつかられ、そうしたところにニヨウマツ類の二次林が侵入したことが予想される。

一方低地部では水田跡の検出やプラント・オパール分析から水田稲作が行われていたと考えられ、こうした低地の河川や水路近くにサワグルミ属・クルミ属がハンノキ属などとともに河畔林や湿地林を形成していた。またこの水田にはサジオモダカ属やオモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水田雑草類と考えられる分類群が生育しており、プラント・オパール分析からキビ族(タイヌビエなど)やヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)もみられたと考えられる。このヨシ属やガマ属などは周辺水路などにも生育していたであろう。この水田の畦道などにはアカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、オオバコ属、ヨモギ属などのキク科などの雑草類が生育していた。またNo.21(3区基本土層のIV層)からは1個体のみであるがソバ属が検出されており、水田稲作と共にソバの栽培も一部において行われていた可能性が推察される。

なおNo.22(3区基本土層のIII層)においてもプラント・オパール分析を含め水田稲作の存在が推測されるが、本試料においては単条型胞子が多産しており、他の試料とは様相が異なっている。一般的にシダ植物胞子の多産は荒れた環境を示唆すると考えられている。こうしたことからNo.22(3区基本土層のIII層)の頃には水田地の存在と共に流水の影響など荒れた環境もあったのではないかと推測される。また、プラント・オパール分析では、試料No.22(3区基本土層のIII層)に比べ試料No.21(3区基本土層のIV層)でイネはかなり少なく、稲作の発展がみにくい状況となっており、これについては土層観察などである程度検討できるのではないと思われる。



No.18:1区SK55の3層、No.19:2区基本土層のIV層、No.20:2区基本土層のIV層、No.21:3区基本土層のIV層、No.22:3区基本土層のIII層

第78図 主要花粉化石分布図

第16表 産出花粉化石一覧表

和名	学名	No18	No19	No20	No21	No22
樹木						
モミ属	Abies	—	1	—	1	—
マツ属単維管束亜属	Pinus subgen. Haploxyylon	—	1	—	1	—
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxyylon	—	5	3	5	12
マツ属(不明)	Pinus (Unkown)	1	2	2	—	6
コウヤマキ属	Sciadopitys	—	—	—	—	1
スギ	Cryptomeria japonica D. DON	5	142	141	135	152
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae - Cephalotaxaceae - Cupresaceae	—	3	3	—	1
ヤナギ属	Salix	—	—	—	—	1
サワグルミ属-クルミ属	Pterocarya - Juglans	2	9	11	7	3
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	—	8	2	4	5
カバノキ属	Betula	—	1	—	1	2
ハンノキ属	Alnus	1	4	3	37	12
ブナ	Fagus crenata Blume	1	46	19	37	17
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	2	16	34	18	21
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	—	3	1	1	—
シイノキ属	Castanopsis	—	3	1	—	1
ニレ属-ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	—	3	2	2	3
カツラ属	Cercidiphyllum	—	—	—	—	2
ユズリハ属	Daphniphyllum	—	—	—	—	1
カエデ属	Acer	—	1	1	—	1
トチノキ属	Aesculus	—	1	1	—	—
ブドウ属	Vitis	—	—	1	—	—
ウコギ科	Araliaceae	—	—	1	—	1
ミズキ属	Cornus	—	—	1	—	—
草本						
ガマ属	Typha	—	1	1	—	1
サジオモダカ属	Alisma	—	—	—	2	1
オモダカ属	Sagittaria	—	3	3	7	—
イネ科	Gramineae	18	64	122	204	298
カヤツリグサ科	Cyperaceae	4	24	33	1	141
ホシクサ属	Eriocaulon	—	—	—	1	1
ミズアオイ属	Monochoria	—	2	2	1	—
ヒガンバナ属近似種	cf. Lycoris	—	—	—	—	1
クワ科	Moraceae	1	8	48	4	3
サナエタデ属-ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon	—	1	2	1	1
ソバ属	Fagopyrum	—	—	—	1	—
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	—	2	18	2	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	—	—	2	1	—
アブラナ科	Cruciferae	—	1	5	1	1
マメ科	Leguminosae	—	1	—	1	1
ツリフネソウ属	Impatiens	—	2	1	—	—
アリノトウグサ属	Haloragis	—	—	—	—	1
セリ科	Umbelliferae	2	—	—	—	2
オオバコ属	Plantago	—	4	—	1	1
ヨモギ属	Artemisia	5	20	51	13	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	—	3	1	1	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	—	3	3	1	7
シダ植物						
ヒカゲノカラス属	Lycopodium	—	—	—	—	1
ゼンマイ科	Osmundaceae	—	1	—	—	1
サンショウモ	Salvinia natas	—	—	—	—	1
単条型孢子	Monolete spore	10	5	8	31	395
三条型孢子	Trilete spore	4	3	1	1	4
樹木花粉	Arboreal pollen	12	249	227	249	242
草本花粉	Nonarboreal pollen	30	139	292	243	469
シダ植物孢子	Spores	14	9	9	32	402
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	56	397	528	524	1113
不明花粉	Unknown pollen	7	24	5	9	13

No18 : 1区S K55の3層、No19 : 2区基本土層のIV層、No20 : 2区基本土層のIV層  
 No21 : 3区基本土層のIV層、No22 : 3区基本土層のIII層

## 第4節 プラント・オパール分析

鈴木茂 (パレオ・ラボ)

## 1 試料

分析用試料は調査1区～3区より採取された5試料(試料番号23～27)である。各試料の土相はおおむね黒～黒灰色の粘土や砂質粘土である。なお同試料(試料No 18～No 22)を用いて花粉分析も行われている。

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体)が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている(藤原 1984)。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

## 2 方法

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 $\mu$ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 $\mu$ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

## 3 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1gあたりの各プラント・オパール個数を求め(第17表)、それらの分布を第79図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1gあたりの検出個数である。試料No 23(1区SK55の3層)からは、イネの機動細胞珪酸体が非常に多く検出され、それとともに破片ではあるがイネの穎(籾殻)に形成される珪酸体がさらに多く観察された。また図表には示していないがイネ型の単細胞珪酸体も連なった状態で多く認められた。その他クマザサ属型、ウシクサ族、キビ族などが検出されている。試料No 24(2区北側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層)からは、イネが3,400個検出された。もっとも多く検出されたのはクマザサ属型で、個数的は約36,000個ほどで、他のヨシ属やウシクサ族は4,000個前後である。試料No 25(2区南側水田跡の耕作土である2区基本土層のIV層)からは、イネが約36,000個と多産している。最も多く検出されたのはクマザサ属型で、約38,000個を示している。次いでヨシ属とキビ族で、約9,000個と機動細胞珪酸体の生産量が少ない両者としてはやや高い数値を示している。試料No 26(3区南側水田跡の耕作土である3区基本土層のIV層)からは、イネが約9,000個得られ、穎部破片も若干観察されている。最も多く検出されたのはやはりクマザサ属型(約35,000個)で、ネザサ節型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族は2,000個前後を示している。試料No 27(3区基本土層のIII層)からは、イネが約37,000個を示して最も多く、次いでクマザサ属型の約23,000個、ヨシ属の約6,000個である。またシバ属が若干検出されている。

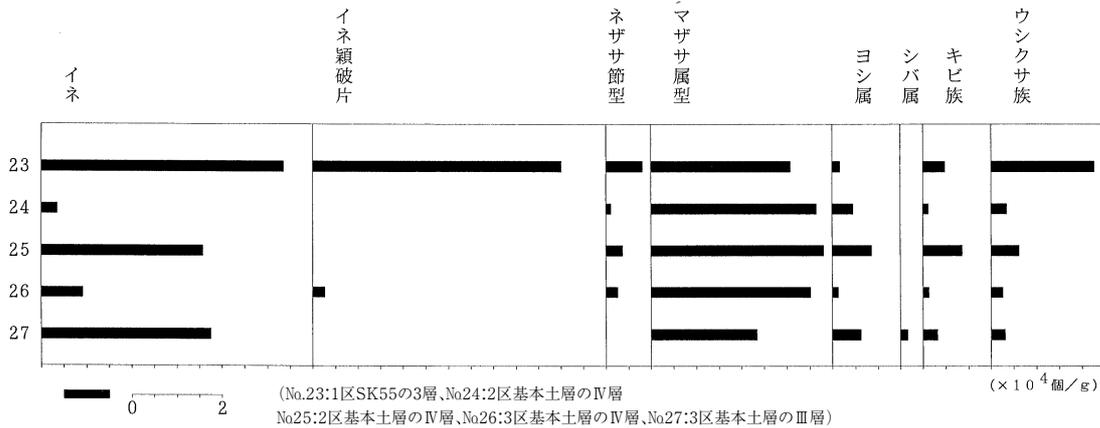
## 4 考察

上記したように、全試料からイネのプラント・オパールが検出された。検出個数について、イネの

プラント・オパールが試料1 gあたり5,000個以上検出された地点から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況などをふまえて判断されている。上記したように試料No 24（2区基本土層のIV層）ではこの5,000個に達しておらず、検出個数のみからは稲作の可能性は低いと考えられる。同試料を用いて行われた花粉分析結果（No 19：2区基本土層のIV層）をみると、イネ科花粉はそれほど多くはないが、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属が検出されており、水田稲作が行われていた可能性を推察させる。また遺構としても水田跡と考えられており、イネのプラント・オパール個数はやや少なかったものの水田稲作が行われていた可能性はあると推測されよう。なおイネのプラント・オパール個数が少なかったことについては不明であるが、一つとして稲作が行われていた期間が短く、イネのプラント・オパール密度が低かったといったことが考えられるが、これについては土層の状況など総合的に判断されることが望まれる。一方、試料No 25（2区基本土層のIV層）では、イネが多産しており、水田跡を支持する結果が得られたと判断される。また3区基本土層のIII層・IV層についても個数のみからは稲作が行われていた可能性は高いと判断されるが、試料採取地点において稲作が行われていたかどうかについては遺構の状況などから判断されよう。試料No 23（1区S K55の3層）では、イネの機動細胞珪酸体が集合体も含め多く認められ、それとともにイネの穎の部分に形成される珪酸体の破片も非常に多く検出されている。またイネ型の単細胞珪酸体や珪化した繊維状組織も多く観察された。こうしたことから試料には稲藁や穀などが焼かれた灰が混入しているのではないかと思われるが、これについては種実分析や土層観察等のさらなる検討が必要であろう。なおススキやチガヤなどのウシクサ族にも連なった状態の機動細胞珪酸体が若干認められ、イネと同様のことが考えられる。また、遺跡周辺にはクマザサ属型のササ類、すなわちチマキザサやチシマザサといったササ類が多く生育していたとみられる。同試料を用いて行った花粉分析結果をみると、スギ林が広く成立しており、ブナやコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林の存在も予想されている。クマザサ属型のササ類はこうした森林の下草の存在で分布を広げていたと推測される。水田跡試料などからやや多くのヨシ属が検出されており、このヨシ属は水田内や周辺水路などに生育していたものと思われる。また全試料から検出されているキビ族についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種であるのかタイヌビエ・エノコログサなどの雑草類であるのか分類が難しく不明であるが、しかしながら遺構としては水田が予想されていることから水田雑草に由来するキビ族（タイヌビエなど）ではないかと思われる。一方ウシクサ族は日の当たる開けたところでの生育が考えられ、ススキやチガヤといったウシクサ族が遺跡周辺の空き地や森林の林縁部などに生育していたと推測される。

第17表 試料1 gあたりのプラント・オパールの個数

試料番号	地区・遺構・層位	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
23	1区S K55の3層	53,500	55,100	8,100	30,800	1,600	0	4,900	22,700	16,200
24	2区基本土層のIV層 (2区北側水田跡)	3,400	0	1,100	36,500	4,600	0	1,100	3,400	1,100
25	2区基本土層のIV層 (2区南側水田跡)	35,700	0	3,700	38,100	8,600	0	8,600	6,200	14,800
26	3区基本土層のIV層 (3区南側水田跡)	9,100	2,600	2,600	35,200	1,300	0	1,300	2,600	2,600
27	3区基本土層のIII層	37,400	0	0	23,400	6,200	1,600	3,100	3,100	6,200



第79図 プラント・オパール分布図

引用文献

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 - , 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用 - 先史時代の水田址探査 - , 考古学ジャーナル, 227, p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (2) - イネ (Oryza) 属植物における機動細胞珪酸体の形状 - , 考古学と自然科学, 11, p.9-20.

第5節 木材の放射性炭素年代測定と樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

加速器による放射性炭素年代測定 (AMS法) と樹種同定を実施した試料は、土坑から出土した木材1点 (試料No.1) と柱穴様ピット内から出土した木材3点 (試料No.2~4) の合計4点である。

2 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール (抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第18表・第19表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、約 1240-1160 BP の8世紀頃の

値を示す。暦年較正值は 1257-992 cal B P の 7 世紀末から 10 世紀頃の奈良時代～平安時代前半頃に相当する値を示す。

## (2) 樹種同定

樹種同定結果を第 18 表に示す。土坑から出土した木材（試料No 1）は、道管を有することから広葉樹であり、その道管配列から散孔材と考えられる。しかし収縮しているために組織の観察が不十分であり、種類の同定には至らなかった。その他の木材は、広葉樹 2 種類（オニグルミ近似種・クリ）に同定された。オニグルミ近似種 (cf. *Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura*) クルミ科クルミ属のこの試料は全体的に収縮している。散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2～3 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は潰れていてほとんど観察できないが、1～4 細胞幅、1－30 細胞高程度と思われる。クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属は、環孔材で、孔圏部は 2－4 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高である。

## 4 考察

樹種同定を行った木材のうち、土坑から出土した木材は種類の同定には至らなかったが、柱穴様ピットから出土した木材は、掘立柱建物の柱材の可能性が考えられており、クリとオニグルミ近似種が認められた。このうち、クリは重硬で強度や耐朽性が高い材質を有する。柱穴様ピットから出土した木材のうち、クリは年代測定で 1200 B P と 1170 B P の値が得られており、暦年較正結果からも古代に属する可能性がある。秋田県内では、これまでの調査でも古代を中心とした掘立柱建物跡の柱材にクリが多い傾向が認められている。これらの結果から、今回の結果は過去に確認された樹種同定結果の傾向と調和的といえる。一方、試料No 4 はオニグルミ近似種であった。オニグルミと仮定した場合、木材は重硬で強度が高い材質を有しており、クリの材質と強度が高い点で共通点がある。年代測定の結果は、試料No 2 と 3 は近似し、暦年較正の結果では重なっている。このことから、クリと同時期にオニグルミの木材も柱材として利用されていた可能性がある。

第18表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試料番号	出土遺構	試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP
1	2区SK81	出土木材(RW34)	木材	広葉樹 (散孔材)	1160±40	-29.57±0.82	1240±40
2	2区SA153 P4	出土木材(RW1)	木材	クリ	1200±40	-26.46±0.40	1220±40
3	2区SA153 P1	出土木材(RW1)	木材	クリ	1170±30	-25.53±0.75	1180±30
4	5区SA22 P2	出土木材(RW1)	炭化材	オニグルミ近似種	1240±40	-27.08±0.72	1270±30

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第19表 暦年較正結果

試料番号	出土遺構	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比		
				cal AD		cal AD			cal BP	
1	2区SK81	出土木材 (RW34)	1160±39	cal AD 782	-	cal AD 790	cal BP 1,168	-	1,160	0.067
				cal AD 813	-	cal AD 843	cal BP 1,137	-	1,107	0.232
				cal AD 857	-	cal AD 900	cal BP 1,093	-	1,050	0.365
				cal AD 919	-	cal AD 958	cal BP 1,031	-	992	0.336
2	2区SA153 P4	出土木材 (RW1)	1199±40	cal AD 780	-	cal AD 884	cal BP 1,170	-	1,066	1.000
3	2区SA153 P1	出土木材 (RW1)	1172±32	cal AD 782	-	cal AD 791	cal BP 1,168	-	1,159	0.104
				cal AD 809	-	cal AD 845	cal BP 1,141	-	1,105	0.335
				cal AD 849	-	cal AD 894	cal BP 1,101	-	1,056	0.471
				cal AD 925	-	cal AD 935	cal BP 1,025	-	1,015	0.090
4	5区SA22 P2	出土木材 (RW1)	1239±36	cal AD 693	-	cal AD 699	cal BP 1,257	-	1,251	0.050
				cal AD 715	-	cal AD 750	cal BP 1,235	-	1,200	0.327
				cal AD 764	-	cal AD 783	cal BP 1,186	-	1,167	0.178
				cal AD 789	-	cal AD 827	cal BP 1,161	-	1,123	0.291
				cal AD 841	-	cal AD 861	cal BP 1,109	-	1,089	0.154

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

## 第6章 まとめ

大見内遺跡・館野遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業（館合地区）に係る範囲のうち、破壊が免れない遺跡の切土施行部分について実施した。調査の結果、大見内遺跡では、縄文時代・平安時代・中世の遺構が検出され、縄文時代・平安時代・中世・近世などの遺物が出土した。また、館野遺跡では、近世の塚が検出され、平安時代・近世などの遺物が出土した。本章では、検出した遺構と出土遺物について、その特徴を述べたい。

### 1 大見内遺跡について

平成14年度に行われた大見内遺跡の調査では、今回の2区の北側にあたる範囲を調査している。調査の結果、奈良時代～平安時代の集落跡であることや水辺で祭祀が営まれていたことがわかっている。その調査範囲は、今回の調査同様、水路になるか所と削平が免れないか所であるごく限られた範囲であったが、大きな成果を得ている。

今回の調査のうちの2・3・5・6・7区は、調査面積12,300㎡の40%にあたり、幅が6mに満たない調査区である。一種のトレンチ調査であり、遺構が調査区外にかかっている場合も多く、遺跡の全体像を明確に把握するには情報量が少なく難しい部分もある。

2・3・6区の調査では十和田a火山灰降下後の水田跡が検出された。IV層の堆積状況や自然科学分析の結果等をもとに考えると、平安時代から稲作が行われていたと思われる。2区の南側や3区からは、合わせて6か所の畦畔が検出された。後世の耕作や区画整理などで攪乱を受けていたり、調査範囲の幅が狭く、水田跡の規模を面的に捉えることはできなかった。しかし、2区のSK81土坑から木製品の鋤が出土したことなどから稲作が行われていたことが明確になった。しかもその鋤の形や作りの特徴は、9世紀前半～10世紀初めの遺跡である山形県米沢市の古志田東遺跡から出土したものと近似している。<sup>(註1)</sup>この鋤は、西暦915年に降下したとされる十和田a火山灰を含有するIV層の下のSK81土坑から出土したことや、出土した多くの遺物から、大見内遺跡は9世紀～10世紀の遺跡と考えられる。また、この土坑から墨書土器が出土したことから、祭祀が行われていたこともわかった。また、3区のSK03土坑は、覆土の1層に十和田a火山灰が堆積していたことから915年より古い時代のもと考えられ、斎串や桃の種が出土したことから、祭祀が行われていたことが窺われる。

1区の北側と南側、2区の北側で掘立柱建物跡が検出され、2区の南側で検出された柱列の柱材を放射性炭素年代測定した結果、8世紀前半～後半のクリであることが判明した。

出土した遺物は、その大部分が平安時代の土師器や須恵器である。特に、底部に網代痕のある土師器が1区（坏2点）、2区（坏4点）、3区（甕1点）、6区（底部破片1点）から出土している。1・2区から出土した坏6点の底部には、タタミ状の圧痕が認められた。稲野彰子氏（いろは写房）の研究<sup>(註2)</sup>によると、坏6点の繊維圧痕のタテ材が14～16mm、ヨコ材が1.5～2mmであることからA種2類であることがわかる。また、「A種は9世紀初頭～11世紀に存在し、東北地方の全域に分布している。A種は、9世紀前葉のものが東北地方南部に、9世紀後半から10世紀前葉のものが東北地方南半部と中央部に、10世紀から11世紀のものが津軽地方に分布する。」とされていることから、今回の大見内遺跡から出土した坏6点の年代は、大きく見れば9世紀後半から11世紀の範疇におさまる。

1・5・6区からは、縄文時代の遺構と遺物が出土しており、今回調査した大見内遺跡は、縄文時代、奈良時代末～平安時代後半の複合の集落跡であることが分かった。なお、6区の北側には、縄文時代後期の遺跡である明神Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡が存在しており、大見内遺跡は、それらの遺跡とのつながりが考えられる。

## 2 館野遺跡について

4区にあたる館野遺跡は、周知の遺跡で、その存在は江戸時代には明らかになっている。調査開始当初、周溝が確認されたことで古墳と思われたが、以下のことから近世の塚であると判断した。

- ①周溝からは神社を建てる際に使用したと思われる材が出土しただけであり、古墳に伴うような遺物は出土しなかったこと。
- ②蝦夷塚古墳群の周溝などから検出される十和田a火山灰が確認できなかったこと。
- ③盛土下には、塚を造った当時の表土が堆積しており、この表土からも十和田a火山灰を検出することができなかったこと。

以上のことから、4区の館野遺跡は、近世の塚が構築された場所であることがわかった。

## 《註》

註1 米沢市教育委員会 『古志田東遺跡』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集 2001（平成13）年

註2 北上市立博物館 『北上市立博物館研究報告』 第10号 1995（平成7）年



空から見た大見内遺跡・館野遺跡（南→）



1. 1区東側全景  
(北西→)



2. 1区南側全景  
(北→)



3. 1区西側全景  
(北東→)

1. 1区S B06  
掘立柱建物跡  
S A24柱列  
(北→)



2. 1区S B59  
掘立柱建物跡  
(南→)



3. 1区S B62・64  
掘立柱建物跡  
(北西→)





1. 1区S D01溝跡完掘 (南東→)



2. 1区S D01溝跡西端完掘 (南東→)



3. 1区S D77溝跡完掘 (東→)



4. 1区S D80溝跡確認 (東→)



5. 1区S D80溝跡断面 (東→)



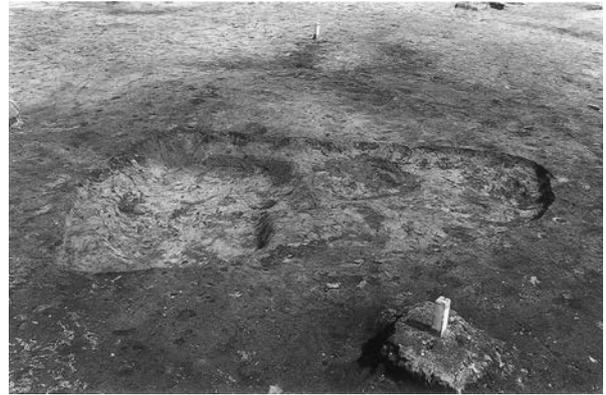
1. 1区S K 90土坑完掘(東→)



2. 1区S K 90土坑遺物出土状況(東→)



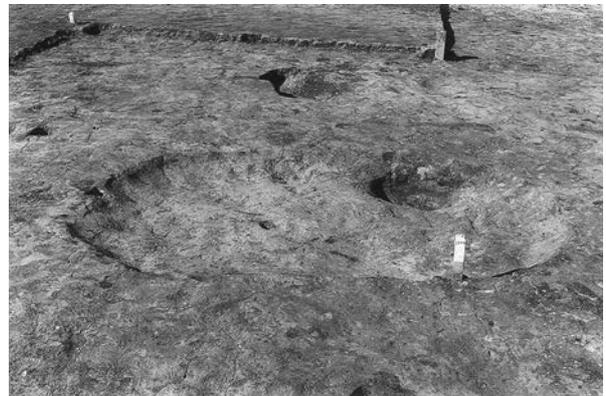
3. 1区S K 48・157土坑完掘(西→)



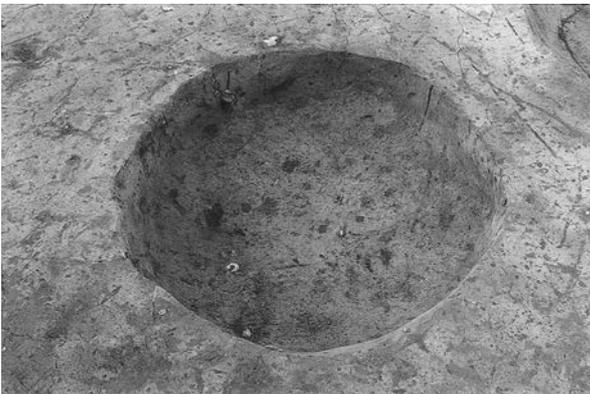
4. 1区S K 52・53土坑完掘(南西→)



5. 1区S K 55土坑完掘(南→)



6. 1区S K 83土坑完掘(南→)



7. 1区S K 94土坑完掘(南→)



8. 1区S K 100・119土坑完掘(南東→)



1. 2区S B 29  
掘立柱建物跡  
(東→)



2. 2区S A 38・43柱列  
S K I 35竪穴状遺構  
(北東→)



3. 2区S A 16・149・  
152・153柱列  
(北→)



1. 2区北側水田跡  
(北→)



2. 2区南側水田跡  
(北→)



3. 2区S K81土坑遺物出土状況(南→)



4. 2区S K81土坑完掘(南→)



1. 2区南側水田跡畦畔断面 (東→)



2. 2区S K I 35竪穴状遺構完掘 (西→)



3. 2区S K 140土坑完掘 (東→)



4. 2区S K 140土坑遺物出土状況 (東→)



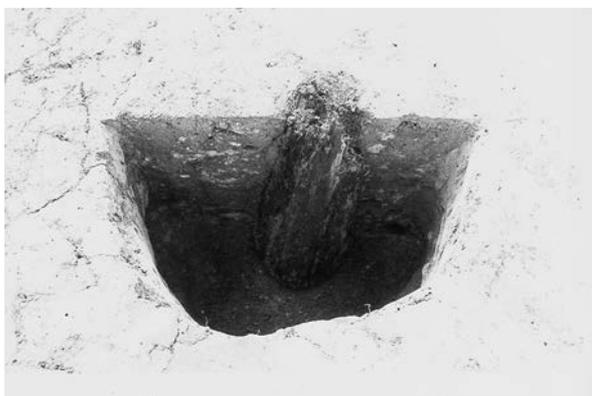
5. 2区S K 180土坑遺物出土状況 (西→)



6. 2区S D 07溝跡完掘 (西→)



7. 2区S D 124溝跡遺物出土状況 (北西→)



8. 2区S A 153 P 1柱材出土状況 (東→)

1. 3区北側全景  
(南→)



2. 3区南側全景  
(北→)



3. 3区南側全景  
(南→)

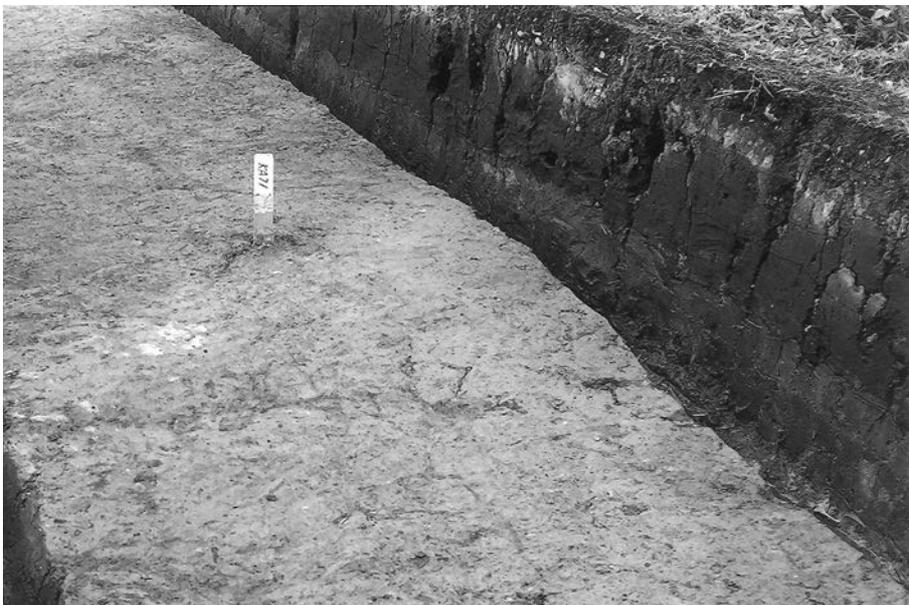




1. 3区南側水田跡  
(北→)



2. 3区南側水田跡  
畦畔C  
(南西→)



3. 3区南側水田跡  
畦畔D  
(南→)

1. 3区南側水田跡  
畦畔C  
(西→)



2. 3区北側水田跡  
畦畔A  
(東→)



3. 3区北側水田跡  
畦畔B  
(北→)





1. 3区S K03土坑完掘(南西→)



2. 3区S K03土坑斎串出土状況(東→)



3. 3区S K32土坑完掘(南西→)



4. 3区S K68土坑完掘(南東→)



5. 3区S D01溝跡完掘(南東→)



6. 3区S D01溝跡遺物出土状況(北→)



7. 3区S D02溝跡遺物出土状況(南西→)



8. 3区S D93溝跡完掘(南→)



1. 4区S Y01塚半截 (東→)



2. 4区S Y01塚断面 (北東→)



3. 4区S Y01塚全景 (南東→)



4. 4区S Y01塚全景 (南西→)



5. 4区S Y01塚全景 (北西→)



6. 4区S Y01塚周溝木材出土状況 (北東→)



1. 4区S Y01塚  
断面と周溝  
(西→)



2. 4区S Y01塚全景  
(北東→)



3. 4区S Y01塚  
周溝全景  
(北西→)



1. 5区S A22柱列完掘 (南東→)



2. 5区南側全景 (北→)



3. 5区S D05・06・07・08溝跡完掘 (北西→)



1. 5区S A22P 1柱材出土状況(南東→)



2. 5区S A22P 2柱材出土状況(北西→)



3. 5区S K02土坑完掘(北東→)



4. 5区S K03土坑完掘(南西→)



5. 5区S K04土坑完掘(南→)



6. 5区作業風景(南東→)



7. 5区S X01性格不明遺構完掘(南→)



8. 5区S X20性格不明遺構完掘(北西→)

1. 5区全景  
(北西→)

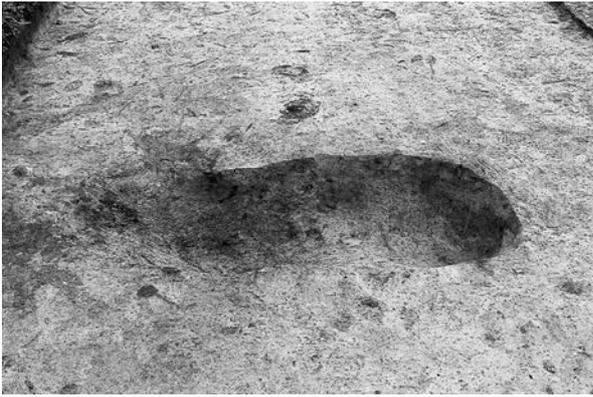


2. 6区北側全景  
(東→)

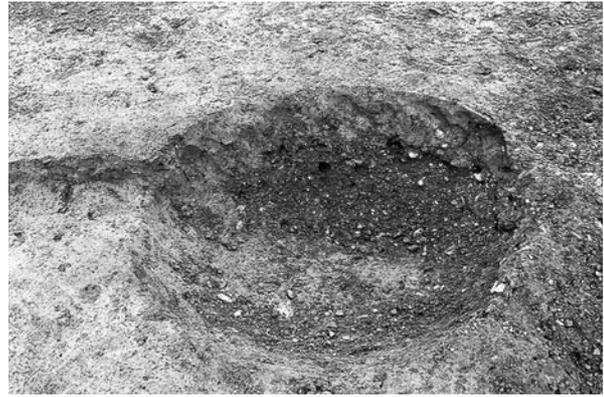


3. 6区東側全景  
(北→)

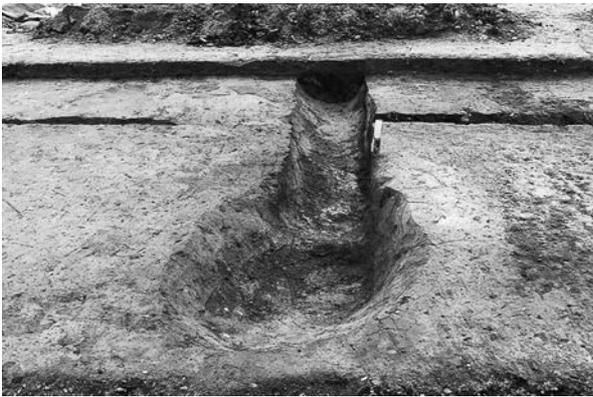




1. 6区SK11・30土坑完掘（北→）



2. 6区SK12土坑完掘（西→）



3. 6区SK15土坑・SD04溝跡完掘（北→）



4. 6区SD03溝跡完掘（北→）



5. 6区水田跡（北→）



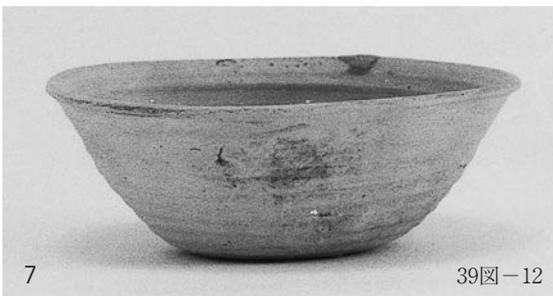
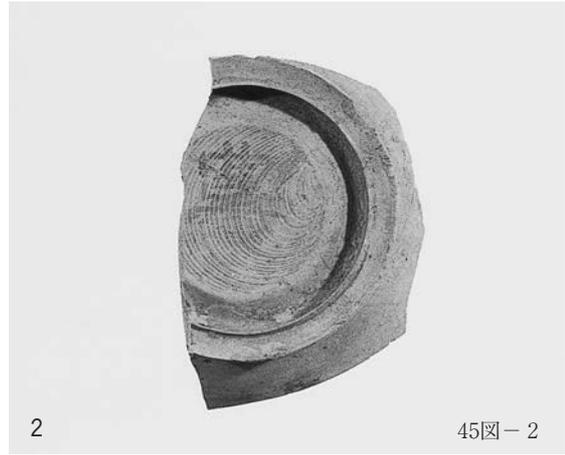
6. 6区西側SKP群（東→）



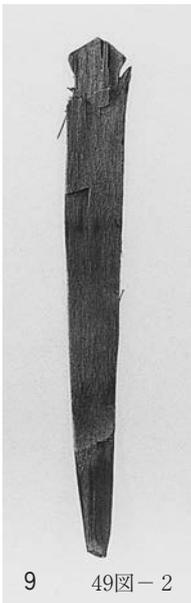
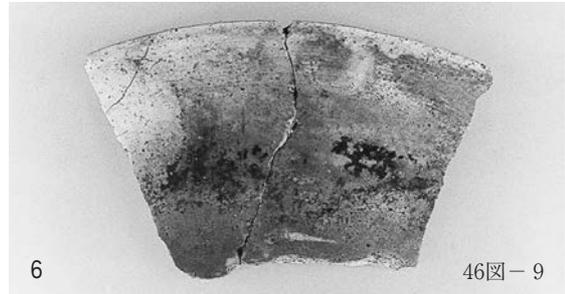
7. 6区北側中央部SKP群（北→）



8. 7区全景（北→）









# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おおみないいせき・たてのいせき							
書名	大見内遺跡・館野遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第386集							
編著者名	高橋直樹・伊藤和美							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行年月日	西暦2005年3月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
<small>おおみないいせき</small> 大見内遺跡	<small>あきたけんひらかぐん</small> 秋田県平鹿郡 <small>おものがわまちうすい</small> 雄物川町薄井 <small>あざおおみない</small> 字大見内300外	05443	60-99	39° 18' 20"	140° 26' 25"	20030513 ) 20031031	12,300m <sup>2</sup>	県営ほ場 整備事業 (館合地区)
<small>たてのいせき</small> 館野遺跡	<small>あきたけんひらかぐん</small> 秋田県平鹿郡 <small>おものがわまちうすい</small> 雄物川町薄井 <small>あざちようがん</small> 字長願110外	05443	60-73	39° 18' 18"	140° 26' 18"		700m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大見内遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代       中世	土坑 掘立柱建物跡 柱列 竪穴状遺構 土坑 溝跡 水田跡 性格不明遺構 柱穴様ピット 溝跡 計	5基 5棟 12列 1基 60基 28条 6か所 10基 248基 1条 376遺構	縄文土器・石器 土師器・須恵器 木製品 (鍬・曲物 斎串・下駄 箸など)  中世陶器など	十和田a火山灰降下後の水田跡が検出された。2区北側水田跡の下の土坑から鍬などの木製品や墨書土器が出土した。		
館野遺跡	集落跡	近世	塚 計	1基 1遺構	銭貨、陶磁器	周溝を伴う塚が検出された。		

秋田県文化財調査報告書第386集  
大見内遺跡・館野遺跡  
—県営ほ場整備事業（館合地区）に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

印刷・発行 平成17年 3 月  
編 集 秋田県埋蔵文化財センター  
〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地  
電話 0187 (69) 3331 FAX (0187) 69-3330  
発 行 秋田県教育委員会  
〒010-8580 秋田市山王三丁目 1 番 1 号  
電話 018 (860) 5193  
印 刷 有限会社 平鹿印刷

